久野部遺跡発掘調査報告書

—七ノ坪地区—

1977

滋賀県教育委員会
野洲町教育委員会
財団法人滋賀県文化財保護協会

はしがき

ここ数年、いわゆる「低成長時代」を反映して、埋蔵文化財をめぐる環境にも、大きな変化が生じつつある。埋蔵文化財の保存および調査が期間、経費等に大きな制約を受けつつあるのもその一つではあるが、開発行為に伴う発掘調査は減少するどころか、ますます増大しているのが現状である。

このような中で、阪急電鉄株式会社が野洲町久野部において、計画策定された分譲住宅造成地内に所在する久野部遺跡について、二次にわたる調査が同社の好意により実施され、ここにその成果が公刊のはこびに到ったことは大変よろこばしいことと言える。本書が埋蔵文化財さらには、文化財に対する一般の理解を深めるために大いに活用されることを願うとともに、本書作成に努力くださった関係者各位に改めてお礼を申し述べたい。

昭和52年12月

滋賀県教育委員会
文化財保護課長
藤　沢　守　雄

001.2
Sh27

例　　言

1　本書は、野洲町久野部字七ノ坪に所在する阪急電鉄株式会社分譲住宅計画地の埋蔵文化財包蔵地についての発掘調査報告書である。

2　本調査は、阪急電鉄株式会社の依頼にもとづき、滋賀県教育委員会、野洲町教育委員会が、財団法人滋賀県文化財保護協会の協力を得て実施した。

3　現地調査および報告書の作成には、滋賀県教育委員会事務局文化部文化財保護課技師大橋信弥が担当し指導した。

4　調査・整理には、別所健二・谷口徹・西島陽子・山崎優子・入江正則の諸氏の全面的な協力を得たほか、木村良太・赤井優・石橋平・吉田芳行・中西和多隆・水野敏昭・尾谷孝・三宅治・美濃部力・大崎義彦・井入勉・谷口考司・山本芳正・国松千夏・大橋美和子・中村明・福井昭彦・寺田忠良・河村文章・出湯栄治の諸君が参加し、遺物写真には、寿福滋氏を煩した。記して謝意を表したい。

5　本書の執筆は、大橋・別所・谷口が分担してあたり、それぞれ文末に記した。なお、現地調査にあたっては、野洲町教育委員会社会教育課主事古川与志継氏、阪急電鉄株式会社土地経営部菅原正義氏に協力を得た。記して謝意を表したい。

久野部遺跡発掘調査報告書
― 七ノ坪地区 ―

目　　次

はしがき

例　言

Ⅰ. はじめに …… 1

Ⅱ. 調査の経過 …… 2

Ⅲ. 調査の結果 …… 7

1. 層　位 …… 7

2 遺　構 …… 9

3. 出土遺物 …… 21

(1) 土　器 (a) A区出土土器 …… 21

(b) B区出土土器 …… 23

(c) C区出土土器 …… 30

(2) 木製品 …… 33

(3) その他の遺物 …… 35

Ⅳ. おわりに …… 36

1. SD2出土の弥生土器について …… 36

2. 畿内近国における古代末～中世の土器生産について …… 45

3. むすび …… 47

出土遺物観察表 …… 48

図　版　目　次

PL 1.　遺　　構　1. A区全景（調査前）　2. SD2、SD3検出状況（北から）
PL 2.　〃　1. SD1～SD7検出状況（西から）　2. SD2検出状況（南から）
PL 3.　〃　1. SD2土器出土状況　2. SB1検出状況（西から）
PL 4.　〃　1. B区調査前全景（西から）　2. B1トレンチ全景（東から）
PL 5.　〃　1. B2トレンチ全景（東から）　2. SB2検出状況（西から）
PL 6.　〃　1. SB2柱根出土状況　2. SB2柱穴内土器出土状況
PL 7.　〃　1. SD10開口部検出状況（西から）　2. SD10開口部遺物出土状況(南から)
PL 8.　A区出土土器　弥生土器（E 32.　E 33.　E 46.　E 47.　E 48）
PL 9.　〃　弥生土器（E 59.　E 61.　E 64.　E 65.　E 74.　E 76）
PL 10.　〃　弥生土器（E 84.　E 85.　E 90.　E104）須恵器（C 151～C 159）
PL 11.　B区出土土器　土師器（H 401～H 428）
PL 12.　〃　土師器（H 429～H 432．H 504）黒色土器（B 439～B 444）
PL 13.　〃　土師器（H 552～H 560．H 602．H 603.）黒色土器（B 555～B 565）
PL 14.　〃　土師器（H 604～H 611）
PL 15.　〃　土師器（H 612～H 630．H 669～H 675）
PL 16.　〃　土師器（H 676～H 683）黒色土器（B 689～B 691）
PL 17.　〃　黒色土器（B 692～B 707）
PL 18.　〃　黒色土器（B 708～B 718．B 777～B781）
PL 19.　C区出土土器　須恵器（C 802～C 824）
PL 20.　〃　須恵器（C 828～C 837）
PL 21.　〃　土師器（H 843～H 852）須恵器（C 903～C 910）
PL 22.　〃　須恵器（C 914～C 927）土師器（H 940．H 944）
PL 23.　A区出土土器　1. 弥生土器（E 1～E 17）　2. 弥生土器（E 18～E 31）
PL 24.　〃　1. 弥生土器（E 34～E 44）　2. 弥生土器（E 45～E 54.E 92～E 96）
PL 25.　〃　1. 弥生土器（E 55～E 69）　2. 弥生土器（E 71～E 89）
PL 26.　〃　1. 弥生土器（E 77～E 91）　2. 弥生土器（E 97～E 106）
PL 27.　〃　1. 須恵器（C 153～C 161）土師器（H 162．H 163）　2. 須恵器、土師器
PL 28.　B区出土土器　1. 土師器（H 403～H 414）　2. 土師器（H 416～H 438）
PL 29.　〃　1. 黒色土器（B 443～B 455）　2. 黒色土器（B 456～B 465）ほか
PL 30.　〃　1. 土師器（H 501～H 506）ほか　2. 黒色土器、土師器（B 559～B 573）
PL 31.　〃　1. 土師器（H 614～H 624）ほか　2. 土師器（H 625～H 639）
PL 32.　〃　1. 土師器（H 640～H 653）　2. 土師器（H 654～H 665）
PL 33.　〃　1. 土師器（H 666～H 687）　2. 黒色土器（B 697～B 713）
PL 34.　〃　1. 黒色土器（B 714～B 727）　2. 黒色土器（B 728～B 740）

PL 35.　B区出土土器　1. 黒色土器（B 741～B 752）　2. 黒色土器（B 753～B 765）
PL 36.　〃　1. 黒色土器（B 766～B 782）　2. 須恵器ほか（B 783～H 797）
PL 37.　C区出土土器　1. 須恵器（C 801～C 823）　2. 須恵器（C 825～C 840）
PL 38.　〃　1. 土師器ほか（E 841～H 855）　2. 須恵器（C 901～C 921）
PL 39.　〃　1. 須恵器ほか（C 922～H 935）　2. 土師器ほか（H 936～K 949）
PL 40.　C区旧沼沢地出土木製品（PW 1～PW 15）
PL 41.　C区旧沼沢地出土木製品（PW 17～PW 22、PW 24～PW 25）
PL 42.　C区旧沼沢地出土木製品（PW 28～PW 35）
PL 43.　C区旧沼沢地出土木製品（PW 36～PW 38）
PL 44.　C区旧沼沢地出土木製品（PW 41～PW 47）
PL 45.　C区旧沼沢地出土木製品（PW 48～PW 56）
PL 46.　C区旧沼沢地出土木製品（PW 57～PW 59、PW 61～PW 63、PW 65～PW 66）
PL 47.　C区旧沼沢地出土木製品（PW 68、PW 73～PW 76）
PL 48.　その他の遺物（砥石S 950　宋銭N 1～N 5　鳩笛I 307）
PL 49.　自然遺物（昆虫遺体、種子）
PL 50.　A区遺構全図
PL 51　A 8・9トレンチ全図（SD 1～SD 7）
PL 52.　B 1・2トレンチ全図（折込）
PL 53.　C区遺構全図
PL 54.　C 7トレンチ遺構図（SD 10開口部）
PL 55.　A区遺構断面図（SD 1～SD 4）
PL 56.　B区遺構断面図
PL 57.　A区SD 2出土土器実測図（E 1～E 24）
PL 58.　A区SD 2出土土器実測図（E 25～E 45）
PL 59.　A区SD 2出土土器実測図（E 46～E 69）
PL 60.　A区SC 2出土土器実測図（E 70～E 90）
PL 61.　A区SD 2、SD 3出土土器実測図（E 91～C 160）
PL 62.　A区SD 3、SD 1出土土器実測図、古銭拓本（C 161～N 5）
PL 63.　B区SD 8出土土器実測図（H 401～H 434）
PL 64.　B区SD 8出土土器実測図（H 435～C 467）
PL 65.　B区SD 9、SB 2、P 1、SK 23～SK 12出土土器実測図（H 501～H 573）
PL 66.　B区包含層出土土器実測図（E 600～H 625）
PL 67.　B区包含層出土土器実測図（H 626～H 681）
PL 68.　B区包含層出土土器実測図（H 683～B 700）
PL 69.　B区包含層出土土器実測図（B 701～B 746）
PL 70.　B区包含層出土土器実測図（B 742～H 797）

PL 71.　C区ＳＤ10出土土器実測図（C 801～C 833）
PL 72.　C区ＳＤ10出土土器実測図（C 834～K 856）
PL 73.　C区沼沢地出土土器実測図（C 901～C 926）
PL 74.　C区沼沢地出土土器石器実測図（C 927～S 950）
PL 75.　C区旧沼沢地出土木製品実測図（ＰＷ 1～ＰＷ16）
PL 76.　C区旧沼沢地出土木製品実測図（ＰＷ17～ＰＷ27）
PL 77.　C区旧沼沢地出土木製品実測図（ＰＷ 28～ＰＷ 33）
PL 78.　C区旧沼沢地出土木製品実測図（ＰＷ 34～ＰＷ 35）
PL 79.　C区旧沼沢地出土木製品実測図（ＰＷ 36～ＰＷ 40）
PL 80.　C区旧沼沢地出土木製品実測図（ＰＷ 41～ＰＷ 47）
PL 81.　C区旧沼沢地出土木製品実測図（ＰＷ 48～ＰＷ 57）
PL 82.　C区旧沼沢地出土木製品実測図（ＰＷ 58～ＰＷ 67）
PL 83.　C区旧沼沢地出土木製品実測図（ＰＷ 68～ＰＷ 77）

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図
第２図　トレンチ設定図
第３図　トレンチ断面実測図
第４図　トレンチ断面実測図
第５図　トレンチ断面実測図
第６図　Ａ７トレンチＳＢ１実測図
第７図　Ａ７トレンチ土坑出土遺物実測図
第８図　Ｂ区遺構全図
第９図　Ｂ１トレンチ整地層内土器出土状況
第10図　Ｂ１トレンチＳＢ２実測図
第11図　ＳＢ２第６柱穴内出土柱根および根絡み
第12図　Ｂ１トレンチ整地層内土器出土状況
第13図　Ｂ１トレンチ整地層内宋銭出土状況
第14図　Ｃ４トレンチＳＤ10東壁断面図
第15図　Ｃ７トレンチＳＤ10開口部断面図
第16図　Ｃ４トレンチ条里坪界断面図
第17図　近江出土の黒色土器埦
第18図　ＳＤ２出土土器層位別対照表
第19図　ＳＤ２出土土器層位別対照図（折込）

I　はじめに

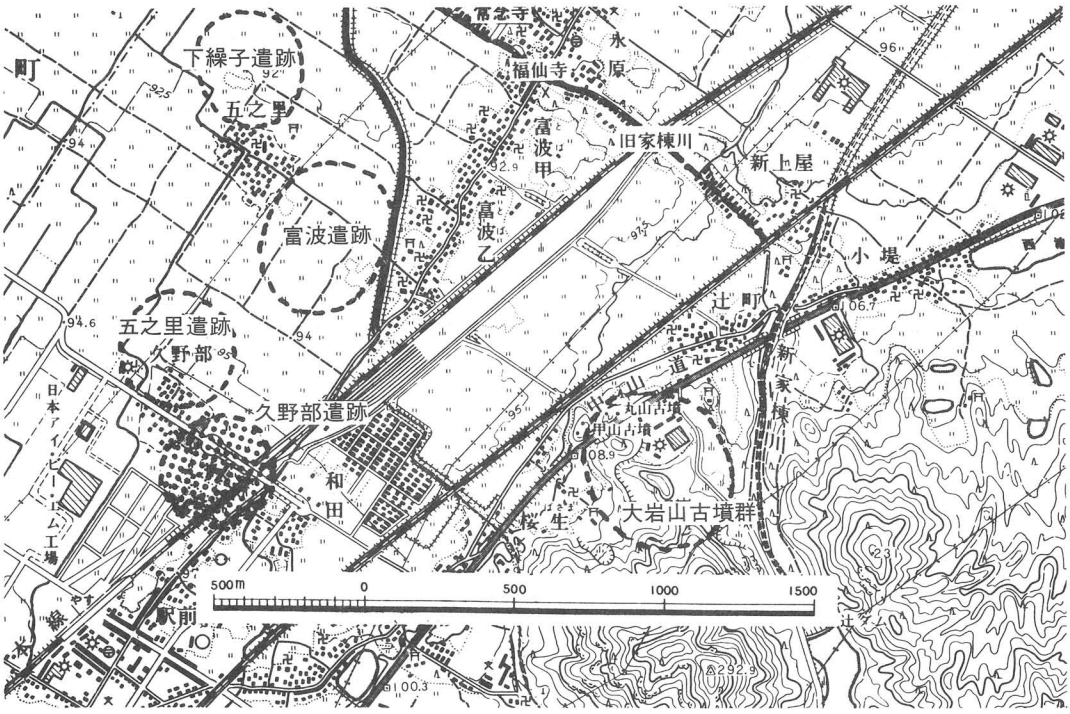
本報告書は、昭和52年2月21日～昭和52年5月21日の3ケ月を要して実施した、滋賀県野洲町久野部遺跡七ノ坪地区の発掘調査の記録をおさめたものである。この地は、かねてより周知の遺跡、久野部遺跡、富波遺跡の隣接地として注意されたところであったが、昭和51年春この地を取得、分譲宅地造成を計画された。阪急電鉄株式会社より試掘調査の依頼があり、同年4月～5月滋賀県教育委員会によって第一次調査が実施された。その結果、対象地の数ケ所において、遺構、遺物の存在が明らかとなり、詳細な調査が必要となったため、滋賀県教育委員会によって第二次調査を実施することになったのである。

本遺跡は、野洲川扇状地端の微高地に立地し、海抜90メートル前後のコンタ上に点在する遺跡群のほぼ中心部に位置し、北に弥生～鎌倉期の集落跡・墓地跡からなる五之里遺跡が、北東に古墳～鎌倉期の集落跡である富波遺跡が、南に古墳後期～平安期の集落跡、和田遺跡、野洲郡街推定地が所在している。本遺跡については、さきに円光寺前の数ケ所、十ケ坪地点などの調査がなされ、弥生時代後期から平安時代に到る掘立柱建物、土拡、井戸、溝などが発見されており、今回の調査によって、その実態が、より明らかになったと考える。(注1)

（大橋信弥）

注

(1)　兼康保明ほか『久野部遺跡発掘調査報告書－野洲郡野洲町久野部字十ケ坪所在－』（野洲町教育委員会・1977）



第1図　遺跡位置図

Ⅱ　調査の経過

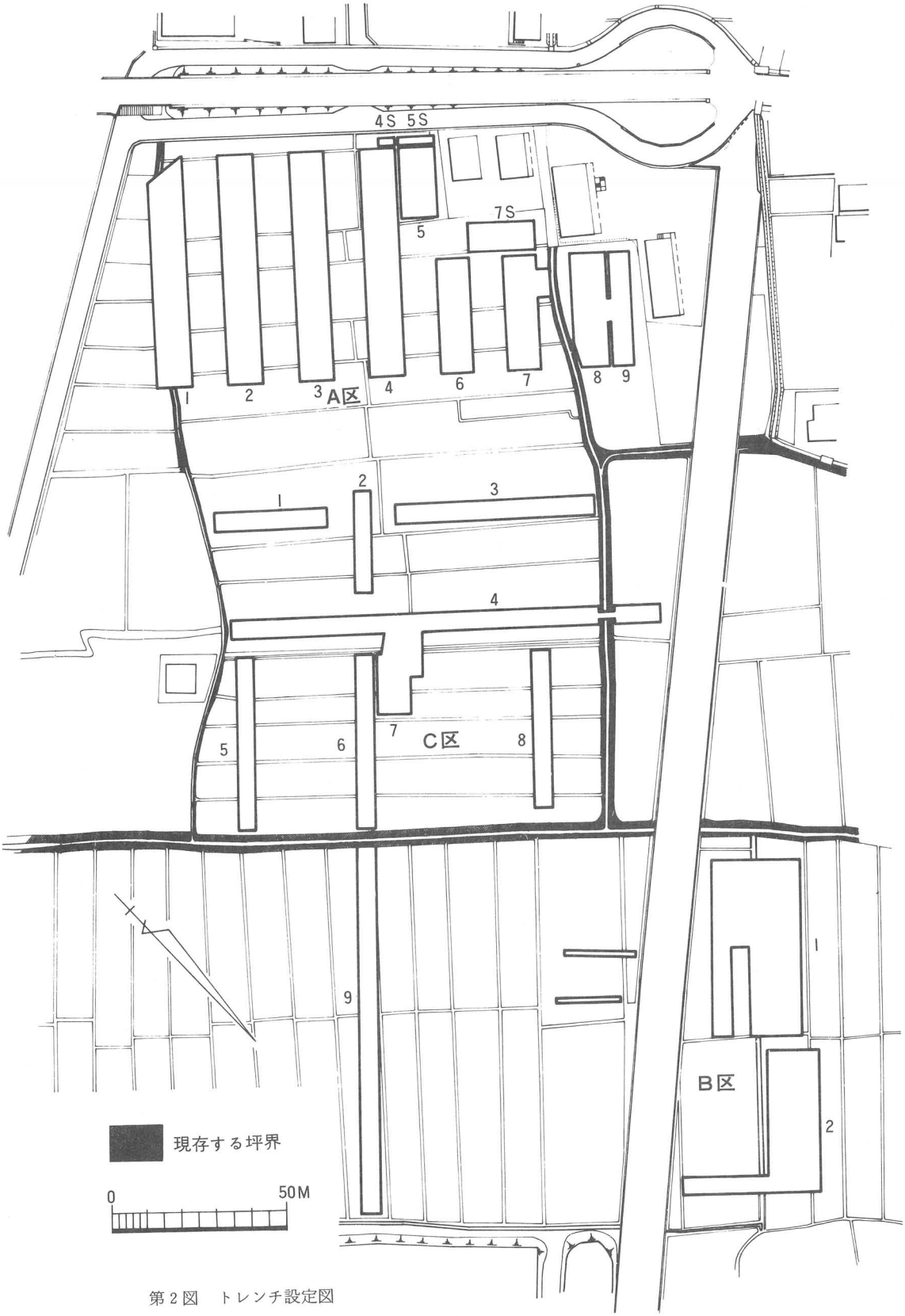
当地区の発掘調査は、1977年2月21日より開始し、同年5月21日までの約3ケ月を要した。当初、南方のA区より調査を開始し、ついで北西のB区、北東のC区へと進んでいった。

A区は、幅10mの南北に長いトレンチを設定し、一つ置きにユンボで耕土と床土を掘削の後、調査を行った。各トレンチの名称は、東から西へA1トレンチに始まって順次A9トレンチにまで至る。遺構が露見する箇所では、それに従って随時拡張区を設定し、全容が明らかとなるよう努めた。なお、さらに下層から遺構の検出される可能性もあるため、断面観察及び排水等を兼ねて壁沿いに常時試掘溝を設けたが、人為性の考慮される層は確認できなかった。

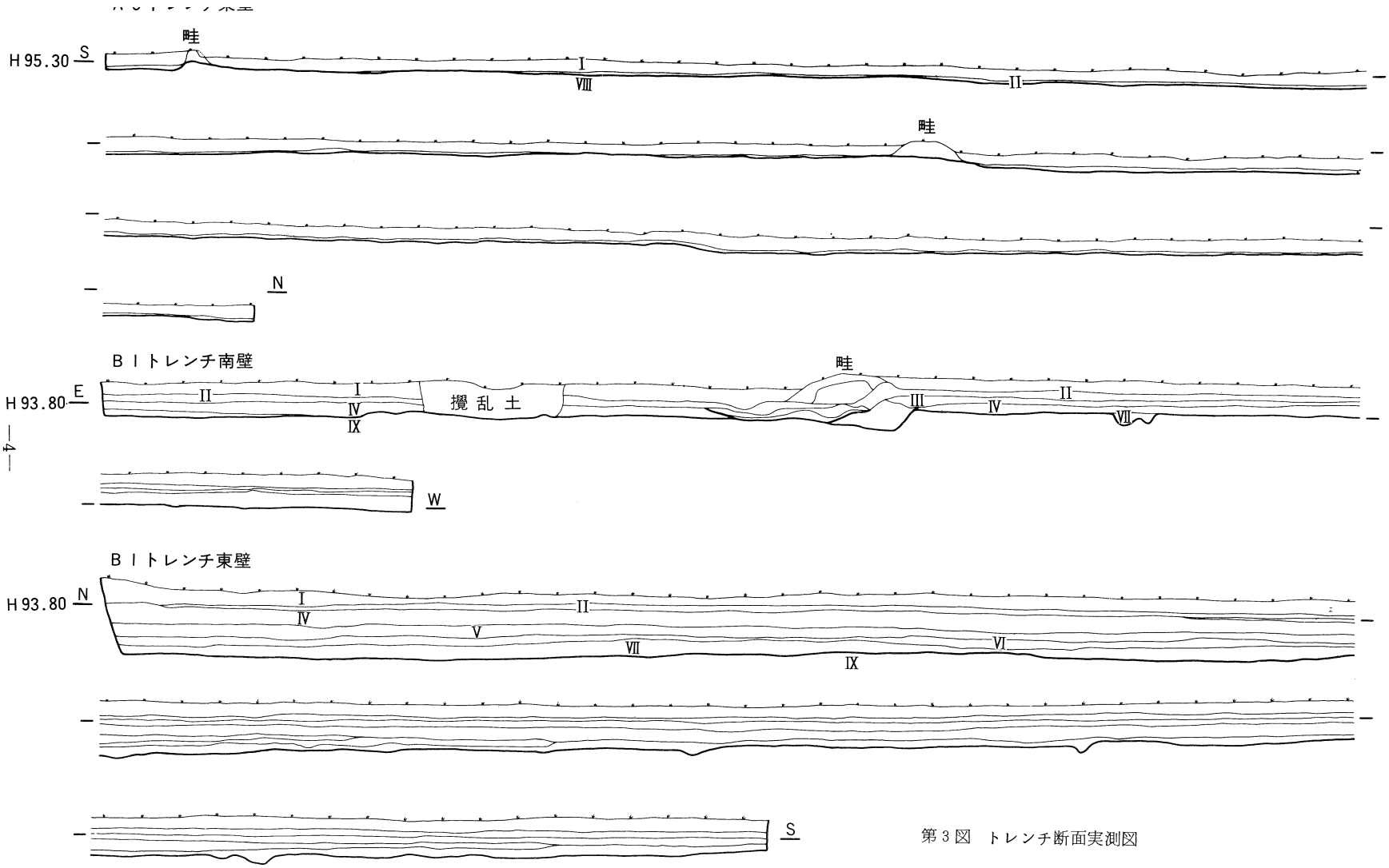
B区は、当初幅5mの南北に長いトレンチをA区同様一つ置きに設けて調査を開始したが、ほぼ全体に遺構の散在することが知られたため、結局、比較的平面的な発掘を行うことになった。従って、トレンチの名称は、B1とB2に一括した。ただA区と異なり、遺構の切り込み面に至るまでには時間を要した。最初に耕土と床土を掘削し、遺構の存否を確認しながら、ついでⅢ層を掘削してⅣ層が露見するに至った。しかし、Ⅳ層の上部は酸化マンガンの斑文集積が著しく、また色調が遺構の覆土と極めて類似しているため、遺構の検出が困難であり、やむなくⅣ層の上部も掘削して遺構を確認した。SD8、SD9の両溝は、それでもなお不明解であったため、壁面の試掘溝に加えて、溝に直交する試掘トレンチを3ケ所に入れて、ようやくプランを明らかにすることができた。

C区は、幅5mの、南北に長いトレンチと東西に長いトレンチを、総計9ケ所に設定した。設定するにあたっては、断面観察が有効におこなえるよう　C2、C6、C9の各トレンチを一直線上に配置したが、そのことにより微高地から旧沼沢地に至る層位の複雑な変化が明瞭に把握できた。C7トレンチにおいては、SD10の開口部が露見し、豊富な遺物が検出されたので、拡張を行った。その他、坪界の確認のため、C4トレンチを北西に延長し、又、C9トレンチの北西には、新たなトレンチを2箇所に設けた。

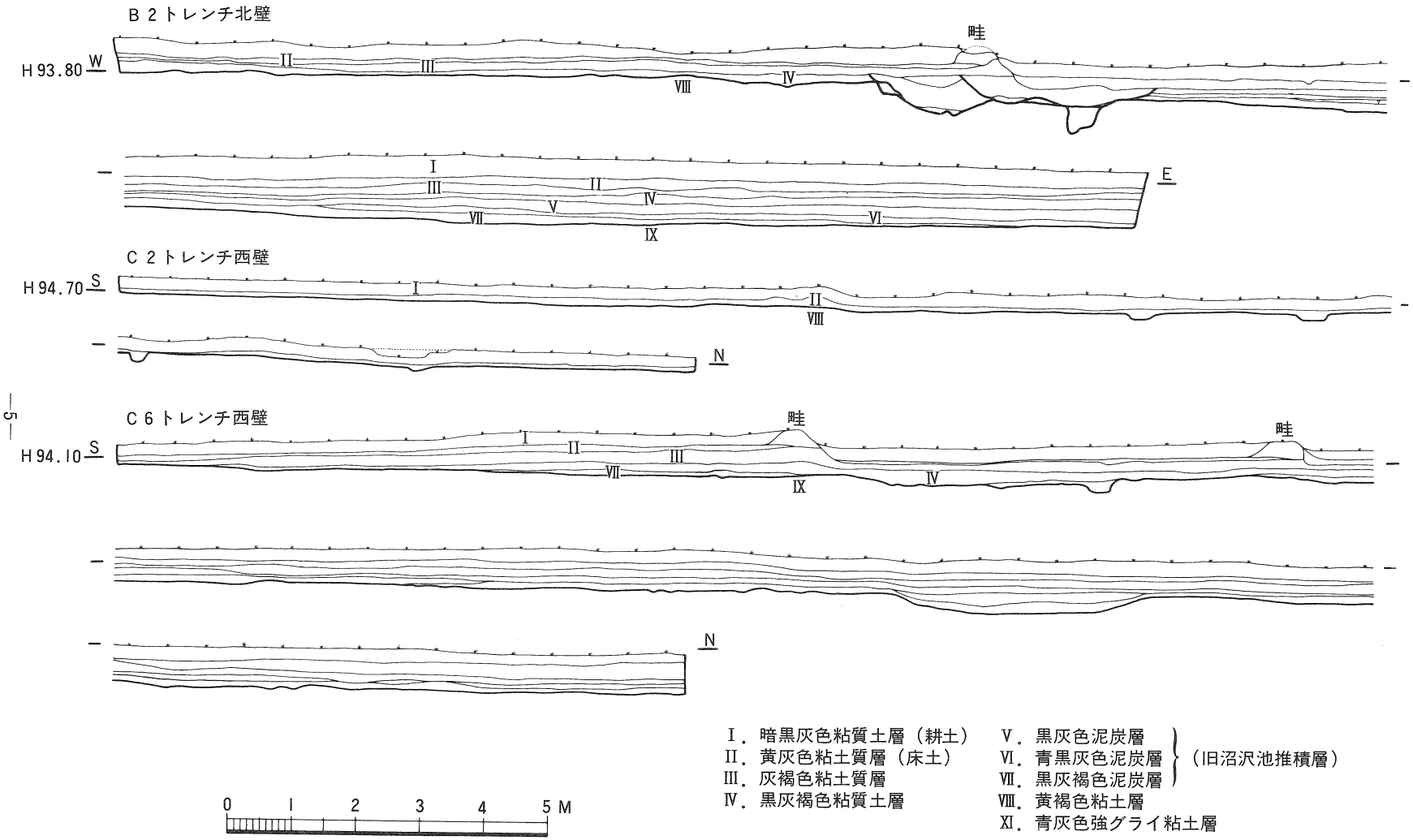
なお、B区東半及びC区北半は、比高を減じて旧沼沢地が広がるため、ポンプの常設、排水溜りの設置など、水との闘いが最も主要な作業上の課題であった。　（谷口　徹）



第2図　トレンチ設定図

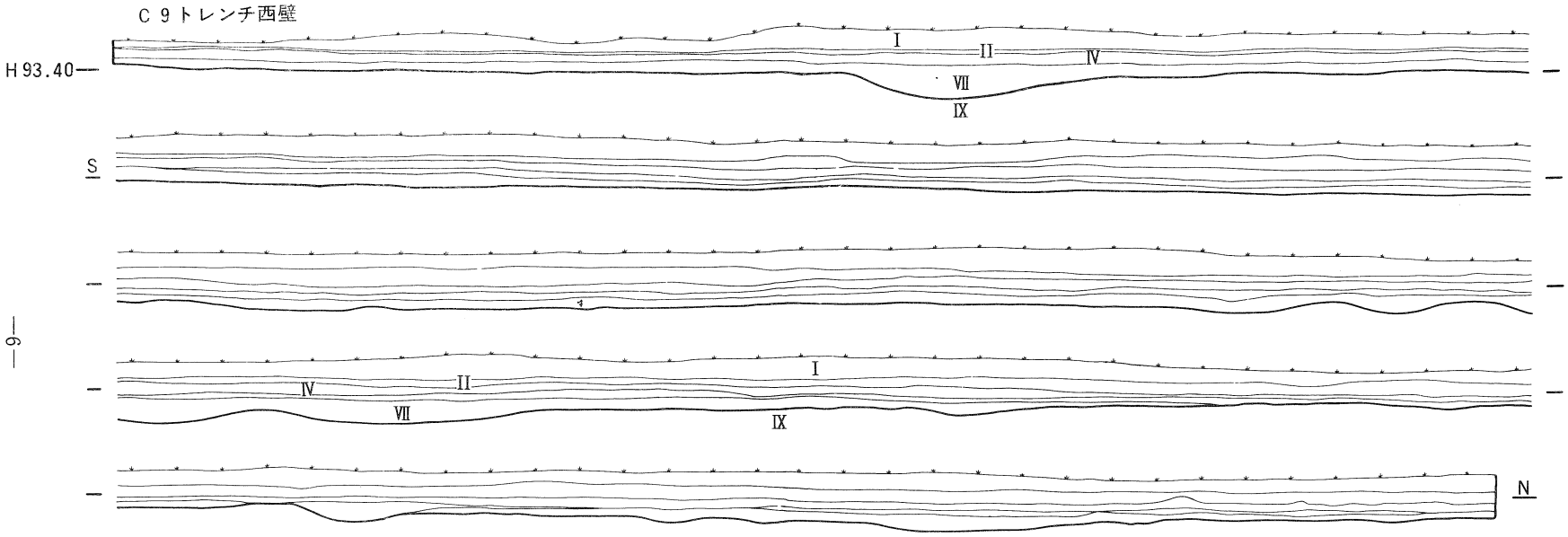


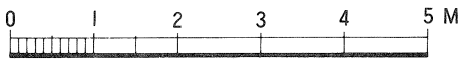
第3図　トレンチ断面実測図



Ⅰ．暗黒灰色粘質土層（耕土）
Ⅱ．黄灰色粘土質層（床土）
Ⅲ．灰褐色粘土質層
Ⅳ．黒灰褐色粘質土層
Ⅴ．黒灰色泥炭層
Ⅵ．青黒灰色泥炭層
Ⅶ．黒灰褐色泥炭層
（旧沼沢池推積層）
Ⅷ．黄褐色粘土層
Ⅺ．青灰色強グライ粘土層

第４図　トレンチ断面実測図





Ⅰ．暗黒灰色粘質土層（耕土）
Ⅱ．黄灰色粘質土層（床土）
Ⅳ．黒灰褐色粘質土層
Ⅴ．黒灰色泥炭層
Ⅶ．黒灰褐色泥炭層
（旧沼沢地堆積層）
Ⅸ．青灰色強グライ粘土層

第５図　トレンチ断面実測図

Ⅲ　調査の結果

1　層　　位

当調査地区は、鈴鹿山地の御在所山にその源を発する野洲川の右岸にあって、野洲川が形成した比較的平坦な扇状地上に位置している。しかし、北東はしだいに比高を減じて旧沼沢地が広がるため、自然の層位も一様ではない。従って、ここではＡ区とＢ・Ｃ区に便宜上分けて、基本的な層位を概括することにしたい。

Ａ区では、耕土（暗黒灰色粘質土層・Ⅰ層）と、その床土（黄灰色粘質土層・Ⅱ層）の直下に、黄褐色粘土層（Ⅷ層）が広がり、各遺構は、すべてこの地山を切り込んで構築されている。黄褐色粘土層には、黄橙色で輪廓不鮮明な太い管状の含水酸化鉄沈殿物が顕著にみられ、下部ではグライ化した青灰色部と酸化した褐色部とがモザイク状に混り合っており、酸化と還元が反覆する地点であることを示している。

深く切り込まれたＳＤ２では、この黄褐色粘土層の下に、停滞水による還元状態のため鉄化合物が還元された結果生じた青灰色のグライ砂層と、さらにその下に径１～10cmの円礫を主体とする暗茶灰色砂礫沖積層が広がるのを確認した。近在のボーリング調査の結果（注１）によれば、こうした砂礫層に、青灰色を基調とする粘土層や砂層が層状に介入しながら、標高90ｍ前後で新期砂礫洪積層に至るようである。

Ｂ区東半およびＣ区北半に端を発してその北東には、床土直下に旧沼沢地が広がっている。厳密には、Ｂ区遺構全図（第８図）、Ｃ区遺構全図（ＰＬ53）に破線で補いながら示したように比較的複雑なプランを呈しており、Ｃ区では南西へ舌状に広がる箇所がみうけられた。この沼沢地の堆積層は、基本的に黒灰色（上層・Ⅴ層）、青黒灰色（中層・Ⅵ層）、黒灰褐色（下層・Ⅶ層）の各泥炭層よりなる。いづれも地下水位が高いため還元状態を呈し、構造も未発達である。沼沢地の下層は、一部に凹部がみられ、当初自然のゆるやかな流路が存在したと考えられる。Ｃ７トレンチで検出された７Ｃ初頭の遺物を主体とする溝（ＳＤ10）開口部の最上層の土が、この沼沢地の下層土へと漸位的に変化することから、沼沢地に泥炭土の堆積が開始されたのもおそらく７Ｃ初頭前後とみてよいであろう。この沼沢地の下には、泥炭や黒泥を含まない無機質の青灰色強グライ粘土層（Ⅸ層）が厚く堆積している。

Ｂ・Ｃ区とも旧沼沢地の縁部直上には、黒灰褐色粘質土層（Ⅳ層）、灰褐色粘質土層（Ⅲ層）が堆積し、両層とも沼沢地の存在しない地域にまで及んでいる。いづれも、沼沢地の縁部あるいはその周辺の地所の低い一帯を整地した　いわゆる整地層である可能性が高い。この人為的な層を形成するまでに至るには、相当の土木量を想定しなければならないだろう。黒灰褐色粘質土層の場合には、Ｂ区の各遺構がこの層の上部ないし中部から切り込まれており、この層の整地化作業がこれらの遺構を構築した12Ｃ前半頃ないしはそれ以前に行われていたことを物語っている。

以上の整地層のうち、黒灰褐色粘質土層には酸化マンガンの斑文が、灰褐色粘質土層には酸化

鉄の斑文が　それぞれ顕著に認められている。このようなマンガン・鉄両斑文の分化・発達は、現耕土が、潅漑水利用の水稲農耕に起因する水田土壌化作用の、かなり長期にわたった結果であると考えられ、開田年次の比較的古い水田であることを示している。

因に、床土直下に灰褐色粘質土を保つ水田は、量も生産性の高い水田であるといわれ、かって沼沢地にすぎなかったこの地も、少くともＢ・Ｃ区近在にみる限りにおいては、幾度かにわたる人為的な整地の結果、現在では良田に生まれ変わっていると理解されよう。

注　　（谷口　徹）

(1) 香昌工業株式会社「梶田共同住宅新築工事に伴う地質調査報告書」(1976)
日本国有鉄道東海道新幹線支社「東海道新幹線地質図」（大阪保線所管内　1967）

＜参考文献＞

1. 松井　建「岡山県津島遺跡における弥生時代の潅漑水利用水田の存在について」(『考古学研究』64)
2. 八賀　晋「古代における水田開発」(『日本史研究』96)

2　遺　　構

(1)　A区遺構各説

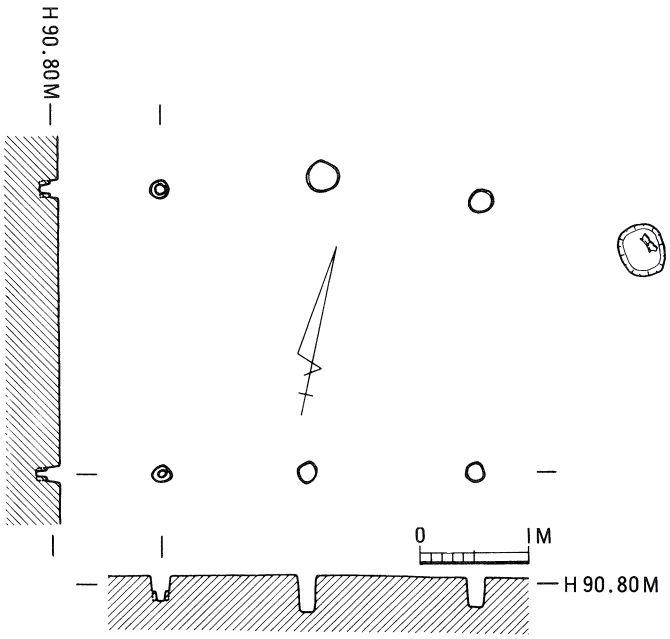
A区やや西方よりに、ＳＤ１～ＳＤ７の各溝の検出をみた。その内、比較的遺存状況の良好であったＳＤ１～ＳＤ４は、１部蛇行するなどの偏差もみられるが、大局的には、いづれも流路を南西から北東に保ち、現存する野洲郡条里制地割とも方向を異にする点で共通している。これら各溝の東側には、径20～30㎝の黒褐色を基調とするピットの点在が認められるが、掘立柱建物として明瞭にそのプランを確認でき得たのは、Ａ７トレンチのＳＢ１の１棟に限られた。その他、数ケ所で不定形の落ち込みが検出された（破線で明示）が、人為性を考慮し難く、自然の所産である可能性が強い。

以上、概括したＡ区内各種遺構は、出土遺物や切り合い関係が示す様に、時期差を保っており、本来ならば地山の掘り込み面を層位的に異にするものも存在したであろう。しかし、現況では、いづれの遺構もその上面を水田耕作によって削平されており、各時期の遺構が同一面で検出された。

(a)　掘立柱建物

ＳＢ１

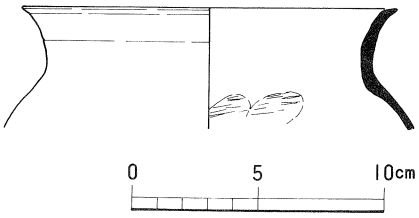
梁行１間（約2.6ｍ）、桁行２間（約３ｍ）の掘立柱建物である。桁行の１間に比して、梁行のそれが、はなはだしく長い点が注目される。方位は東西よりやや北にずれている。柱穴は径20㎝前後。深さは、最も深いもので35㎝を計る。こうしたプランを持つ掘立柱建物は、弥生時代以降、幾つかの検出例が存在し、倉庫としての機能用途が考えられている。本例もそうした機能用途を考えたいが、比較的良好な出土をみた山木遺跡の柱穴が深さ110㎝を計ることを考えれば、



第６図　Ａ７トレンチＳＢ１

仮に、地山上面の削平を考慮に入れても浅く、果たしてわずか６本の柱で、重量に富む上屋を支えきれたかどうか留意される。

各柱穴からは遺物の出土をみなかったが、建物の東側で、径50×40㎝、深さ約50㎝の楕円形土坑が露見し、坑内から古墳時代中期頃と思しき土師器甕の口頸部１点（第７図）が検出された。この土坑の覆土が黒褐色粘質土であり、それが各柱穴の覆土と土質・土色の両面において同じであることから、一応、この掘立柱建物も古墳時代中期頃の所産であろうと推定される。同年２月初めに調査された久野部遺跡十ケ坪地区からも、同様の掘立柱建物が３棟検出されており、その内ＳＢ２の方位が当区のそれとほとんど同じであり、又、覆土も極めて似ている。十ケ坪地区は、今回の調査地区とわずか国鉄の線路を隔てた至近距離にあり、おそらく同期の遺構と考えるのが穏当であろう。ただ、十ケ坪地区の報告では、弥生時代後期としての位置付けがなされており、時期決定資料に乏しい当区の場合、古墳時代中期という断定を避けて今後に待ちたい。(注１)



第７図　土坑内土器実測図

（b）溝

ＳＤ１

ＳＤ１は、次に述べるＳＤ２内を南東から北西へ、やや蛇行気味に流れる溝である。幅約1.8ｍ、深さ約0.4ｍを計り、椀状を呈する。覆土は④～⑦層に細分されるが、大きくは、粘質土層（④・⑤層）と砂質土層（⑥・⑦層）に分けることが可能であり、砂質土層内に遺物の出土が目立った。この溝は７Ｃ後半頃の所産と理解されるが、時代を決しうる遺物に乏しい。ただ、西方へ行くに従い地山の削平が著しく、Ａ７Ｓトレンチ以西では粘質土層が姿を消している。なお、Ａ７Ｓトレンチでは、このＳＤ１の上に①層の単純層からなる溜りが存在したが、遺物の出土に恵まれず、その時期は定かでない。

ＳＤ２

ＳＤ２は、南東から北西へ、ほぼ直線的な流路を保つ溝である。通常、幅約3.0ｍ、深さ約1.0ｍを計る椀状を呈し、床土直下の黄褐色粘土層（Ⅷ層）から切り込まれ、青灰色グライ砂層を経て暗茶灰色砂礫沖積層にその底部を置く。覆土は、基本的に⑧～⑮の８層に細分されるが、⑫・⑬両層からは遺物の検出が無く、又⑫層は、必ずしも普遍的に存在する層ではない。以上を考慮すれば、厚く堆積し比較的安定した上層（⑧層）、砂層と粘土層が薄く数条にわたって互層をなす中層（⑨～⑪層）、やや腐植を帯びた粘土層と、地山の流入により生じた砂礫層からなる下層（⑭・⑮層）の３層に大別される。

これらの層中より検出された遺物から、この溝は弥生時代後期中葉の極めて短期間に埋没してしまったことが理解される。ただ、わずかの落ち込みとして、その形骸は後にまで留めることになったようだ。先にＳＤ１がＳＤ２内をやや蛇行気味に流れると記したが、おそらくそうした落ち込みを利用して、新たにＳＤ１がその上から掘り込まれたと考えるのが妥当であろう。

なお、Ａ５トレンチ近在では、左肩部に幅約１ｍ、深さ約0.２ｍの浅い小溝ないしは溜りが平行して走っており、⑫層が堆積している。下層の堆積が終了した時点で、何等かの用途をもって新たに掘開されたのであろう。又、Ａ７Ｓトレンチには、ＳＤ２埋没の後、同じく左肩部を一部で切り込んで②、③両層からなる溝様のわずかの落ち込みが存在したが、遺物に恵まれず、その時期を決するまでには至らなかった。

ＳＤ３

ＳＤ３は、ＳＤ２の西側を同じく南東から北西へ流れる溝である。通常、幅約2.５ｍ、深さ約0.５ｍを計り、やや扁平なＵ字状を呈している。Ａ５Ｓトレンチでは一部でＳＤ２と接しており、Ａ８トレンチの南端近くでは小さな氾濫帯の様に不整形な広がりをみせ、ＳＤ１、ＳＤ２の一部を切り込んでいる。

覆土は、厳密には５層からなり、①・②・③の各砂質土層の下に、礫層（④層）と砂層（⑤層）が堆積している。礫層は、酸化鉄が礫層の間隙を埋める様に沈着し、遺物の検出が最も多い層であった。これらの遺物の検討から、ＳＤ３が埋没したのは７Ｃ初頭を中心とする６Ｃ中頃から８Ｃ末の間に位置づけることができる。

ＳＤ４

ＳＤ４は、ＳＤ２の東側をやや蛇行しながら、南東から北西へ流れる椀状の溝である。最も遺存状況の良好であったＡ７Ｓトレンチでは、幅約0.８ｍ、深さ約0.３ｍで、小規模ながら最も明確なプランを保っていた。Ａ７Ｓトレンチの西端では、ＳＤ２を一部切り込んでおり、東方では急に流路を南に変えて宅地下に埋没し、Ａ５トレンチでは既にその姿を確認できなかった。

覆土は、粘質土層と砂層が数次にわたって互層をなし、細分すれば７層が確認可能である。遺物の検出は少ないが弥生時代中期後半頃の遺物が出土している。

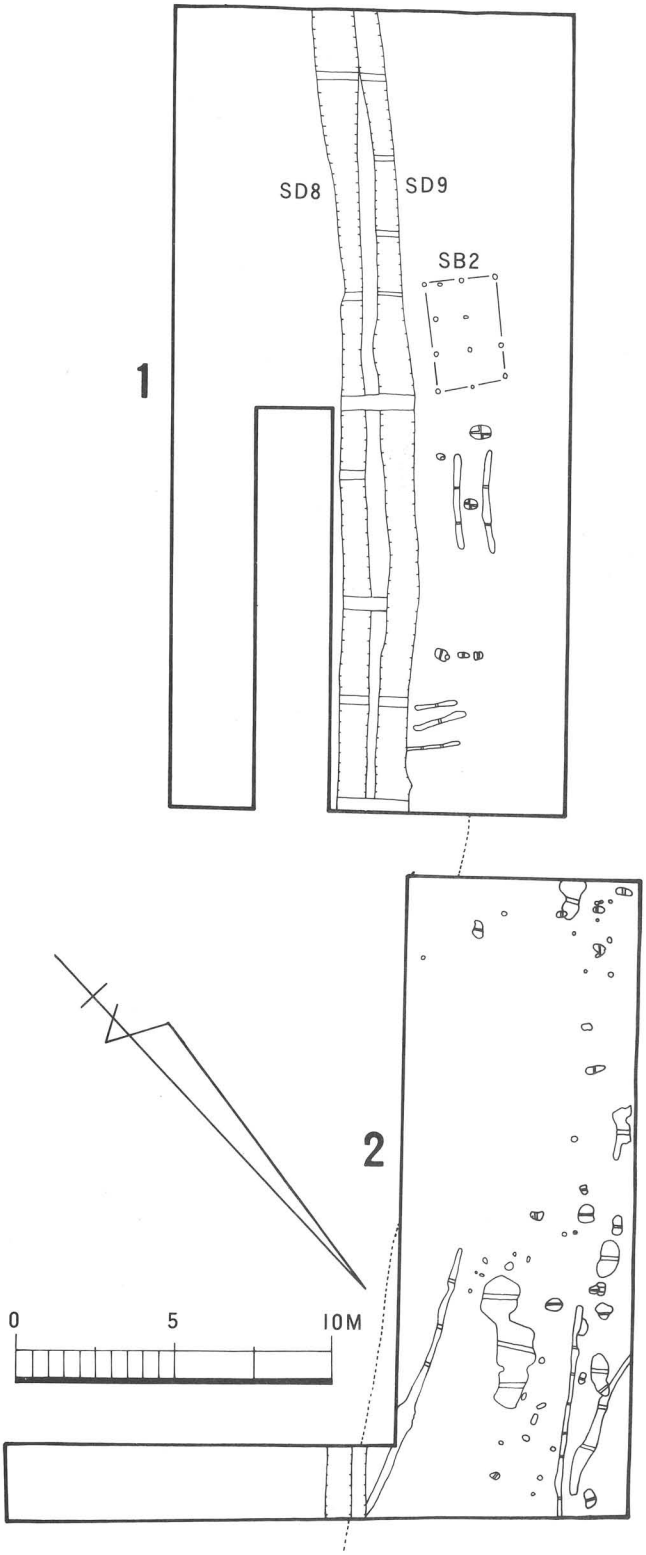
ＳＤ５、ＳＤ６、ＳＤ７

いずれの溝も灰褐色粘質土層の単純層からなる浅いものであり、その流路は、これまでと同じく南東から北西に保っている。ただ当初からは比較的浅い溝であったと考えられ、現況では、わずかに深かった箇所のみ残存しているに過ぎない。これまでの各溝は人為的な掘り込みの結果であると思われるが、この３溝に関しては疑問の点も多い。ただ、その流路がいづれもこれまで同様の方位を保っていることから、人為的な掘り込みである可能性を残しておきたい。なお、これらの溝の埋没時期に関しては、遺物に乏しく不明である。

〈Ａ区小括〉

Ａ区で概括した各溝が、わずかの偏差を伴いながらも、おしなべて南東から北西への流路を保っている点は十分注目するに価しよう。こうした各溝が居住域との関連で掘開されたものであるとすれば、北東に広がる旧沼沢地に対する南西、つまり現在の久野部集落の近在に、各期の遺構が重層化して眠っているとみることができるであろう。

(2) Ｂ区遺構各説



第８図　Ｂ区遺構全図

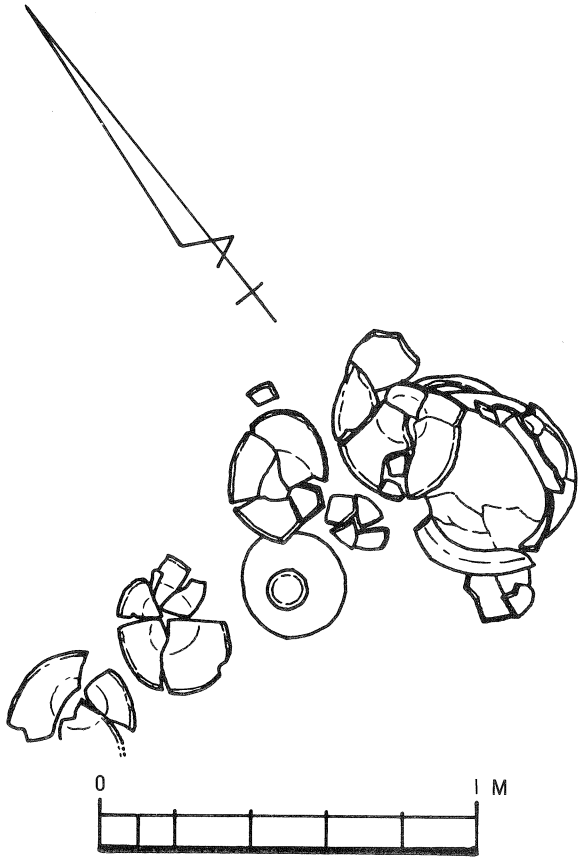
Ｂ区では、条里制地割に規制されたＳＤ８、ＳＤ９の両溝が、流路を南西から北東に保っている。この東側では遺構の検出はなかったが、対する西側には、両溝に平行してＢ１トレンチでＳＢ２を確認した。その他Ｂ１トレンチでは、若干の柱穴、土坑、及び小溝の存在が知られたが、Ｂ２トレンチに至ってそれらはおびただしいものがあった。Ｂ区で検出したこれらの遺構は、遺構内出土の黒色土器及び土師器等の検討から、一部に切り合い関係をなすものも存在するが、概ね12Ｃ前半頃のものと解される。各遺構は、先にいわゆる整地層と判断した黒灰褐色粘質土層（Ⅳ層）の上部から掘り込んでいるものが大勢を占めたと考えられるが、この上部には酸化マンガンの斑文集積が著しく、又、色調が遺構の覆土と極めて類似しており、遺構の検出が困難であった。結果的に、上部をある程度掘削して遺構を確認することになったが、整地層として一括した多量の土器の中には、本来遺構内の土器であった可能性もある。ただ、各遺構内から出土した土器と整地層からのそれとの間に、現状では時期差を認め難い。なお、整地層上部において、特に土器片の散布が著しかった箇所は、図中に破線で明示した（ＰＬ52）が、上部を掘削した段階でその下から浅い小溝が露見した。おそらく、小溝が用を足さなくなった段

階に土器の集積が行われて、土器溜りの様相を呈していたと考えられる。

（a） 掘立柱建物

ＳＢ２

第７～第９の各柱穴が明瞭でないが、梁行２間（約4.5ｍ）、桁行３間（約6.8ｍ）の掘立柱建物である。柱間は梁行2.25ｍ、桁行2.30ｍのほぼ等間隔をなし、総柱の倉庫である可能性が高い。方位はＮ－33°－Ｅであり、野洲郡条里制地割にみる方位に完全に一致し、その規制の下で構築された建物であることを物語っている。



第９図　Ｂ１トレンチ　整地層（Ⅳ層）内土器出土状況

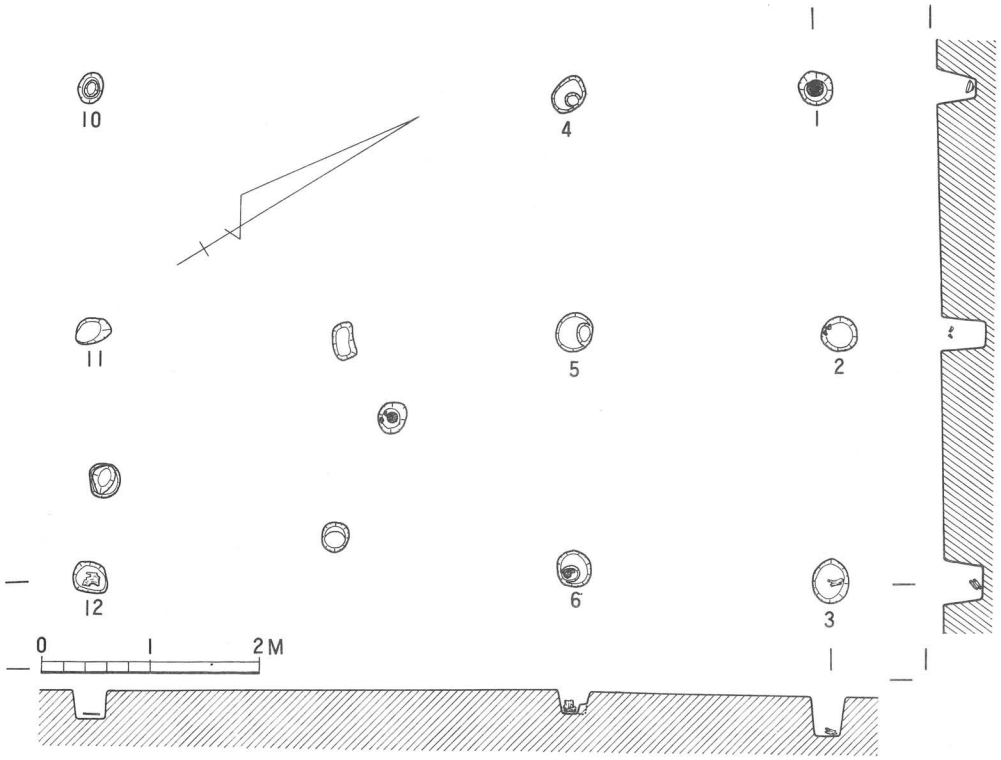
柱穴内はいづれも暗黒灰褐色粘土で覆われ、第６柱穴内には柱根が遺存し、柱根の下方に枘孔を穿って、それに根絡みと考えられる別木をはめ込んでいた（第11図）柱の沈下及び横ずれを防ぐ目的を持つものであろう。その他、第３と第12柱穴内では、柱の沈下を防ぐ礎板が、又、第１柱穴の底部近くからは、ほぼ完形に近い土師器椀が検出された。

（b） 溝

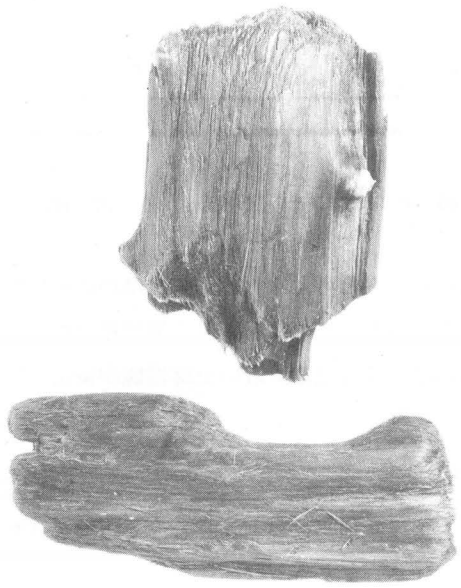
ＳＤ８、ＳＤ９

ＳＤ８、ＳＤ９はいずれもＳＢ２と同じく条里制地割に規制される形で掘削された溝である。流路を南西から北東に保ち、ＳＤ８は浅い皿状を、又ＳＤ９は椀状をなす。両溝内の遺物から時期差を求めるのは困難であるが、断面観察の結果、ＳＤ８がＳＤ９を切り込んで、新たに構築されたものであることが確認された。

ＳＤ８は①～④の４層により、ＳＤ９は⑤～⑦の３層によって埋没している。ＳＤ８は上層が軟性に富む粘土層（①層）よりなり、下層は３層からなる砂層（②・③・④層）が堆積している。③層の黄褐色砂層は酸化鉄の沈着が著しく、遺物が比較的豊富に出土した層であり、土器片以外



第10図　B1トレンチSB2



第11図　SB2第6柱穴内出土の柱根及び根絡み

にも数ケ所で自然木や骨片の出土をみた。SD9は、比較的砂質に富む粘質土層（⑤層）やや腐植質の粘土層（⑥層）及び砂層（⑦層）からなり、粘土層が最も厚く安定している。

両溝が掘り込まれた段階には、すでにある程度の整地化が試みられているとはいえ、ほぼ両溝を境としてその東側には、かって旧沼沢地が広がっていたのが知られた。わずか10㎝前後の整地化作業によって、沼沢地およびそれがもたらす湿気をくい止めることは困難であろう。SD8・SD9が2度にわたって掘り込まれたその背景には、こうした沼沢地から西側に広がる居住域を隔離し保護する意図が存在したに相異ない。

両溝が埋没した段階、つまり12C前半以降再度整地化作業が行われたらしく、灰褐色粘質土

層（Ⅲ層）の堆積が確認されるが、両溝を境とする各層位の落差は依然として解消されるに至らず、現在では、ＳＤ８、ＳＤ９の両溝上に、その流路に沿ったやや規模の大きい畦が構築されている。

その他、数条の小溝が確認されるが、黒灰褐色粘質土の単純層からなるものが多く、おそらく排水・排湿の機能を果たす為に掘開されたものであろう。Ｂ１トレンチでは、既述の様に、そうした溝が用を足さなくなった段階で土器片の廃棄に利用されたらしく、おびただしい量の土器片が集積していた。

（c）土　坑

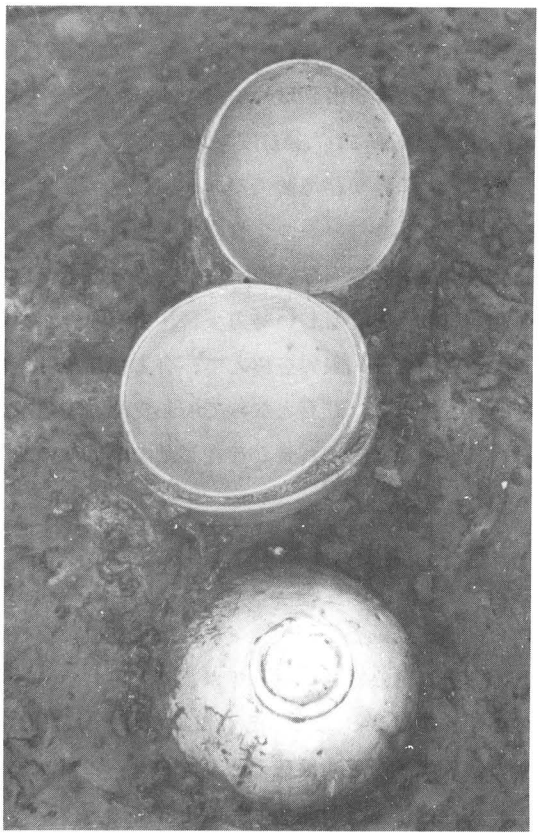
Ｂ１トレンチ北半からＢ２トレンチにかけて多数の土坑が検出された。平面小判形を呈し比較的深いもの、不定形な広がりを保ち浅いものなど、形態上種々の偏差を伴っているが、いわゆる土坑墓の可能性を持つものは存在しない。覆土は、通常２～４層が確認され、いづれも粘質土層からなる。上部には黒灰褐色の粘質土層（①層）が堆積し、この層から最も多量の遺物を出土する。下部には、やや黒色の強い暗黒灰色を基調とする粘質土層（②層）や、灰褐色粘質土層（③層）が堆積するが、時として酸化鉄が若干沈着する黄褐色粘質土層（④層）の堆積をみる。

いづれの土坑も、その占める位置からすれば屋外土坑の範疇に属し、おそらく貯蔵ないし廃棄物処理の用途に供されたと考えられる。

〈Ｂ区小括〉

Ｂ区の場合、遺構構築時の12Ｃ前半には、既にある程度の整地化（Ⅳ層）が試みられているとはいえ、ＳＤ８・ＳＤ９を境としてその東側には沼沢地が広がっていた為、遺構の存在は皆無である。従って、東に対する西側、つまり五之里や富波の集落にむかって遺構の広がりが想定されよう。この五之里や富波近在は、かって富波庄の庄域であったといわれ、当区も又、その可能性が高い。検出された倉庫址や土坑を始め、多量の遺物も又、この富波庄との関連の下で考察を加える必要があろう。

まず、文献から富波庄に関する記載を拾ってみると、弘長２年（1262）頃、鎌倉左衛門次郎が富波荘に数代にわたって城居し、子孫が繁昌したという。次いで室町期には石山寺寺領であり、荘園内には室町幕府の御料所が存在したともいう。ただ、残念なことに、今



第12図　Ｂ１トレンチ整地層（Ⅳ層）内土器出土状況

第13図　B1トレンチ整地層（Ⅳ層）
内宋銭出土状況

回検出された各遺構構築時の12C前半にまでさかのぼりうる記載は認められない。

荘園は、もともと律令体制の一大原則であった公地制が、主に公民や奴婢の逃亡によって打ち破られる過程で生まれてきたものである。その後、荘園は、社会の発展の過程で様々の矛盾をかかえ込み、時に荘園を維持する歴史的主体を変える等の改良を重ねながら、継起的に発展してきた。中世村落が形成されるようになると、それに対応して、耕地を始め集落や山野河海を有機的に統一し、農民を領域的に支配する荘園が現われるようになる。いわゆる荘園制的領域支配が成立してくる訳であるが、その出現は11C中葉であり、12Cには広範な展開をとげたと考えられている。この荘園制的領域支配の体系において、在地領主制が　荘園領主つまり都市貴族と農民との間に介在する重要な要として位置付けられるようになる。在地領主は、平安時代の農村内部で階層分化の中から生まれて農村内部に生活基盤を持ちながら、将来的には荘官として組織されることにより、荘園支配の尖兵として農民と対立する存在となったものである。彼ら在地領主は、豊富な資材と労働力を駆使して大規模な開発を敢行し、その大経営、大土地所有は、周辺の農民に重大な影響を及ぼし農民は自立性を失って彼らの家父長的保護下に入ってゆくことになる。今次の調査で確認した整地層は、こうした存地領主が家父長的傘下にある農民を使役した表徴であるとは考えられないだろうか。又、その整地層上に構築された倉庫址は、大経営の所産を収納する建物の一部ではなかったろうか。調査区から宋銭や輸入陶磁器が併出するありさまは、少くともこの地が通有の農民のものではありえないことを示していよう。文献に記載された鎌倉佐エ門次郎もこうした歴史的性格をたずさえた在地領主ではなかったか。

ただ、仮に彼が存地領主であると想定した場合、彼が富波庄に蟠居したのは、数代の間という限定された期間でしかない。つまり彼ら在地領主の大経営、大土地所有も、それを保障すべき政治的、社会的諸条件の整わない段階では、意外に不安定な位置にあったと言わねばならない。当時、在地領主間にめまぐるしい勢力交替、弱肉強食が存在したことが数多くの文献から知られる。従って、彼らは村落の限界を超えて、有力な都市貴族及び寺社（荘園領主）と結び付き、所領の寄進を敢行し、自らは荘官となって所領支配の安定を図った。富波庄が室町期に石山寺寺領となるのは、こうした歴史的背景が存在したのではないかと思われる。

(3)　C区遺構各説

C区は、当調査地区の中で最も広大な面積を有するが、C区北半はしだいに比高を減じて旧沼沢地が広がる為、遺構としては、不明確な落ち込みとわずかのピットを除けば、唯一その沼沢地へ流入するSD10に限られた。ただ、SD10の遺物は豊富で、須恵器、土師器を始め、木製品、植物種子、昆虫遺体とバラエティーに富んでいた。

その他、当区では条里制地割としての坪界が良好に遺存していたので、一部切断して断面観察

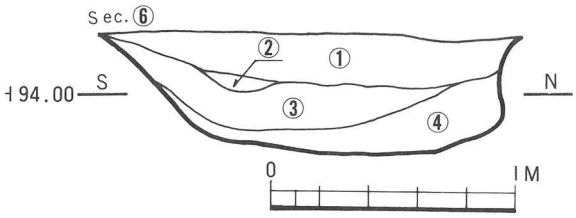
を行った。

（a）溝

ＳＤ10

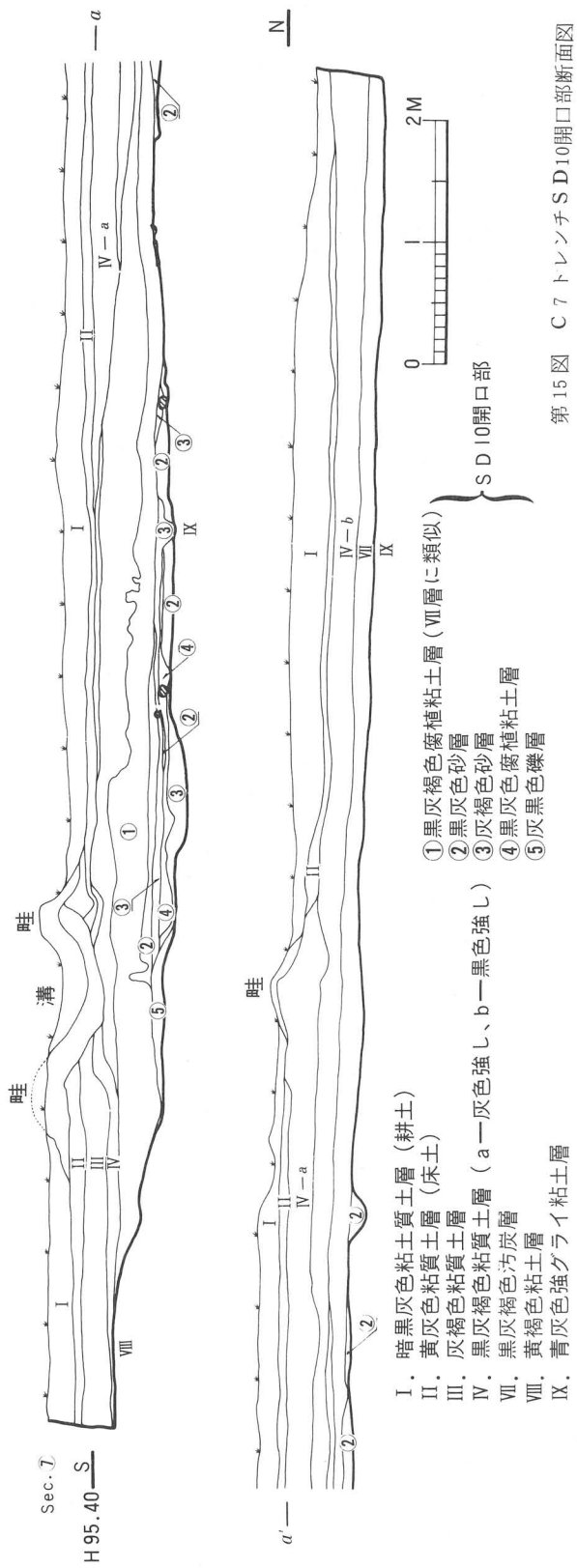
ＳＤ10は、当初西から東へ流れるが、旧沼沢地へ流れ込むあたりで、孤を描いて流路を東から北へ変える。幅約1.7ｍ深さ約0.5ｍを計り、やや北に片寄った浅い椀状をなす。整地層と推定される灰褐色粘質土層（Ⅲ層）直下の黄褐色粘土層（Ⅷ層）から切り込まれて、青灰色強グライ粘土層中にその底部を置く。覆土は①～④の４層に細分され、①層は黒褐色粘質土層、次いで灰黒色のわずかな粘土層（②層）を経て、厚く堆積した黒灰褐色粘土層（③層）に至る。この③層中に最も遺物が多く、開口部では腐植化を強めて旧沼沢地下層土へと、漸位的に変化していく層でもある。④層は、地山の青灰色強グライ粘土層が③層と混入した結果生じた層である。

ＳＤ10は旧沼沢地に流れ込んで、１ｍ余りまでは人為的な掘開の痕跡が認められるが、それより北では開口して、沼沢地に流路を委ねている。このＳＤ10開口部上層（①層）は、先の黒灰褐色粘土層が腐植を帯びて厚く堆積し、土器片以外に昆虫類の外骨格遺体が多数検出された。



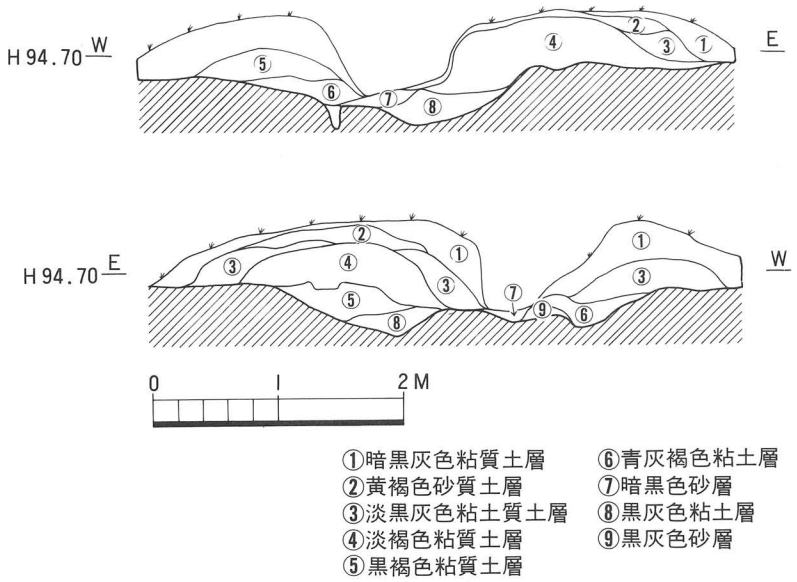
①黒褐色粘土質層
②灰黒色粘土層
③黒灰褐色粘土層
④黒色及び青灰色粘土の混入層

第14図　Ｃ４トレンチＳＤ10東壁断面図



第15図　Ｃ７トレンチＳＤ10開口部断面図

この層は沼沢地の中心部へ向かうにつれて、しだいに腐植化を弱めると同時に、沼沢地下層（Ⅶ層）へと漸位的に変化していく。中層（②～④層）は、砂層と腐植粘土層が薄く数次にわたって堆積を重ねている。この砂層内から、おびただしい量にのぼる土器、木製品、及びモモを始めとする植物の種子が出土した。おそらく水と共に流下し、流れの失われるこの地で埋没したのであろう。⑤層は、径１～10㎝の礫層である。破線で示した様に、開口部の最も南側に集中的に堆積していた。ＳＤ10が流れを強めた時期に、一気にこの地に流れついたのであろうか。



第16図　Ｃ４トレンチ坪界断面図

以上概括した様に、ＳＤ10及びその開口部からはおびただしい量にのぼる土器片が出土し、それらの検討を通じて、この溝が７Ｃ初頭を中心に、６Ｃ中葉から８Ｃ末の間に埋没したことが知られた。なお、ＳＤ10開口部から更に北方でも、新たに合計５条の小溝を確認した。おそらく、沼沢地縁辺には、他にもこうした自然のゆるやかな流路が数多く存在していると考えられる。

（b）条里制遺構（坪界）

Ｃ区北西をＮ－34°－Ｅで走る８ノ坪と14ノ坪の坪界は、遺存状態が良好である為、Ｃ４トレンチを北西に延長して断面観察を行った（第16図）。その結果、当初、黄褐色粘土層（Ⅷ層）からなる地山をわずかに掘り込んだだけの、幅約３ｍ深さ0.4ｍ前後の浅い溝が走っていたと推定される。その後、⑤、⑥、⑦、⑧、⑨の各層が順次堆積してその溝は埋まり、新たに東の８ノ坪側には①、②、③、④層を、又西の14ノ坪側には①、③層を盛ることによって、溝をはさんで両側を畦とする現況が出来あがったのであろう。幅は4.6ｍ前後を計る。この坪界に限らず、当調査地区では、この様な溝をはさんで両側を畦とする坪界が幾つか現存している（第２図）。坪界の普遍的な姿とみてよいであろう。なお④層内からは若干の土器小片が出土し注目されたが、残念ながら時期を決しうるまでには至らなかった。

その他、Ｂ区に近く、現在坪界の存在しない７ノ坪と13ノ坪の坪界推定地にも、トレンチを合計２ケ所に入れた。結局、坪界らしき地割の痕跡は確認できなかった。おそらく、沼沢地を避けて、この地には坪界が設定されなかったものと考えられる。調査をするまでには至らなかったが、

そのことは、おそらく沼沢地の広がる南東の１ノ坪と７ノ坪の坪界においても、又同様であったと思われる。

〈Ｃ区小括〉

Ｃ区中央で沼沢地に開口するＳＤ10が、Ｃ区の西方、更にはＡ区で、どのような流路を保つかは問題である。調査時からそのことには留意したが、結局、確認できなかった。Ｃ４区から、そのまま直線的な流路を保つのであれば、必然的にＣ３区で露見するはずであるが、検出されなかった。ただ、断面観察の結果、わずかに沼沢地がこの地にまで浅く舌状に張り出しているのを確認したにとどまった。Ａ区で検出したＳＤ３は同時期の溝であるが、その流路及び覆土等からみて、両者の関係は肯定し難い。又、Ｃ３トレンチにまで及ばない短距離間を流れる溝であるとすれば、流下したおびただしい遺物の説明がつかない。やや常例を逸脱した考えになるが、Ｃ３トレンチとＣ４トレンチの間で、再び流路を西北に変えて久野部の集落の方に向かっているのであろうか。

野洲郡条里については、文献上、御上神社所蔵長亨元年文書、泉涌寺所蔵永和２年文書に一部記載されているにとどまり、その全容は定かではない。ただ、条に関しては中主町に五条・六条の地名を遺存し、里に関しても野洲町に五ノ里、守山市に十二里の地名が残存している。こうした地名に加えて現存する地割などから、野洲郡条里地割が、条については北方の蒲生の郡界を基点とし、６町をもって南西に漸次条界を設けて南方の栗太郡との郡界に至るまでに17条を計る。その方位をＮ－34°－Ｅに保つ。　里については東方の成橋山東端及び菩提寺山西端を基点とし、同じく６町をもって北西に漸次里界を設けて湖岸近くに至るまでに14里を計る。

このように、条里制呼称は１郡を単位として極めて整然としているが、「１郡１条里」が一律に施工開拓されたという訳ではない。呼称に関しては確かに大化以後におこって一律の名称が与えられたのであろうが、１町方格の地割開拓は、古くは大化前代から代（しろ）の地積を軸に開始され、大化以後も随時開拓の食指を拡大していったものと考えられる。

さて、今回調査した地区は、呼称としては、近江国野洲郡10条４里の中に位置付けられる。更にその内部は、６町四方を縦横に６等分して36区画に細分される。この１町角が坪である。この数え方には、千鳥式と平行式があり、千鳥式が多いようであるが、近江の場合は平行式が用いられている。野洲郡も例外ではなく、従って、当地では更に厳密に示せば、近江国野洲郡10条４里の１ノ坪、２ノ坪、３ノ坪、７ノ坪、８ノ坪、９ノ坪、13ノ坪と、14ノ坪、15ノ坪の各々の一部ということになる。七ノ坪という呼称は、現在まで遺存している。断面観察を行った８ノ坪と14ノ坪の坪界は、当初、浅い溝が存在したにすぎないが、現況では溝をはさんで両側を畦とし、幅は4.6ｍ前後を計った。現況に関しては、他にも同様の坪界が存在するところから、坪界の普遍的な姿とみることができよう。断面観察を行った坪界の一方の畦の盛土内から若干の土器片が出土し、地割開拓の年代が解明されるものと注目したが、時期を決しうるまでには至らなかった。なお、沼沢地に規制されて７ノ坪と13ノ坪の坪界は存在せず、おそらく地理的に似かよっている１ノ坪と７ノ坪の坪界も存在しないであろう。又、２ノ坪と３ノ坪の坪界及び８ノ坪と９ノ坪の坪界は、いづれも小さな畦畔と化し、既述の様な明瞭な坪界を残していない。

更に、１坪は10等分されて１枚の田となるが、この等分方法にも半折形と長地形の２者がある。当地区の場合、こうした地割は既に削平されてしまっているのか、断面で確認することができず、現在の畦畔から復元するしかない。８ノ坪の場合、若干不完全ではあるが、東西に10等分した痕跡が認められ、その他の坪内でも旧態依然とした坪内ではその分割の痕跡が著しい。断定をするまでには至らないが、長地形を採用していたのではないかと推定される。

（谷口徹）

注

(1) 兼康保明ほか『久野部遺跡発掘調査報告書－野洲郡野洲町久野部字十ケ坪所在－』（野洲町教育委員会　1977）

＜参考文献＞

1. 平井聖「床の構造よりみた古代の住居」（『日本古代文化の探究－「家」－』1975）
2. 古川与志継「富波遺跡について」（『滋賀県文化財調査年報』昭和四十八年度 1973）
3. 入間田宣夫「平安時代の村落と民衆の運動」（『岩波講座日本歴史』4　1976）
4. 服部昌之「草津市とその周辺の条里」（『草津市吉田の条里景観遺存地区の歴史地理学的調査報告』1974）
5. 水野正好ほか　『野洲郡野洲町富波条里制遺構調査概要』（1966）
6. 落合重信『条里制』（1967）
7. 渡辺久雄『条里制の研究』（1968）

3　出土遺物

(1) 土　器

(a) A区出土土器

A区では、いずれも北流するＳＤ１～ＳＤ４及びこれらの溝状遺構の東側の土壙等から弥生土器、須恵器、土師器、陶器が出土している。個々の土器の説明は後掲の観察表にゆずるとして、ここでは、数量的に恵まれたＳＤ２の弥生土器の概要とＳＤ３の須恵器について若干記しておくことにする。

〔弥生土器〕

ＳＤ２から出土した弥生土器は甕、壷、高杯、器台、鉢、甑等の器種より構成されるが各器種とも形態ならびに手法上よりさらに細分できた。

甕Ａ（Ｅ１～Ｅ５）

頸部から「く」字状に外反した口縁部の上端を屈曲させて上方へ直立させるか、内彎または内彎気味に立上がらせるタイプで、大阪府南部の各遺跡から出土する受口状口縁の甕と酷似するものである。これもまた細部の特徴によってⅠ～Ⅳに分類されるが、次に記す甕Ｂに比べれば、全体的に口縁部に丸味があり、口縁部を飾らないのが特色である。なお、この甕ＡはＳＤ２の中層・下層よりは出土したが、上層よりは出土例を見なかった。

甕Ｂ（Ｅ６～Ｅ20、Ｅ97）

甕Ａに近似した受口状口縁のものであるが、頸部が逆「コ」状を呈するもので、口縁端部はやや外へ肥厚し、上端は平坦もしくは内傾する面を形成する。口縁立上がり部には一様に櫛状工具による刺突列点文を施し、装飾する。このタイプもさらに口縁部の形態でⅠ～Ⅳの４類に細分される。すなわち、口縁部が直立するⅠ類（Ｅ６～Ｅ12）、口縁部上端に段を持つⅡ類（Ｅ13～Ｅ14）、口縁部立上がりがやや外向し、端部がわずかに外方へ突き出るⅢ類（Ｅ15～Ｅ17）、口縁端部に内傾する面を形成するⅣ類（Ｅ18～Ｅ20）が存する。これらの中でⅠ類のみはＳＤ２の各層より出土を見たが、他の類はいずれも出土層が限定された。

甕Ｃ（Ｅ21～Ｅ24、Ｅ98）

頸部から外上方へ外反する口縁部が単純な形態を呈するものであるが、頸部の屈曲の丸味があって鈍いⅠ類、頸部の屈曲が「く」字状を呈し鈍いⅡ類、口端部をつまみあげるⅢ類まである。

以上の甕の底部と考えられるものがＥ25～Ｅ31の底部破片で、平底のⅠ類とやや上げ底のⅡ類の二分される。

長頸壷（Ｅ32～Ｅ44）

長頸壷も細部の形態及び手法上の特徴により、こまかくは４類に類別されるが、近似するⅠ、Ⅱ類を同一のものと見れば３類に分類できよう。このうち数量的にもっとも多いのはⅠ、Ⅱ類をあわせた７個体である。この二類の特徴は形態上から言えば、口縁部と体部の比が１：３近く、圧倒的に胴部の占める割合が大きいと思われることと、口頸部がずん胴の筒状を呈し、頸部が引

締らないことである。手法上の特徴は器体内外面にハケ目仕上げを多用することである。

これに対して、細頸の漏斗状に開くⅢ類（E40、E41）と頸部より外上方へ直線的に開く口縁部のⅣ類（E42～E44）はいずれもナデて仕上げるため、ハケ目等の調整痕をあまりとどめていない。この二類は下層からのみ少量出土した。

以上の長頸壺の他に広口壺及び小型壺等が上層より出土している。これらの壺の底部と考えられるものには、Ⅰ類～Ⅳ類までに分類されるが、このうちⅠ類（E49～E54）のみは底部の高さが殆ど見られなく、すぐ体部に連続するもので、他の底部のように下方へ突出しない。つくりもシャープでなく全体に鈍く、粗雑なものである。このⅠ類は下層出土に限られた。

高杯Ⅰ（E70～E73）

浅い皿状の杯部の中位で屈折して、口縁部が外上方に立上がるタイプである。A類は中層、下層出土に限られ、上層よりは出土しなかった。

高杯Ⅱ（E74～E76）

細部は異なるものの、いずれも椀状の深い杯部を呈すものである。特にE76は受部を有する点、特異であり類似に乏しい。別類として分離できる可能性がある。Ⅱ類の高杯は上、中層からの出土であり、最下層では認められなかった。なお、これら高杯の脚部も次に4類に分類されるが、Ⅰ・Ⅱ類が圧倒的に多数を占める。Ⅲ類は畿内Ⅳ様式の高杯脚部に類似し、もっとも古相を呈する。Ⅳ類の細身で中実の形態は逆にもっとも新しい様相を示す。

鉢Ⅰ（E93、E94）

比較的深い体部を持つもので、口縁部は外上方へ屈曲する。体部が浅く、口縁部が大きく開く上六万寺式までは下らない。

鉢Ⅱ（E104）

やや内彎気味に外上方へ伸びる直口縁を持つタイプであり、器壁は全体に薄く、つくりも粗雑である。

有孔鉢Ⅰ（E95、E105）

底部中央に円孔を穿つものである。

有孔鉢Ⅱ（E96）

平底の底部に多数の小円孔を穿ったものである。

〔須恵器〕

ＳＤ３より出土した須恵器には杯蓋、杯身、壺等の器種に及ぶが、ここでは形態的に差異の見られる杯蓋と杯身に限ってふれておきたい。

杯蓋A（C151～C155）

天井部にツマミを持たないタイプであるが、天井部が扁平で体部との区別も意識された、全体にシャープで比較的口径の大きいものから、天井部をはじめ全体に丸味があって鈍いつくりの、小型のものまである。陶邑古窯址群のＴＫ10からＴＫ209までのものに比定されるもので6世紀中葉から7世紀前半までの実年代を当てることができよう。

杯蓋C（C156）

天井部に扁平なツマミを付けるもので、天井部も扁平で口縁部は低く外方へのびる。端部欠損で明確でないが、ＭＴ21に相当するもので７世紀末～８世紀前半のものと思われる。

杯身A（C158）

やや深目の体部に内傾する立上りが付くタイプである。受部はほぼ水平であり、底部は平坦である。ＴＫ10形式に相当するもので、６世紀中葉の実年代が得られる。

杯身B（C159）

体部から口縁部へ外上方へ開く、立上りのないタイプである。底部はやや丸味を持つものの、ほぼ平坦である。ＭＴ21形式に相当し、７世紀末～８世紀前半の実年代が考えられる。

杯身C（C160）

底部外縁に退化した高台が貼付された杯身である。底部と体部の境界は明確な稜線で示される。陶邑ＴＫ７に相当し、長岡京ＳＤ51にも類品が存する。実年代として８世紀後半、なかんづく末葉頃と考えられる。

（別所建二）

（b） Ｂ区出土土器

出土土器の概要

Ｂ区出土遺物は、弥生土器や、古墳時代の須恵器が若干含まれるものの、大部分を占めるのは、古代末から中世にかけての日常雑器セットである土師器・黒色土器の椀・皿・鍋・羽釜などであり、若干の施釉陶器・輸入陶磁が伴う。しかしながら、畿内で一般的な瓦器は一片も発見されなかった。（注１）

さきに指摘されているように、Ｂ区出土遺物は、掘立柱建物・土坑・溝などに伴うものと、包含層出土のものに二分されるが、包含層出土としたものも、大部分が土器溜り状遺構より検出されたもので、ほとんど形式差は認められず、一括遺物としてとらえうると考えられる。

〔**弥生土器**〕　少量の出土が知られるが、図示できたものは、包含層出土の壷底部１点のみである。後期のものであろう。Ａ区ＳＤ２出土例などと関係するものか。

〔**須恵器**〕　古墳時代の須恵器は、包含層および、ＳＢ２ピット堀り方埋め土より、杯身破片が２点出土している。陶色の型式でＴＫ10、ＴＫ43に類似品が認められる。これも流入品とみなされる。（注２）

〔**土師器**〕　各遺構より、椀・皿・脚付皿・鉢・堝・羽釜などが出土している。堝・羽釜は少量で、大部分を占めるのは、椀と皿である。椀は、形態よりＡ～Ｄの４種に分けうるが、ほかに小椀が若干伴う。（注３）いづれも、粘土紐巻き上げ、貼り付け高台の手づくね品で、ほとんどが、口径14.5～15cm、器高5.2～5.5cmの同一規格である。内面上部で横方向・中位で斜方向（部分的に格子状）、底部は縦方向に、外面は斜方向にヘラミガキを施している。ただ、Ａ・ＢタイプとＣ・Ｄタイプでは、形態・成形手法（ヘラミガキの粗密）に若干の差があり、時期差を示す可能性もあるが、層位的に両者を区別することはできない。用途としては、出土量より、食器として頻

繁に使用されたと思われる。皿には、若干大型品もあるが、小皿が多く、器形により、A～Eの5種に分類される。いづれも、粘土板成形による手づくね品で、一部ナデ調整するものもあり、口径8～11cmが多い。若干器形により、時期差があるようであるが、層位的には確認できなかった。なお、ススの付着はなく、食器類と考えられる。脚付皿は、ごく少量で、脚の形態よりA・Bの2種に区分されるが、成形手法等ほぼ同じである。脚は貼り付けで、ナデにより調整される。供献用に使用されたものであろう。鉢は、SD8より浅鉢様のものが1点出土しているだけで、出土量は少なく、供献用かと思われる。堝の出土も少なく、詳細は明らかではないが、いわゆる三足堝のカナエも出土している。口縁の形態より、一応2種に分類される。粘土紐つみ上げ品で、外面にススが付着し羽釜とともに煮沸用に供されたものであろう。羽釜は、口縁部が、内傾するものと、直立するものの2種がみられ、つばは、短かいものが多い。外面に指押えがのこり、内面は、ハケ調整される。外面にススが付着しており、煮沸用に用られたものである。出土量は少ないが、消耗が激しかったのであろう。

〔**黒色土器**〕 器種としては、土師器とほぼ同じで、碗・皿・羽釜などがみえるが、椀が大部分を占める。形態・成形手法とも土師器と全く同じである。椀は、口縁の形態から土師器と同じくA～Dの4種に分類される。内外面のヘラミガキが明確なものと、そうでないものがあるが、A・Bに前者が、C・Dに後者が多いのも土師器の場合と同じである。これらは、いわゆる内黒土器で、内面と外面の口縁付近にのみ、炭素が吸着される。内外面黒色のものも若干あるが、そのすべてが、小椀であるのは注目されてよい。皿の場合も、ごく小量で、決定的なことは言えぬが、内外面黒色が一般的である。器形としてもバラエティに富む土師器に比べ、単一で小ない点も注意される。羽釜は、黒色土器というより瓦質であって、出土量は少ない。形態・成形手法等、土師器とほぼ同じである。

〔**須恵器**〕 若干歴史時代の須恵器が出土しているが、いづれも典型的なものというより、中世陶器に近いものである。器形には、椀・鉢・壷などがあるが、ほとんどが糸切底である。東海系のものか。

〔**施釉陶器**〕 緑釉・灰釉の出土が、少量ではあるが知られる。器形は、椀・皿でいづれも小破片である。緑釉は、黄緑色を呈し、軟質なもので、灰釉も瀬戸系と考えられるもので典型的なものとは言えない。(注4)

〔**輸入陶器**〕 明確なものは、1点のみであるが、小破片は若干認められる。しかし、生産地の判明するものはない。或は竜泉窯のものか。

〔**中世陶器**〕 信楽焼と思われる鉢が耕土中より若干出土している。黄赤褐色で、長石を多く含み硬質なものである。

〔**土錘**〕 包含層より1点出土している。棒状で土師質のものである。(注5)

土器の年代観

B区出土遺物は、上述したように、典型的な古代末から中世にかけての日常雑器セットを示すものと言えるが、この時期の遺跡、遺物の調査は、近年に到ってこそ著しく増えているが、従来

においては、最もおくれた分野であり、遺物の年代観にも問題が多い。ここでは、出土例が最も多い土師器椀・黒色土器椀について若干の検討を加えたい。

さきに述べた通り、B区出土の土師器椀および黒色土器椀は、形態・成形手法とも、ほぼ同一で、炭素を吸着するかしないかのみが唯一の違いとなっている。このうち、黒色土器椀については、これまで県内においても、若干の出土例はあるが、この種の土師器椀については、管見に上ったものはない。したがって、このことは本遺跡の遺物の性格を考える上で、注視すべき点であるが、それは後述するとして、ここでは黒色土器椀についてまず検討しよう。

本遺跡出土の黒色土器椀は、上に述べたとおり、一部を除き大部分が、いわゆる内黒土器で、田中琢氏の黒色土器A類である。ところが、本遺跡出土の黒色土器椀は、いわゆる畿内に一般的な黒色土器とは、形態・成形手法において、やや異なる性格を有するものであって、その年代観については、若干問題の残るところなのである。(注6)

古代末から中世にかけての、畿内における土器生産について、まとまった考察を加えられた田中琢氏は、奈良末から平安時代にかけての土師器生産に、器形の減少・成形手法の簡略化等、大量生産の傾向が顕著であることを指摘し、その中で「土師器の表面とくに内面をヘラで、ていねいにみがきあげ、炭素を吸着させて漆黒色とした」黒色土器が生み出されたこと、それが8C中頃より漸増し、9C～10Cの最盛期には、土師器**3**に対し**2**の割合で出土すること（黒色土器A類）、10C末頃、新しい構築的な窯の出現とともに、内外面黒色を呈するいぶし焼された黒色土器が成立し（黒色土器B類）、つづいてその系譜を引き、より高温度で焼成され、硬質灰白色の胎土をもつ瓦器が生み出されたとされた。(注7)

この外、瓦器については、稲垣晋也氏や白石太一郎氏によって、最近では橋本久和氏により分布、年代観の検討がなされ、それなりに中世史研究に一定の役割を果しつつある。ところが、黒色土器については、平城宮跡の資料によって、9C前後までの年代観が明らかにされているが、(注8)9C以降のものについては、白石氏が、瓦器の成立と関連させて、若干の検討を加えられているのみで、いづれも断片的なものであり、今一つ判然としないのである。そこで、ここでは、白石編年(注9)と、最近における平安京の調査成果を参照して、本遺跡の出土品の位置づけを試みたいと考える。白石氏は、畿内の黒色土器について、8C後半とされる平城宮跡SK219から11C中葉とされる法隆寺東室出土例までの6形式を設定し、そのあとに瓦器の成立を想定された。このうち、SK219につづき、10C後半とされる仁明陵北地点の出土例との間をうずめるものとして、各々、9C前半と後半にその下限が求められる平城宮跡SD650A・SD650B例や、10C代とされる平安京跡内裏内郭廻廊跡出土例があり、11C前半とされる法隆寺東室出土例に並行ないし後出するものとしては、11C末に下限の定点がおかれる平安京藤原国明邸SE－8出土例と同一の瓦器椀を伴出する、京都市六角堂遺跡溝1出土のものが上げられる。(注10)(注11)(注12)(注13)

以上によって、畿内における黒色土器椀の変遷について、若干の補足を加えたが、ここで注意されるのは、畿内においてもいわゆる黒色土器A類が、11C末にまで存続していること、したがって、黒色土器B類や、瓦器の成立以降にも、A類の生産が、依然として存続していたという点である。これは、瓦器の成立について、新たな問題を提起するとともに、近江における古代末～(注14)(注15)

中世の日常雑器生産について、一つの示唆を与えると考えるが、その点は後述するとして、本遺跡出土例は、これらのどの位置に置くことができるであろうか。本遺跡の黒色土器椀には、上述の通りA～Dの形態分類がなされているが、このうちA・BタイプとC・Dタイプは、形態・成形手法において若干異なり、一応2種に大別される。A・Bタイプは、大部分のものが、口径15.0～15.6cm、器高5.3～5.6cmをはかり、深い椀形を呈している。これに対し、C・Dタイプは、同じく口径15.2～16.1cm、器高4.0～5.0cmをはかり、浅い椀形と言えよう。前者については、内面底部に丁寧なヘラミガキを施し、器壁にも上位に横方向、中位に斜方向（一部斜格子状）のヘラミガキ、外面上部にも横方向のヘラミガキが認められる。これに対し、後者は、土器表面の剥落が激しいこともあるが、内外面のヘラミガキにかなり簡略化の傾向がうかがえ、特に外面のそれについては、ほとんど省略しているものが多い。これらの点から、まずA・Bタイプに関しては、一応、六角堂遺跡出土例に、並行ないし後出するものではないかと考える。すなわち、六角堂出土例は、口径15.0cm、器高5.1cmをはかり、内外面に丁寧なヘラミガキを施すものであって、形態・成形手法に多くの一致をみるのである。六角堂出土例は、先述のとおり、11世紀末葉に年代の一点が押えられる藤原国明邸出土例と同種の瓦器椀を伴出しており、おおよそ12C前半という年代観を当てることができる。なお本遺跡では、内外面黒色の小椀・小皿が、若干伴出しており、時期決定に手がかりを与えてくれる。すなわち、小椀については、稲垣氏によって、法隆寺東室において黒色土器椀に小椀が伴うこと、それが瓦器に受け継がれていることが指摘され、高槻市内の瓦器編年試案を検討された橋本氏によって、その第1段階（11C後半～12C）に、小椀・小皿の伴うことが指摘されているのである。(注16) したがって、この点も本遺跡のA・Bタイプをおおよそ12C前半とする上の想定を裏付けると考える。(注17)

一方、C・Dについては、形態・手法の面からみるならA・Bに後出することは明らかである。しかし一般的に、畿内の黒色土器は、11Cごろを境として消滅し、瓦器に転換するとされており、その編年的位置に問題が残る。この点については、本遺跡に隣接する富波遺跡の一括遺物について若干の考察がある。それによれば、同遺跡出土の黒色土器は、畿内に一般的な黒色土器と形態・成形手法の全く異なる粗製品であって、どちらかと言えば、畿内に一般的な瓦器に共通性があると指摘し、これを白石太一郎氏の瓦器の編年に当てはめ、共伴する土師器皿・土釜・輸入陶磁などの年代観を考察し、ほぼ12C末～13C初の所産とされたのである。(注18) 後述するように、私は、この種の黒色土器が、畿内に一般的なものと、全く別種とは考えないが、その結論とされるところに異論はない。

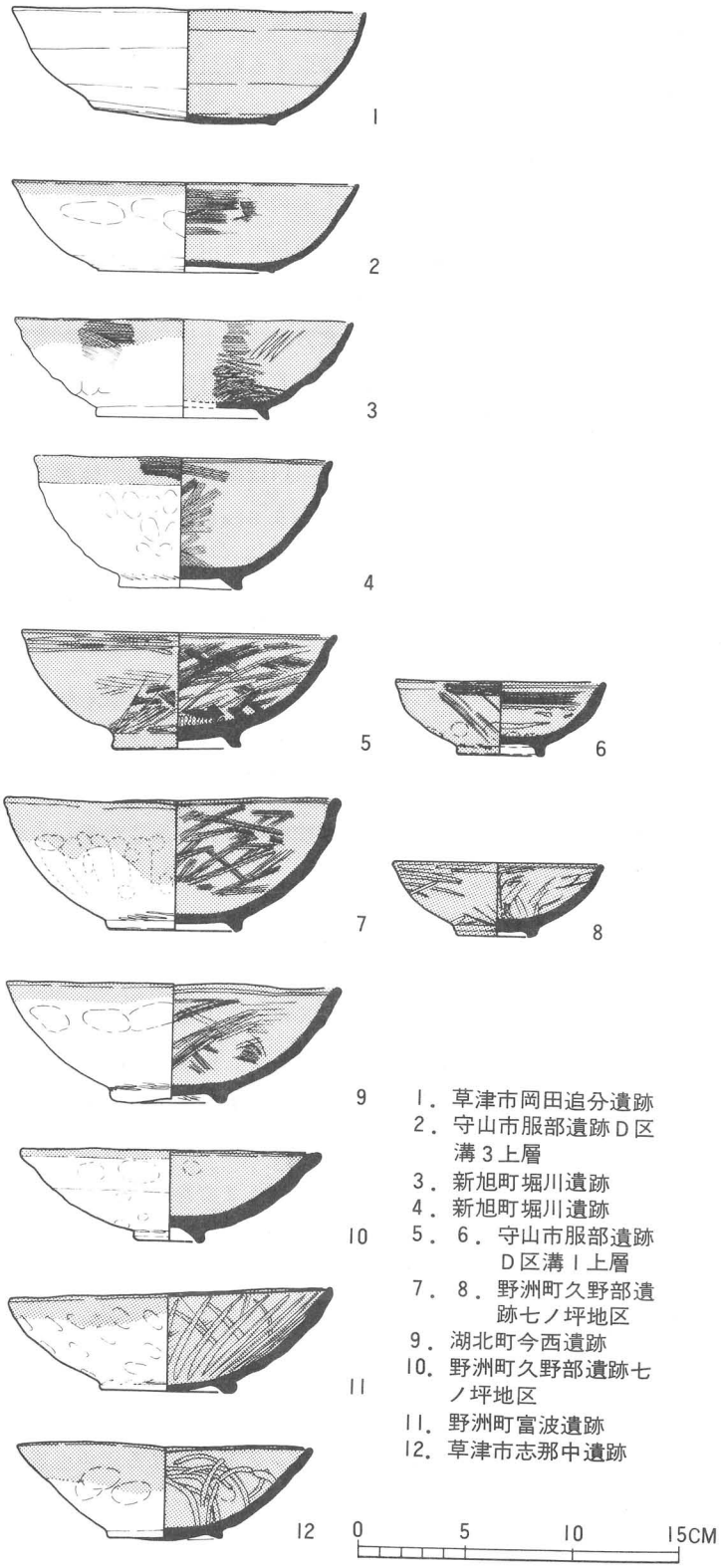
富波遺跡出土例は、本遺跡のものと同様に、いわゆる内黒土器で、内面はナデの後、ヘラ状工具による暗文が加えられており、口径14.8cm、器高4.8cm、器高指数31前後のものが多いとされ、本遺跡のC・Dタイプときわめて類似した形態をとるのである。ただ、本遺跡出土例には、粗いながら内外面にヘラミガキを施すものもあり、若干先行する可能性がある。

以上のように、本遺跡出土例については、A・Bタイプが、12C前半に、C・Dタイプが、12C中葉～12C末に、その相対的な年代をおくことができると思うのであるが、次に、この点を、伴出遺物より若干検討してみたい。

まず、出土量の多い土師器であるが、このうち椀については、黒色土器椀と形態・成形手法が全く同じであるから、省略するとして小皿・脚付皿・堝・羽釜が問題となる。小皿については、平安時代前半に典型的なものはなく、平安後期に一般的なものと言える。堝・羽釜についても、藤原国明邸ＳＥ－８堀り方出土品に類例が求められる。(注19)

須恵器については、出土量も少なく明確なものはないが、東海産のものらしく、平安中期以降のものと思われる。施釉陶器としては、瀬戸系と思われる灰釉と東海産と考えられる緑釉の破片が若干出土している。しかし、その数は、極めて少なく、消滅期のものであることが予想される。一般に緑釉は、12Ｃ頃に消滅するとされており、(注20)ほぼ、上述の年代と一致すると思われる。富波遺跡では、緑釉の出土はなく、逆に瀬戸系の天目茶椀などが伴出しており、かかる想定を助けるであろう。そして、本遺跡で、輸入陶滋の明確なものが、極めて少ないことも本遺跡の年代を考える上で、注意すべき点を考える。そこで最後に近江における黒色土器の系譜を考えるため、近江出土の黒色土器について、若干の検討を加えておきたい。

近江において、奈良時代に遡ると思われるものとしては、現在のところ明確なものはなく、大部分



第17図　近江出土の黒色土器椀

が９Ｃ以降のものである。草津市岡田追分遺跡からは、９Ｃ前半とされる平安京藤原国明邸ＳＥ－７Ａの一括遺物中のものと類似する断面三角形の簡単な高台がつく広口浅埦が出土しており、器種としては、埦のほか甕が若干みとめられる。これに並行ないしつづくのが、守山市服部遺跡D区溝３上層出土のもので内外面に横方向のていねいなヘラミガキを施した浅い埦で、無高台のものと断面三角形の簡単な高台のつくものがある。ここでも、甕・皿などが伴う。(注21)10Ｃ段階のものについては、良好な資料はないが、新旭町堀川遺跡出土例が、この時期のものと考えられる。(注22)すなわち、同遺跡各地区より上述の服部遺跡例に類似する断面三角形の簡単な高台を付けた浅埦や、10Ｃ後半とされる平安京仁明陵北方遺跡出土例に類似した安定した高台をもつ浅埦、11Ｃ中葉といわれる大和法隆寺東室出土例に、若干先行すると思われる深埦の３種がみとめられるのである。

これに続くものとして服部遺跡D区溝１上層およびD区土坑３の出土品があげられる。(注23)すなわち、内外面にていねいなヘラミガキ（口縁部で横方向、体部で斜方向、底部で縦方向）を施した深埦で、口径15.2cm前後、器高5.6～5.8cmをはかる内外面黒色処理をしたもの、ほぼ同型、同手法で内面のみ黒色処理をしたものなどで、11Ｃ中葉とされる法隆寺東室出土例に、並行ないし、若干後出するものと考えられる。そしてかかる年代観は、伴出遺物からも一応裏付けられるようである。

服部遺跡例につづくものとしては、上に検討を加えた本遺跡Ａ・Ｂタイプを、上げうるが、(注24)これとほぼ同時期と考えられるのは、湖北町今西遺跡出土例で、口径15.0cm、器高5.5cmと形態的にも一致し、成形手法ともほぼ同一である。そして、これにつづくのが、本遺跡Ｃ・Ｄタイプと考えられ、内外のヘラミガキが簡略化され、(注25)器高が著しく減じ、浅埦と言えるもので、12Ｃ後半に比定されよう。

Ｃ、Ｄタイプの次に、上述したように富波遺跡例がくると思われるが、富波遺跡例に近いものとしては、秦荘町上蚊野４号墳出土のものがあり、径15.0cm、器高4.9cmをはかる。そして、これらにさらに後出するものとしては、守山市金ケ森遺跡出土のものが指摘されており、(注26)この種の遺物が、近江においては、依然として、生産されていたことが知られるのである。(注27)

以上、不十分ながら、簡単に近江における黒色土器の変遷をみてきた。これによって、近江においては、畿内に一般的な瓦器生産は行われなかったが、それにかわるものとして、(注28)黒色土器の生産が、平安前期以来、鎌倉末に到るまで存続していたことが明らかになったと言える。したがって、上に述べたように鎌倉以降と考えられる近江出土の黒色土器についても、奈良平安期のものと全く別系統のものではなく、瓦器が、黒色土器の発展的形態であると同様に、それ以前の黒色土器の系譜に含めて考えることができると思われる。その意味で、本遺跡例や服部遺跡例は、両者の間隙をうめるものとして、貴重な資料を提供するものと言えよう。そして、本遺跡において、黒色土器という点からみれば、末製品とも言える土師器が、多数出土していることは、今後他遺跡例との検討も必要であるが、近江における黒色土器生産のあり方を考える上で注目されるであろう。

（大橋信弥）

注

(1) 近江においては、廷暦寺西塔跡、瀬田国分寺跡、水口町波涛平古墳からの出土が知られ、最近では、守山市服部遺跡、今津町中ノ坊遺跡からの出土が知られるのみで、出土量もきわめて少ない。（なお後述）

(2) 田辺昭三『陶邑古窯跡群Ⅰ』（平安学園考古クラブ、研究論集、第10号、1966）

(3) 以下の器形分類・成形手法の記述は、平安京調査会『平安京跡発掘調査報告書－左京四条一坊－』（1976）の用法に従った。

(4) 楢崎彰一『三彩・緑釉・灰釉』（『陶磁大系』5、1975）

(5) この種の遺物は、本遺跡に隣接する富波遺跡の数次にわたる調査でかなりの出土が知られる。

(6) 田中琢「古代中世における手工業の発達（窯業）－畿内－」（『日本の考古学』Ⅵ、1959）

(7) 注(6)に同じ

(8) 稲垣晋也「法隆寺出土の瓦器埦－瓦器埦編年試論－」（『大和文化研究』6－4、1961）、同「瓦器埦の成立と展開－奈良時代黒色土器工人から室町時代火鉢座への系譜－」（『日本歴史考古学論叢』2、1968）、白石太一郎「いわゆる瓦器に関する二、三の問題」（『古代学研究』54、1969）同「瓦器生産に関する二、三の覚え書」（『古代文化』1975、1）、森田勉「九州地方の瓦器埦について」（『考古学雑誌』59－2、1973）、橋本久和「中世日常雑器類の分析－高槻市における編年試案－」（『大阪文化誌』7、1977）

(9) 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告』Ⅱ、Ⅳ（1962・1972）

(10) 白石太一郎「いわゆる瓦器に関する二、三の問題」（前掲）

(11) 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告』Ⅵ、(1976)

(12) 甲元真之・伊藤玄三「平安宮内裏内郭廻廊跡第二次調査」（『平安博物館研究紀要』第6輯、1976）

(13) 平安京調査会『平安京跡発掘調査報告書』（前掲）

(14) 古代学協会『平安京六角堂の発掘調査』（『平安京跡研究調査報告』第2輯、1977）

(15) 瓦器の成立については、11C前半に遡るとされている。（白石太一郎、橋本久和、前掲論文）

(16) 稲垣晋也「法隆寺出土の瓦器埦」（前掲）

(17) 橋本久和「中世日常雑器類の分析」（前掲）

(18) 丸山竜平・山口辰一「富波遺跡調査報告」（『滋賀県文化財調査年報』昭和四十八年度 滋賀県教育委員会、1975）

(19) 平安京調査会『平安京跡発掘調査報告書』（前掲）

(20) 楢崎彰一、前掲書

(21) 大橋信弥・山口利彦・岸本岳文「岡田追分遺跡調査報告」（『滋賀県文化財調査年報』、昭和五十年度、滋賀県教育委員会、1977）

(22) 山崎秀二「黒色土器」（『波登里』4、服部遺跡調査団、1975）

(23) 滋賀県教育委員会『堀川遺跡発掘調査報告書』（『滋賀県文化財調査報告書』第5冊、1974）

(24) 注(20)に同じ

(25) 中谷雅治ほか『湖北町今西遺跡発掘調査報告書』（湖北町教育委員会、1974）

(26) 近藤滋・松沢修「上蚊野古墳群調査報告」（『ほ場整備関連遺跡発掘調査報告書』Ⅴ－Ⅱ、滋賀県教育委員会、1977）

(27) 注(18)参照

(28) 近江における黒色土器の出土例としては、以上ふれたほかに、早くは石部町六反田古墳・廷暦寺

大講堂出土例が報告されているが、詳細は明らかでなく、さきに調査された守山市吉身北遺跡・野洲町五之里遺跡、江部遺跡・富波遺跡（第２次）・上屋南遺跡・多賀町水沼荘遺跡・草津市志那中遺跡・大津市近江国衙跡などからも出土が知られる。このうち、実見した江部・富波二次は、富波遺跡出土例に並行するものと考えられ、志那中例は、それに若干後出し、金ケ森例に先行するものである。

（c） C区出土土器

調査区のほぼ中央にあたる当区からは、久野部遺跡北東部に大きく広がる沼沢地及びこれに流入するＳＤ10の開口部より弥生土器、須恵器、土師器、黒色土器、陶器等が出土したが、その大半を占めるのが須恵器である。したがって、ここにはこの須恵器の概要を記するとともに、共伴した土師器についても要説しておくことにする。

なお、当区出土土器の詳細については別表を参照されたいが、沼沢地出土とした土器のほとんどが上記ＳＤ10から流出したものと考えられることを付記しておきたい。

〔須恵器〕

Ｃ区出土の須恵器には杯蓋・杯身・鉢・高杯・壷・長頸壷・提瓶等多種を数えるが、実年代においても相当な長期間にわたるもので、６世紀中葉から８世紀末まで継続する遺物である。

杯蓋 A（C801～807・C901～907）

天井部にツマミを持たないものを一括したが、細部の相異からなおも４類に分類される。

Ｃ801・Ｃ901～Ｃ902は天井部から体部へは概して丸く、両者の境界は明瞭でないものの、口縁端部に内傾する面が残っている。なお口径は13cm～14cm余りで比較的大きい。陶邑古窯址群のＴＫ10～ＴＫ43に比定されるもので、６世紀中葉から後半にかけての実年代が得られる。

Ｃ802～Ｃ803・Ｃ806はやや小型化し、口縁端部は面を持たない。ＴＫ209に相当するもので前記の類に継続するものと考えられる。６世紀末から７世紀初頭のものである。

Ｃ804～Ｃ805・Ｃ903～Ｃ905は口径10cm前後の小型品であるが、天井部はその割合には高く、余り扁平な感じを受けない。口縁部を外下方へ流すものの他に、下方へ短かく下ろす特色をそなえるものがある。難波宮杯Ｃのセットになる杯蓋であり、ＴＫ217に比定される。７世紀中葉のものである。

Ｃ807・Ｃ906～Ｃ907は天井部の高いもので、口縁部は明らかに折まげて下方へおろす。わずかに美園遺跡で似寄ったものが見られるものの、類品に乏しく時期については不明確である。ＴＫ209以降、蓋内面にかえりを持つＴＫ217までの間の一形式と思われるが、いずれにしても型式学的に断絶が見られ、今一つ未知の要素が多い。一応７世紀前半としておこう。

杯蓋 B（C808・C908）

口端部近くの内面にかえりを持つ蓋である。このかえりは口端より下方へ突出する。一方天井部は体部との境界が不明瞭で丸味を持つ、恐らく頂部に乳首形のツマミをつけたものであろう。ＴＫ217に比定されるが、同型式でも比較的早い段階のものであろう。実年代にして７世紀中葉

の頃のものである。

杯蓋C（C809～C815）

口縁端部の返りが消失、端部を下方へおろすのみのもので、さらに2類に分類される、なおツマミはいずれも付けない。

C809～C811は扁平な体部から外下方へ低く流れる口縁端部を下方へ摘み出すか、わずかに折曲げたものである。陶邑MT21に近似する。美園遺跡のC－Ⅱ型と同タイプと思われる。7世紀末～8世紀前葉の実年代が考えられる。

C812～C815はいずれも天井部が高く、丸味を帯びる。外下方へ下りる口縁端部は一旦屈曲させた上に再び下方へつまみだす特異なものである。県下でも湖西の美園遺跡・堀川遺跡等で類品が見られる。一応8世紀前半とする。

杯身A（C816～C829・C909～C916）

全体的に丸味のある体底部と口縁部に内傾する立上がりを有す杯身である。さらに細部における相違によって、5類に分類することができる。

C816・C909は口径が13～14cmとまだ比較的大きく、体部も深い。口縁部立上がりは内傾するものの、後述のタイプに比して長く、高い。陶邑TK10に相応する7世紀中葉のものである。

C820～C823・C910～C911は口径は13cmを計るものがあるぐらいで、まだ比較的大きいが、体底部が浅く扁平になる。また底部がやや尖り気味と推定されるものが在る。口縁部立上がりは短かく、内傾するが、端部ではほぼ垂直に立つ。陶邑TK209に相当し、難波宮Ⅰ層より出土した杯Aと同タイプである。実年代にして6世紀末～7世紀初頭にかけてのものと考えられる。

C817～C819・C912～C914は口径10cm前後と小形化したもので、全体に胎土・焼成が不良で、軟質である。口縁部立上がりは大きく内傾し、低いが、受部よりはまだ上位までのびる。横山編年の桃谷期及び難波宮杯Bに相当するものと思われ、7世紀前半中葉の頃のものである。

C824～C827はさらに小形化して口径10cmに達するものはない。口縁部立上がりは強く内傾し低く、受部の高さとほとんど同じである。横山編年の桃谷期に比定され、難波宮Ⅱ、Ⅲ層を代表する杯Cと同タイプである。7世紀中葉の実年代が得られる。

C828～C829・C915～C916はやはり口径10cm以下の小型品で、口縁部立上がりは低く短かいもので、強く内傾する。底部は全体的に平坦で、中には底部中央が窪むものがある。受部も退化し、消滅するものがある。前タイプから継続、余り時期的には大きな開きがなく7世紀中葉直後の時期が考えられる。

杯身B（C830～C831・C917～C918）

平底の底部から体部・口縁部が外上方へ伸びるもので、口縁部の立上がりは消滅している。これもまた3類に細分される。

C917～C918はほぼ安定した平底からやや内彎気味に立上がる体部を有する。口縁部は端部を外上方へ摘むのかわずかに外反する。口径は12cm以上を計り、少し大形化する。陶邑MT21かMT21直後のものと考えられ、藤原宮Ⅰbに相当する。7世紀後半のわけても後半中葉頃と言えよう。

C830はやや丸味のある底部から外上方へこころもち外反気味に立上がる体・口縁部を持つタ

イプである。陶邑ＴＫ７に相応するものが存する。８世紀後葉に実年代を得られる。

Ｃ831は完全な平底で、体部との境界も鋭い屈曲で明瞭である。体部はやや内彎気味ではあるが外上方へほぼ直線的に立上がる、やや深目のものである。奈良時代末期から平安時代初期のものと考えられるが、長岡京造営時にかかわるＳＤ6301出土の杯身に近似しており、８世紀終末頃の実年代が得られる。

この他、須恵器には高杯・壷・長頸壷・鉢・提瓶・甕等が出土しており、すべて既述した蓋杯の存続期間、つまり６世紀中葉から８世紀末までの長期の間の遺物と考えられる。

ただ高杯について見るならば、３類に更に細分される。

高杯Ａ（Ｃ834・Ｃ922・Ｃ923）

外上方へ立上がる杯部の口縁・体部・底部を凹線で区分するもので、脚部は長脚と思われ、透しを入れた痕跡が杯底部に見える。

陶邑ＴＫ10ないしはその直後のものに比定され、６世紀中葉～後葉に位置づけられるであろう。

高杯Ｂ（Ｃ924）

やや内彎気味に外上方へ立上がる杯部には、凹線や櫛描文様等は見られず、脚部は低く、透しも穿たない。

高杯Ｃ（Ｃ926）

口径17cmをこえる浅い盤に、外下方へ開く脚部をつけた特異なものである。

上記の高杯Ｂ、Ｃはいずれも高杯Ａよりは新しい要素を備えており、陶邑古窯址群のⅢ期以降のものと判断しうるであろう。

〔土師器〕

Ｃ区より出土した土師器には杯・高杯・壷・甕・埦・把手等が存するが、ここでは形態的に相違のある杯についてのみ記すことにしておく。

杯Ａ（Ｈ844・Ｈ939～Ｈ941）

安定した平坦な底部から外上方へ立上がる体部を持ち、口縁部は端部を内側へ巻きこんだ様態を呈すものである。器体外面への調整は統一を欠く。

杯Ｂ（Ｈ845）

安定した平底の底部から上方へ内彎しつつ立上がる杯。口縁端部は丸くおさめる。

杯Ｃ（Ｈ846～Ｈ848・Ｈ942）

扁平ではあるが、やや丸味のある底部から内彎しつつ上方へ立上がるもので、埦と呼ぶのが適切か。中に器体外面の体・底部にヘラ削りを加えるものがある。

以上の杯はややバラツキがあって、不明瞭な点も存するが、ほぼ奈良後期～平安時代前期までの大枠に入るものと考えられる。したがって、他の器種についても、一部古い様相や新しいタイプを持っているものがあるが、大半は杯各類同様、奈良後期から平安時代前期までの遺物と見てよいだろう。

（別所健二）

<参考文献>
1 田辺昭三『陶邑古窯址群Ⅰ』(平安学園考古学クラブ　1972)
2 横山浩一「手工業生産の発展」(『世界考古学大系』3　1959)
3 「平城京左京一条三坊の調査」(『平城宮発掘調査報告Ⅵ』奈良国立文化財研究所　1974)
4 中尾芳治「難波宮造営の遺跡調査報告」(『難波宮址の研究』研究予察報告第5第二部　1969)
5 平良泰久「長岡京跡昭和50年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会　1976)
6 徳丸始朗・百瀬正恒・高橋美久二「長岡京左京三条二坊第2次発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会　1976)

(2) 木製品

C7トレンチで検出されたSD10開口部からは、須恵器、土師器に伴って多量の木製品が検出された。土器の検討から、これら木製品も7C初頭を主体とする、6C中葉から8C末の所産と解される。当時、いづれの木製品も、物質的イデオロギー的に優れて意義ある生産用具であったことに変りはないが、用途の明らかとなった木製品について、細かく分類をこころみると、ほぼ次のようになろう。

1. 食料生産用具

農耕具　柄(PW44、PW45)、田下駄(PW57～PW59)

狩猟具　丸木弓(PW48～PW51)

2. 日用具(最も原始的な性的分業の結果、主として女性があつかうことになったと思しき木製生産用具)

容　器　蓋(PW24、PW25)、曲物底(PW26～PW31)、曲物(PW32)
盤(PW34)、枡状品(PW35)、片口付浅鉢(PW36)、浅鉢(PW37)

機織具　機織具(PW46、PW47)

その他　整形板(PW22)、柄(PW41～PW43)

3. 土木建築用具

木端(PW23)、丸木杭(PW52～PW56)、建築資材(PW69～PW77)

4. イデオロギー的生産用具

斎串(PW17～PW21)

以上に分類した個々の木製品の観察は、観察表に委譲して、ここでは比較的まとまった形で出土した斎串と田下駄について考察を加えておくことにしたい。

斎串

斎串は、「小塔姿」あるいは「削り掛け」とも呼ばれ、細長い薄板の両端を削って尖らせた串状の木製品である。県下では、本例以外に、湖西線関係遺跡で6C後半の開析谷から合計22点出(注1)

土したのを始め、服部遺跡で５Ｃ末ないし６Ｃ初頭と考えられる第17号方形周溝状遺構から数点、又、赤野井遺跡で古墳時代の溝から１点それぞれ検出されたのが知られる。

この斎串も、その大小や長短あるいは両側辺に加えられた切り掛けの部位や数の差から数種類に細分することが可能なようだが、本例の場合、いづれも上端を欠損しており全容は定かでない。ただ、下端は、剣先状に尖るものと、先端へ新たに切り落しを加えて尖らないものの微妙な差が確認される。なお、現状では、両側辺に切り欠きや切り掛けの痕跡を認めることはできなかった。湖西線関係遺跡の場合には、端部が本例にも存在したごとく剣先状に尖るタイプ、端部が剣先状で側辺に切り掛けを入れるタイプ、端部を斜めに切り落とすタイプ、端部を斜めに切り落して側辺に切り掛けを入れるタイプの４類が確認されている。服部遺跡と赤野井遺跡の斎串については現在未整理の段階にあり不明である。こうした斎串にみる形態上の偏差が、時代の流れがもたらす変化であるのかどうか、仮りにそうであるとすればどのような変遷をたどり、又おのおのの形態にどのような歴史的意味があるのか、興味深いものがあり、今後の類例の増加が望まれる。

さて、こうした斎串がどのような遺構から検出されたのかは斎串の性格を考える上でも重要なことであろう。黒崎直氏の研究によれば、溝や井戸から検出される場合が多く、水との関連が特に注目されている。(注２)そのことは、県下の出土例をみてもうなずけよう。こうしたことから「神助によって清冽な水を得るため、斎串を地に刺し立てて浄域を設定して神を請き降した」とする用例が考えられるが、一方では、他域で用いられて溝や井戸に流入することも十分あり得る。その場合には、他域での新たな用例が考えられなければならない。服部遺跡の第17号方形周溝状遺構から検出された斎串の場合には、近在から周知の共鳴箱を持つ４弦琴が出土するなど、葬送にともなう祭礼との関連が濃厚である。つまり、斎串は、水に限らずさまざまの祭礼の場において、浄域設定にあたり多用されたのではないかと考えられる。湖西線関係遺跡における22点にのぼる斎串の出土例が、そのことを物語っているのではないだろうか。

田下駄

水稲農耕においても、当初は裸足での労働が支配的であったと考えられる。だが、労働上さまざまの困難に直面する中で、人々はその用途に応じて創意工夫をこらし農耕用はきものを考案してきた。ここでは、必要にせまられて作り出されてきた、こうした農耕用はきものを総称して田下駄と考えたいが、その形態は千差万別の観がある。ただ、種々の微差を排除して機能用途に注目しながら大別すれば、概ね次の３類が浮かびあがってくる。

1　下駄型田下駄

これまで通常〝田下駄〟と称されてきたものであり、現在の下駄に比べて縦・横とも１まわり大きい長方形の１枚板を使用している。時に２枚歯を保つものもあるが、普通は足への固定を意図した前緒孔１、横緒孔２を穿つのみである。この田下駄は大形であるため、４隅を足が当らないように削り落したり、桟を板目に直角に打って補強するなどの工夫がこらされている。今回の調査で出土したＰＷ57がこの例である。

主として、深田の稲刈りに用いられる他に、屋根材にする管・芦・葭などを川原で刈る場合にも使用される。

2　枠型・輪樏型田下駄（大足）

北方狩猟民が雪中歩行に使用した輪樏からの転用で、通常〝大足〟と言われるものである。板目ににそって比較的細長い1枚板に、前緒孔1、横緒孔2を穿ち、前後両端近くにV字形の抉りか小孔を穿って、篠竹やソダなどによる枠を取りつけるのが特徴である。PW58が、その典型で、裏面3ケ所で確認される棒状圧痕から推察して、楕円形の枠を両端に配し、さらに板目に直交する棒を中央に渡して補強していたと思われる。枠には取り縄をつけて歩行を補助したであろう。

主として施肥踏み　（田を耕やす際に、稲藁や山の青草等を入れて腐らせ、土塊とともに踏み込む）や代踏みに供されたであろう。

3　板型田下駄（ナンバ）

所によっては、ナンバと称されているもので、横に長い長方形の一枚板に4孔を穿ち、板目に直角方向に足を置いてサンダルの様に履く。通常、前幅に対し後幅を狭くして歩行の便宜を計っている。しばしば表面に泥土を避けるため逆梯形の枠や台を作りつけたり、裏面4ケ所に突起を設けて田面からの離れを良くしている。前者の類例が県下鴨田遺跡にある。又、最近森浜遺跡から出土したこの種の田下駄には、大足同様の枝を曲げた枠が遺存していた。

主として深田の稲刈りに供されるが、それ以外にも代踏みや施肥踏みに使用される。

PW59は、民俗例でイタゲタあるいはイネカリゲタと称される小形の田下駄で、稲刈り以外に、踏鋤として、あるいは又畑地で利用されるようである。3類中下駄型田下駄の範疇に属するとみてよいであろう。

なお、以上の田下駄がいづれも入手し易く、加工し易く、かつ軽いスギ材から作られていることには注目しておく必要があろう。　（谷口　徹）

注

(1) 田辺昭三「湖西線関係遺跡調査報告書」（滋賀県教育委員会　1973）

(2) 黒崎直「斎串考」（『古代研究』10．1976．）

＜参考文献＞

1　潮田鉄雄『はきもの』（1973）

(3)　その他の遺物

以上に紹介した土器・木製品の他に出土した遺物を以下に簡単に記す。

土錘（H797・H855）

C区SD10とB区整地層内からそれぞれ1点づつ出土を見た。SD10出土のH855は径1.0×1.2cm、長さ5.2cm、B区出土のH797は径3.2cm、長さ5.4cm　でともにほぼずん胴の円筒形の形態を呈す。ともに縦軸に平行に径2.0cm程の穿孔が貫かれている。

鳩笛（I 307）

高さ2.9cm・長さ6.9cmを計る土製のもので、胴部に羽毛も印刻されている。尾部から胴上部へ空気孔が穿たれる。胎土・焼成とも良好で淡褐色を呈す。A1トレンチ耕土層より出土した。

砥石（S 950）

18cm×11.4cmの矩形の砂岩の表裏及び両側面すべてを使用、表裏両面は中央部が使用される頻度が少なかったのか、やや高くなっているが、両側面は平坦な面になっている。C区沼沢地出土。

古銭（N 1～N 5）

B区及びC区より出土、すべて宋銭である。

	銭　名	王　朝　名	鋳造年代	出土地、層
N 1	咸平元宝	北　宋　真　宗	998~1003	B区 整　地　層
N 2	祥符元宝	北　宋　大　中	1008~1016	B区 整　地　層
N 3	元豊通宝	北　宋　神　宗	1078~1085	C区 青灰色粘土層
N 4	不　明			B区 整　地　層
N 5	不　明			B区 整　地　層

古銭一覧表

自然遺物

C区沼沢地中より自然遺物として各種種子及び昆虫遺体が採集された。とくに多量に出土したのが桃核である。この他種子には瓜科に属するものや種類不明のものがある。昆虫遺体はこがね虫であろうと思われる。

（別所健二）

Ⅳ　おわりに

1　SD 2出土の弥生土器について

(1)　はじめに

先にその概要を紹介したA区SD 2内出土の土器群は、結論的に述べるならば、弥生時代後期前半から中葉までの時期に相当するものである。ところで、弥生時代後期の土器については、この原始社会から古代社会への過渡的な時代を研究するうえで、もっとも基本的な資料として－すなわちこの過渡期の時代区分に、あるいはこの時代の社会の具体的な変貌及び地域社会相互間の交渉の具体的状況を物語るものとして－、近年たいへん活発に検討が加えられているものである。とくに、弥生時代後期から古墳時代にかけての政治的社会的変革の表舞台であった畿内にあっては、後期弥生土器および古式土師器の研究が現在に至るまで、一貫として重要視されてきたのは言うまでもない。

さて、まずは小林行雄氏(注1)の研究に始まり、坪井清足(注2)・田中琢両氏(注3)の研究を経て、近年の都出比

呂志氏・丸山竜平氏の研究におよぶ、この時代の一連の土器研究が蓄積したその内容の精度と視点の広さは、他地域のこの時代の土器編年のいずれよりも、一等抜出ていると言っても過言ではないであろう。しかし、これら畿内Ⅴ様式の弥生土器編年に関する詳細な研究史的整理については、最近、兼康保明氏が適確に行われているのでこれに譲ることとして、ここでは集約的に触れておこう。(注4)(注5)(注6)

要するに畿内Ⅴ様式でもっとも古相を呈し、弥生時代後期前半に位置づけられるのが、小林氏の提唱された西ノ辻遺跡のⅠ地点式である。このⅠ地点式はⅣ様式的要素を留め、数量的にも資料として十分にたえるもので、その編年的位置は確定的であるとされてきた。ただ同遺跡で、より後出的とされて細分されたⅠ地点式とⅠ地点式については資料的に不十分であるとの指摘がなされ、その資料的補塡が検討された。しかし、その後も良好な資料に恵まれず、結局のところ都出氏によって、この二様式については、Ⅰ式より新しい様相をもつものとして一括されたに留まり、その資料的補塡は果されずに終った。ただし都出氏は、これら西ノ辻遺跡の三形式に後出するⅤ様式後半の土器資料を提出されるとともに、庄内式土器を畿内Ⅵ様式としてとらえなおされることによって、弥生式土器から土師器へのより詳細な移行過程を明らかにされたのであった。(注7)(注8)(注9)(注10)

そして最近あいついで、丸山竜平氏は中河内および近江南部の新資料によって、畿内とその周辺地域の後期弥生土器から土師器への新しい編年案を発表された。特に氏の論稿は土器形式論とも呼ぶべき従来の土器編年を脱して、土器形態と器種構成の変遷の基盤にはあくまでも社会構造の変動が存在し、土器の変様はこの現実の人間社会の変革が表出されたものであるという視点に立論されたもので、今後の土器編年の方向を示唆するものであった。ともあれ丸山編年は、これまで資料的に不足のあった畿内Ⅴ様式中葉に比定される土器を補塡し、後期弥生土期から、土師器に至る詳細な編年を試みたものであった。(注11)(注12)

畿内における弥生後期の土器編年の大要は上記のごときものであったが、これに比べて、近江の後期弥生土器の編年研究は皆無と言ってよいものであった。ただわずかに、湖北地方で、東海地方の影響の大きい古式土師器を含む土器群について編年案が提出されたことがあった。しかし、その後湖北地方においては、布留式併行期の土器変遷の層位的検証が田中勝弘氏によって行われたのを別にすれば、当該土器の編年は検討されなかった。(注13)(注14)

一方、湖南地方においては、後期弥生土器の出土例が散発的であって、今一つこの地域における土器の全般的な傾向とその特色が不明瞭であったため、トータルな編年への試行はなされなかった。ところが、近年湖南地方における調査例が増えるとともに、後期弥生土器およびこれに直続する古式土師器の出土が豊富となり、ようやく弥生時代後期から古墳時代初頭の土器実態が明らかになってきた。そして、この状況をふまえて公表されたのが、先に紹介した丸山編年であり、今一つが兼康保明氏が久野部遺跡十ケ坪地区の調査報告で提出されたものである。(注15)(注16)

(2) ＳＤ２出土弥生土器の検討

さて、上述の両氏の編年案は研究の進んだ畿内の資料との比較検討の上に提示されたものであるとともに、近江における本格的な弥生後期の土器編年作業の開始を示す、注目すべき成果であ

り、同時にいずれの編年案にも久野部遺跡の土器資料が組込まれている点などを考慮して（丸山編年には七ノ坪地区略報資料、兼康編年には久野部遺跡十ケ坪地区出土資料）、まずこの二つの編年案の整理確認から、本遺跡出土の弥生土器の検討を開始することにしたい。(注17)

はじめに丸山編年についてであるが、氏の編年は既に述べたように、単に土器の形式的な変遷のみに終始するのではなく、壷形土器の消長が弥生時代と古墳時代の時代的画期を象徴するものであるという、どちらかと言えば土器の器種構成の交替に主眼を置いたものである。この編年によれば、久野部遺跡七ノ坪地区出土の弥生土器は以下のごとき相対的位置が与られるのである。すなわち、壷形土器に長頸壷がまだ出現せず、受口状口縁の甕形土器a類とb類が併存し、杯部が鉢状で口縁上端部が水平な面を成す、口端部を下方に拡張する高杯が確認される弥生時代中期末の段階の大津市堅田春日山遺跡(注18)および雄琴高峰遺跡(注19)より久野部遺跡は後出的なものと考えられている。と同時に久野部遺跡は、畿内V様式に盛行する典型的な長頸壷が消滅し、受口状口縁甕形土器b類の盛行期であり、杯部が浅い皿状を呈す中実の脚部の高杯が出現する後期終末の大津市山上町部屋ケ谷遺跡よりは先行する段階のものと考えられている。つまり、弥生中期末と後期終末の2度の倭国大乱(注20)の緊張した状勢下に出現した、二ケ所の高地性集落の時代にはさまれた時代が久野部遺跡の相対的な位置なのであり、そしてそれを丸山氏は、「長頸壷の時代」と換言されておられるのである。

つぎに兼康編年(注21)であるが、氏の編年は野洲町内の隣接する三遺跡についてのみの比較検討であり、さらに畿内的色彩の強い土器群と東海地方の影響が濃い土器群との比較という点からして、やや資料的に不足の感じをぬぐうことができない。だがともかく、氏の編年案では、久野部遺跡出土土器は以下に列挙する特徴によって古富波山遺跡(注22)、高木遺跡(注23)のいずれよりも先行する段階のものと考えられている。①長頸壷が認められない。②口縁立上がり部に刺突列点文のないS字状口縁甕形土器が存する。③杯部が深くて底面が水平、脚部が内彎すると言った欠山式に顕著なタイプの高杯を共伴する。そして氏は、この久野部遺跡の段階を、畿内とりわけ中河内の資料との綿密な比較検討(注24)から、後期中葉の上小阪(注25)・馬場川遺跡(注26)と併行する時期であるとされたのである。

以上のように、両氏の編年によれば久野部遺跡出土の弥生土器は、後期前半ないし中葉頃のものと把握できる。ところが、丸山編年については編年表のみで詳しい説明はないし、兼康編年についても七ノ坪資料が使用されていないので、ここであらためて久野部遺跡七ノ坪地区出土の弥生土器の位置とその特徴を眺めておくことにしたい。

まず甕形土器の中でも点数に恵まれた受口状口縁甕形土器について見てみると、この形態の土器については大きく2類に分類された。このうち甕Aとして一括されたものは、河内系受口状口縁甕とも呼ぶべきもので、頸部が「く」字状を呈し、口縁部立上がりが丸味のある甘いものを典型とし、その立上がり部に丁寧な横ナデ調整以外の何等の装飾も施さないのを特徴とする。この種の甕は河内を中心に分布しているものと思われ、同じ受口状口縁甕でも近江を中心に分布する甕Bとはまた別の系譜に属するものとも考えられる。この点で安満遺跡報告は受口状口縁甕を近江系として一括して、私見と異なる解釈を提出されているが、この両者の系譜的な関係等については今後の資料の増大と研究の進展を待つことにしたい。(注27)

もう一つの受口状口縁を呈す甕形土器である甕Ｂは、近江から淀川水系沿いに広く畿内各地に伝播した事が、最近の各地における調査によって判明してきたのである。ところで、これまでこの種の甕については、弥生後期以降伊勢湾地方を中心に分布を見るＳ字状口縁甕形土器が、近江地方に伝播し、普及、派生したものと、大方において理解されてきた。(注28)しかし最近あいついで、これを受口状口縁甕として、Ｓ字状口縁甕とは区別せねばならないことが提唱されだした。しかも加えるに、丸山論文(注29)や安満報告(注30)のように、むしろこの受口状口縁甕こそが、Ｓ字状口縁甕の祖形であり、その誕生に影響を与えた土器そのものであるという見解が公表されている。ただし、いたって装飾的なこの甕Ｂに対して、先にも記したように、河内地方を中心に分布する非装飾的な甕Ａが存することを考慮して、今はここに甕Ｂとして一括したものを、近江系受口状口縁甕と呼称するものである。

つぎに単純口縁の甕Ｃについてであるが、この種に属する甕は出土点数が少なく、資料的に不十分である。形態的には肩部の張出しがやや強く、体部上位に最大径を持つものと考えられ、肩部の張りがなく口径が胴部径と等しい無花果形のより古相を呈すものや、球形の胴部をもつ形式的に新しい様相を帯びる甕も認められなかった。また、内面箆削り手法といったような、土師器の製作技法として顕著な調整痕を留めたものも存在しなかった。

壷形土器(注31)について見ると、丸山氏が弥生時代の終焉と古墳時代の開始の画期的現象と提唱される、稲籾貯蔵用の広口壷の極少化、消滅化が進んでおり、この点で弥生土器としての性格に欠ける。しかしその反面、畿内Ｖ様式の代表的な土器である長頸壷(注32)が盛行している点からすれば、まぎれもなく久野部遺跡七ノ坪出土の土器は「長頸壷の時代」の所産に係わるもので、明らかに弥生土器的要素を濃厚に持つのである。また、本遺跡出土の長頸壷(注33)はⅠ～Ⅳの４類に細分され、その形態的変遷も考えられるが、この点については後に層位的な関係を踏まえて、詳しく眺めて見る。なお、かつてパレススタイルと呼ばれた、下ぶくれの器体に櫛状工具で波状文、横線文、羽状文、重孤文等を描く、伊勢湾地域弥生後期の装飾的な壷や欠山式に顕著な瓢形の長頸壷等に影響を受けたものは出土を見なかった。(注34)

このような伊勢湾的色彩の希薄さは、以下の器形からも伺うことのできるものである。例えば、高杯は杯部の中位で屈曲して口縁端部へ外反するⅠ類と椀状の杯部を有するⅡ類が見られるが、大型で杯部が深くて水平な底部を特徴とする欠山式の高杯は見られなかった。このタイプの高杯が出現するのは、野洲を中心とする湖南地域では富波遺跡(注35)や片岡遺跡(注36)等に見られるように、今少し時期的に下がるのではないだろうか。(注37)

このような高杯に見られる傾向は鉢形土器にも確認できる。本遺跡の鉢形土器には大きく口縁部が屈曲するⅠ類と屈曲しない直口縁のⅡ類に類別できるが、いずれも畿内各地で見られるものである。ところが、浅い体部に「く」字状に外反する口縁部または受口状口縁をつけた、伊勢湾地域の浅鉢形土器にその系譜を求められる鉢形土器は皆無であった。この種の鉢形土器は、同じ近江にあっても、湖北地方において鴨田遺跡等(注38)によって確認されるごとく、弥生後期の早い時期に伝播しているのに対して、湖南地方では服部遺跡ＳＤ－Ｅの一括品中(注39)に見られるごとく、久野部遺跡よりは今少し新しい弥生最終末から庄内式併行期に至らないと出現しないようである。(注40)さ

て以上に述べたのが久野部遺跡七ノ坪地区出土の弥生土器の全容とその特色であるが、ＳＤ２出土土器は幸にも比較的良好な状態で、層位的に採集しえたと言えよう。そこでここに畿内Ｖ様式併行期の久野部遺跡七ノ坪地区出土土器群の層位的細分を試み、近江における弥生時代後期の土器編年作業の参考に供したい。

(3) ＳＤ２出土土器の層位的細分

第18図はＳＤ２出土土器の層位を明らかにしたものである。これによれば、まず上層出土に限られるものは甕Ｂ－Ⅳ・高杯脚部－Ⅳ・鉢Ⅱ・有孔鉢Ⅰの４器種である。このうち甕Ｂ－Ⅳと高杯脚部－Ⅳは形式学的にも畿内Ｖ様式およびそれに併行する時期のより新しい段階のものと認められるであろう。なぜならば甕Ｂ－Ⅳは口縁端部が内傾するものであるが、この端部の成形法は形式的には、上端部がフラットな面を呈す甕Ｂ－Ⅰから端部を極く僅かに摘出し気味に横ナデするため、端部がやや外反気味の形態を呈する甕Ｂ－Ⅱへ、そして口縁端部の内面に段を成形する甕Ｂ－Ⅲへと変化する最後の段階の形態に位置するものである。また高杯脚部－Ⅳは支柱部の内面になんらの加工も加えず、中実のままで仕上げるという技法(注41)の簡略化の段階のものと思われるのである。事実、この手の脚部は河内地方においては、馬場川遺跡以降の段階にその出土が限られている。さらに上層では長頸壷はⅠ類の２点が見られるが、これは中下層の10点に比べて著しく少なく(注42)、長頸壷の消滅への途上を暗示するものである。このような点から、ＳＤ２上層より出土した一括遺物は、畿内Ｖ様式の新しい段階に併行する時期の所産によるものと考えられるのである。

器種／層位	甕A				甕B				甕C			甕底部		長頸壷				壷	壷底部				高杯		高杯脚部				器台	鉢		有孔鉢
	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ		Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ		Ⅰ	Ⅱ	Ⅰ
上層					1			(1) 3	(1) 1			(1) 1	(1) 1	2				(2) 2	(1)		(1)	2		* 1	2			1			(2)	(1)
中層			1	1	3	1	2			1	1	1		1	1					4	2	2	3	2	3	5	1			2		
下層	1	2			2	1			1			1	1	2	1	2	3	1	6		2	2	1			2			1			

（　）内は上層出土土器として確認できるもの。
＊　中層Ｂ類とは形態が異なり、別類として分離もできる。

第18図　ＳＤ２出土土器層位別対照表

ついで下層より出土した土器群について検討してみると、この層の単独出土土器は甕Ａ－Ⅰ・甕Ａ－Ⅱ・長頸壷Ⅲ・長頸壷Ⅳ・器台を数えることができる。これらの中で、甕Ａ－Ⅱは河内系受口状口縁甕でも古相を呈するものであり、長頸壷Ⅲは体部欠失のため確実とは言えないものの、他の長頸壷に比してもっとも口頸部の長いものと想像される古態として把握できるもので、いずれも河内地方では弥生後期前半の鬼塚遺跡前後の段階に盛行する土器であると言えよう。なお、甕Ａ－Ⅲ・甕Ａ－Ⅳ・甕Ｂ－Ⅱ・甕Ｂ－Ⅲ(注43)・甕Ｃ－Ⅱ・甕Ｃ－Ⅲ・壷底部Ⅲ・高杯Ⅰ・高杯脚部

Ⅲ・鉢Ⅰなどの中・下層にまたがった土器や中層単独出土の土器についても、後で述べるように下層出土土器として一括できるであろう。さて、これらを含めた下層出土土器群は既に述べた上層出土土器群とは形態的に明らかに相異し、同じＳＤ２出土の遺物でもより古式の土器として把握することが可能なのである。

最後に中層出土の土器について観察してみると、中層にもこの層のみに包蔵が限られた土器がある。甕Ａ－Ⅲ・甕Ａ－Ⅳ・甕Ｂ－Ⅲ・甕Ｃ－Ⅱ・甕Ｃ－Ⅲ・壷底部－Ⅱ・高杯Ⅱ・鉢Ⅰなどがそれである。それではこれらを中層出土の土器として、上・下層とは時期的に前後する土器群として一括できるであろうか。

ところが中層には、先ほど述べたように下層にも包蔵されていた土器が他にあり、ある程度の両層の混入が考えられ、上述の中層単独出土土器群についてはやや疑点が残るのである。勿論、このような包蔵状態にある中層土器群を過度的様相を示すものとして解釈することも可能である。だが遺構の項でも述べられたように、ＳＤ２の堆積層の中で、上層は比較的安定した厚い粘質土層であったが、中・下層はやや不安定で特に中層は砂と粘土との互層で、地点によって層厚に増減があり、非常に不安定であった。このため中層内の粘土と下層をなす青黒灰色粘土はところによっては平面上識別困難をもたらした。以上の結果、中層と下層の土器はその堀り下げ時に相当の混入が予想されるので、今は一応、中層単独出土土器というものを考えず、中・下層を一括して下層出土土器としておく。ただし、これら中・下層混入の一括遺物を、今後の資料の増大と研究の進展如何によっては、より形式的に新しい様相を示す土器を中層出土土器として抽出することも期待できるのである。

(4)　久野部遺跡七ノ坪地区出土土器の相対的年代

上述したごとく、久野部遺跡七ノ坪地区ＳＤ２出土土器はともかく上・下層の土器群を分離することを得た。すなわち、久野部遺跡上層式土器と下層式土器である。そこでつぎには、これら上・下二層の土器群がそれぞれ弥生後期のいかなる段階に比定されるものか、今一度畿内のとりわけ資料的に豊富な河内地方の土器との比較検討を加え、その相対的年代を考えておこう。

まず下層だけから出土した河内系受口状口縁甕である甕Ａ類は、畿内Ⅴ様式前半の標式である西ノ辻Ⅰ式にすでに出現しており、次期の鬼塚遺跡で増大化している。そうして畿内Ⅴ様式の新しい段階の様相を強める上六万寺遺跡(注44)まで下ると、口縁立上がり部(注45)が非常に甘く、外方へ大きく開くとともに口端部に疑凹線を加えたりする、甕Ａ亜式が盛行するものの、甕Ａそのものは衰退化の方途にある。

近江系の受口状口縁甕とした甕Ｂは、系譜的には畿内Ⅱ様式併行期まで辿ることができ、畿内Ⅳ様式併行期にはその形態を完成させたと言われているものであるが(注46)、畿内各地にはⅤ様式の段階それもどちらかと言えば中葉以降になって波及したもの(注47)と考えられる。ただ西ノ辻Ⅰ地点式に見える受口状口縁甕には刺突列点文・直線文を施さないものの、近江系に近い受口の形態を示すものがあり(注48)、畿内における近江系受口状口縁甕の最古の出土例とも予想できよう。

ところが、畿内においては、山城地方をのぞけば(注49)、近江系受口状口縁甕は比較的早く消滅化の

過程を踏み、庄内式併行期には存在しなくなったと思われる。このような現象は、庄内併行期にも確実にその存在が確認される近江出土のこの種の甕を逆に畿内の資料から、その時期的検討を加えることができるのである。この点に関して例えば、最近報告された安満遺跡周溝墓A5－2内出土一括品の中にも近江系受口状口縁甕が存し注目される。(注50) すなわち甕Eとして一括されている受口状口縁甕のうち175・176・178であって、前2例は久野部遺跡甕B－Ⅲと同タイプであり、後例の178は久野部遺跡甕B－Ⅳと完全に同類のものである。(注51) 結局のところ、久野部遺跡の甕B類は安満遺跡周溝墓A5－2一括遺物と同時期ないし前後する時期が考えられるのである。なお安満遺跡周溝墓A5－2の一括品は西ノ辻E地点直後に比定されている。

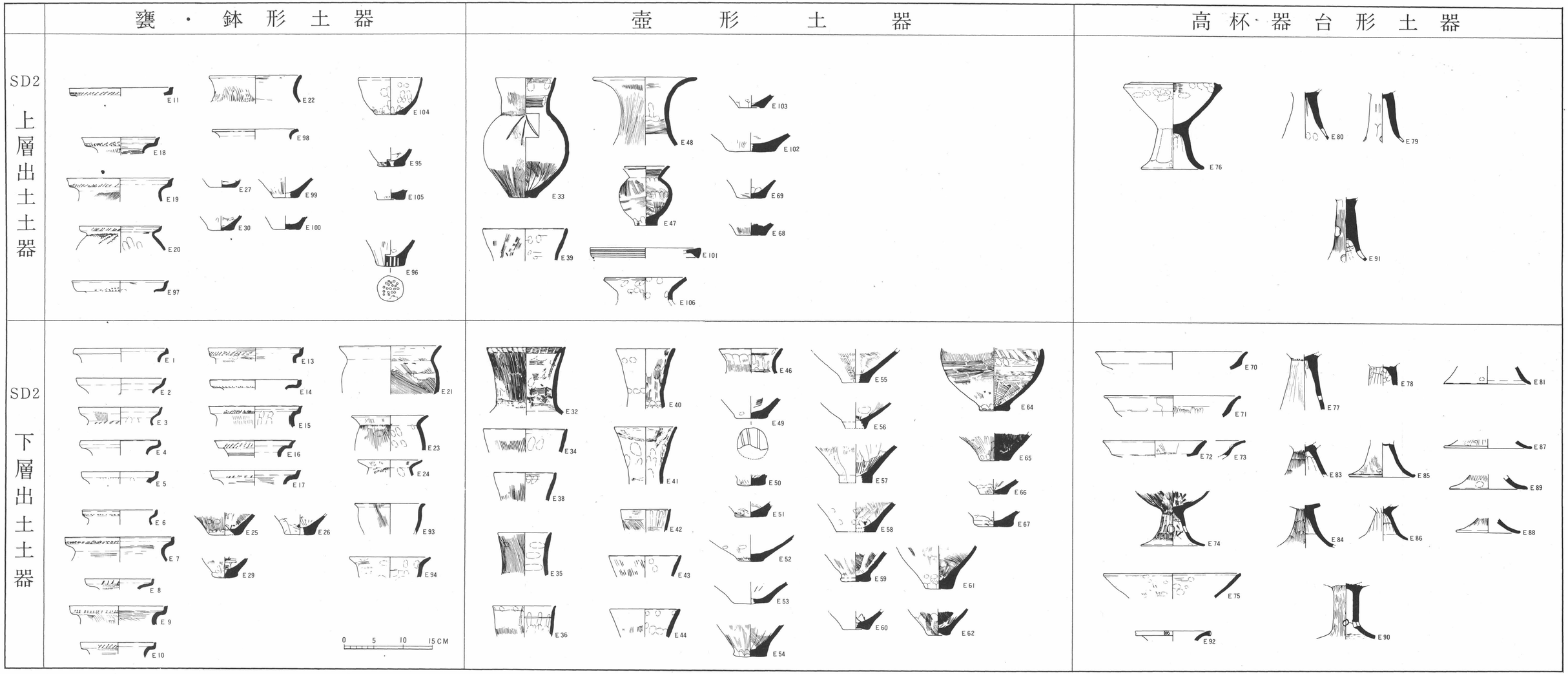
頸部から「く」字状に外反する単純口縁の甕Cについては、先にも記したように、畿内V様式でもやや新しい傾向をおびる安満遺跡周溝墓一括品例と類似するE21・E98等は存するに対して、畿内Ⅳ様式的様相を残す西ノ辻I地点式例のようなより古式なものが見当らない。(注52) しかし、球形の器体に連続ラセンタタキ目技法を加える北鳥池下層例がまだ出現していない点からして、(注53) 本遺跡出土の甕Cは畿内V様式前半～中葉の頃に相対的な年代を求められるであろう。(注54)

さてついで本遺跡で4類に細分された長頸壷についてであるが、この器種についても河内地方の形式学的編年研究とSD2の層位関係を参照にしつつ、今少し詳しく述べて見たい。河内地方で形式学的にもっとも古相を呈する長頸壷は西ノ辻I式に見られるもので、口頸部と体部の比率がおよそ等しいほど口頸部が長大なのを最大特徴とする。(注55) この他、西ノ辻I式の長頸壷には次に記すようないかにも初現期のものらしい面が看取される。すなわち、口頸部が漏斗状を呈し頸部で強く引締まり、口縁端部が水平もしくは内傾する面を有し、無花果形に近い肩部のやや張った心持ち胴長の器体を成すというふうに、全体的に作りが丁寧でシャープな感じをおびている。

ところが、この初現期における長頸壷の要素は、つぎの鬼塚遺跡の段階から早くも崩れ始め、口頸部は漏斗状から円筒形を呈す太身のものとなり、口端部は丸くおさめるだけで面をとらなくなっている。(注56) このような長頸壷の退化傾向は序々に著しくなっていき、上小阪遺跡では口頸部はますます太身を増したずん胴の形態になり、小形化が始まる。(注57) そして、つぎの馬場川遺跡では小形化が定着しだし、上六万寺遺跡では胴部中位が強く張り出した扁球状の体部に細身の口縁部がつくまでに形態的に大きく変わっている。(注58) そしてこれらの変遷を辿った長頸壷も北鳥池ではついに見られなくなって、消滅するのである。(注59)

以上の河内地方における変遷に基づくならば、久野部遺跡七ノ坪地区出土の長頸壷は以下のような相対的位置が得られるであろう。(注60) I類は形式的に古相を呈す鬼塚期から、やや新しい様相を持ちはじめる馬場川遺跡までの段階が考えられるが、このような時期的幅は、上層・中層・下層を通じて出土を見た層位関係にも合致している。また、端部に面を有し、漏斗状を呈す口頸部のⅢ類は下層のみにその包蔵が限られたが、形式的にも西ノ辻I地点式の様相を残す本遺跡出土の長頸壷の中でも、もっと古式のタイプである。

高杯についてはI・IIの2類が見られたが、このうちI類について見れば、中に杯部中位の屈曲が甘いものがあるものの、馬場川遺跡の高杯ほど口縁部が長く外反するものがないことから、馬場川遺跡よりは先行する形態と思われる。しかしまた、西ノ辻I地点式の高杯ほど鋭く屈折して



第19図　ＳＤ２出土土器層位別対照図

強く立上がる口縁部でもないので、これよりは後出的な形態を呈すものと思われる。要するに、本遺跡出土の高杯については、鬼塚遺跡〜上小阪の段階が考えられるものの、脚部が半中実のものが見受けられたり、Ⅱ類の杯部の中に比較的浅い西ノ辻E地点式の類品が含まれていたりする点から一部後期中葉以降の新しい時期まで下がる可能性も十分に考えられる。

資料的に不十分な鉢形土器はⅠ類・Ⅱ類とも鬼塚遺跡出土例に形態的に近似するものが存する。ところが、体部から口縁部へ直線的にのびる西ノ辻Ⅰ式例が含まれず、さらに上六万寺遺跡で出現する、浅い体部に受口状口縁を付けたタイプが見えないなど、「鬼塚」段階を大きく前後することはないと判断される。

以上の久野部遺跡七ノ坪地区出土土器と畿内なかんずく中河内のⅤ様式土器との比較によって、結果として以下のごとく相対的年代が層位的に確認されるであろう。すなわち、長頸壷が極少化を辿り、甕Bでもっとも新しいⅣ類を含み、中実の高杯脚部を共伴する上層式は全体として、畿内Ⅴ様式の新しい様相を表わす器種が多い点は否めず、「上小阪」〜「馬場川」の段階に併行する時期を求めることができる。一方、形態上畿内Ⅴ様式でも古式な部類に入る甕A・甕B－Ⅱ・Ⅲを包蔵し、長頸壷が盛行する下層式として一括されたものは河内地方の「鬼塚」〜「上小阪」の段階にその相対的な位置を設けることができるのである。

（別所健二）

注

(1) 小林行雄「大阪府枚岡市額田町西ノ辻遺跡Ⅰ地点の土器」
同「大阪府枚岡市額田町西ノ辻遺跡D・E・F・H地点の土器」
（『弥生式土器集成』資料編Ⅰ　弥生式土器集成刊行会　1958）

(2) 坪井清足「穂積式土器」（『日本考古学辞典』東京堂出版　1963）

(3) 田中琢「布留式以前」（『考古学研究』第12巻第2号　1965）

(4) 都出比呂志「古墳出現前夜の集団関係」（『考古学研究』80　考古学研究会　1974）

(5) 丸山竜平「弥生式土器の終焉」（『古代研究』10　元興寺仏教民俗資料研究所　考古学研究室　1977）
同「弥生時代から古墳時代へ」（『古代研究』12　元興寺仏教民俗資料研究所　考古学研究室　1977）

(6) 兼康保明ほか『久野部遺跡発掘調査報告書―野洲郡野洲町久野部字十ケ坪所在―』（野洲町教育委員会　財団法人滋賀県文化財保護協会　1977）

(7) (1)の小林行雄「大阪府枚岡市額田町西ノ辻遺跡Ⅰ地点の土器」

(8) (1)の　同「大阪府枚岡市額田町西ノ辻遺跡D・E・F・H地点の土器」

(9) 佐原真「畿内地方」（『弥生式土器集成』本編2　東京堂出版　1968）

(10) (4)の都出論文

(11) (4)の都出論文

(12) (5)の丸山論文

(13) 中谷雅治ほか「鴨田遺跡」（『国道8号線長浜バイパス関連遺跡調査報告書Ⅱ』滋賀県教育委員会　1973）

(14) 田中勝弘『矢倉川中小河川改修に伴う入江内湖西野遺跡発掘調査報告書』（滋賀県教育委員会 財団法人滋賀県文化財保護協会 1977）

(15) (5)の丸山竜平「弥生時代から古墳時代へ」

(16) (6)の兼康論文

(17) 大橋信弥・別所健二・谷口徹「野洲町久野部遺跡七ノ坪地区調査略報」（『滋賀文化財だより』No. 2 財団法人滋賀県文化財保護協会 1977）

(18) 丸山竜平「大津市堅田真野春日山遺跡」（『滋賀県文化財調査年報』昭和五十年度滋賀県教育委員会 1977）

(19) 近く調査報告書が刊行される予定。

(20) (19)同様調査報告が行われる。

(21) 以上の湖南地域の各遺跡における土器の概観にあたっては、(5)の丸山論文「弥生時代から古墳時代へ」に掲載された編年図表を参照した。

(22) 丸山竜平・山口辰一・古川与志継「野洲郡野洲町富波遺跡調査報告」（『滋賀県文化財調査年報』昭和四十八年度滋賀県教育委員会 1975）

(23) 古川与志継「高木遺跡調査概要」（『ほ場整備事業関係遺跡調査報告Ⅱ』滋賀県教育委員会 1975）

(24) 久永春男「東海」（『日本の考古学』Ⅲ弥生時代、河出書房新社 1974）

(25) 『上小阪・瓜生堂・新家遺跡調査報告書』（東大阪市遺跡保護調査会、1976）

(26) 『馬場川遺跡Ⅲ』（東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報14 東大阪市教育委員会 1975）
下村晴文・福永信雄・芋谷隆裕『馬場川遺跡発掘調査報告』（東大阪市遺跡保護調査会 1977）

(27) 橋本久和『安満遺跡発掘調査報告書』（高槻市教育委員会『高槻市文化財調査報告書第10冊』1977）

(28) 大参義一「弥生式土器から土師器へ－東海地方西部の場合－」（『名古屋大学研究論集（史学）』第47輯 1968）

(29) (18)の丸山論文。

(30) (27)の安満報告。

(31) (3)の田中論文。
(4)の都出論文は庄内式を弥生土器とするが、この技法上に成立した庄内式土器を一つ小画期とする点においては同じである。

(32) (5)の丸山論文。

(33) (5)の丸山論文。

(34) (24)久永論文。

(35) (24)久永論文。

(36) (22)の丸山らによる報告。

(37) 丸山竜平ほか「草津市片岡遺跡」（『ほ場整備関連遺跡発掘調査報告書Ⅲ→Ⅱ』滋賀県教育委員会 財団法人滋賀県文化財保護協会 1976）

(38) (24)の久永論文および(28)の大参論文。

(39) (13)の中谷ほか「鴨田遺跡」。

(40) 服部遺跡を守る会事務局「滋賀県守山市服部遺跡の調査－学術的成果と保存運動－」（『考古学研究』92・1976）参照および筆者の調査中の実見による。

(41) 林博通・葛野泰樹・須崎雪博『榿木原遺跡発掘調査報告書Ⅱ』（滋賀県教育委員会 財団法人滋賀県文

化財保護協会　1976）　は伊勢湾の影響を重視した、本変遷とは逆に近い変遷を考えられているが、首肯しがたい。

(42)　(27)の『馬場川遺跡Ⅲ』に同じ。

(43)　芋本隆裕・稲山数士「鬼塚遺跡」（『東大阪市遺跡保護調査会年報Ⅰ』東大阪市遺跡保護調査会 1975）

(44)　(1)の小林行雄「西ノ辻遺跡Ⅰ地点の土器」

(45)　(43)の芋本・稲山報告。

(46)　福永信雄・勝田邦夫「上六万寺遺跡」（『東大阪市遺跡保護調査会年報Ⅰ』東大阪市遺跡調査会 1975）甕Aの亜式の類品と思われるものは片岡遺跡・下繰子遺跡に若干見られる。

(47)　田辺昭三・加藤修・福岡澄男・松沢修『湖西線関連遺跡発掘調査報告』（滋賀県教育委員会 1973）

(48)　(1)の小林行雄「西ノ辻遺跡Ⅰ地点の土器」

(49)　円勝寺発掘調査団「円勝寺跡の発掘調査」（『仏教芸術』82）によれば、円勝寺C類は庄内式に相当する。

(50)　例えば、富波遺跡・高木遺跡・下繰子遺跡※・片岡遺跡・坂口遺跡※等に見られる受口状口縁甕は、ほとんどが庄内式併行期のものと思われる。

※　近く調査報告書が刊行される予定。

※　林博通、葛野泰樹、宮成良佐『坂口遺跡発掘調査報告書』（滋賀県教育委員会、財団法人滋賀県文化財保護協会　1975）

(51)　(27)の安満報告

(52)　(27)の安満報告

(53)　(1)の小林行雄「西ノ辻遺跡Ⅰ地点の土器」

(54)　大阪府立花園高校地歴部『河内古代遺跡の研究』1970）

(55)　(1)の小林行雄「西ノ辻遺跡Ⅰ地点の土器」

(56)　(43)の芋本・稲山報告

(57)　『上小坂・瓜生堂・新家遺跡調査報告書』（東大阪市遺跡保護調査会　1976）

(58)　(26)の『馬場川遺跡Ⅲ』

(59)　(46)の「上六万寺遺跡」

(60)　(54)の『河内古代遺跡の研究』

2　畿内近国における古代末～中世の土器生産について

「Ⅲ」において、近江における黒色土器の系譜について、やや詳しく検討を加えた。そこで、ここでは近江の黒色土器生産の歴史的位置づけを、畿内近国における瓦器生産との関連で、若干試みておきたい。

さきに述べたとおり、古代末から中世にかけての土器生産は、大量生産・技術の簡素化・規格の統一の方向で進展し、奈良末に発明された黒色土器が、しだいにその占める割合を増大させ、11C前半頃に新しく構築的な窯によって、黒色土器B類が生み出され、ついで、瓦器が成立し、畿内および周辺の日常雑器の主流を点めるとされているのである。しかしながら、近江においては、瓦器は、いわゆるごく限られた場所で、ごく少数発見されているだけで（注1）、依然として黒色土（注2）

器が生産つづけられたのである。

上に述べたように、畿内にあっては一般に、瓦器の成立とともに黒色土器は、消滅したとされるが、前述の六角堂の例からも知られるように、11C末においても黒色土器A類が依然みられるのであって、必ずしも一率に瓦器への転換がなされなかったことを示している。すなわち、畿内のある地方（おそらく大和か山城と思われる）で、黒色土器工人の一部が、黒色土器B類を、つづいて瓦器を生み出してのちも、一方では黒色土器が生産されていたのであって、近江の場合のように、ついに瓦器の生産技術を生み出さないところもあったのである。

その点で、瓦器生産について、白石氏が指摘されているところは注目されてよい。すなわち、大和興福寺、河内放光寺の瓦窯において、瓦器が焼かれたり、丹波の瓦窯で須恵器とともに瓦器が焼かれている事例を上げ、土師器生産工人が、瓦工人や須恵器工人の協力のもとに瓦器生産をすすめたことを明らかにされたのである。

瓦器生産のあり方については、すでに田中琢氏が、黒色土器の技術を基底とすること、その生産に構築的な窯が必要なこと、製品がきわめて規格性にとみ生産地・流通機構に、画一性のあることを指摘され（注3）、白石氏もかって、11C段階では、大和において集中的に生産され、12C段階で畿内に一国単位の生産・供給圏の出きることを指摘されていた（注4）。又、最近では、橋本氏が、さらに小単位の供給圏を想定されているのであるが、そのことは同時に（注5）、丹波の如き事例や、近江の如き事例とともにこの時期の日常雑器生産の多様性を示すようにも考えられるのである（注6）。

すなわち、上述したように、瓦器流通の一つの中心である京内にあっても、六角堂例のごとく11C末に下る黒色土器が認められるのであって、黒色土器から瓦器への転換が一率になされたのではなく、丹波のごとき須恵器生産を媒介とするもの、近江のごとく瓦器生産の技術を全く導入し得なかったところもあったのである。瓦器の分布が、一般集落においてもかなりの密度を示すとはいっても、依然として官衙、寺院跡、豪族の居宅などに多いことも、瓦器の生産流通が、大寺院につらなる工人集団、商人層と不可分の関係にあったことをうかがわせるし、構築的な窯が、すでに衰退していた近江のようなところでは、依然、黒色土器が、日常雑器の主流を占めていたのであろう（注7）。又、近江の黒色土器が、時代が下るほど、形態・成形手法において、瓦器と区別できなくなるのは、両者における技術的交流の存在を想定させるとともに、古代末から中世にかけての政治的社会的動向を、背後に感じるのである。

（大橋信弥）

注

（1） 田中琢「古代中世における手工業の発達（窯業）－畿内－」（前掲）

（2） 兼康保明「高島町中ノ坊遺跡出土の瓦器埦」（『滋賀文化財だより』No.5．1977．8）

（3） 白石太一郎「瓦器生産に関する二、三の覚え書」（前掲）

（4） 田中琢、前掲論文

（5） 白石太一郎「いわゆる瓦器に関する二、三の問題」（前掲）

（6） 橋本久和「中世日常雑器類の分析」（前掲）

（7） 白石氏は、瓦器生産の成立に当って、瓦工人と土師器工人の提携を想定されるが、あくまでその主体は、黒色土器工人であったと考える。つまり、瓦器生産は、あくまで須恵器生産の衰退後における、土師器の需要拡大という状況下においてなされた技術革新であって、焼成の大量化・生産品の硬質化という点で、たまたま瓦窯が利用されたのであって、瓦工人が主体的に土器生産にのり出したのではないと考える。そして、瓦窯を利用し得た土器工人も、おそらく大寺院につらなる工人群であったことは問違いないであろう。

3 む す び

本調査によって、明らかになったのは、おおよそ次の諸点である。

(1) 本調査区は久野部遺跡の北限、五之里遺跡の東限にあたり、大部分は沼沢地であった。

(2) 久野部遺跡の北限に当るA区では同遺跡の北を限ると思われる、溝数条および掘立柱建物1棟、土坑若干が検出され、ＳＤ２からは弥生後期の良好な一括資料が得られた。

(3) 五之里遺跡の東限に当るＢ区からは倉庫様の掘立柱建物1棟、土坑多数と条里に規制された溝２条などが検出され、それらはおよそ12Ｃ以降に一部沼沢地を整地して構築されたものであった。

(4) 沼沢地は野洲川と家棟川の自然提防によって形成された後背湿地状のもので、Ｃ区で発見されたＳＤ１０開口部の土器類によって、７～８Ｃ段階まで沼沢地としての機能を果したことが知られた。

(5) Ｂ区における沼沢地の埋め立ては、埋土中の遺物によりおよそ１２Ｃ以降開始されたごとくであり、文献にみえる「富波庄」の形成史を検討する上で注目される。

（大橋信弥）

出土遺物観察表

A区　SD2出土土器

器　形	図版番号	法量(cm)	形態の特徴	成形手法の特徴	備　考
甕 A－Ⅰ	E 1	口径 15.6	ゆるく外反する口縁の端部は上方に短く立上がり、内外両面に鋭い稜を成す。上端は今少し尖り気味か。	剥落が著しく明確でないが、内外面口頸部を横ナデ調整か。	(胎土) 良好 (焼成) 不良 (色調) 淡褐色 下層出土。
甕 A－Ⅱ	E 2 〜 E 3	口径 14.2 〜 15.2	頸部からゆるく外反する口縁部は中位で再び屈折して外上方へ立つ。端部は丸くおさめる。口縁部、頸部のいずれの屈曲も比較的あまい。器壁は5㎜前後の薄いもの。	頸部に刺突文を横方向一段に施したのち、横ナデ調整を加える。E 3には下地にハケ目調整を施している。内面は口縁部はナデ調整。E 3には指圧及び指でナデ上げた痕跡が頸部に見られる。	(胎土) やや不良 (焼成) 不良 (色調) 淡赤褐色 E 3口縁部外面に煤付着。 下層出土。
甕 A－Ⅲ	E 4	口径 13.4	頸部で大きく外反した口縁部は中位で鋭く屈曲内上方へ立上がる。		(胎土) やや不良 (焼成) 不良 (色調) 赤褐色 中層出土。
甕 A－Ⅳ	E 5	口径 13.2	頸部で外反した口縁部は中位でほぼ上方へ屈伸する。上端は平坦な面を呈す。中位の屈曲は丸味を有す。 器壁はやや厚手気味である。	口頸部にハケ目調整したあと、内外両面に横ナデ調整。	(胎土) 良好 (焼成) 良好 (色調) 淡灰褐色 口縁部外面に煤付着。 中層出土。
甕 B－Ⅰ	E 6 〜 E12	口径 11.4 〜 18.6	頸部から外方へ屈曲して再び上方に立上がる口縁部を付す。上端部は凹気味の平坦な面を呈すのが多数を占めるが、中にはE12のように丸く終るものがある。E 8の頸部は他に比してきつく引締るものである。	いずれも口縁部屈曲部近くに櫛状工具による列点文を横位置及び右上がりに施す。 E 7、E10の頸部には櫛状具に条痕が見られる。器体の調整は横ナデ或はハケ目で仕上げる。	E 6〜E 7は下層出土。 E 8〜E10は中層出土。 E11は上層出土。
甕 B－Ⅱ	E13 〜 E14	口径 15.3 〜 16.0	上端部が段を成す受口状口縁甕である。なおE14の頸部での屈曲は大きく、外方へ水平に	立上がり部外面に右上がり又は左上がりの刺突列点文を施す。 E13は頸部内外面をハ	(色調) 双方とも淡褐色を基調とする。 E13は下層、E14は中層出土である。

器　形	図版番号	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	成形手法の特徴	備　　考
			開く。	ケ目調整。口縁部内外面を横ナデする。	
甕 B － Ⅲ	E15 ～ E17	口径 13.6 ～ 15.8	口縁部の立上がりがやや外反気味のものである。口端部は横ナデのためか、ややつまんだ様態を呈す。このため上端の面は凹面または段状気味になる。立上がりは強く、内外に明瞭な稜線を成す。	口縁立上がり部に櫛状具による刺突列点文を一様に施す。E16・E17の頸部には篦または櫛状具かによる条痕を見る。 器体内外面には横ナデ調整を施すが、E15・E17のようにそれ以前にハケ目調整を加えるものもある。	（色調）基調は褐色であるが、いずれも白色がかる。 E 15・E16は中層出土。
甕 B － Ⅳ	E18 ～ E20	口径 13.2 ～ 18.1	口端部に内傾する面を有すものである。 口縁立上がりは甕B－Ⅲ同様少し外開きである。	立上がり部を櫛状具による刺突列点文で飾る。器体調整は内外両面とも、ハケ目と横ナデである。 E20の肩部内面には指圧痕が残る。	すべて上層出土。
甕 C － Ⅰ	E 21 ～ E22	口径 15.2 ～ 17.4	丸くゆるやかに屈曲する頸部に、単純に外反する口縁部と肩の張らない体部を付す甕である。 E21の頸部内面は比較的鋭い稜を形成す。	E21は口縁部内面を横方向にハケ目調整、頸部から体部内面を斜目にハケ目調整したあと、口頸部内外面に横ナデを施し仕上げる。 E22は外面頸部以下と内面口縁部にハケ目調整したあと、口頸部内外面を横にナデて仕上げる。	焼成はいずれも良好である。 E21は下層出土。 E22は上層出土。
甕 C － Ⅱ	E23	口径 12.8	肩の張りのない体部に「く」字状に外反する口頸部が付く。	器体外面は細かいハケ目調整を全体に施したあと、口頸部に横ナデを加えて仕上げる。 内面は口縁部に横ナデ調整を加える。この他ところどころにハケ目痕が残る。 なお、体部には内外に指圧が段状に加えられる。	（胎土）良好 （焼成）良好 （色調）白褐色 中層出土。
甕 C － Ⅲ	E24	口径 10.8	「く」字状に屈曲する	口頸部内外面にハケ目	（胎土）良好

器　形	図版番号	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	成形手法の特徴	備　　考
			頸部に、低く大きく開く口縁部が付く、口径の小さいものである。口端部は上方へわずかにつまみ上げる。	調整を加え、そのあと横ナデ或はナデ調整を施す。	（焼成）やや不十分 （色調）明赤褐色 中層出土。
甕底部－Ⅰ	E 25 ～ E 28	底径 5 前後	底径の比較的大きい、平底のものである。	良好な調整痕が残っているのはE25であるが、これによれば、外面は縦方向にハケ目調整し、内面は横方向にハケ目調整する。なお、この内面のハケ目は、明らかに板状工具を回転させて施したものである。この他に内外面とも指圧痕が認められたが、これは輪積の接合点を押圧したものと考えられる。	E 25は下層出土。 E 26は中層出土。 E 27は上層出土。
甕底部－Ⅱ	E 29 ～ E 31	底径 4 ～ 5	底径の比較的小さい、若干上げ底気味のものである。	内外両面をハケ目調整する。内面はナデて平滑にするものがある。（E 29）	E 29は下層出土。 E 30は上層出土。 E 31は出土層不明。
長 頸 壺 Ⅰ	E 32	口径 13. 4	頸部から若干外反しつつ、上方へ長く伸びる円筒形の口頸部を有すもの。上端部はフラットな面を成す。	外面は口頸部を縦方向に密なハケ目を加えたあと、口端部と頸部を横にナデて仕上げる。内面は口頸部を横方向に板ナデを施し、端部を横ナデしたあと、ところによって指で縦方向にナデる。 なお、口端部の横ナデも幅のせまい板状工具によるものと考えられる。 頸部以下の内面は篦で削ったあと指でナデて仕上げる模様。	（胎土）良好 （焼成）良好 （色調）淡灰褐色 中層出土
長 頸 壺 Ⅰ	E 33	口径 10. 2 器高 20. 2	中位に最大径を有すほぼ球の胴部に、端部付近で若干強く開く円筒形の口頸部と、小さな上げ底の底部が付く。	器体外面は全体にわたって細かなハケ目を加え調整し、肩部に 3 本の記号風篦描文を刻む。内面は口頸部にハケ目	（胎土）やや不良 （焼成）不良 （色調）赤褐色 上層出土。

器　形	図版番号	法量(cm)	形態の特徴	成形手法の特徴	備　考
			口端部は丸くおさめる。	調整の痕跡がみえ、体部下半にハケ目調整が見られる。これは恐らく板状工具を回転し、胎土を掻取ったことによるものと考えられ、体部上半はナデ調整を施す。	
長頸壷Ⅰ	E34 E37 〜 E39	口径 10.4 〜 14.2	E33に類似する長頸の壷破片である。いずれも端部が内彎気味になる円筒形のものであろう。端部は丸くおさめるか一部尖り気味のものもある。	口縁部外面をハケ目調整し、端部を横にナデる。内面は段状の指圧のあと横ナデ調整する。	(色調) 褐色を基調とする。 E34、E38は下層出土。 E39は上層出土。 E37は出土層不明。
長頸壷Ⅱ	E35 〜 E36	口径 9.2 〜 10.6	頸部からゆるく外反して長くのびる口縁部の端部が軽く外反するもの。	器体外面にハケ目調整を施したあと、内外面を横ナデもしくはナデ調整する。	(色調) 淡褐色 E35は下層出土。 E36は中層出土。
長頸壷Ⅲ	E40 〜 E42	口径 9.9 〜 10.5	細頸で漏斗状に開く口縁部が接続するもの。E41は上端に幅のせまい平坦な面をとる。	内外面をハケ状工具で軽くすばやくナデた他には指頭で押圧を加える程度である。	(胎土) 良好 (焼成) 良好 (色調) 淡赤褐色 二点とも下層出土である。
長頸壷Ⅳ	E42 〜 E44	口径 8.5 〜 12.3	頸部より屈曲して外上方へ伸びる口縁部は、長頸壷Ⅰ・Ⅱのそれより短かく、外反度も大きく、やや直線的なものと推定される。	器体外面はハケ目(E43・E44)または箆磨き(E45)と横ナデ調整。 内面は指頭圧のあとを横ナデと簡単だが、E43はハケ目のあと横にナデ、その上指でナデ上げる丁寧なもの。	(色調) 褐色を基調とする。 三点とも下層出土。
短頸壷	E45	口径 9.8	上半部に最大径を持つと思われる胴部に、短かく直口に近い口頸部が付く。	器体外面に指頭による圧痕が段状に残る。	(胎土) 良好 (焼成) 良好 (色調) 乳白色 出土層不明
壷	E46	口径 10.8	筒状の頸部に短く強く外反する口縁部が付く。	器体内外面をハケ目調整したあと横ナデさらには指でナデ上げる。 なお、口頸部の彎曲部には強い指圧が加えら	(胎土) 良好 (焼成) 良好 (色調) 淡褐色 下層出土

器　形	図版番号	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	成形手法の特徴	備　　考
				れており、特に外面は面が形成されている。	
壷	E47	口径 8.2	球形の胴部に「く」字に屈曲して朝顔状に開く口頸部と突出気味の完全な平底が付く小型壷	器体外面は体部をハケ目調整したあと口頸部を横ナデ、体部をナデ調整する。底部には指圧を加える。 内面は接合個所に指圧を加えたあと、ハケ目調整する。口縁部は横ナデ調整のみ。	(胎土) 良好 (焼成) 良好 (色調) 乳白褐色 上層出土。
壷	E48	口径17.5	頸部から大きく弓なりに外反する大型の壷口縁。 端部は単に丸くおさめる。	内外面ともハケ目調整のあとナデて仕上げる。	(胎土) 良好 (焼成) 良好 (色調) 乳白褐色 上層出土。
壷底部－Ⅰ	E49 ～ E54	底径 4.8 ～ 6.0	平底の底部だが、丸味があり、シャープでないもの。 E54はむしろ壷底部－Bに分類すべきか。	器体内外面をハケ目調整、ナデ調整するのが通例。E54の内面のハケ目調整は板状工具を回転させたもの。 なお、E49の底部底面には篦による三本の刻線が走る。	すべて下層出土。
壷底部－Ⅱ	E55 ～ E58	底径 3.5 ～ 6.6	大きく張り出した胴部につく小さく突出したシャープな平底が主たるものであるが、E58はやや径も大きく胴部への張り出しもそれほど大きくない。	器体内外面をハケ目調整、ナデ調整する。	(色調) 褐色を基調とする。 すべて中層出土。
壷底部－Ⅲ	E59 ～ E63	底径 4.0 ～ 6.2	底部輪台への充填が少ないため、中央に比較的深い窪みが出来た、明瞭な上げ底。	器体内外面をハケ目調整のうえナデるが、内面のクモノ巣状のそれは板状工具を回転させたことによるものと思われる。	(色調) 褐色を基調する。 E59・E60は下層出土。 E61・E62は中層出土。 E63は出土層不明。
壷底部－Ⅳ	E64	底径 5.0	球形の胴部に小さな突出気味の底部がつく。 底部輪台への充填は十分で、ほぼ平底に近い	胴部外面はまず縦方向にハケ目調整、そのあと横方向にハケ目調整。 そのあと胴部下半をナ	(胎土) 良好 (焼成) 良好 (色調) 外面は淡褐色、内面は黒褐色。

器　形	図版番号	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	成形手法の特徴	備　　考
			がわずかに接地しない面が残るもの。	デ調整して仕上げる。内面は胴部下半にハケ目調整。中位は強い横ナデ調整の上に指ナデを行う。	下層出土。
壷底部－Ⅳ	E65 ～ E69	底径 4.8 ～ 6.0 底径6.0を主とする。	底部輪台への充填はほぼ完全で、平底に近いがわずかに接地しない面が残る。	内外面をハケ目及び板ナデ調整する。中に篦研磨するものがある。（E65）	E65は下層出土。 E66、E67は中層出土。 E68、E69は上層出土。
高 杯 － Ⅰ	E70 ～ E73	口径 17.6 ～ 25.6	杯部中位、体部と口縁部境界点で稜を成して屈折する、浅皿状のもの。E73の口縁部は大きく外反する。	外面はハケ目を縦に調整。内面は篦磨きまたはハケ目で縦に調整。あと横にナデる。	胎土、焼成は良好なものが多く、色調は褐色を基調とする。 E70は下層出土。 E71～E73は中層出土。
高 杯 －Ⅱ	E74	底径 10.8 脚高 6.1	杯部は内彎しつつ口縁に至る椀状のもの。 脚部は支柱部と裾部の境界の不明瞭な「ハ」字状にゆるく外反して端部に至るもの。 柱状部の円孔は外から内へ三ケ穿つ。	外面脚付根にハケ目痕、その上から杯部支柱部と縦に篦磨き。 内面は杯部に板ナデあるいは指ナデを加え、脚部は絞り目痕、巻上げ痕を指ナデで消す。	（胎土）精良 （焼成）堅緻 （色調）淡灰褐色 中層出土。
高 杯 － Ⅱ	E75	口径 23.4	E74同様椀状のものだが、やや浅いものである。	器体内外面にハケ目調整そのあとナデて仕上げる。なお、内外に指頭による圧痕が多く見られる。	（胎土）良好 （焼成）良好 （色調）灰白色 中層出土。
高 杯 － Ⅱ	E76	口径 14.2 器高 14.8	杯部は内彎気味の深い椀状の体部に受部を持つ口縁部がつく。受部の立上りは短く低く内傾する。 脚部はやや開き気味の筒状の支柱部に短くゆるくカーブする裾部が付く。	外面は杯部の体部と口縁部の境区指頭で連続的に押圧、支柱部は指で強く押しナデたのか、面を成す。 内面は杯部の体部と口縁部の境を指圧、その上にハケ目調整。脚部は指でナデ下ろす。	（胎土）良好 （焼成）良好 （色調）暗紫褐色 上層出土。
高杯脚部 －Ⅰ	E77 ～ E82	脚部付根径 3.8～4.4 底径 15.0 ～ 20.4	背の比較的高い付根付近から「ハ」字状におだやかに開く支柱部に、短かい開きの小さな裾	器体外面にハケ目又はヘラ研磨を施し、端部付近は横にナデる。 内面はナデ調整。端部	（色調）基調は褐色 E77、E78は中層出土 E79、E80は上層出土。

器　形	図版番号	法量(cm)	形態の特徴	成形手法の特徴	備　考
			部がつく。裾端部は丸くおさめる。 支柱部下端から裾部境界点付近に小円孔を穿つ。	は横ナデ。	E81は中層出土。 E82は出土層不明。
高杯脚部 －Ⅱ	E 83 ～ E 89	脚部付根径 2.6 ～ 4.0 底径 10.8 ～ 15.0	背の比較的低い付根から大きく「ハ」字状に開く脚部。端部は丸くおさめるものと、外上方へつまむものとある。	外面は篦磨き又はハケ目調整したあと、ナデ又は横ナデ調整。 内面は絞り目、巻上げ痕を指でナデ下ろして消す。端部付近は横ナデ調整。	（色調）基調は褐色を呈す。 E83は下層出土。 E84～E86は中層出土。 E87は下層出土。 E88、E89は中層出土。
高杯脚部 －Ⅲ	E 90	脚部付根径 4.4	筒状の比較的長い支柱部に「ハ」字状に大きく開く裾部が付く。このため支柱部と裾部の境は明瞭であるが、稜は形成しない。 支柱部下端に4個の円孔を外から内へ穿つ。	器体外面を縦に篦磨きしたあと、ハケ目調整を粗く施す。 内面は杯部に篦磨きするほか、裾部には横ナデ調整したうえに軽く指で縦方向にナデる。	（胎土）良好 （焼成）堅緻 （色調）乳白褐色 中層出土。
高杯脚部 －Ⅳ	E 91	脚部付根径 3.0	細身の開きの少ない支柱部は中実である。 裾部はゆるやかに「八」字状に開く。 支柱部中位に4個、支柱部と裾部の境に3個円孔を穿つが、中位の円孔は支柱部中実のため貫通しない。	外面支柱部にハケ目調整。 内面は巻上げ痕、指圧痕、絞り目痕を指でナデて消す。 円孔壁面にもハケ目痕が見える。	（胎土）やや不良 （焼成）良好 （色調）赤褐色 上層出土。
器　台	E 92	口径 12.6	大きく外反する受部の端部を下垂させて面を取るもの。端面には円形浮文を貼付ける。	受部内面をナデ調整。 端面円形浮文には竹管文を押捺する。	（胎土）良好 （焼成）堅緻 （色調）淡赤褐色 下層出土。
鉢　－　Ⅰ	E 93 ～ E 94	口径 12.0 ～ 13.4	いずれも体部から外上方へ屈曲する口縁を持つ。ただしE93のそれは丸味のあるもので、外反すると言った方が適切だとも言えよう。 E93はやや肩が張るに比べてE94はまったく張らず、内彎気味に直	外面はハケ目調整。内面は横ナデ調整。	胎土、焼成いずれも良好。 色調も共に淡褐色を呈す。 中層出土。

器　形	図版番号	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	成形手法の特徴	備　　考
			線的に底部へ伸びる。		
有孔鉢 Ⅰ	E 95	底径 4.6	平底の底部に円孔を一個を穿つ。(内から外へ)底部と体部の境界は明らかである。	底部外面に指圧、ハケ目を施す。 内面も指圧、ハケ目調整。	(胎土) 不良 (焼成) 良好 (色調) 外面は赤褐色、内面は淡褐色を呈す。
有孔鉢 Ⅱ	E 96	底径 4.6	平底の底部に計20個の小円孔を外から内へ穿つもの。小円孔のうち貫通しないものがある。	外面はハケ目調整のあとナデ調整。 内面はナデ調整。	(胎土) 不良 (焼成) 良好 (色調) 淡赤褐色
甕 B －Ⅳ	E 97	口径 16.4	頸部で強く外反した口縁部はさらに鋭く屈曲して、外上方へ立上がる。 口端に内傾する面を取る。	口縁立上がり部外面に2ケ一単位の刺突列点文を施す。 内面は横ナデ調整が見られる。	(胎土) 不良 (焼成) 不良 (色調) 淡黄褐色
甕 C － Ⅰ	E 98	口径 14.2	頸部から強く外反した口縁部は短かく、端部はわずかに肥厚させて面を取る。		胎土、焼成とも良好で、淡黄褐色を呈す。
甕底部－Ⅰ	E 99	底径 4.2	完全な平底の底部は逆「ハ」字状に体部へ伸びる。	器体外面をハケ目調整。	胎土不良、焼成良好淡褐色を呈す。
甕底部－Ⅱ	E 100	底径 4.4	底部外面中央にわずかに接地しない凹面を持つ上げ底。		(胎土) 良好 (焼成) 不良 (色調) 外面は淡赤褐色、内面は黒灰色を呈す。
広　口　壷	E 101	口径 18.8	口端部を肥厚させて、下垂する。	端面に四条の退化した凹線を描く。	(胎土) 良好 (焼成) 良好 (色調) 乳白褐色
壷底部－Ⅰ	E 102	底径 8.4	安定した大きな平底で、体部へはわずかに屈曲してのびる。	内外面にハケ目調整痕が残る。	胎土不良、焼成良好、色調は淡褐色を呈す。
壷底部－Ⅲ	E 103	底径 4.4	比較的に深い上げ底。体部へ直線的にのびる。	底部下端を指で押圧する。	胎土、焼成とも良好、色調は淡赤褐色を呈す。
鉢　　Ⅱ	E 104	口径 10.6	直口の口縁部に内彎気	器体内外面に指圧を加	(胎土) やや不良

器　形	図版番号	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	成形手法の特徴	備　　考
		底径 5.0	味に外上へのびる体部がつく。 口縁端部は丸くおさめる。 底部内面は体部からゆるやかにカーブする。 ごく浅い上げ底である。	えたあと、外面にハケ目調整を施す。このハケ目調整は底部、底面にも及ぶ。	（1～2m大の砂粒含む） （焼成）不良 （色調）淡赤褐色
有孔鉢 I	E 105	底径 4.6	上げ底の底部中央に円孔を一個穿つ。 体部へはわずかに屈曲してのびる。	底部外面には指圧痕をとどめる。	（胎土）不良 （焼成）良好 （色調）外面は赤褐色、内面は黒灰色。 以上E97～E105はSD－1内掘開時に出土したものの、むしろ下層のSD－2内包蔵遺物と考えるべきものである。
壷	E 106	口径 13.8	短かく直立した頸部から大きく朝顔状に開く口縁の端部はわずかに外傾する面をとる。	口端部外端面に一条の凹線を走らせる。端部付近と頸部付近の内外面を指圧、外面には頸部あたりにハケ目調整痕も見られる。	（胎土）良好 （焼成）良好 （色調）淡赤褐色 SD－3内堀開時に出土したものだが、むしろSD－2内包蔵の遺物と考えられる。

A区　SD 3 出土土器

器　形	図版番号	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	成形手法の特徴	備　　考
杯 蓋 A	C 151 ～ C 155	口径 11.2 ～ 13.4	つまみの付かない杯蓋である。 C151～C152の天井部は比較的扁平で、C153～C155の天井部は丸い。 C 151は一条の凹線で天井部と体部を分ける。 また、C 151は口縁部を外反させて、C 153は垂直に下向させることにより、体部と区別する。 なお、C151、C 153、C 154は口端部に内傾する面をつくるが、とくにC 151は鋭く明瞭で	C 151、C154の天井部はヘラケズリを施し、C 151はさらに天頂部にカキ目を施す。 すべて器体内外面を横ナデ調整するが、C152の天井部はヘラ切り不調整で粘土紐痕が残る。	

器　形	図版番号	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	成形手法の特徴	備　　考
			ある。		
杯 蓋 C	C 156		ツマミを付ける杯蓋である。 扁平な天井部に付くツマミは平坦で、わずかに窪み、宝珠形のおもかげはない。 口縁部は下方に折曲げるものとおもわれる。	器体外面は横ナデ調整を全面に加え、天井頂部にカキ目を施す。 内面も横ナデ調整を行うが、天井頂部には指圧痕及び仕上げナデが見られる。	
高 杯 蓋	C 157		天井部と体部の境は不明瞭で、わずかに天井部を篦で削って分ける。この天井部の中央に中くぼみのツマミを付ける。	器体外面体部以下と内面全体を横ナデ調整。ツマミも全面横ナデ調整。	
杯 身 A	C 158	口径 11.6	体部が比較的扁平で浅い杯身。受部はほぼ水平で先端を丸くおさめる。立上がりは内傾するが比較的長く高い。	内外面を横にナデ調整。底部内面に指圧痕がのこる。底部はヘラ切り。	
杯 身 B	C 159	口径 11.6	体部と口縁部は外上方へ直線的にのびる。 口縁端部は丸くおさめる。底部は平坦である。	内外両面を横ナデ調整。底部はヘラ切り。	
杯 身 C	C 160	底径 9.8 高台径 8.6	底部外縁よりに短かく退化した高台が付く杯身。体部と底部の境界は屈曲によって明瞭である。	内外面を横ナデ調整するが。底部中央はヘラ切り不調整か。	
壷	C 161	底径 11.5 高台径 10.8	平坦な底部の外縁にややふんばった高台がつく。体、底部の境界は不明瞭だが、体部下端をごく浅くヘラ削りを行うことによって稜を作り区分する。 高台は外下方へおろし、端部は内外に肥厚させてやや窪む端面を形成する。内先端で接地する。	体底部、高台の内外両面を横ナデ調整。 体部下端を浅くヘラ削り。	

器　形	図版番号	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	成形手法の特徴	備　考
椀（高台）	H 162	底径 4.5 高台径 4.2	厚味のある尖り気味の高台を底部に貼付ける。	体部下端に指頭圧痕が見える。 高台内面に横ナデ調整が残る。	胎土、焼成とも良好、色調は淡黄灰色を呈す。
把　手	H 163		外上方へするどく屈曲する平面三角形に近い形態を示す。	体部内面残存部にハケ目調整が見える。 把手上面には指頭圧痕を加え、下面にハケ目調整を施す。	胎土、焼成とも良好、色調は淡黄褐色を呈す。

A区　SD1出土土器

器　形	図版番号	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	成形手法の特徴	備　考
直 口 甕	C 201	口径 21.2	内彎気味に立上がった口縁部の端部は丸くおさめ、内傾する面を取る。この内端面は段を形成する。	器体内外両面を横ナデ調整するが、口端近くの内外面には下地にハケ目状の調整痕が残る。	焼成は堅緻。

A区　SD4出土土器

器　形	図版番号	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	成形手法の特徴	備　考
壷	E 251	口径 19.2	頸部から大きく外反した口縁部の端部を外上方へ立上がらせた壷か。端部にはやや内傾する面を形成する。	口端外面の立上がり部に竹管文を横位置に押捺する。 また口縁外面に本来は凹線を走らせたか。	胎土、焼成とも不良、色調は淡褐色を呈す。剥落著しい。

A区出土土器

器　形	図版番号	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	成形手法の特徴	備　考
短 頸 壷	E 301	口径 6.6	頸部で屈曲した口縁部は内向気味に上方へのび、端部近くからわずかに外半させる。端部は丸くおさめる。 器壁は厚い。	内外両面を指圧または指でナデ上げる。	（胎土）不良 （焼成）良好 （色調）淡灰褐色 A－8トレンチ耕土層出土。
壷底部－Ⅳ	E 302	底径 4.8	底部から体部への伸びは直線的で屈曲しない。底面はわずかに窪む。	底部外面に指圧および叩目が残る。	（胎土）良好 （焼成）良好 （色調）淡赤褐色 表採

器　形	図版番号	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	成形手法の特徴	備　　考
高杯脚部 －Ⅰ	E 303	脚部付根径 4.4	柱状部上端から外下方へゆるやかに開く脚部。柱状部下端に円孔を4ケ穿つ。	内面に絞り目が残る。	（胎土）やや不良（2～3㎜大の砂粒顕著） （焼成）良好 （色調）淡赤褐色 表採
杯　蓋　A	C 304 ～ C 305	口径 10.8 ～ 14.6	いずれも天井部は丸く、体部との境界は不明瞭。口縁部はC304は少し外へ屈曲させるに対してC 305 はやや内彎気味に直立する。 ともに内面にあまい面をとるが、C304はこの面に一条の沈線を走らす。	内外面横ナデ調整。	（焼成）堅緻 C 304 はA－7Sトレンチ地山直上出土。 C 305 はA－8トレンチ耕土層出土。
鉢	K 306	底径 13.8	完全な平底の底部から体部へ大きく開く。	内外面を横にナデ調整するが、底部下端には手ズレが見られる。底部内面下端に指圧痕がある。	（胎土）良好 （焼成）良好 （色調）淡黄褐色、内面には煤が付着。 A－2トレンチ耕土層出土。

B区　SD8出土土器

器種	器形		図版番号	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	成形手法の特徴	備　　考
土師器	椀	A	H 401	口径 16.4 器高 5.5 高台 0.5 底径 5.4	○体部は内彎し、端部を丸くおさめる。 ○口縁内側に一条の沈線をめぐらす。 ○高台は低く、下端外面を斜めに削る。	○粘土紐巻き上げ。 ○貼り付け高台で、貼り付け後、ナデ調整。 ○体部上半に指押え。 ○体部、高台の境に斜めのヘラミガキ。	○淡灰褐色 ○胎土、焼成良
		B	H 402	口径 15.4 器高 5.4 高台 0.6 底径 5.6	○体部は大きく内彎、全体にややいびつにつくる。 ○口縁内側に沈線。 ○断面三角形の高台で、やや外傾する。	○粘土紐巻き上げ。 ○貼り付け高台、内外にナデ。 ○口縁内外面横方向の、内外面中位に斜方向、内底部に縦方向のヘラミガキ。 ○内外面中位指押え。	○淡灰白色 ○胎土、焼成良
		C	H 403	口径 14.6	○体部は内彎して上方にのび端部を丸くおさめる。	○粘土紐巻き上げ。 ○内面中位斜方向のヘラミガキ。	○灰白色 ○胎土、焼成良

器種	器形		図版番号	法量(cm)	形態の特徴	成形手法の特徴	備考
土師器	椀				○口縁内部に沈線。		
		D	H 404	口径 15.6	○体部はゆるやかに内彎、端部がやや外反する。 ○口縁内側に沈線。	○粘土紐巻き上げ。 ○口縁内外に横方向のヘラミガキ。 ○内面に指押え。	○淡灰褐色 ○胎土、焼成良
			H 405 H 406	高台0.8と0.5 底径 5.6	○やや高い高台で、ゆるやかに内彎、端部を丸くおさめる。	○貼り付け高台、貼り付け後ナデ。	
			H 407 〜 H 411	高台0.5〜0.7 底径5.3〜6.2	○断面三角形の高台。	○貼り付け高台で貼り付け後ナデ。	
			H 412 〜 H 414	高台0.55〜0.6 底径5.8〜6.2	○低い高台で、下端外面を斜めに削る。E 211は、端部を外に引き出す。	○貼り付け高台で、貼り付後ナデ。	
	脚付皿	A	H 415 H 416	H415脚 3.8 底径8.2 H416脚 2.2 底径9.2	○高い脚台、外方にゆるやかに開き、端部を丸くおさめる。	○皿底部に糸切り痕が認められる。 ○貼り付け後、内外にナデ内部に指押え。	○淡褐色 ○胎土、焼成良
		B	H 417	底径 7.2	○高い脚台で、ゆるやかに内彎し、端部を丸くおさめる。	○内外面、ナデ調整。	○淡褐色 ○胎土、焼成良
	皿	AⅠ	H 418 H 419	H 418 口径 19.4 H 419 口径 14.8 器高 2.9	○体部は内彎し、口縁は内彎して端部を丸くおさめる。 ○体部と底部の境界は不明瞭で平底を呈す。	○粘土板成形。 ○体部下半に指押え、上半にナデ調整。	○淡褐色、H 418は内面黒色 ○胎土、焼成良
		AⅡ	H 420 H 421	H 420 口径 11.0 器高(1.7) H 421 口径 8.4 器高(1.4)	○体部はゆるやかに内彎し、口縁部は、直線的にのび、端部は外反する。 ○体部・底部の境界はやや不明瞭である。	○粘土板成形。	○淡茶褐色 ○胎土、焼成良
		B	H 422 H 423	H 422 口径 8.9 器高 2.2 H 423 口径 10.0 器高(1.9)	○底部は丸味をおび、体部はやや内彎する。端部は丸くおさめるものと、少し外反するものがある。	○粘土板成形。 ○内面指押え、外面横ナデ。	○黄褐色 ○胎土、焼成良
		CⅠ	H 424	口径 13.4	○体部は直線的にのび、口縁部は内反し、端	○粘土板成形。	○淡褐色 ○胎土、焼成良

器種	器形		図版番号	法量(cm)	形態の特徴	成形手法の特徴	備考
土師器					部を丸くおさめる。		
	皿	CⅡ	H 425 〜 H 427	口径 10.4〜11.1 器高(1.8〜2.0)	○体部はゆるやかに内彎し、口縁部は大きく外反する。	○粘土板成形。 ○体部下半に指押え。	○淡黄褐色 ○胎土、焼成良
		D	H 428 〜 H 431	口径 8.8〜10.3 器高 1.7〜1.8	○体部はゆるやかに内彎し、口縁部は内反して、直線的にのびる。	○粘土板成形。 ○内外面に指押え。 ○口縁部にナデ。	○淡褐色 ○胎土、焼成良
		E	H 432	口径 10.45 器高(1.8)	○体部はゆるやかに内彎し、口縁端部は外反し、丸くおさめる。 ○底部丸底。	○粘土板成形。 ○内外面に指押え。 ○口縁部ナデ。	○灰白色 ○胎土、焼成良
	鉢		H 433	口径 24.6	○体部はゆるやかに内彎し、口縁部は外反する。	○粘土紐巻き上げ。	○淡褐色 ○胎土、焼成良
	堝	A	H 434	口径 24.9	○口縁部は、やや外反し、立ち上がって端部を丸くおさめる。 ○体部は、ほぼ直線的に底部に至る。	○粘土紐つみ上げ。 ○体部中位に、内外面からの指押え。 ○口縁部横ナデ。	○茶褐色、下部にススス付着 ○胎土、焼成良
	羽釜	A	H 435 H 436	H 435 口径 25.0 H 436 口径 22.1	○口縁部は内傾し、端部は立ち上がる。 ○つばは断面三角形を呈し、端部は丸い。	○粘土紐つみ上げ。 ○体部内面はハケ。 ○体部外面に指押え。	○茶褐色、外面にススス付着 ○胎土、焼成とも良好
		B	H 437 H 438	H 437 口径 25.2	○口縁部は、直立し、端部は肥厚する。 ○つばは、やや下方にのび、端部を丸くおさめる。	○粘土紐つみ上げ。 ○体部内面細かいハケ。 ○口縁部外面に指押え。端部はナデ。	○暗褐色、外面にススス付着 ○胎土、焼成良
黒色土器	埦	A	B 439 B 440	B 439 口径 16.2 器高 5.2 高台 0.55 底径 6.25 B 440 口径 17.2 器高 6.25 高台 0.5 底径 6.4	○体部は内彎し、端部を丸くおさめる。 ○口縁内部に一条の沈線。 ○高台は断面逆台形を呈し、下端外面を少し削る。	○粘土紐巻き上げ。 ○貼り付け高台。 ○体部外面上半横方向のヘラミガキ、下半指押え。 ○体部内面斜方向一部格子状の底部、縦方向のヘラミガキ。	○内面、一部外面黒色、外面淡赤褐色 ○胎土、焼成良
			B 441	口径 15.5 器高 5.4	○体部は大きく内彎し、端部を丸くおさめる。	○粘土紐巻き上げ。 ○貼り付高台。	○内面および外面一部黒色、外面淡褐

器種	器形		図版番号	法量(cm)	形態の特徴	成形手法の特徴	備考
黒色土器	椀	B		高台 0.6 底径 5.7	○口縁内側に沈線。	○体部内面ナデの後、斜方向（一部格子状）のヘラミガキ。 ○口縁内外に横方向のヘラミガキ。	色 ○胎土、焼成良
		C	B 442 B 443	B 442 口径 15.4 器高 5.1 高台 0.55 底径 4.4 B 443 口径 15.6	○体部は低くゆるやかに内彎し、端部は丸くおさめる。 ○高台は断面三角形を呈し、やや小さい。	○粘土紐巻き上げ。 ○貼り付け高台、貼り付け後ナデ成形。 ○外面下半に指押え、内面粗いヘラミガキ。	○内面および外面の一部黒色、外面淡黄褐色 ○胎土、焼成良
		D	B 444	口径 14.1 器高 5.2 高台 0.55 底径 3.3	○体部は低くゆるやかに内彎し、端部は少し外反し丸くおさめる。 ○口縁内側に沈線。 ○高台は低く逆台形を呈す。	○粘土紐巻き上げ。 ○貼り付け高台。 ○外面と内面の一部に指押え。	○内面、外面の一部は黒色、外面は淡赤褐色 ○胎土、焼成良
			B 445 〜 B 452	高台0.4〜0.7 底径5.1〜6.3	○低い高台で下端外面を斜めに削る。	○貼り付け高台、貼り付け後ナデ。 ○内底部に縦のヘラミガキ。	○内面黒色 ○胎土、焼成良 ○B452、内外面黒色
			B 453 〜 B 455	高台0.5〜0.65 底径5.1〜6.4	○やや高い高台で、大きく外方にのび端部を丸くおさめる。	○貼り付け高台で、貼り付け後ナデ。	○内面黒色 ○胎土、焼成良
			B 456 〜 B 460	高台0.5〜0.75 底径5.5〜6.2	○断面三角形の高台、やや内反ぎみのものと、外反ぎみのものがある。	○貼り付け高台、貼り付け後ナデ、指押え。 ○内底部にヘラミガキ。	○内面黒色 ○胎土、焼成良 ○B 459、内外面黒色
			B 461 〜 B 465	高台0.5〜0.65 底径5.2〜6.9	○逆台形の高台で、外反するため端部内面が着地する。	○貼り付け高台、貼り付け後ナデ。 ○内底部にヘラミガキ。	○内面黒色、外面淡黄褐色 ○B 464 内外面黒色 ○胎土、焼成良
須恵器	鉢		C 466	高台 0.55 底径 14.8	○体部は直線的に上方にのびる。 ○高台は低く断面台形を呈する。	○内外面ナデ。 ○貼り付け高台、貼り付け後ナデ。	○暗灰色 ○胎土、焼成良
緑釉	椀		G 467	高台 0.5 底径 10.7	○断面三角形の高台 ○内面に一条の沈線	○貼り付け高台。 ○軟質。	○淡黄緑色 ○胎土、焼成良

B区　SD 9 出土土器

器種	器形		図版番号	法量(cm)	形態の特徴	成形手法の特徴	備考
土師器	椀		H 501	高台 0.45 底径 5.6	○低い高台で断面逆台形を呈す。	○貼り付け高台、貼り付け後ナデ。	○灰褐色 ○胎土、焼成良
			H 502	高台 0.5 底径 5.6	○外方にのび端部を丸くおさめる高台。	○貼り付け高台、貼り付け後ナデ。	○灰褐色 ○胎土、焼成良
			H 503	高台 0.8 底径 6.9	○断面三角形を呈する高台。	○内面へラミガキ。 ○貼り付け高台、貼り付け後ナデ、一部へラミガキ。	○淡茶灰色 ○胎土、焼成良
	皿	AⅡ	H 504	口径 9.2 器高 1.3	○体部は内彎し、端部はやや鋭い。 ○底部はやや上げ底で体部との境界は一応明瞭。	○粘土板成形。 ○内外面にナデ、内面下半に指押え。	○赤褐色 ○胎土、焼成良
	羽釜	B	H 505		○口縁部はほぼ直立する。 ○つばはやや下方にのび端部を丸くおさめる。	○粘土紐つみ上げ。 ○体部内面に細かいハケ。 ○口縁外面に指押え、つば周辺ナデ。	○褐色 ○胎土、焼成良
		C	H 506	口径 21.0	○短かい口縁部は、やや外方にのび端部は鋭い。 ○つばは小さく断面三角形を呈す。	○粘土紐つみ上げ。 ○口縁部内面上半、体部外面下半に指押え。 ○外面ナデ。	○淡灰褐色、外面下半スス付着 ○胎土、焼成良
須恵器	椀		C 507	高台 1.0 底径 7.0	○高い高台、端部は丸くおさめる。 ○底部はほぼ水平。	○粘土紐巻き上げ。 ○貼り付け高台、貼り付け後ナデ。 ○底部糸切り、内外面にナデ。	○灰白色 ○胎土良、焼成堅緻
	鉢		C 508	高台 0.8 底径 10.4	○体部は直線的に斜上方にのびる。 ○台形の高台が斜めに付く。	○体部外面にタタキが残存。内面はナデ。 ○貼り付け高台、貼り付け後ナデ。	○灰色、内面に自然釉 ○胎土、焼成良

B区　SB 2 出土土器

器種	器形		図版番号	法量(cm)	形態の特徴	成形手法の特徴	備考
須恵器	杯		C 551	口径 14.2	○立ち上がりは、きわめて低く受部とほぼ	○粘土紐巻き上げ。 ○内外面ナデ。	○暗灰青色 ○胎土、焼成良

器種	器形		図版番号	法量(cm)	形態の特徴	成形手法の特徴	備考
須恵器					同じ。 ○体部は直線的に底部に到る。		
土師器	椀	B	H 552	口径 14.6 器高 5.5 高台 0.65 底径 5.8	○体部は大きく内彎し、口縁部はやや外反、端部を丸くおさめる。 ○口縁内側に一条の沈線。 ○断面逆台形の高台で下端外面を斜めに削る。	○粘土紐巻き上げ。 ○貼り付け高台、貼り付け後ナデ、一部へラミガキ。 ○内外面に指押え。 ○口縁内外に横方向のへラミガキ。	○淡褐色 ○胎土、焼成良
		C	H 553	口径 16.4	○体部はゆるやかに内彎、端部は鋭い。 ○口縁内側に沈線。	○粘土紐巻き上げ。 ○外面下半に指押え。	○淡褐色 ○胎土、焼成良
	皿	CⅡ	H 554	口径 9.65 器高 2.8	○体部はゆるやかに内彎し、口縁部は少し外反し、端部を丸くおさめる。	○粘土板成形。 ○内外面に指押え。	○茶褐色 ○胎土、焼成良
黒色土器	椀	B	B 555 B 556	B 555 口径 15.4 器高 5.9 高台 0.65 底径 6.1 B 556 口径 14.6	○体部は大きく内彎し、端部は鋭い。 ○口縁内側に沈線。 ○断面逆台形の高台、やや外反する。	○粘土紐巻き上げ。 ○貼り付け高台、貼り付け後ナデ。 ○内面にナデのあと斜方向の粗いへラミガキ、口縁内外に横方向のへラミガキ。	○淡黄褐色 ○内面と外上面に炭素吸着 ○胎土、焼成良
			B 557	高台 0.7 底径 5.6	○断面逆台形の高台、やや内反する。	○貼り付け高台、貼り付け後ナデ、一部へラミガキ。	○内面黒色、外面淡褐色 ○胎土、焼成良
			B 558	高台 0.65 底径 5.5	○断面三角形の高台。	○貼り付け高台、貼り付け後ナデ、一部へラミガキ。	○内面黒色、外面淡褐色 ○胎土、焼成良
			B 559	高台 0.65 底径 5.8	○断面逆台形の高台、やや外反する。	○貼り付け高台、貼り付け後ナデ。	○内面黒色、外面淡赤褐色 ○胎土、焼成良

B区　P 1 出土土器

器種	器形		図版番号	法量(cm)	形態の特徴	成形手法の特徴	備考
土師器	皿	B	H 560	口径 8.2	○体部は大きく内彎し、	○粘土板成形。	○淡赤褐色

器種	器形		図版番号	法量(cm)	形態の特徴	成形手法の特徴	備考
土師器	皿	B		器高 1.45	端部は鋭い。底部は丸底。	○口縁部ナデ。	○胎土、焼成良

B区 SK23出土土器

器種	器形		図版番号	法量(cm)	形態の特徴	成形手法の特徴	備考
土師器	椀	A	H 561	口径 15.4	○体部は、ゆるやかに内彎し、口縁端部は少し外反、丸くおさめる。 ○口縁内側に沈線。	○粘土紐巻き上げ。 ○口縁内外面、横方向のヘラミガキ。	○淡灰褐色 ○胎土、焼成良
			H 562	高台 0.8 底径 6.1	○断面逆台形の大きな高台、下端外面を斜めに削る。	○内面底部に縦のヘラミガキ。 ○貼り付け高台、貼り付け後ナデ、一部ヘラミガキ。	○灰褐色 ○胎土、焼成良
黒色土器	椀		B 563	高台 0.6 底径 5.3	○断面三角形の高台、やや外反する。	○貼り付け高台、貼り付け後ナデ。	○内外面黒色 ○胎土、焼成良
			B 564	高台 0.5 底径 5.8	○断面逆台形の高台、下端外面が斜めに削られる。	○貼り付け高台、貼り付け後ナデ、ヘラミガキ。 ○底部縦のヘラミガキ。	○内面黒色、外面黒褐色 ○胎土、焼成良

B区 SK18出土土器

器種	器形		図版番号	法量(cm)	形態の特徴	成形手法の特徴	備考
黒色土器	椀	C	B 565	口径 13.8 器高 4.3 高台 0.4 底径 5.4	○体部はゆるやかに内彎し、口縁端部を丸くおさめる。 ○低い高台は、断面三角形を呈し、外方に開く。	○体部はゆるやかに内彎し、口縁端部を丸くおさめる。 ○口縁内側に沈線。 ○低い高台は、断面三角形を呈し、外方に開く。	○内面及外面の一部黒色、外面淡黄褐色 ○胎土、焼成良

B区 SK16出土土器

器種	器形		図版番号	法量(cm)	形態の特徴	成形手法の特徴	備考
土師器	椀	(小椀)	B 566	高台 0.7 底径 3.9	○断面逆台形の高台、端部はやや丸い。	○貼り付け高台。	○淡赤灰色 ○胎土、焼成良
			H 567	高台 0.5 底径 5.4	○断面逆台形の高台、やや外傾する。	○貼り付け高台、貼り付け後ナデ。	○淡黄褐色 ○胎土、焼成良

B区　SK12出土土器

器種	器形		図版番号	法量(cm)	形態の特徴	成形手法の特徴	備考
土師器	椀		H 568 ～ H 570	高台0.55～0.85 底径 5.2～6.2	○逆台形状のぶ厚い高台、端部は丸くおさめる。 ○体部はゆるやかに内彎。	○貼り付け高台、貼り付け後ナデ、一部ヘラミガキ。	○淡褐色 ○胎土、焼成良
			H 571	高台 0.55 底径 4.9	○断面逆台形の高台、やや内反する。	○貼り付け高台、貼り付け後ナデ、一部ヘラミガキ。	○灰褐色 ○胎土、焼成良
黒色土器	椀	(小椀)	B 572	高台 0.55 底径 5.4	○断面逆台形の高台。	○貼り付け高台、貼り付け後ナデ、一部ヘラミガキ。	○内外面黒色 ○胎土、焼成良
		(小椀)	B 573	高台 0.5 底径 3.8	○断面三角形の小さな高台。	○貼り付け高台、貼り付け後ナデ。	○内外面黒色 ○胎土、焼成良

B区包含層出土土器

器種	器形		図版番号	法量(cm)	形態の特徴	成形手法の特徴	備考
弥生土器	壷		E 600	底径 4.6	○やや上げ底の底部、体部はゆるやかに内彎する。	○外面指押え。 ○内面ハケ。	○淡褐色 ○胎土、焼成良
須恵器	杯身		C 601	口径 10.8	○たちあがりは、やや外彎しつつ内傾し、受け部は短かく、端部は、丸くおさめる。 ○体部は、ゆるやかに内彎。	○内外面横ナデ。	○淡灰色 ○胎土、焼成良
土師器	椀	A(小椀)	H 602	口径 9.6 器高 3.4 高台 0.6 底径 4.3	○体部はゆるやかに内彎し、端部は丸くおさめる。 ○断面逆台形の高台で、やや外傾する。	○粘土紐巻き上げ。 ○外面指押え。 ○貼り付け高台、貼り付け後ナデ、一部ヘラミガキ。	○淡褐色 ○胎土、焼成良
		A	H 603 ～ H 616	口径 13.1～16.2 器高 5.15～5.7 高台0.5～0.8 底径5.0～6.5	○体部は、大きく内彎し、端部は丸くおさめ、内反する。 ○口縁内側に沈線。 ○断面逆台形の高台、やや外反するものと内反するものがある。	○粘土紐巻き上げ。 ○口縁内外面に横位のヘラミガキ、体部内外面に指押えの後、斜方向のヘラミガキ(一部格子状)。 ○内底部、縦方向のヘラミガキ。 ○貼り付け高台、貼り	○淡褐色のものと、灰褐色のものがある ○胎土、焼成良

器種	器形		図版番号	法量(cm)	形態の特徴	成形手法の特徴	備考
						付け後、ナデ、ヘラミガキ。	
土師器	椀	B	H 617 〜 H 623	H 617 口径 15.4 器高 5.9 高台 0.75 底径 5.9 H 618〜623 口径 13.9〜17.8	○体部はゆるやかに内彎し、端部は丸くおさめる。 ○口縁内側に沈線。 ○断面逆台形の高台で、しっかりしたものが多い。	○粘土紐巻き上げ。 ○内外面指押え、大部分は、剥離が激しいが、H 617は、Aと同じく口縁内外に横位の、体部内外に斜方向の、内底部に縦方向のヘラミガキを施す。 ○貼り付け高台、貼り付後ナデ、ヘラミガキ。	○淡褐色、灰褐色 ○胎土、焼成良
		C	H 624 〜 H 627	H 624 口径 14.8 H 625 口径 15.2 H 626 口径 14.5 H 627 口径 14.9	○体部はゆるやかに内彎し、端部を丸くおさめる。 ○口縁内側に沈線。 ○口径は大きく、器高は低い。	○粘土紐巻き上げ。 ○外面指押え。	○淡褐色 ○胎土、焼成良
		D	H 628 〜 H 630	H 628 口径 16.7 H 629 口径 16.8 H 630 口径 14.6	○体部はゆるやかに内彎し、口縁部がやや外反、端部を丸くおさめる。 ○口縁内側に沈線。 ○低い器高。	○粘土紐巻き上げ。 ○口縁外面　横方向のヘラミガキ。	○淡褐色 ○胎土、焼成良
			H 631 〜 H 639	高台0.5〜1.15 底径54〜6.5	○断面逆台形の端正な高台、ややぶ厚いものもある。	○貼り付け高台で、貼り付け後ナデ、一部ヘラミガキ。	○淡褐色 ○胎土、焼成良
			H 640 〜 H 649	高台0.5〜0.7 底径5.3〜6.8	○断面逆三角形の高台、端部のやや丸いものもある。	○体部　下半指押え。 ○貼り付け高台、貼り付け後ナデ、一部ヘラミガキ。	○淡褐色 ○胎土、焼成良
			H 650 〜 H 668	高台 0.45〜0.8 底径5.2〜7.2	○断面逆台形で、やや外傾する高台、やや内反するものと、端部を丸くおさめるものがある。	○貼り付け高台、貼り付け後ナデ、一部ヘラミガキ。	○淡褐色 ○胎土、焼成良
	脚付皿	A	H 669	底径 5.5	○高い脚台、外方に直線的に開く、端部は丸くおさめる。	○内外面ナデ。	○淡褐色 ○胎土、焼成良
		B	H 670	底径 7.7	○高い脚台、やや内彎	○内外面ナデ。	○淡褐色

器種	器形		図版番号	法量(cm)	形態の特徴	成形手法の特徴	備考
土師器	脚付皿	B			し、端部は丸くおさめる。		○胎土、焼成良
	皿	AⅠ	H 671 ～ H 674	口径 13.8～18.3 器高 2.55 （H 672）	○体部はゆるやかに内彎し、口縁部は少し外反し、端部を丸くおさめる。 ○体部・底部の境界は不明瞭。	○粘土板成形。 ○内外面に指押え。	○淡灰褐色 ○胎土、焼成良
		AⅡ	H 675	口径 10.6	○体部は直線的にのび、口縁部はやや内反し、端部は丸くおさめる。	○粘土板成形。 ○内面指押え。	○灰褐色 ○胎土、焼成良
		B	H 676 ～ H 678	口径9.1～9.4 器高1.3～1.8	○底部は丸底で体部はゆるやかに内彎、端部を丸くおさめる。端部の外反するものもある。	○粘土板成形。 ○内外面指押え、口縁外面にナデ。	○淡褐色 ○胎土、焼成良
		C	H 679 ～ H 681	口径 10.1～10.4 器高 1.7～2.15	○平底で、体部はゆるやかに内彎口縁部が外反する。	○粘土板成形。 ○内外面指押え。	○淡褐色 ○胎土、焼成良
		E	H 682	口径 4.7 器高 1.5	○小型のぶ厚い手づくねの皿。 ○平底で、体部は直線的にのびる。	○粘土板成形。 ○外面指押え。	○淡灰褐色 ○胎土、焼成良
	堝	A	H 683	口径 23.8 器高 10.1	○平底で、体部は直線的に立ち上がる。 ○口縁部は「く」字に外反し、端部を丸くおさめる。	○粘土紐つみ上げ。 ○体部内外面指押え。 ○口縁内外ナデ。 ○体部内面ハケ。	○茶褐色、外面にススス付着 ○胎土、焼成良
		B	H 684	口径 25.6	○体部はゆるやかに内彎し、口縁部は外反、端部を丸くおさめる。	○粘土紐つみあげ。	○淡褐色 ○胎土、焼成良
			H 685		○三足堝の脚破片か。 ○断面円形で、やや内彎。	○外面指押え。	○灰白色　外面にススス付着 ○胎土、焼成良
	羽釜	A	H 686 H 687	H 686 口径 22.5	○口縁部は内傾し、端部は方形を呈する。 ○つばは、断面三角形で端部を丸くおさめ	○粘土紐つみ上げ。 ○口縁部内外ナデ。 ○体部内面ハケ。	○茶褐色 ○胎土、焼成良

器種	器形		図版番号	法量(cm)	形態の特徴	成形手法の特徴	備考
					る。		
	羽釜	B	H 688	口径 26.2	○口縁部は直立し、端部方形。 ○つばはやや長く、端部は下方にのび、丸くおさめる。	○粘土紐つみ上げ。 ○口縁内外ナデ。 ○体部内面ハケ。	○灰褐色 ○胎土、焼成良
黒		A（小塊）	B 689	口径 9.9 器高 3.4 高台 0.35 底径 3.6	○体部内彎し、端部を丸くおさめる。 ○口縁内側に沈線。 ○断面逆台形の低い高台で、やや内反する。	○粘土紐巻き上げ。 ○口縁内外に横方向の、体部に斜方向の、内底部に縦方向のヘラミガキ。 ○貼り付け高台、貼り付け後ナデ、ヘラミガキ。	○小型品 ○内外面黒色 ○胎土、焼成良
色土器	椀	A	B 690 〜 B 704	口径 13.8〜16.4 器高 5.2〜6.1 高台 0.6〜0.75 底径 5.55〜7.0	○体部は内彎し、端部は丸くおさめる。 ○口縁内側に沈線。 ○断面逆台形で、安定した高台をもつ。	○粘土紐巻き上げ。 ○口縁内外、横方向のヘラミガキ。 ○体部に斜方向のナデないし粗いヘラミガキ、指押え。	○外面の一部及内面黒色外面淡褐色 ○胎土、焼成良
		B	B 705 〜 B 711	口径 14.9〜16.0 器高 5.25〜5.85 高台 0.45〜0.6 底径 5.6〜6.2	○体部は内彎し、口縁部が少し外反、端部を丸くおさめる。 ○口縁内側に沈線。 ○断面逆台形の高台、やや外傾するものが多い。	○粘土紐巻き上げ。 ○剥離したものが多いが、B 708 などにはナデの後、口縁内外に横方向、体部に斜方向のヘラミガキが施される。 ○貼り付け高台、貼り付け後、ナデ。	○外面一部および内面黒色、外面淡褐色 ○胎土、焼成良
		C	B 712 〜 B 717	B 712 口径 15.8 器高 5.5 高台 0.5 底径 5.8 B 713〜717 口径13.9〜15.6	○体部はゆるやかに内彎し、端部を丸くおさめる。 ○口縁内側に沈線。 ○断面三角形の低い高台。	○粘土紐巻き上げ。 ○体部内面に粗い斜方向のヘラミガキ。外面指押え。 ○貼り付け高台、貼り付け後、ヘラミガキ、ナデ。	○内面および外面の一部黒色、外面淡褐色 ○胎土、焼成良
		D	B 718 〜 B 722	B 718 口径 16.8 器高 4.85 高台 0.6 底径 6.0 B 719〜722 口径 13.9〜15.5	○体部はゆるやかに内彎し、口縁部はやや外反、端部を丸くおさめる。 ○口縁内側に沈線。 ○断面逆台形の安定した高台。	○粘土紐巻き上げ。 ○内外面指押え、体部内面一部斜方向のヘラミガキ。 ○貼り付け高台、貼り付け後ナデ。	○内面および外面の一部黒色、外面淡褐色 ○胎土、焼成良

器種	器形		図版番号	法量(cm)	形態の特徴	成形手法の特徴	備考
黒色土器	椀		B 723 〜 B 739	高台0.5〜0.7 底径4.4〜7.7	○断面逆台形の安定した高台。	○内面縦のヘラミガキ。 ○貼り付け高台、貼り付け後ナデ、一部ヘラミガキ。	○内面黒色、外面淡褐色、B 729、B 732、B 737 内外面黒色 ○胎土、焼成良
			B 740 〜 B 758	高台0.4〜0.7 底径5.1〜6.2	○断面三角形の高台、端部の丸いものもある。	○内面ヘラミガキ。 ○貼り付け高台、貼り付け後ナデ、一部ヘラミガキ。	○内面黒色、外面淡褐色、B 749、内外面黒色 ○胎土、焼成良
			B 759 〜 B 776	高台 0.45〜0.85 底径 4.95〜6.7	○断面逆台形の高台、全体にやや外傾する。	○内面粗いヘラミガキ。 ○貼り付け高台、貼り付け後ナデ、一部ヘラミガキ。	○内面黒色、外面淡褐色、B 765 内外面黒色 ○胎土、焼成良
	脚付皿	A	B 777	脚 2.15 底径 5.45	○高い脚台、外方にゆるやかに開き、直線的にのびる。	○貼り付け高台、貼り付け後、内外面ナデ。	○内面黒色、外面淡黄褐色 ○胎土、焼成良
	皿	AⅠ	B 778	口径 15.5 器高 2.4	○平底で、体部は直線的にのび端部はやや外反する。 ○体部・底部の境界は一応明瞭である。	○粘土板成形。 ○口縁内外面にナデ。 ○外面に指押え痕。	○内面および外面の一部黒色 ○胎土、焼成良
		CⅡ	B 779 〜 B 781	口径 9.0〜10.0 器高 1.4〜2.05	○底部は平底ないし、ゆるやかな丸底を呈し、口縁はゆるやかに外反する。	○粘土板成形。 ○内面、外面ナデ、一部ヘラミガキ。	○内外面黒色 ○胎土、焼成良
	羽釜	A	B 782	口径 21.4	○口縁部は短かく、内傾して立ち上がる。 ○つばは長く水平にのび端部を丸くおさめる。	○粘土紐つみ上げ。 ○体部内面ハケ、口縁部内面指押え。	○黒褐色、外面スス付着 ○胎土不良、焼成良
		B	B 783	口径 18.2	○口縁部は短かく立ち上がる。 ○つばは水平にのび、端部を丸くおさめる。	○粘土紐つみ上げ。 ○体部内面ハケ、外面ナデ。	○内外面黒色、外面スス付着、瓦質か? ○胎土、焼成良
須恵器	椀	B	C 784	高台 1.0 底径 7.8	○高台は外下方に直線的に開き、端部は丸くおさめる。	○貼り付け高台、糸切り底。 ○内外面ナデ。	○灰白色 ○胎土、焼成良
		C	C 785 C 786	高台 0.8 底径 7.4	○体部はゆるやかに内彎する。	○糸切り底。 ○貼り付け高台。	○淡茶褐色 ○胎土、焼成良

器種	器形		図版番号	法量(cm)	形態の特徴	成形手法の特徴	備考
須恵器	椀				○高台は低く、断面逆三角形を呈する。	○内外面ナデ。	○山茶椀か？
	椀	D	C 787	高台 0.65 底径 7.8	○断面逆台形の高台で、やや外下方にのびる。 ○体部はゆるやかに内彎する。	○糸切り底。 ○貼り付け高台。 ○内外面ナデ。	○灰白色 ○胎土、焼成良
	鉢		C 788	底径 11.2	○平底で体部は直線的に斜方向にのびる。	○糸切り底か。 ○内外面ナデ。	○灰色 ○胎土、焼成良
	壷		C 789	高台 1.0 底径 12.4	○高台は外下方にのび、端部内面を斜めにけずる。	○貼り付け高台。 ○内外面ナデ。	○灰色、一部自然釉 ○胎土、焼成良
緑釉	椀		G 790	高台 0.75 底径 7.2	○断面逆三角形の高台、やや下外方にのびる、外面ヘラ沈線。 ○底部内面に一条のヘラ沈線。	○貼り付け高台。 ○内外面ナデ。	○黄緑色 ○胎土、焼成良
灰釉	皿		A 791	高台 0.2 底径 4.8	○体部はゆるやかに内彎、端部を丸くおさめる。 ○断面逆三角形の簡単な高台がつく。	○内外面ナデ。 ○削り出し高台。	○黄灰色の釉が全面にかかる ○胎土、焼成良
			A 792	底径 6.2 高台(0.1)	○体部はゆるやかに内彎、端部を丸くおさめる。 ○低い逆台形の高台。	○糸切り底。 ○内外面ナデ。 ○削り出し高台。	○淡灰褐色、薄い釉薬 ○胎土、焼成良
磁器	椀		P 793	高台 0.35 底径 6.5	○低く幅広い高台。 ○体部は直線的にのびる。	○削り出し高台。 ○内外面ナデ。	○青灰色の釉を全面にかける(青磁？) ○胎土、焼成良
陶器	鉢		K 794 K 795	K 794 底径 11.0 K 795 底径 16.0	○平底で、体部は外彎ぎみにひらく。	○粘土紐つみ上げ。 ○内外面ナデ。 ○内面に指押え。	○淡赤褐色 ○胎土、焼成良 ○信楽か？
			K 796	口径 29.0	○体部はやや内彎し、端部は外反する。	○粘土紐つみ上げ。 ○内外面ナデ。	○淡赤褐色 ○胎土、焼成良
	土錘		H 797	直径 3.2 長さ 5.4	○円柱状を呈する、中ぶくれ。	○手づくね。	○淡灰白色 ○胎土、焼成良

C区　SD10 出土土器

器　形	図版番号	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	成形手法の特徴	備　考
杯　蓋　A	C 801 ～ C 807	口径 9.8 ～ 13.8	ツマミを持たない立上がりのある杯身とセットになる杯蓋。 C 802 をのぞいて天井部と体部、体部と口縁部の境界はおおむね不明瞭で屈曲はいずれも甘い。C 807 のように天井部から体部へまったく屈曲せずなだらかに外下方へ流れるものもある。 口縁部はC 801、C802 C 803 はやや鋭く下方へ下ろすに比して、C 804、C 806 は体部から連続的に外下方へ流れる。C 807 は口縁部を屈曲させて下方へ下ろす。この点からC 807 はむしろ杯蓋B類に入れるべきか。 なお、C 801 は口縁端部に内傾する面をとるが、その他は単純に丸くおさめる。	口縁内外面を横ナデ調整する。 C 804 は天井部頂部をヘラ削り。C 807 はヘラ切り不調整のため粘土紐痕が残る。C 802 はヘラ切りのあとヘラで調整。C 805 は体部外面に墨書するが、体部以下部分的に欠損のため字体不明。	
杯　蓋　B	C 808	口径 10.6	扁平な天井部と口縁部裏面に返りを有す杯部。返りは口縁部より下方に突出する。	器体内外面を横ナデ調整する。	(胎土) 良好 (焼成) 良好 (色調) 淡灰色
杯　蓋　C	C 809 ～ C 811	口径 11.6 ～ 15.2	扁平な天井部及び体部に、やや内向気味に下方に折曲げた口縁部がつく杯蓋。 C 811 は中でも著しく扁平で、器高 1.9 cmである。 なお、口縁内面の屈曲部は篦先で調整したと思われ、鋭い稜線を残す。 C 810 は全体に大きな焼ひずみを受ける。	内外両面を横ナデ調整する。 C 810、C 811 の天井部はヘラ切り不調整で、粘土紐巻上げ痕を残す。	C 810 は $\frac{1}{2}$ 欠損の破片。 いずれも焼成は堅緻。

器　形	図版番号	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	成形手法の特徴	備　　考
杯　蓋　C	C 812 ～ C 815	口径　8.8 ～ 11.2	天井部が比較的高く、椀形を呈す体部に、外下方へ屈曲させた口縁部をつける杯蓋である。口縁の屈曲はまず外方へ水平に近く屈折したあと、再び下方へ折りまげる。C 813、C814の口縁部屈曲は甘く、端部の屈曲は殆ど明瞭でなく、わずかに外面先端を下方へ下ろすのみである。	いずれも内外両面を均しく横ナデ調整する。 C 811の天井部はヘラ切り不調整で粘土紐痕が残る。 C 813の天井部もヘラ切りで調整は粗い。天井部から体部付近の横ナデは一部カキ目状を呈す。天井部内面に仕上げナデを加える。	C 811、C 812の焼きが堅緻なのに比べて、C 813、C 814はやや甘く軟質である。
杯　身　A	C 816	口径 13.9 器高　4.8	口径の大きい、やや深い体部に内傾するものの比較的長く、高い立上がり部が付く杯身。立上がり部は1.2cmを測る。 受部は外上方へ短かくのびる。先端は丸くおさめる。 体部から底部への屈曲は比較的丸味を有し、底部は平坦である。	内外両面を横ナデ調整する。 体部下半は浅くヘラ削りする。 底部はヘラ切り不調整である。	ロクロは時計回りと逆回転 （胎土）良好 （焼成）良好 （色調）明灰色
杯　身　A	C 817 ～ C 820	口径　9.2 ～ 10.6 器高 3cm前後 ～ 3.5cm	やや小型の浅い体部に、内傾は強いものの、まだ比較的長い立上がり部を有す杯身である。 C 816の立上がり部は上端は屈曲してほぼ直立する。先端はいずれも丸くおさめる。 受部は水平もしくは外上方へのび、先端はいずれも丸くおさめる。 C 816の受部上面にはヘラ沈線を一条がめぐる。 体、底部は丸く成形する。C 818の体部の器壁は薄い。	内外両面を横ナデ調整する。 C 817は体部下半をヘラ削り。底部はヘラ切り不調整。	
杯　身　A	C 821 ～ C 823	口径 10.8 ～ 12.8	極度に内傾する低い短かい立上がり部の杯身。 C 821の立上がり部は	内外両面を横ナデ調整する。	色調は淡灰色～淡灰青色を呈す。

器　形	図版番号	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	成形手法の特徴	備　　考
			断面三角形状の厚いもの。 C 822 の立上がり部先端は上向する。 受部は水平または外上方へ内彎ぎみに短かくのびる。端部は丸くおさめる。 底部は扁平または丸味のあるものである。		
杯　身　A	C 824 〜 C 827	口径　9.0 〜 9.4	口径 9 cmあまりの小型の杯蓋で、短かく低い、強く内傾する立上がりを有する。 受部は水平もしくは内彎ぎみに外上方へ短かくのびる。 底部は中央部が平底となる。	内外面を横ナデ調整する。 底部はヘラ切りである。	C 826 、C 827 は立上がり部先端を欠失。
杯　身　A	C 828 〜 C 829	口径　8.4 〜 8.6	C 824 〜C 827 よりもさらに小型化する杯身で、底部の平底も一段と明瞭でその面も大きい。 なお、立上がり部は内傾するものの先端は上へ持上げている。	器体内外面を横ナデ調整。 底部はいずれもヘラ切りのあと、横ナデ、ナデ、ヘラ先による調整等が見られる。 なお、C 829 底部内面には仕上げナデを加える。	いずれも胎土は精良、焼成は堅緻、色調は灰色を呈す。
杯　身　B	C 830 〜 C 831	口径 12.2 〜 12.4	C 830 はやや不安定ながら大きな平底の面を呈す。体部から口縁部はやや外反気味に外上方へ直線的に開く。 なお、底部から体部へ屈曲は、外面では丸味を有す。 C 831 は体底部の深いもので、底部は完全な安定したもので、体部との屈曲も角を持つ鋭いものである。 体部から口縁部はわずかに内彎気味に外上方へ直線的にのびる。	C 830 器体内外面を横ナデ調整する。口縁部と底部にはその上から雑なナデ調整。底部はヘラ切り。C 831 は底部ヘラ切りのあと器体内外面を横ナデ調整。 C 830 、C 831 とも底部底面に粘土紐巻上げ痕が残る。	C 831 の底部底面に「至」の墨書がある。色調はともに灰色で焼成は堅緻。

器　形	図版番号	法量(cm)	形態の特徴	成形手法の特徴	備　考
杯身C	C 832	底径 9.0 高台径 8.4	安定した平底の底部外縁よりに、外下方にやや踏んばった短かい高台がつく。高台は内先端で接地する。 体部と底部は明瞭な角で分けられる。	器体内外面を横ナデ調整。	(胎土) 良好 (焼成) 堅緻 (色調) 灰色
埦	C 833	口径 10.6	肩が少し張る浅い体底部に、外上方へまっすぐのびる口縁部が連続する。	内外面を横ナデ調整。	
高杯A	C 834	口径 9.6	比較的小型の無蓋高杯。体部と底部の境に凹線を一条めぐらせる。	内外面横ナデ。	
壷	C 835	口径 11.4	口縁部は外上方へ直線的にのび、頸部は鋭く屈曲して「く」字状を呈す。肩部は強く張り出す。	口縁部外面横ナデ調整。体部内面には同心円の圧痕が残る。	口縁部内面に自然釉が吹きだす。
壷	C 836	底径 10.0	体部中上位に最大径があり、やや肩の張った器形で、底部は完全な平底を呈す。	内外面を横ナデ調整する。体部下端に一条の凹線を走らす。	器体内面には多くの気泡があって凹凸が著しい。 外面全体に自然釉付着。
長頸壷	C 837		細長い頸部の下端は厚いが、上方へのびるにつれて器壁は薄くなる。肩部は頸部下端から外方へ大きく張り出す。	頸部下端内面を横方向にヘラケズリ。頸部中位の外面に凹線を一条めぐらす。内外面横ナデ調整。	
提瓶	C 838 〜 C 839	口径 6.4 〜 7.8	C 838の口縁部は外上方大きく開く。 C 839の口縁部はやや内彎気味に外上方へのびる。ともに頸部に近いほど器壁は厚くなる。	C 838中上位と外面に一条の凹線をめぐらす。ともに内外両面を横ナデ調整。	C 838口端には部分的にヒズミが生じている。 焼成は共に堅緻。
甕	C 840	底径 14.2	完全な平底で、体部への屈曲も角を持つ。	内外両面を横ナデ及びナデ調整。 底部はヘラ切り。	内面には気泡が一部にあり、器体にヒズミが生じる。
甕	E 841	口径 7.0	外上方へ大きく反った口縁部は中位で鋭く屈	口縁立上がり部に櫛状工具による刺突列点文	(胎土) やや不良 (焼成) やや不良

器　形	図版番号	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	成形手法の特徴	備　　考
			曲して、内上方へ強く立上がる。口端には内傾する面を有する。 口縁部下半部に小孔を一ケ内から外へ穿つ。	を施す。立上がり部直下に刻目状の圧痕のあるのはハケ目か。口頸部を横ナデまたはナデ調整。	（色調）淡黄灰褐色
甕	E 842	口径 16.8	「く」字状の頸部から外上方へ直線的にのびる口縁部破片。頸部以下欠失。	外面には指圧痕 内面にはハケ目調整痕。	（胎土）良好 （焼成）良好 （色調）赤褐色
甕	H 843	口径 10.8	「く」字状の頸部から短かく外上方へのびる口縁部の先端は内上方へわずかにつまむか。 体部は中位に最大径を有する球形で、底部は丸底である。	体部内外面をハケ目調整したあと、体部下半外面を篦ケズリ、体部上半内面を指ナデ調整する。 口縁部内外面は横ナデ調整。 なお、体部内面のハケ目調整は板状工具で左→右へ掻き上げる。	（胎土）良好 （焼成）良好 （色調）淡灰褐色
杯　A	H 844	口径 13.8 器高 3.2	安定した平坦な底部に外反気味に外上方へのびる体部が付く。口縁部は丸くおさめるが、内面に凹線を一条巡らせるため、端部を折曲げた様態を呈す。	器体内外面を横ナデ調整及びナデ調整する。 器体外面に指頭による圧痕が残る。 体部下端は横にヘラミガキか。	（胎土）精良 （焼成）良好 （色調）淡褐色
杯　B	H 845	口径 11.8 器高 3.3	安定した平坦な底部に内彎気味に上方に強く立上がる。端部は丸くおさめる。	器体外面はナデ調整。 内面は横ナデ調整で仕上げる。 器体外面には指頭圧痕が残る。	（胎土）良好 （焼成）良好 （色調）淡褐色
杯　C	H 846 〜 H 848	口径 13.4 〜 15.2	扁平な丸味のある底部に内彎しつつ外上方にのびる体部、口縁部を有す。端部を丸くおさめるがH 847は内部にわずかな面を形成する。	外面は口縁部を横ナデ調整。体底部は指圧の他には篦ケズリするものがある。（H 897、H 848） 内面は横ナデ調整を施すが、H 846は横ナデの上からハケ目調整を体底部に加える。H 847は縦方向に篦ミガキを加える。	胎土はいずれも精良である。 色調はいずれも淡褐色を呈す。
埦	H 849	口径 13.4	やや内彎気味に外上方	内外面とも指頭圧痕が	（胎土）精良

器　形	図版番号	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	成形手法の特徴	備　　考
			にのびる口縁部、体部の比較的浅い椀。	多数残る。 口縁外面は横ナデ調整か。	（焼成）やや不良 （色調）淡赤褐色
皿　　B	H 850	口径 9.2 器高 2.1	扁平な丸味のある肩から外上方に低くのびる体部、口縁部を有す。 口縁部はやや上方に屈曲する。	外面の口縁部、体部、内面の口縁部には横ナデ調整する。 体部外面に粘土紐痕が残る。	（胎土）良好 （焼成）良好 （色調）外は淡灰褐色、内は淡赤褐色を呈す。
高　　杯	H 851 〜 H 852		脚径 7 cm前後、器高 7〜8 cmの小型で器体のイビツ、粗雑なもの。 脚部は短かい支柱部に内彎する裾部がつくが、部分的には裾部は外反する。	脚部外面は指頭による圧痕のみ。 内面は指頭圧痕及びハケ目調整または板ナデを加える。H 851 には絞り目が残る。	胎土、焼成はいずれも良好。 色調はH 851 は赤褐色、H 852 は淡乳白褐色を呈す。
把　　手	H 853 〜 H 854		H 853 は楕円形のやや厚味のあるもの、把手中央に円孔を穿つ。 H 854 は平面三角形で端部へ大きく彎曲するもの。	いずれも指頭圧痕が多数残るが、本体との付根付近をハケ目調整する。	胎土、焼成とも良好。色調は淡褐色を基調とする。 H 854 は竈の把手と思われるが、上彎する他の器種の把手の可能性も存する。
鉢	K 856	口径 26.4	浅い扁平な体部からやや内屈して上方にのびる口縁部は上端で鋭く屈曲して外方へほぼ水平にのびる。	外面は全体に横ナデ調整。 内面は口縁部のみ横ナデ調整。	（胎土）やや不良 （焼成）良好 （色調）外は淡赤褐色、内は肌色。信楽

C区　出土土器（沼沢地出土土器）

器　形	図版番号	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	成形手法の特徴	備　　考
杯　蓋　A	C 901 〜 C 902	口径 13.4 〜 14.2	扁平な体部と天井部の境界は不明瞭。 口縁部は下方へまっすぐにのび、端部はやや外反ぎみである。このため内側に内傾する面を形成する。	内外面を横ナデ調整。 天井部はヘラ切り不調整。 外面天井部から体部にかけて部分的に手ズレのあとあり。	焼成はいずれも堅緻。 沼沢地出土。
杯　蓋　A	C 903 〜 C 905	口径 9.8 〜 10.4	口径10cm前後の小型。 杯蓋で、天井部、体部のつくりは甘く鋭い。	天井部はいずれもヘラ切り不調整。 但しC 905 は体部への	焼成はいずれも堅緻。 沼沢地出土。

器　　形	図版番号	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	成形手法の特徴	備　　考
			C 903がやや扁平な天井部である他はいずれも丸い。 口縁部は体部下端から下方へおろすが、C905はわずかに外方へ流れる。端部はいずれも丸くおさめる。	転換点付近をごく浅くヘラケズリ。 その他、内外両面を横ナデ調整。C 903天井部内面には仕上げナデを加える。	
杯　蓋　A	C 906 〜 C 907	口径 11.6 〜 12.8	天井部の高い蓋で、体部は外下方へ直線的に下降する。 口縁部は屈曲して下方へまっすぐおりる。C 907の口縁端部はわずかに外反気味である。 端部は丸くおさめる。	内外両面は横ナデ調整。	胎土は精良、焼成は堅緻。 沼沢地出土。
杯　蓋　B	C 908	口径 9.6	天井部から外下方へ直線的にのびる口縁部の端部内面にやや内向する返りを持つ。この返りは口端部より下方へ突出する。	内外両面を横ナデ調整。	（胎土）良好 （焼成）良好 （色調）灰白色 沼沢地出土。
杯　身　A	C 909 〜 C 911	口径 12.2 〜 13.6	口径の比較的大きい杯身である。全体として丸味のあるやや深いものだが、C 911は浅く底部は扁平。 口縁部立上りはいずれも内傾し、端部を丸くおさめるが、C 909の立上りはこのうち比較的高く長い。 受部はほぼ水平に外方へ短かくのび、端部は丸くおさめる。	C 909、C 910の体部転換点付近をヘラケズリ。 あとは内外両面を横ナデ調整。 底部はいずれもヘラ切り、そのあと不調整。	C 909のロクロは時計と反対回り。 C 909、C 911は沼沢地出土。
杯　身　A	C 912 〜 C 914	口径 9.0 〜 10.6	口径の小さい、扁平な浅い体底部。 口縁部立上りはいずれも強く内傾し、低い。 ただC 912は上端でほぼ上方へ立上がる。 受部は彎曲気味に外上方へのびる。	内外両面を横ナデ調整 内面の立上がり接続部はヘラ先で調整して、稜を鋭くする。 C 914の底部はヘラ切り不調整。	胎土、焼成はやや不良。 色調は灰色を基調とする。

器　形	図版番号	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	成形手法の特徴	備　　考
杯　身　A	C 915 〜 C 916	口径 10.0 〜 10.4 器高 3.2	立上がりはさらに強く内傾し、低い。 受部は退化して、やや外方につまむ程度である。 底部はC 915は平坦であるが、C 915は丸い。	底部はいずれもヘラ切り不調整であり、内面に指圧痕が残る。仕上げは内外面を横ナデ調整。C 916の底部の上半を浅くヘラケズリ。	胎土、焼成はともに良好、堅緻である。 沼沢地出土。
杯　身　B	C 917 〜 C 918	口径 12.4 〜 12.8	安定した平底の杯身。 しかし、底部から体部への屈曲は丸味を有する。 体部は外上方へ直線的にのびて口縁端部に至る。 端部は丸くおさめる。	C 918はヘラ切り不調整。仕上げは内外両面とも横ナデ調整。	沼沢地出土。
杯　身　C	C 919 〜 C 921	高台径 8.2 〜 9.8	安定した平底の杯身の底部外縁よりに退化した短かい高台がつくもの。 C 919、C 920の高台はやや外方へ踏んばり気味で内先端で接地するに対して、C 921はほぼ直下へのび、端面全体が接地する。	C 920の体部下端はヘラ削りする。 C 919の底部はヘラ切り不調整。 内外面横ナデ調整。	胎土はいずれも良好。 焼成はいずれも堅緻。 C 920、C 921は沼沢地出土。
高　杯　A	C 922 〜 C 923	口径 10.0 〜 11.2	口径の比較的小さい小型の杯部を持つもの。 体部上、下端にそれぞれ一条の凹線をめぐらせ、口縁部と底部とを区別する。脚部には透しを入れたのが、杯底部に痕跡が入る。	内外両面を横ナデ調整する。	いずれも沼沢地出土。
高　杯　B	C 924		扁平な底部から外上方大きく開く杯部に、背の低い脚部がつく。脚部には透しはない。	器体内外面横ナデ調整。	（胎土）精良 （焼成）堅緻 （色調）灰色 沼沢地出土。
高　杯　C	C 925	口径 17.6	盤状の大きい杯部を有する高杯。	器体内外面を横ナデ調整。 杯底部には不定方向の仕上げナデ。 口縁部には一部縦方向にナデ調整を加える。	（胎土）良好 （焼成）良好 （色調）淡灰色 沼沢地出土。

器　形	図版番号	法量(cm)	形態の特徴	成形手法の特徴	備　考
高杯脚部	C 926	脚径 10.6	裾端部は上、下にわずかに肥厚して、やや窪み気味の面を形成する。	内外両面を横ナデ調整。とくに内面端部近くは強く、カキ目状にナデる。	(胎土) 精良 (焼成) 堅緻 (色調) 青灰色
長頸壷	C 927 〜 C 929	頸部径 5.0 〜 5.8 高台径10.4	C 927 頸部は開きが小さく、口縁部近くで大きく開くもの。 C 928 の頸部は比較的開きが大きく、頸部も短かいものと推定される。 C 928 の肩部には丸味がある。 C 928 はやや小型のものか。 C 929 は長頸壷の底部と思われる。安定した平底の底部外縁に外下方へ強くはりだした高台がつく。高台は内先端で接地する。	器体内外面を横ナデ調整。 C 927 の肩部から頸部にかけて自然釉付着。 C 928 の肩部にハケ目状の調整痕あり。	C 927、C 928 は沼沢地出土。 C 928 は平瓶か。
提瓶	C 930	口径 8.9	強く、短かく開く口縁部。端部は丸くおさめる。	外面を横ナデ調整。 内外両面とも自然釉付着。	(胎土) 良好 (焼成) 良好 (色調) 淡灰色 沼沢地出土。
底部	C 931 〜 C 932		C 931 は底部中央が平坦になる。 C 932 は丸底。	底部内外面横ナデ調整。 C 932 には粘土紐の巻上げ痕が残る。	ともに沼沢地出土。
甕	H 933	口径 22.0	口径20cmをこえる大型品。 「く」字状の頸部から外反した口縁部は上端では屈曲して上方に立上がる。	外面は口端部を横ナデ調整。 内面は口縁及び頸部をハケ目調整。	(胎土) 良好 (焼成) 良好 (色調) 淡赤褐色 沼沢地出土。
壷	H 934	口径 15.2	円筒形の頸部から大きく外反した口縁端部は外傾する面を形成する。	調整不明。	(胎土) やや不明 (焼成) やや不十分 (色調) 淡赤褐色 SD－10出土か。
短頸壷	H 935	口径 11.4	肩部からすぐに口縁部直結する壷。 口縁部はまっすぐ上方にのびる。端部は丸く	肩部内外両面に指頭圧痕が残る。 口縁端部横ナデ調整。	(胎土) 良好 (焼成) 良好 (色調) 淡褐色 沼沢地出土。

器　形	図版番号	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	成形手法の特徴	備　　考
			おさめる。		
底　部	H 936 ～ H 938	底径 5.4 ～ 9.0	いずれも平底であるが、径の大小の二種がある。	H 938 は単にナデまたは横ナデ調整であるが、H 936、H 937 は内外面をハケ目調整。	H 936、H 937 は沼沢地出土。 H 938 はＳＤ－10出土か。 H 936 は甕、H 937、H 938 は壷か。
杯　A	H 939	口径 14.8	やや丸味のある平底の底部に外反する体部がつく。口縁は端部を丸くおさめる。	口縁部内面に一条の凹線をめぐらせる。 外面底部以外は横ナデ調整。 外面底部には指圧痕。	（胎土）良好 （焼成）良好 （色調）茶褐色
杯　A	H 940	口径 12.7 器高 3.9	口縁部折曲げたもの。体部は外上方へ直線的にのびる。底部は安定した平底である。 器表面は指ナデや圧痕で凹凸が著しい。	器面全体を指頭圧を加えたあと、ハケ目調整を内外面とも全面に施す。そのあと横ナデ調整にて仕上げる。	（胎土）良好 （焼成）良好 （色調）基調としては茶褐色であるが、内外とも黒ずんで汚れている。 沼沢地出土。
杯　A	H 941		安定した平底から外上方へ開く体部の杯の口縁部は折曲げるものと思われる。		胎土、焼成とも良好。色調は赤褐色を呈す。沼沢地出土。
杯　C	H 942	口径 12.3	やや丸味のある平坦な底部に内彎気味に外上方へのびる体部、口縁部を有する杯。	内外面をハケ目調整のあと口縁部へ体部を横ナデ調整。	（胎土）良好 （焼成）良好 （色調）茶褐色
把　手	H 943		平面台形の把手。中央部に円孔を穿つ。	把手上面に指圧痕が残り、本体の内面にも指頭圧痕が残る。	（胎土）良好 （焼成）良好 （色調）淡褐色 沼沢地出土。
皿　D	H 944	口径 8.4 器高 1.4	底部は安定した平底。体部は内彎気味に外上方へのび口縁部に至る。	内面に指圧痕が残る。 口縁部外面は横ナデ調整である。	（胎土）良好 （焼成）良好 （色調）茶褐色 沼沢地出土。
椀高台 D	H 945	高台径 5.0	底部の比較的中央部に短かく小さな高台をつける。 高台はやや外反気味に踏んばる。	調整不明	（胎土）良好 （焼成）良好 （色調）茶褐色 沼沢地出土。

器　形	図版番号	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	成形手法の特徴	備　　考
椀高台B	B 946	高台径 4.3	丸味のある底部にやや長めの外下方へ踏んばる高台がつく。 高台端面は丸味を持つ。	高台内外面を横ナデ調整。 内外面媒付着。	（胎土）やや不良 （焼成）良好 黒色土器
椀高台D	B 947	高台径 5.4	丸い底部のほぼ中央に低い、外方に踏んばる高台を貼付ける。	底部内面にヘラミガキ。 内面媒付着。	（胎土）良好 （焼成）良好 （色調）淡赤褐色 黒色土器
ツ　マ　ミ	C 948		中央部がやや窪む扁平なツマミ。	ツマミ天井部全面に淡緑灰色の自然釉が付着。	（胎土）良好 （焼成）良好
椀	P 949	高台径 5.0	底部外縁よりに下方に直向する角ばった高台がつく。 内外面とも体部と底部の境は角を持ち明瞭。内面のそれは段を形成する。	外面は全体に浅くヘラケズリ。 内面の底部、体部に薄い縁灰色の釉薬が塗られている。	（胎土）精良（やや砂ぽくザラつく） （焼成）堅緻 （色調）明灰白色 ベース直上出土。

C区　出土木製品

器　　形		図版番号	特　　徴	備　　考
小形棒状品	A	PW 1 PW 2	○PW1は、全長16.2cmの四角柱状をなすほぼ完形品である。両端に対して中央部をこころもち太くしており、最大幅は1.3cmを計る。いづれの角にも丁寧な面取りを行い、両端には瘤状の突起を作り出している。断面は、偏平な六角形をなしている。 ○PW2は、約半個体分を欠損しているが、PW1同様の製品で、同じく入念な仕上げを施している。 ○残念ながらその用途は定かでないが、紡錘で紡いだ糸を巻子の形に捲きもどす際の大管の様なものだろうか。	
	B	PW 3	全長7.7cmを計る四角柱状品であるが、長軸の端が他端に対して厚く、ともに端部は丸く仕上げている。	
	C	PW 4	○上端を欠損しており、残存長10.9cmである。刀子様工具による、上から下へ向かう断続的な削り出しの痕が顕著である。 ○形態上、現代使用されている箸に似ており、それに類する用途を彷彿させるが、明瞭にそれと断定しうる出土例が皆無に近く、又その起源の定かでない現状では推定の域を出ない。ただヤポニカ種の場合、デンプン質が粘性に富むところから手への付着を避けるため、既に発見例のあるさじを始めこうした箸状のものも多用されたのではないだろうか。	

器　　形	図版番号	特　　徴	備　　考
D	PW 5 ～ PW16	○径1.5～0.7cmの棒状品である。いずれも一端ないしは両端を欠損しており全長は確かではない。残存長の最大のものは24.5cmを計る。 ○残っている端部はaさらに深く削り込んで段を有するもの（PW5）、b尖り気味に削り落としているもの（PW6）、c平坦ないしは平坦に近いもの（PW8～PW16）の3類が認められる。c類の内PW12の端部は4方からやや尖がり気味に面取りを行い、4面を有する。 ○すべてスギの辺材を削り込んで作成したものであり、小枝を利用したものは1例もみあたらない。断続的な削り出しのために加工痕が明瞭なもの（PW10）もみられるが、大多数は上から下へと大きく削り落としてわずかに面をなすのが確認されるに留まる。 ○形態上これらに類似するものが最近県下森浜遺跡から出土している。それでは火鑽臼とともに出土し、端部が摩擦のため丸くなり火を受けて焼けているところから火鑽杵と考えられている。ただ、本例の場合には、いずれの端部にもそうした痕跡が認められない所から新たな別の用途が考えられよう。邪推であるかもしれないが、これらの内の幾例かは、機織の際、滕から送られてくる経糸を整経して綜統へ送る機能をもつ綾棒として利用されたのではないだろうか。	スギ材
斎　　串	PW17 ～ PW21	○いずれも上端を欠損しており、全容は定かではない。現存長が最大のPW17は、18.5cmである。下端は、左右から斜めに切り落として剣先状に尖るもの（PW18、PW19、PW20）と、さらに板目にそって切り落として尖らないもの（PW17、PW21）の小さな相異が認められる。その他、切り欠き、切り掛け等の痕跡は現状では見られない。 ○各地で出土している斎串に比べて、やや厚手であり、加工に鋭利さを欠くが斎串と考えるのが最も妥当であろう。	スギ材他
整　形　板	PW22	○長さ19.5cm幅2.3cmで上端近くに1孔が穿たれている。たぶん紐を通して引っかける機能を果たしたのであろう。 ○中央やや上方から下へ向かう断続的な削痕があり、下端ではこころもち厚さを減じるとともにやや幅を広くする。 ○土器などの製作において、整形の用途に供されたのではないだろうか。	スギ材
木　　端	PW23	○さまざまな角度からの、鋭利な削り落しがみられる。一端が尖っている所から、楔に利用されたのかもしれない。	
蓋	PW24 PW25	○両者ともほぼ半分を欠損しているが、本来は円板状品である。PW24、PW25ともに径は7.2cmを計るが、PW24では中央に1孔が穿たれている。孔には把手用の紐を付けていたのであろう。 ○周縁部は両者とも小刻みに削られ丸くなっているが、段は確認されない。	PW25はスギ材

器　　形	図版番号	特　　徴	備　　考
曲　物　底	PW26 〜 PW31	○欠損例ばかりで全容は明らかでないが、復元直径はいずれも15cm前後と考えられ、画一的である点が注目される。 ○PW30には、若干の線刻がみられる。	
曲　　物	PW32	○SD10開口部から一箇所に散在して露見したものであり、本来同一個体であったと考えられる。PW32、PW33はそれらの内、比較的保存度の良好であった2例である。 ○厚さ0.5〜0.6cmの薄板を曲げ円筒形に作っていたと考えられ、重ね合わせ部は、幅0.8cmの樹皮で綴り合わせている。薄板を曲げるに当たっては、幅0.8cm前後の間隔で縦に走る鋭い線刻が厚さの半分に達する程度に刻み込まれて、曲げるのを容易なものにしている。こうした線刻のある側が内側と考えられ、対する外側には線刻はない。 ○PW32には径0.3cmの円形からなる1孔が確認される。底板に打ち込んだ木釘の跡であろうか。 ○曲物の規模はわからないが、樋の側板として利用されたものであろう。	
盤	PW34	○残存部はわずかであるが、内部をくり抜いて作った盤の一部と考えられる。復元すれば、平面円形ないしは楕円形の器形であろう。内面は加工痕であろうか、それとも使用痕であろうか、さまざまな方向からの直線的な線刻が顕著である。縁外面には、断続的な立ちあがり痕がみとめられる。	
枡　状　品	PW35	○周縁に平坦部を残して内部をくり抜いて作られた精緻な容器である。復元規模の内径は、それぞれ12.1cm×14cm深さ8.5cmで上端をやや開き気味とする。内部底は横に走る加工痕が顕著である。縁の一辺中央には、把手様のものが削り出されており、これらの角をも含めて、いずれの各角も正確な面取りが施されている。 ○ちなみに、復元容積は859.5㎤であった。把手様のものが存在することから、枡以外に縦形杓子のようなものも考えられるが、現状では断定し難い。	
片口付浅鉢	PW36	○復元長径30cm余、高さ11cmの楕円形の浅鉢であり、一方の縁が他方の縁に比して薄いことから、片口部を作り出していたと考えられる。周縁に平坦部を残して、内部をくり抜いて作られている。摩耗が著しく、加工痕は明瞭ではない。	スギ材
浅　　鉢	PW37	○相当大形になることが予想される浅鉢の一部である。周縁に平坦部を残して内部をくり抜いて作られている。摩耗の度合、材質共に片口付浅鉢と同様である。	スギ材
棒　状　品　A	PW38	○全長43.5cm、最大幅2.3cmを計る。全体に摩耗が著しいが、柄にあたる箇所には10数個の抉りが設けられて櫛歯	スギ材

器　　形		図版番号	特　　徴	備　　考
			状を呈している。一方、先端部付近は幅広く、かつ薄く削り込んでいる。柄部の抉りが、握り易くするための工夫であるとすれば、先端部は奈良県纒向遺跡などに類例のみられるような大形の篦として利用されたのではないだろうか。	
	B	ＰＷ39	○スギの辺材を削り込んで棒状にしたものである。遺存する一端は、両側から削り落として偏平とし、中央部にはその偏平な面に対して斜めに１孔が穿たれている。	スギ材
	C	ＰＷ40	○ＰＷ39に同じく、スギの辺材を削り込んで棒状にしたものをさらに半截した半円形の棒状品である。両端をいずれも欠損しているが、仮にそれらの両端に頭部が作り出されていれば、機織具の綾棒として使用された可能性が指摘されよう。	スギ材
柄		ＰＷ41 ～ ＰＷ45	○ＰＷ41は丸木を半截し、握り部はさらに断面を四角形に削り込んでいる。握り部上端には、円孔と、小形のノミを使用したと思われるやや大きい角孔の２孔が穿たれ、引っかける機能を果たしていたと考えられる。欠損部にはおそらく小さく匙様のものがついていたと思われる。 ○ＰＷ42とＰＷ43は、材質は異なるが、同じく辺材を削り込んで作り出した柄様の部分である。ＰＷ42は握り部を太くし、欠損部へ向かうに従って細くなり、かつ反りをみせる。ＰＷ43は上端に小さく尖起部が見られ、全体に角柱状に仕上げたものであるが、下端に向かうに従いやや厚みが加わっている。欠損部にはＰＷ41同様の匙様のものがついていたのであろう。 ○ＰＷ44、ＰＷ45は長くまっすぐな円柱状をなす。ＰＷ44は丸木を利用したものであるが、ＰＷ45は辺材を削り込んで柄となしている。ＰＷ44の一端は火を受けて焼けている。ＰＷ45はＰＷ42と同じ堅緻な材質である。鍬などの柄に供されたものであろう。	ＰＷ43はスギ材
機　織　具		ＰＷ46 ＰＷ47	○ＰＷ46、ＰＷ47の両者はともに長さ10cm弱の把部を保つ。ＰＷ46は材質・作りとも緻密で断面はややいびつな梯形をなす。上面には把部より15cm前後入った所から数次にわたる大きな削痕が認められ、最も薄くなった箇所で折れて欠損している。加工時本来のものか、二次的なものであるかは定かでない。 ○ＰＷ46は機織具の榎・綜棒などが考えられるが、綜棒と考えた場合、綜糸を定着させるのに必要な溝、ないしはそれに類するものがみられない。ＰＷ47は、滕あるいは中世に中筒とよばれた板状具の用途が考えられるが、中筒と考えた場合、経糸の擦痕がみられない。	ＰＷ47はスギ材
丸　木　弓		ＰＷ48 ～ ＰＷ51	○いずれも丸木のままの両端に弭を削り出して作られた丸木弓であり、弓身の１側を断続的に削剥して撓みを調整している。しかし、その規模、弭の形態、および弓身の	

器　　形		図版番号	特　　徴	備　　考
丸　木　弓			削剥が施されている側面からみて、２類が考えられる。 ○ＰＷ48、ＰＷ49は比較的小形の弓である。末弭部のわずかを欠損する形で出土したＰＷ48は径２cm前後、現存長93.5cm、復元長１ｍ前後を計ると想定される。弭は若干の切り込みからなり、又、削剥は弓身の背側、つまり弭を作り出した反対側にみられる。ＰＷ50、ＰＷ51は、それぞれ径4cm前後、3.5cm前後を計り、登呂遺跡や唐古遺跡の類例からみて、６尺（２ｍ）ないし７尺（2.3ｍ）前後の長弓と想定されよう。弭は、四方から削り落とし、結果的に本弭先端は先細りとなる。削剥は弓身の腹側にみられる。以上にみられる相異は、用途とそれをもたらす機能上の相異に起因するのであろう。 ○ＰＷ48、ＰＷ51では本弭部に弦の圧痕が明瞭に確認される。 ○ＰＷ48では弓柄に関する何らの痕跡も見いだせない。	
丸　木　杭		ＰＷ52 ～ ＰＷ56	○いずれも上端を欠損しているが、簡易な丸木杭である。ＰＷ52、ＰＷ53、ＰＷ54、ＰＷ56は先端を一面から、ＰＷ55は二面から、それぞれ斜めに削り落として尖らせている。ＰＷ53、ＰＷ55は樹皮の残存がみられ、ＰＷ53では一部火を受けて焼けた箇所がみられる。 ○ＰＷ56は他の杭と材質・規模共に異なり、同じく杭ではあるが他とは異なる用途に利用されたのであろう。	
田下駄	下駄型田下駄	ＰＷ57	○全長42.0cm、最大幅14.5cm、厚さ1.2cm。前緒孔が２孔、横緒孔が左右に一孔ずつ穿たれている。前緒孔は、心もち左への片よせがみられる。前緒孔が２孔存在するのは、田面に密着する面積が広いこうした田下駄の場合、特に前緒には相当の力が加わることが予想され、それに対処するためであろう。 ○前端部には、断続的な削り落としがみられ、後端の一部には、幅0.7cm前後の切りかけがみられる。比較的大形の曲物蓋を二次的に利用した結果であろうか。ともかく、こうして後端部左側が湾曲している点は、これに右足をのせて歩行するに際して田下駄どうしがぶつかるのを防ぐ効果を果たしたであろう。 ○その他、一部に線刻がみられ、数カ所で火を受けて焼けているのが留意される。 ○裏面は摩耗が著しい。	スギ材
		ＰＷ59	○全長19.0cm、幅8.6cm、厚さ1.0cm。緒孔が３孔穿たれており、前緒孔にやや左への片よせがみられる。ＰＷ57同様、右足にはいたのであろう。ただ、各鼻緒間が狭すぎ、とりわけ横緒間は5.5cmしかなく大人の使用は不可能である。小児用とするのが妥当であろう。 ○前後両端とも、ＰＷ57の一部にみられたような切りかけがみられる。同じく曲物蓋の二次利用であろうか、それとも枠のようなものを取り付けていたのであろうか。類	スギ材 通常、下駄型田下駄という場合には、ＰＷ57のように下駄に比べて縦も横も一まわり大きいものをいう。ただ下駄型田下駄、

器形		図版番号	特徴	備考
田下駄			例が現在の日本各地に若干知られ、イネカリゲタないしイタデタと称されて、稲刈り以外にも踏鋤、あるいは畑地で利用されている。 ○裏面は摩耗が著しい。	枠型・輪樏型田下駄(太足)、板型田下駄(ナンバ)の大きく3様に類型化する場合には、下駄型田下駄の範疇に属するとしてよいであろう。
	枠型・輪樏型田下駄(大足)	PW58	○長さ41.9cm、幅9.7cm、厚さ1.5cmの中央には、足との固定を意図した鼻緒が3孔穿たれている。 ○他の田下駄と違い、前緒孔に古代下駄に通有の片よせがみられない。緒には、今日各地で使われているように、稲藁を横槌で柔かく打ち縄に編んだものが使用されていたであろう。 ○前後両端近くには、静岡県山木遺跡出土のものと同様、V字形の抉りがあり、裏面3カ所で確認される棒状圧痕との関連から、篠竹かソダなどを利用した枠をとりつけていたと考えられる。枠には取り縄がつけられて歩行を補助するよう考慮されていたであろう。 ○この大足も、他の田下駄同様、入手し易く、加工し易くかつ軽いスギが選ばれているのは注目される。	スギ材
有孔板状品		PW60 〜 PW65	○PW60は中央に1孔、PW61は中央と斜め上端に各1孔穿たれている。両者とも、約半個体分を欠損しているが、田下駄の可能性を残すものである。 ○PW62は、全体で11孔穿たれ、内3孔は未貫通である。上端は尖るようである。 ○PW63は、1側辺に対称的な2孔があり、表面には側辺の2孔をずらすようにやや偏して新たに2孔が穿たれている。側面のそれは、いずれも1.5cm前後内へ入って止まっている。一孔には木釘が打ち込まれていた。側込には本来、別の板材が木釘で結合されていたのであろうか。両端はいずれも斜めに切り落とされて梯形をなし、表面には手斧用工具による削痕がみられる。材質は堅緻である。 ○PW64は側辺に1孔が穿たれている。1端が断続的に削り込まれて薄くなっている。 ○PW65は、摩耗が著しいが、3孔が確認される。曲物の周囲に捲き、これを締め固める用途をもったタガの様なものだろうか。	PW60、PW61、PW62、PW64、PW65はスギ材
板状品		PW66 PW67	○PW66は上端を山形に尖らせ、下端を丸く削り落としている。形態上斎串に似ているが、加工が荒く、材質が異なり、規模もやや大きい。 ○PW67は遺存が良好であるが、加工痕がみあたらない。	
建築資材等		PW69	○PW69は、伐採した原材を手斧用様工具で切り削った角	スギ材

器　　形	図版番号	特　　徴	備　　考
	～ ＰＷ77	杭の可能性がある。先端は、一部を残し二面の削り落としがみられる。 ○ＰＷ74は、板目にそって当り幅７～８cmの比較的大型の手斧様工具による削痕が顕著である。 ○ＰＷ75は、両端をそれぞれ、長さ13cm、幅６cmと長さ12cm、幅6.5cmに削り出し把手部を形成している。 ○ＰＷ76は、１側辺に3.5×3.0cmの枘穴を設けている。鉄製利器の活用は、枘、枘孔材の技術を発展させ、住居等の建築に際して、かなり複雑な施設を実現させるに至っていたであろう。 ○全体に摩耗、欠損が著しく、原形を復元するのは困難である。	

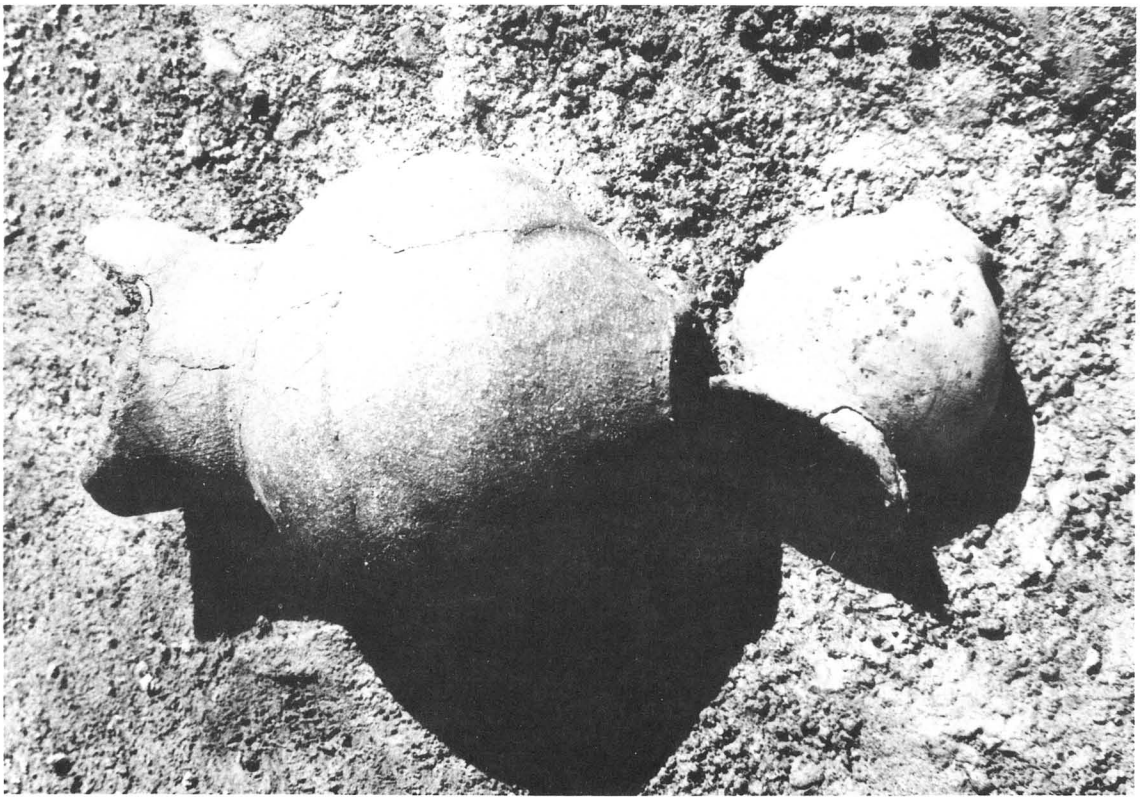
図　　版

A区全景

A7Sトレンチ　SD2（右）およびSD3（左）検出状況（北から）

A－8・9トレンチ　SD1～SD7検出状況（西から）

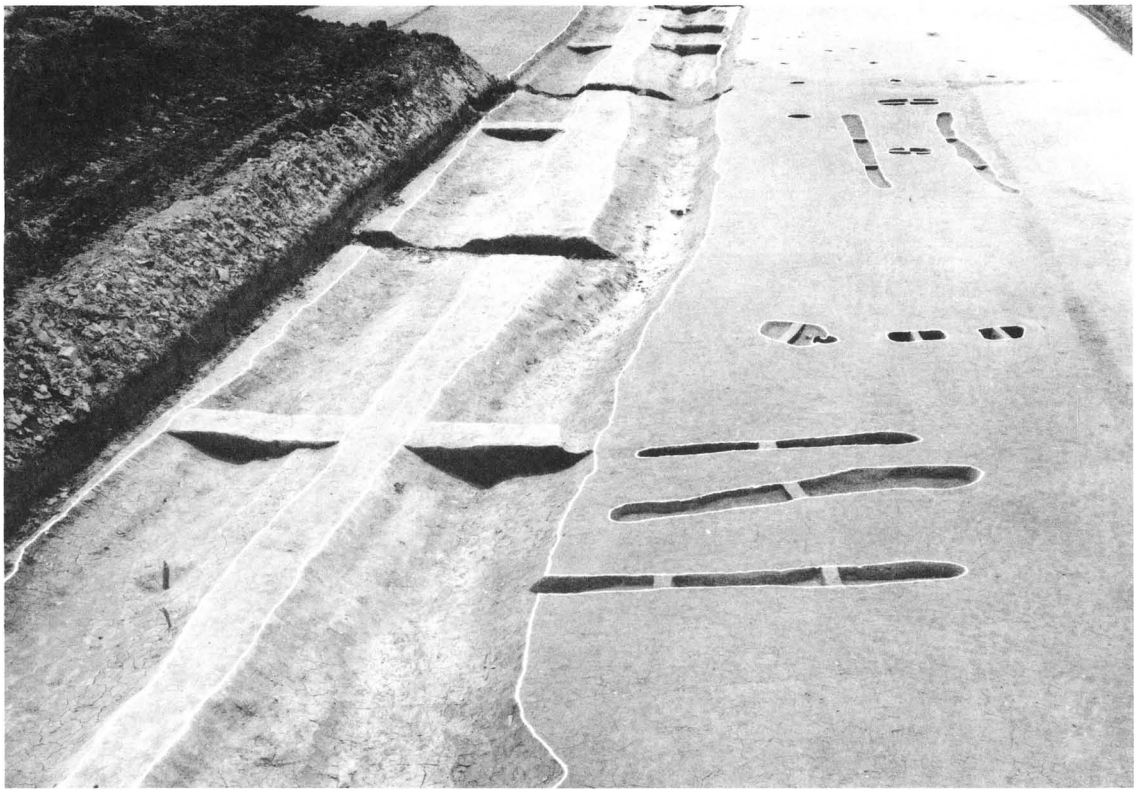
A－8・9トレンチ　SD2検出状況（南から）



Ａ８トレンチ　ＳＤ２土器出土状況

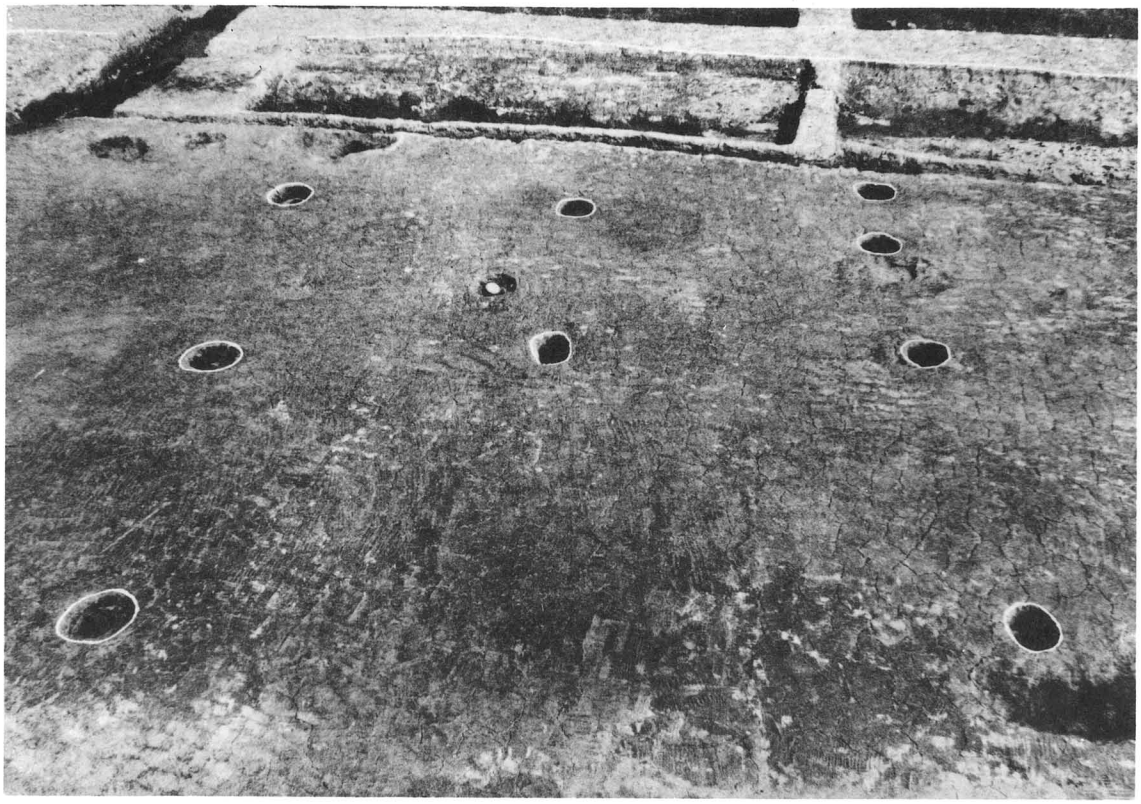
Ａ７トレンチ　ＳＢ１検出状況（西から）

B区調査前全景（西から）

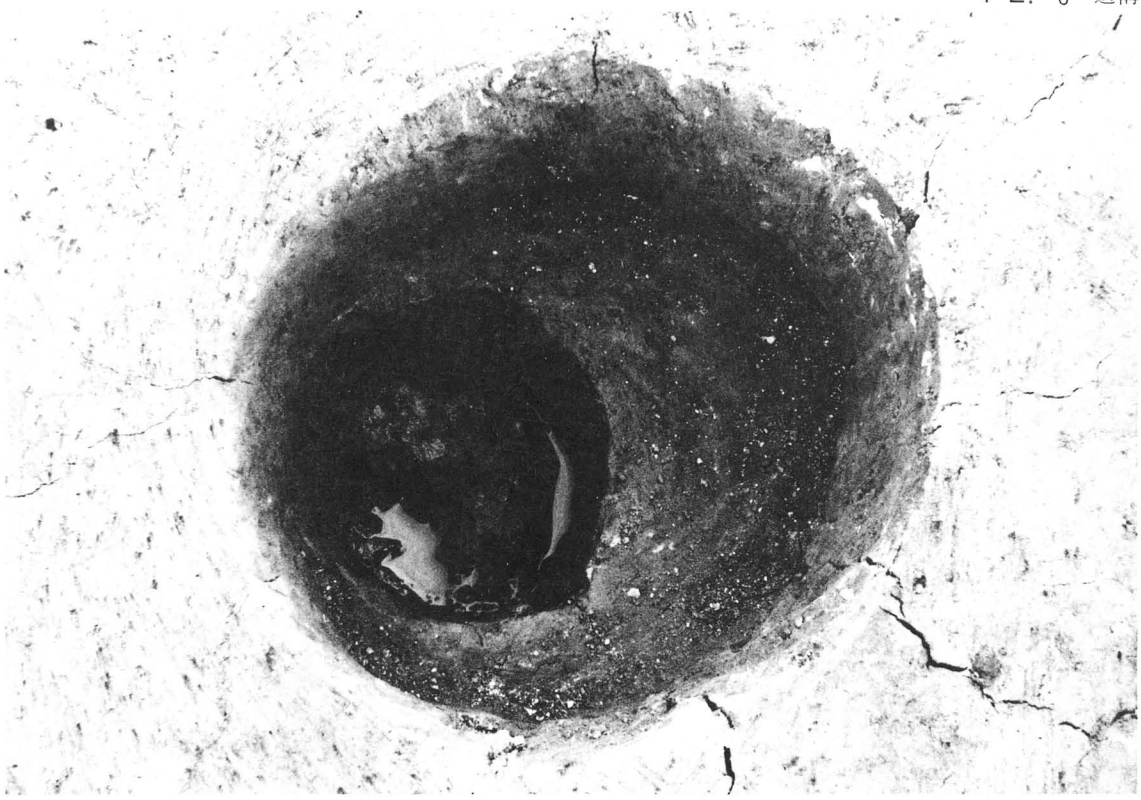


Ｂ１トレンチ遺構全景（東から）

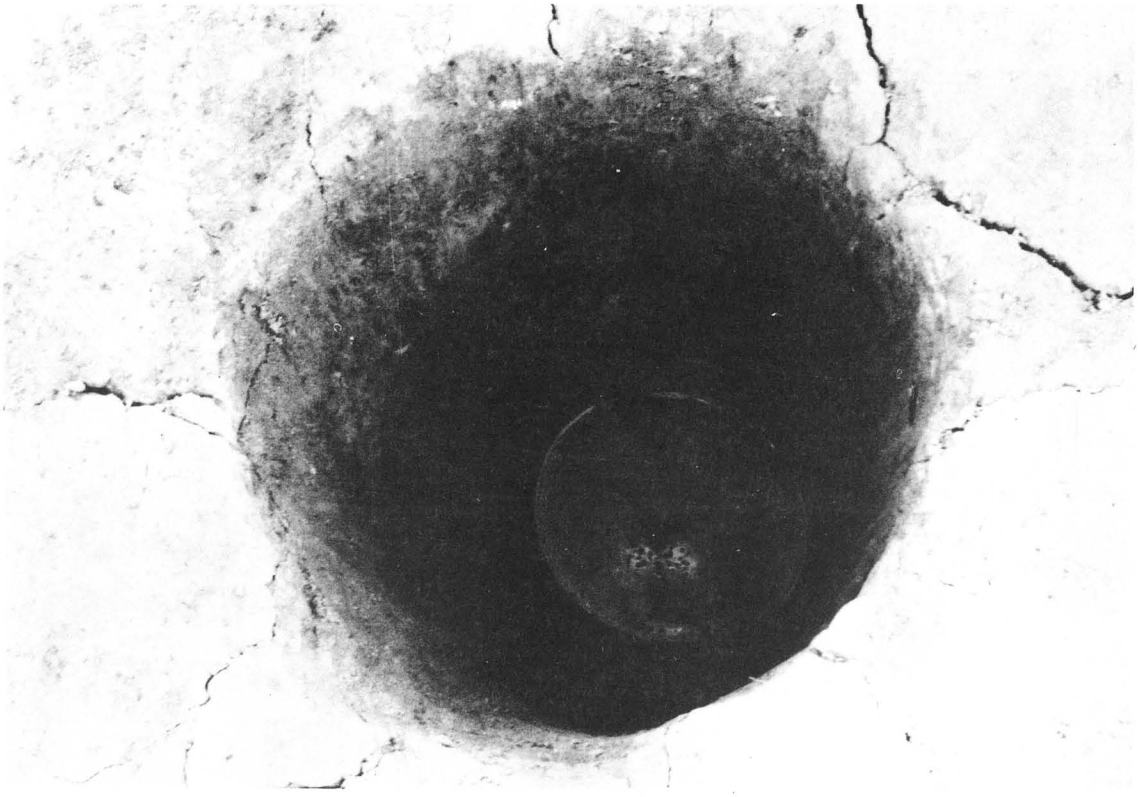
B２トレンチ遺構全景（東から）



B１トレンチ　SB２検出状況（西から）

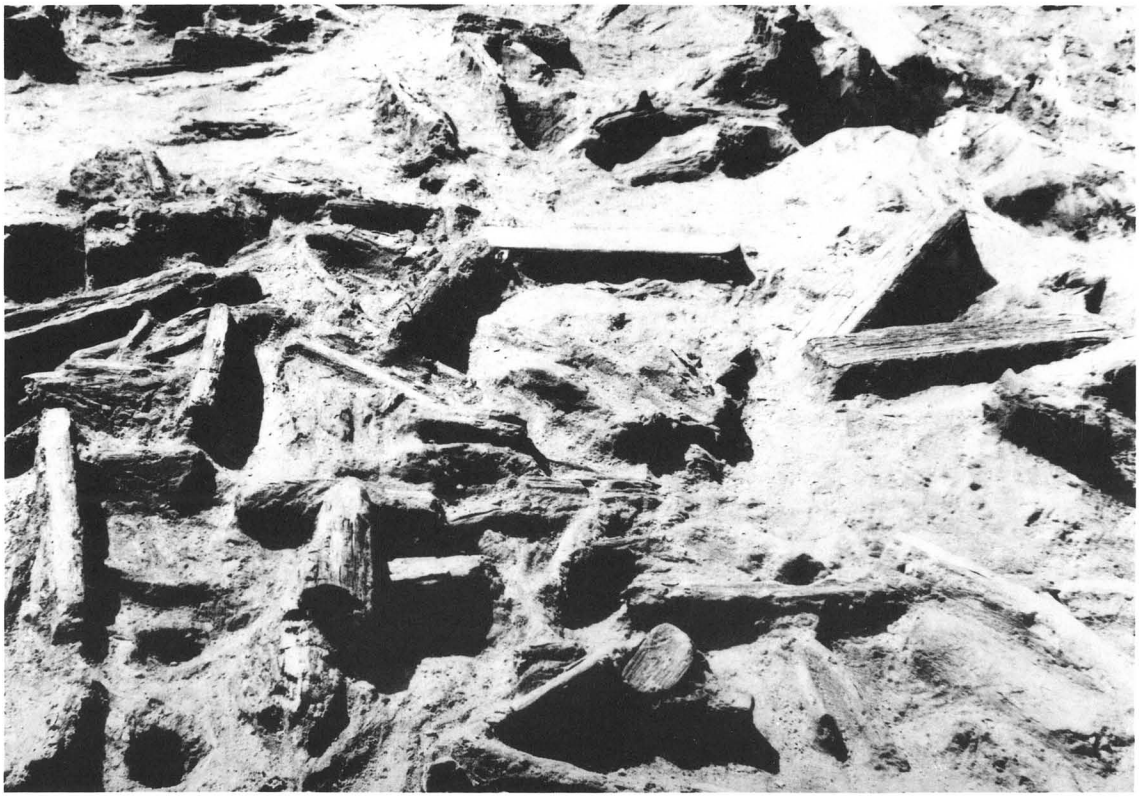


Ｂ１トレンチ　ＳＢ２第６柱穴内柱根出土状況



Ｂ１トレンチ　ＳＢ２第１柱穴内土器出土状況

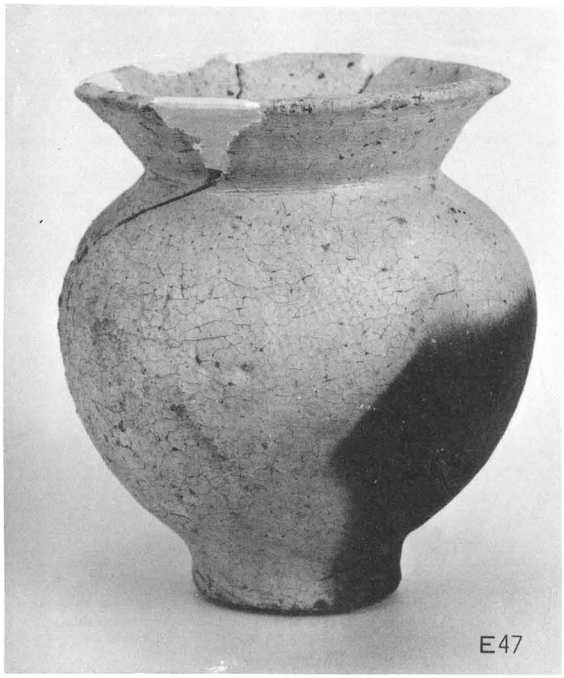
Ｃ７トレンチ　ＳＤ10開口部検出状況（西から）



Ｃ７トレンチ　ＳＤ10開口部木製品出土状況（南から）

E32

E46


E47

E33

E48

E59

E61

E64

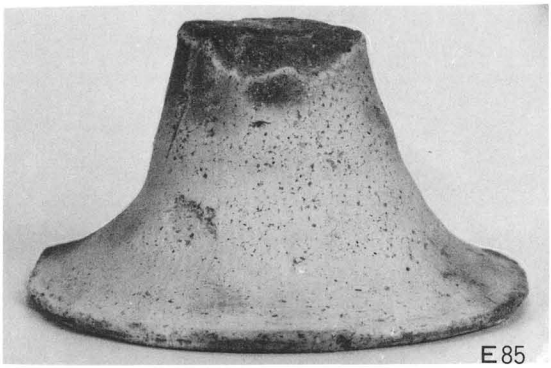
E65

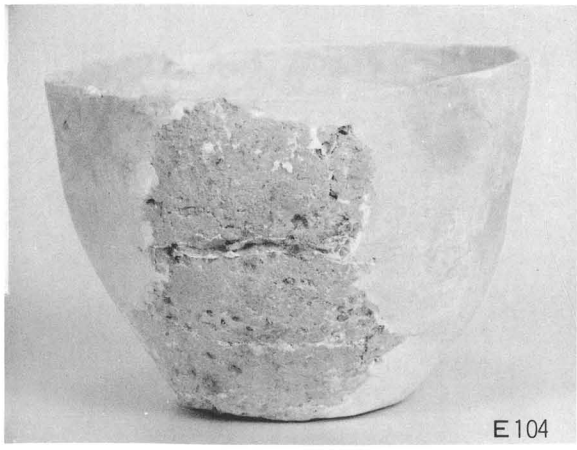
E74

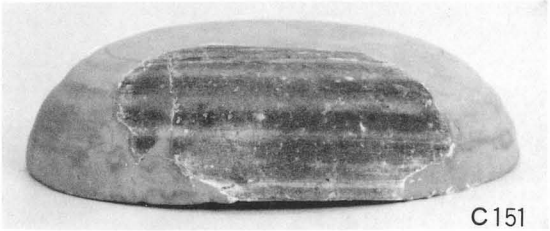
E76

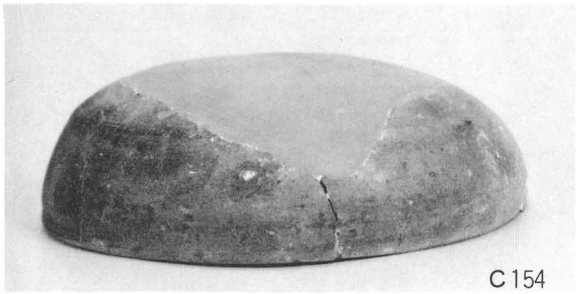
E84

E90

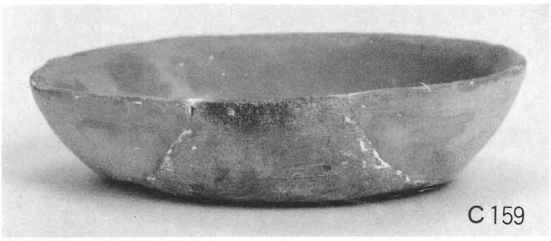

E85


E104

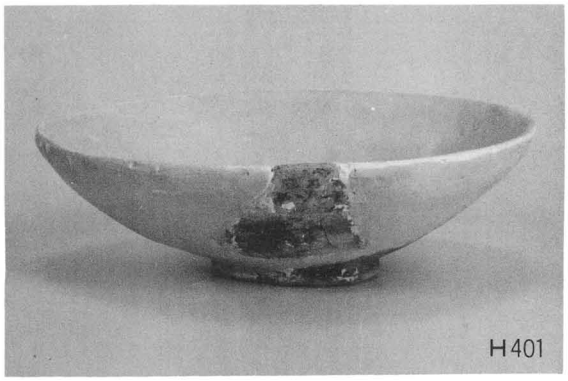

C151


C154

C152

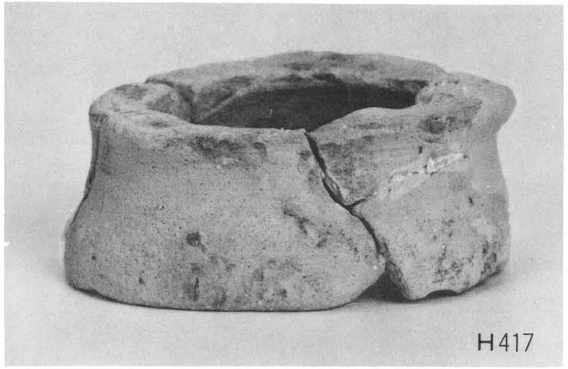

C159

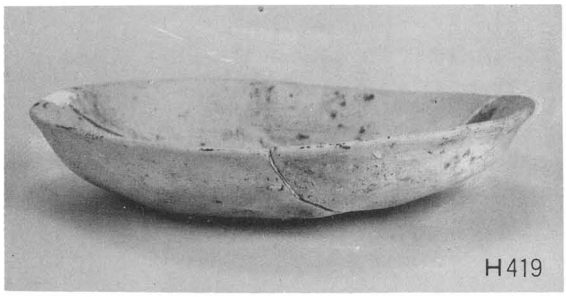
C158

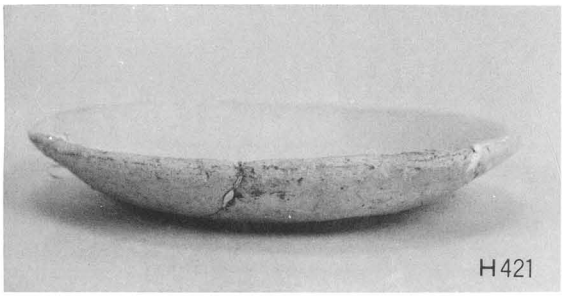

H401

H402

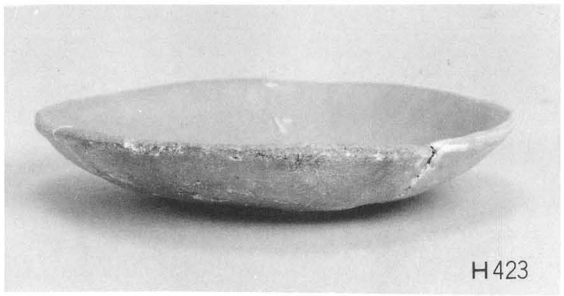
H415

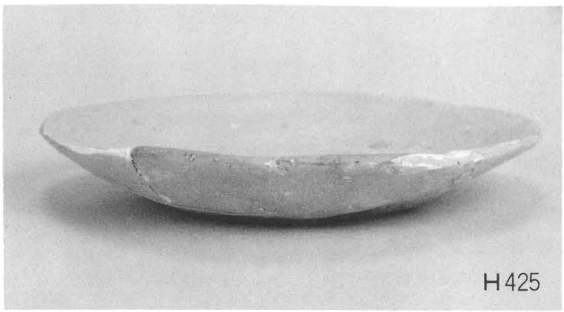

H417

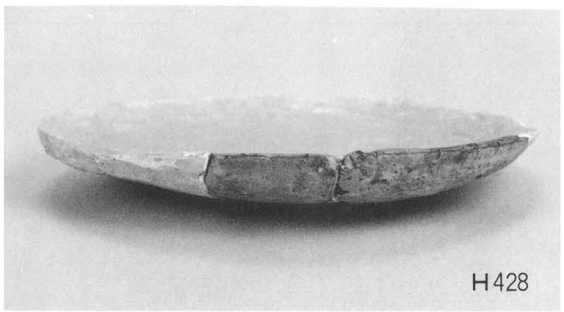

H419


H421

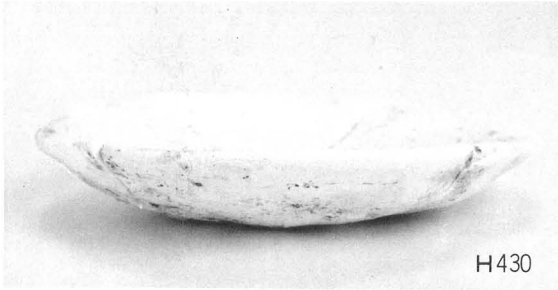
H422

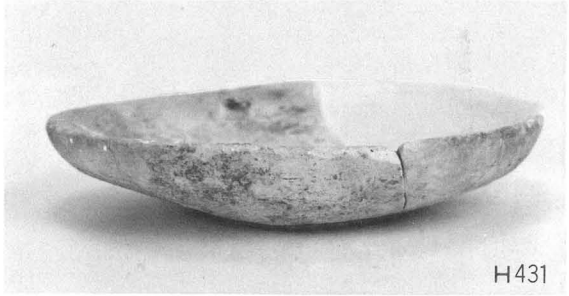

H423

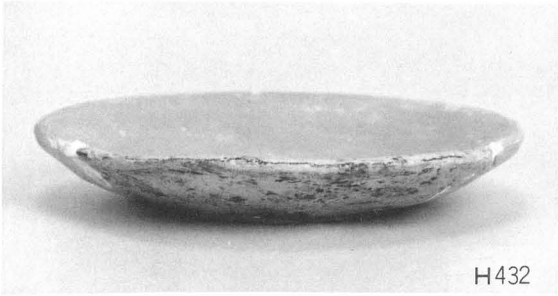

H425


H428

H429


H430


H431


H432

B439

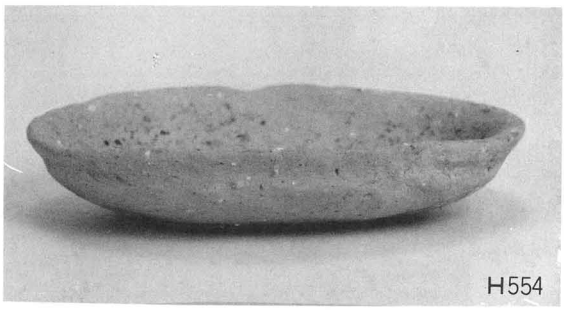
B440

B441

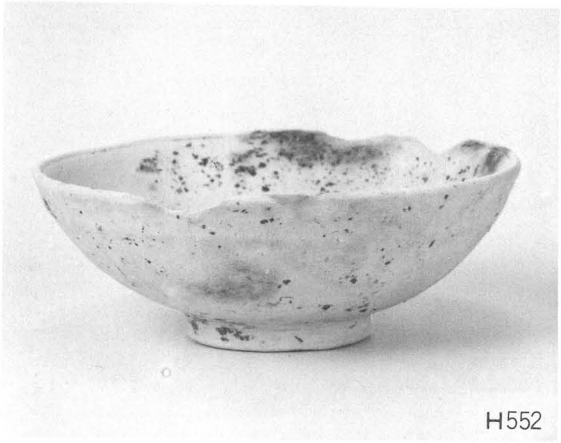
B442

B444

H504


H554

H560


H552

B555

B556

B565

H602

H603

H604

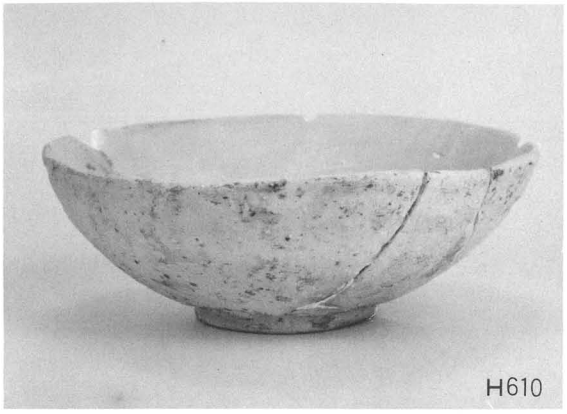
H605

H606

H607

H608

H609


H610

H611

H612

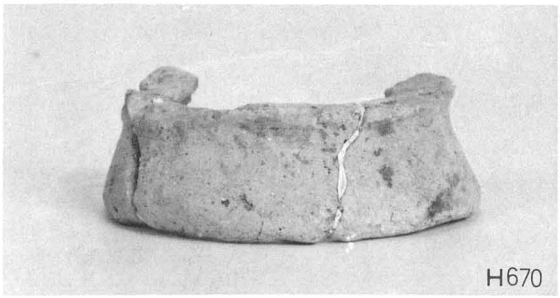
H613

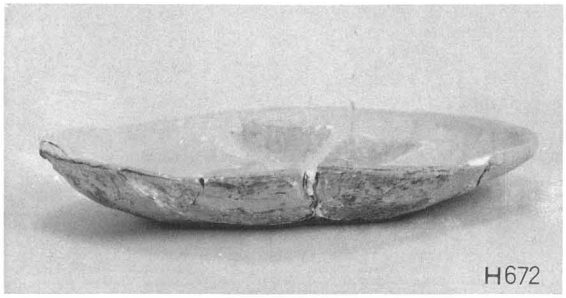
H617

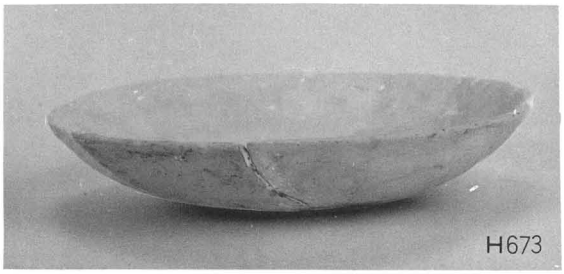
H626

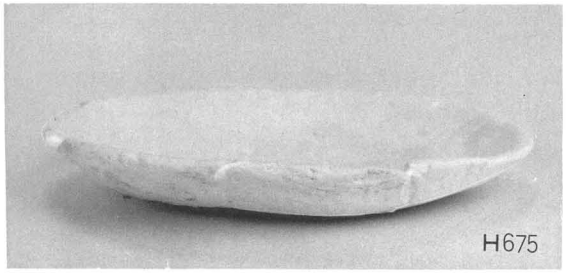
H630

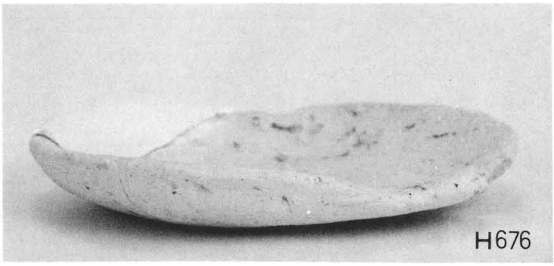
H669


H670

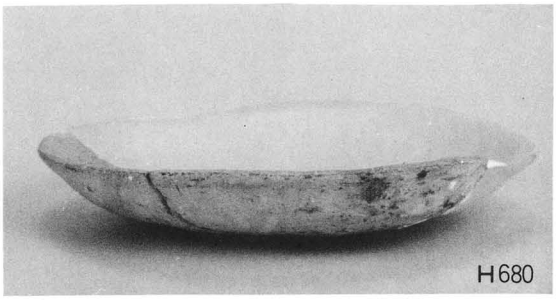

H672

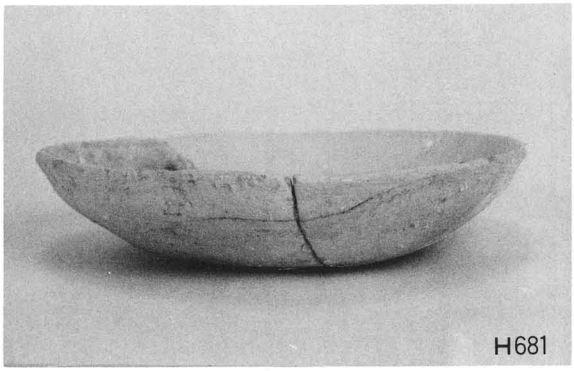

H673

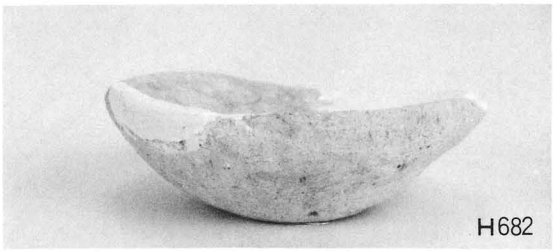

H675


H676

H679


H680


H681


H682

H683

H689

B690

B691

B692

B693

B694

B695

B696

B705

B706

B707

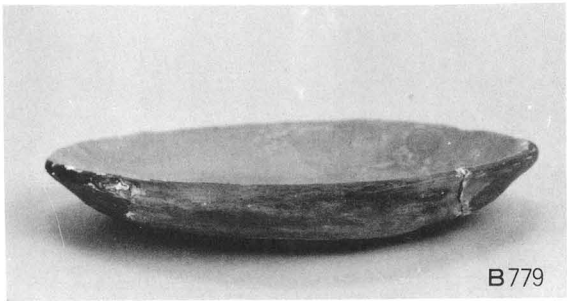
B708

B712

B718

B777

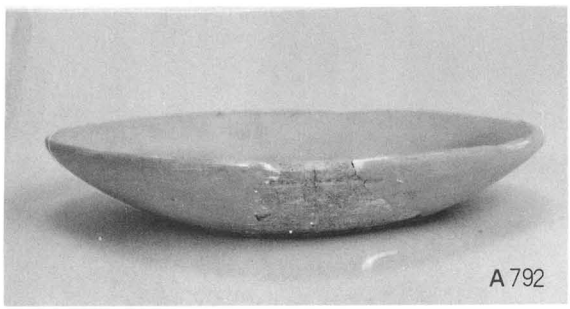
B778

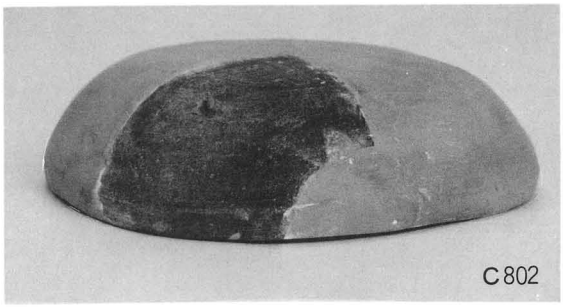

B779

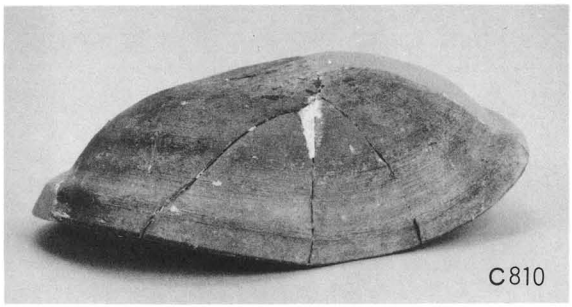
B780

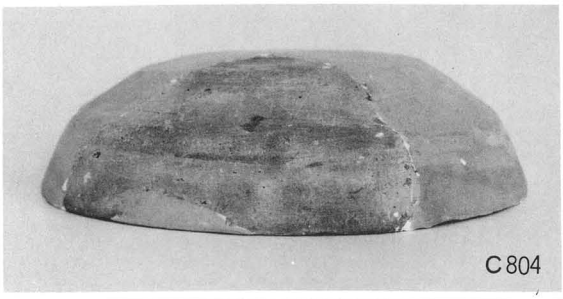
B781

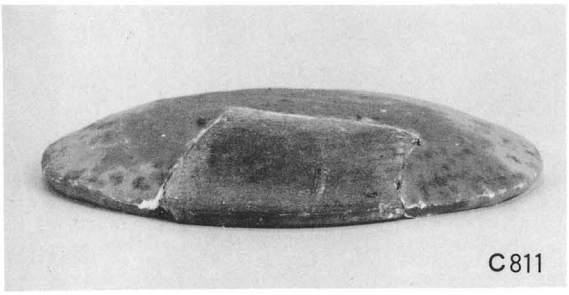
A791

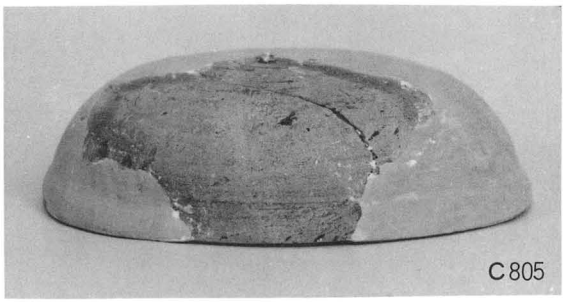

A792

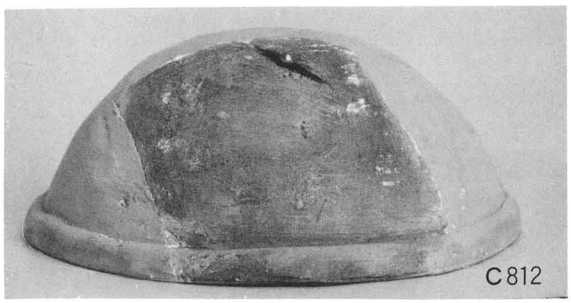

C802

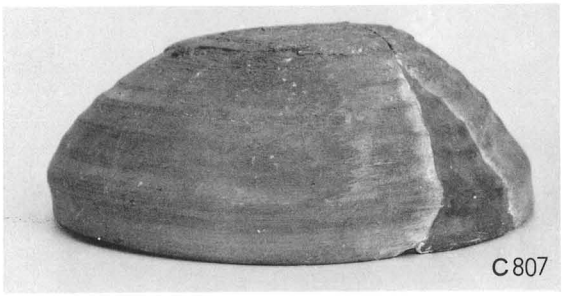

C810


C804


C811


C805


C812


C807

C813

C814

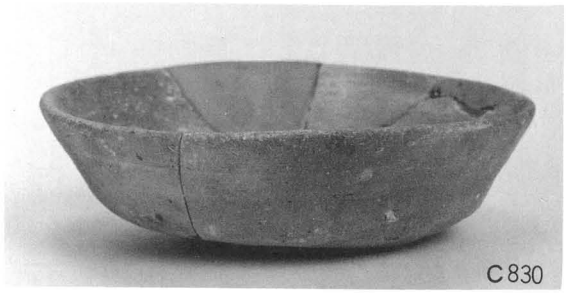
C816

C818

C824

C828

C829


C830

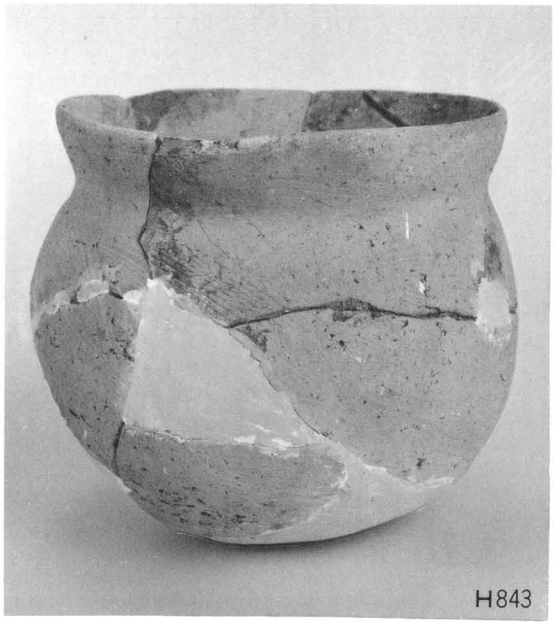
C831

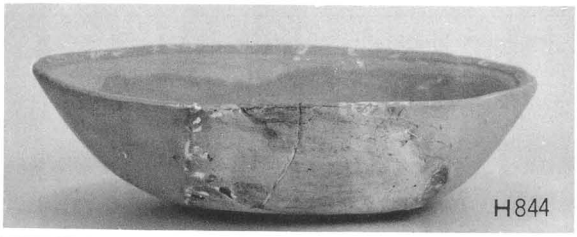
C831

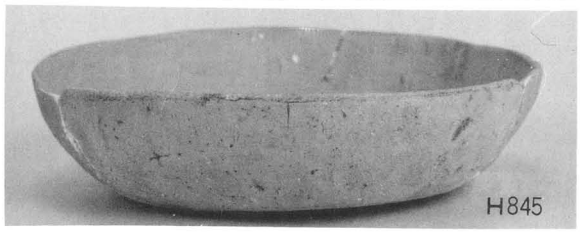
C832

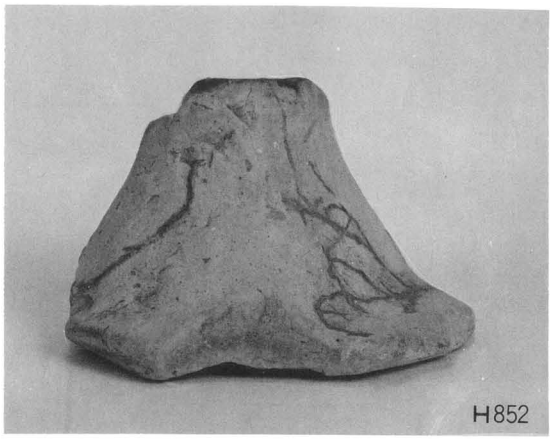
C836

C837


H843


H844


H845


H852

H851

C903

C909

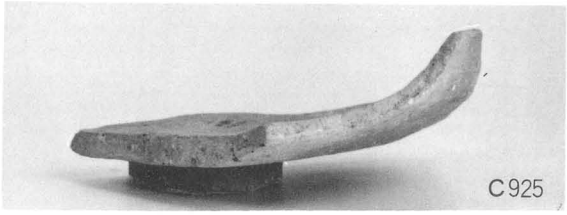
C905

C910

C914

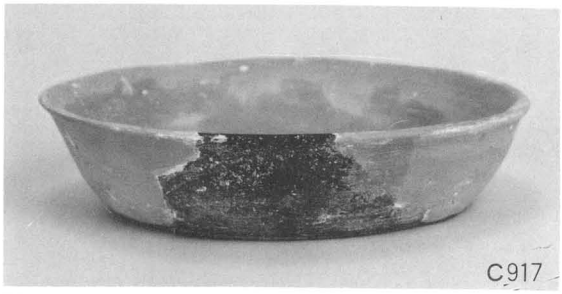
C924

C915

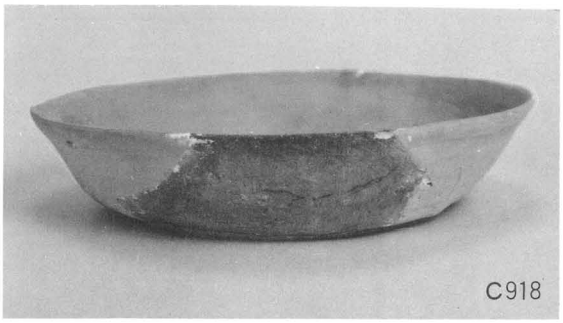

C925

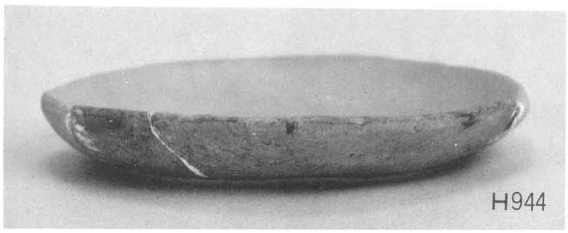
C916

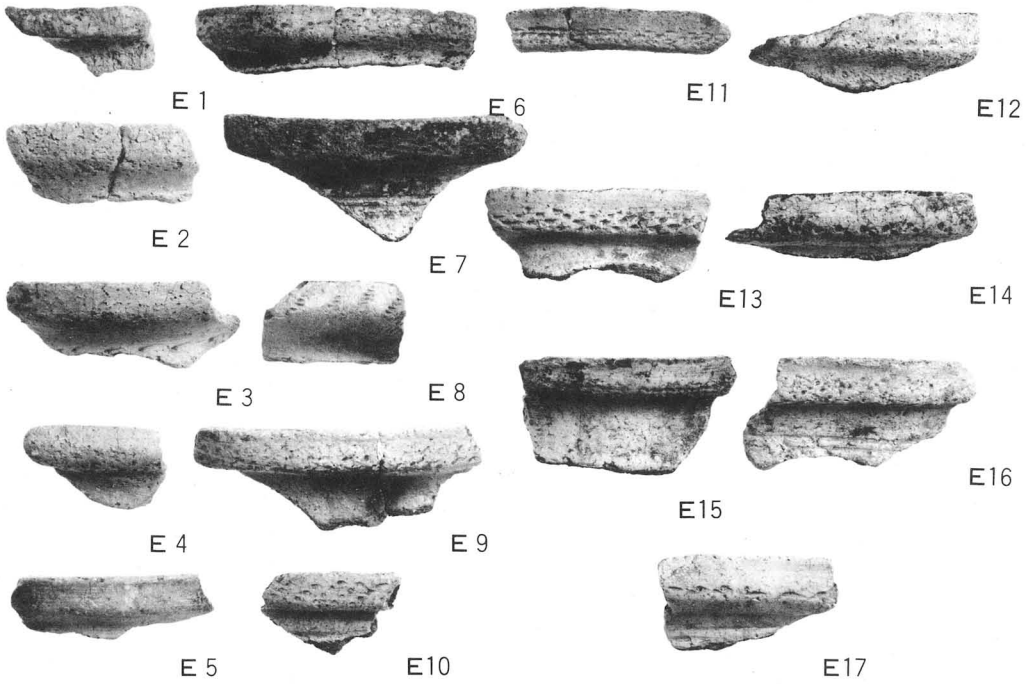
C927

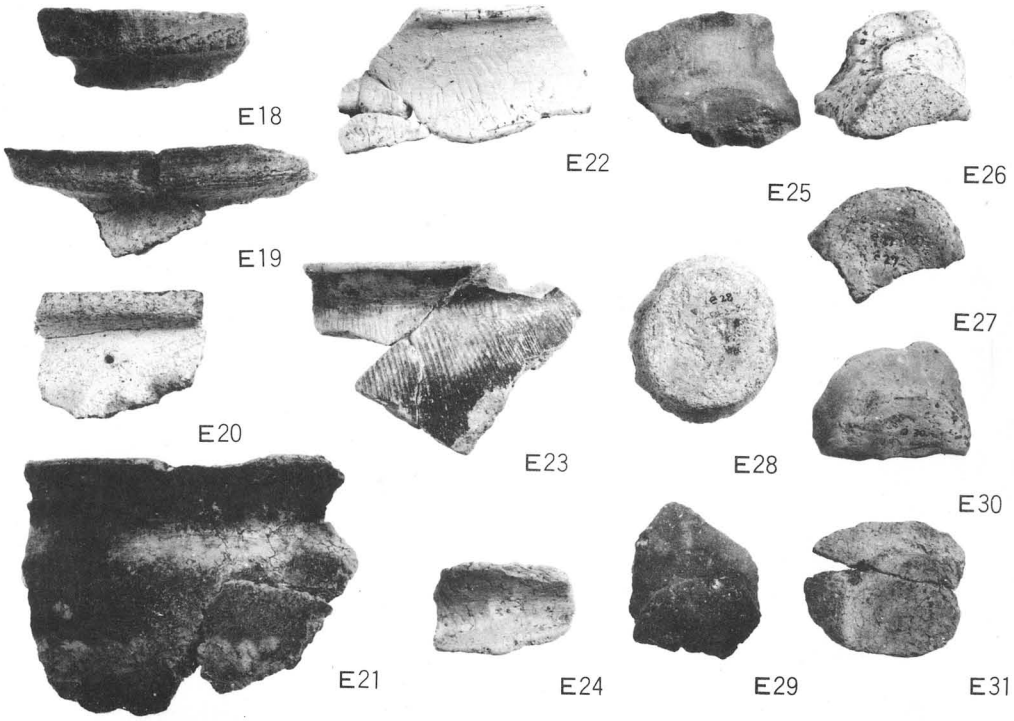

C917

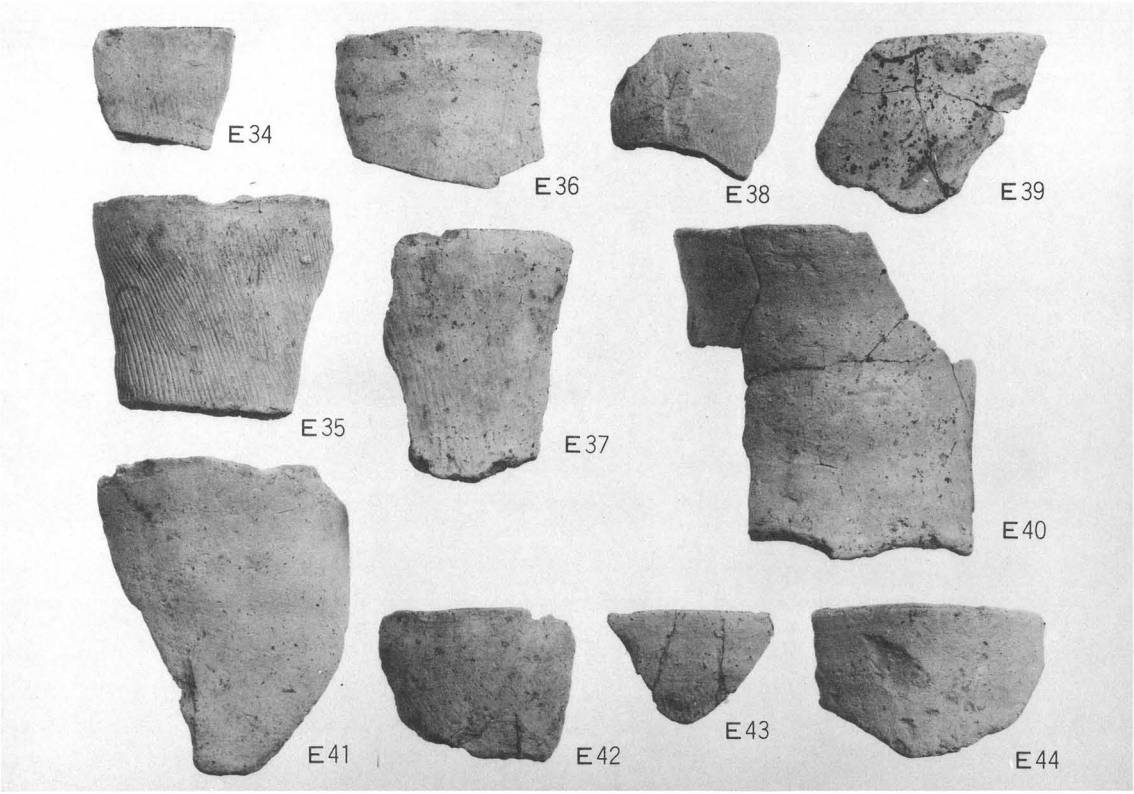
H940

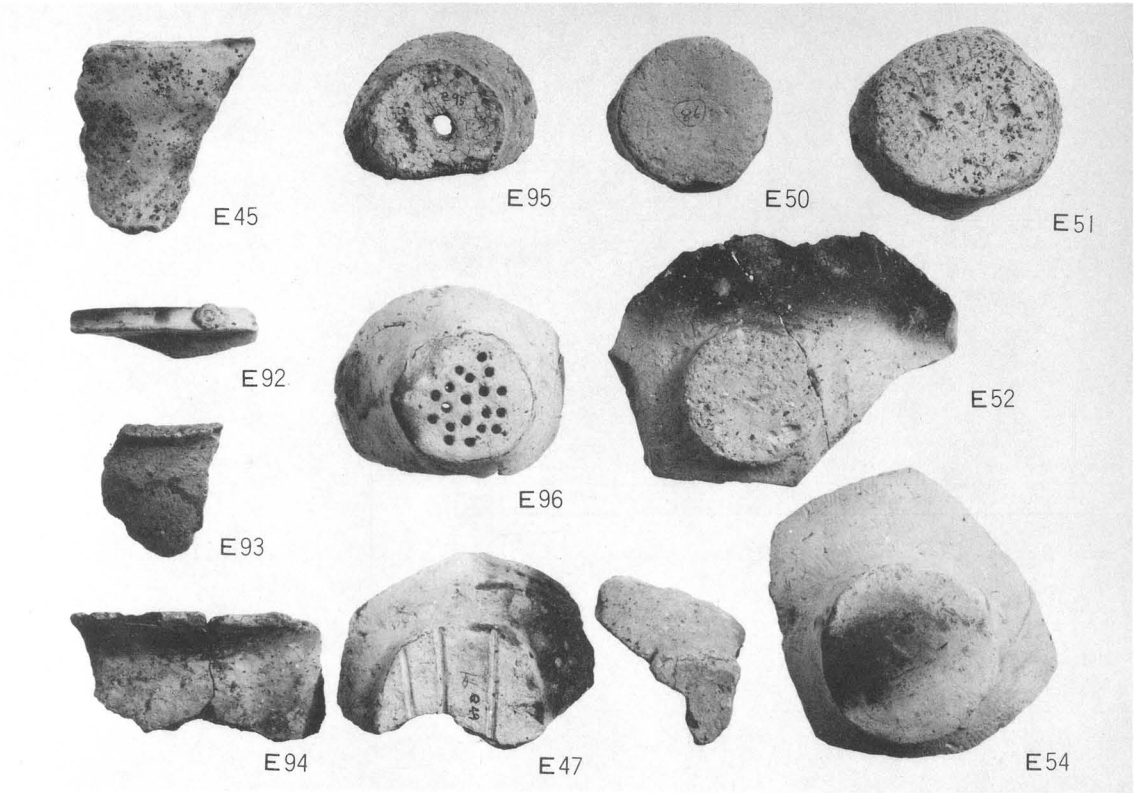

C918

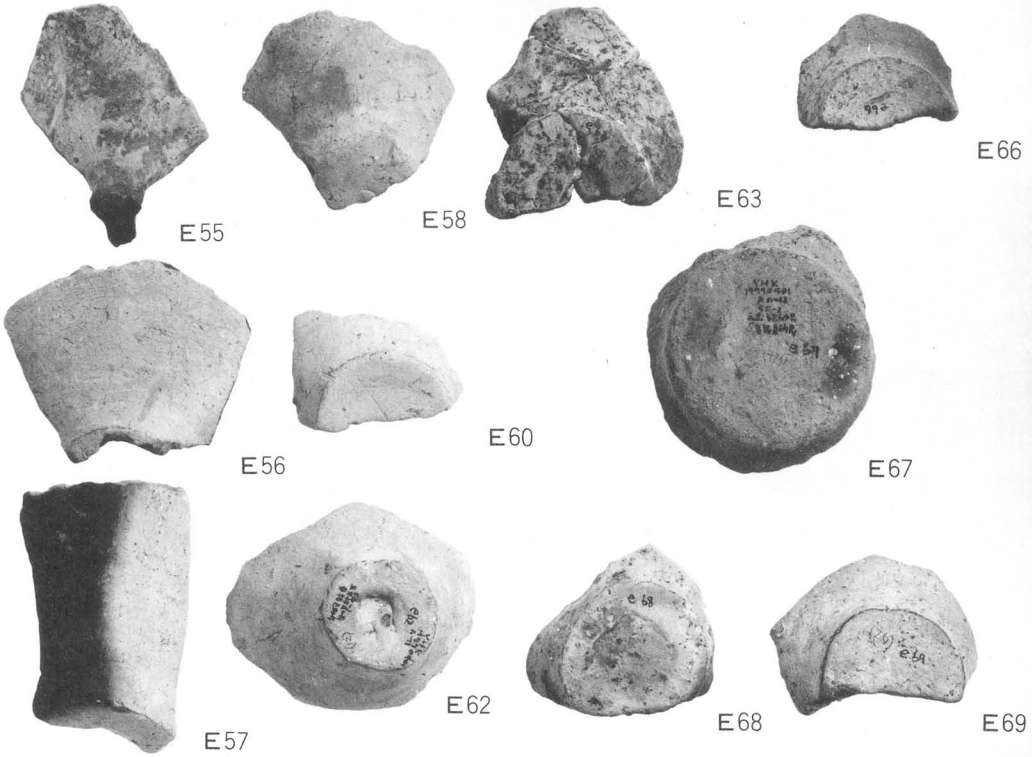

H944

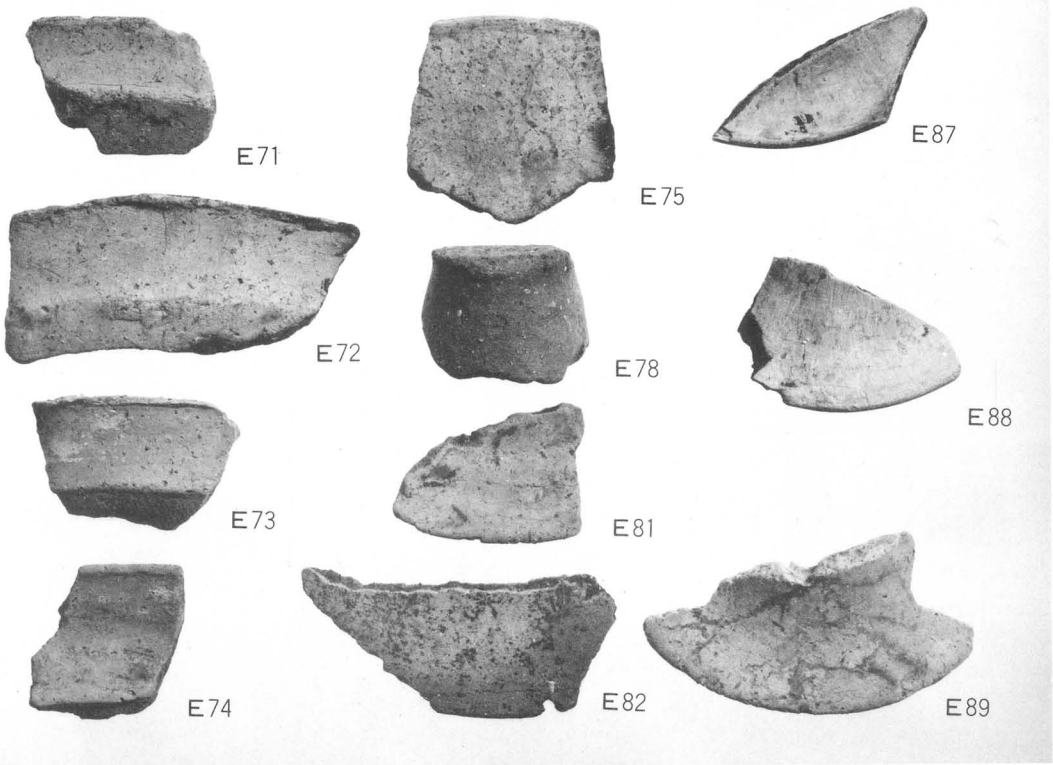

E 1
E 6
E11
E12
E 2
E 7
E13
E14
E 3
E 8
E15
E16
E 4
E 9
E 5
E10
E17

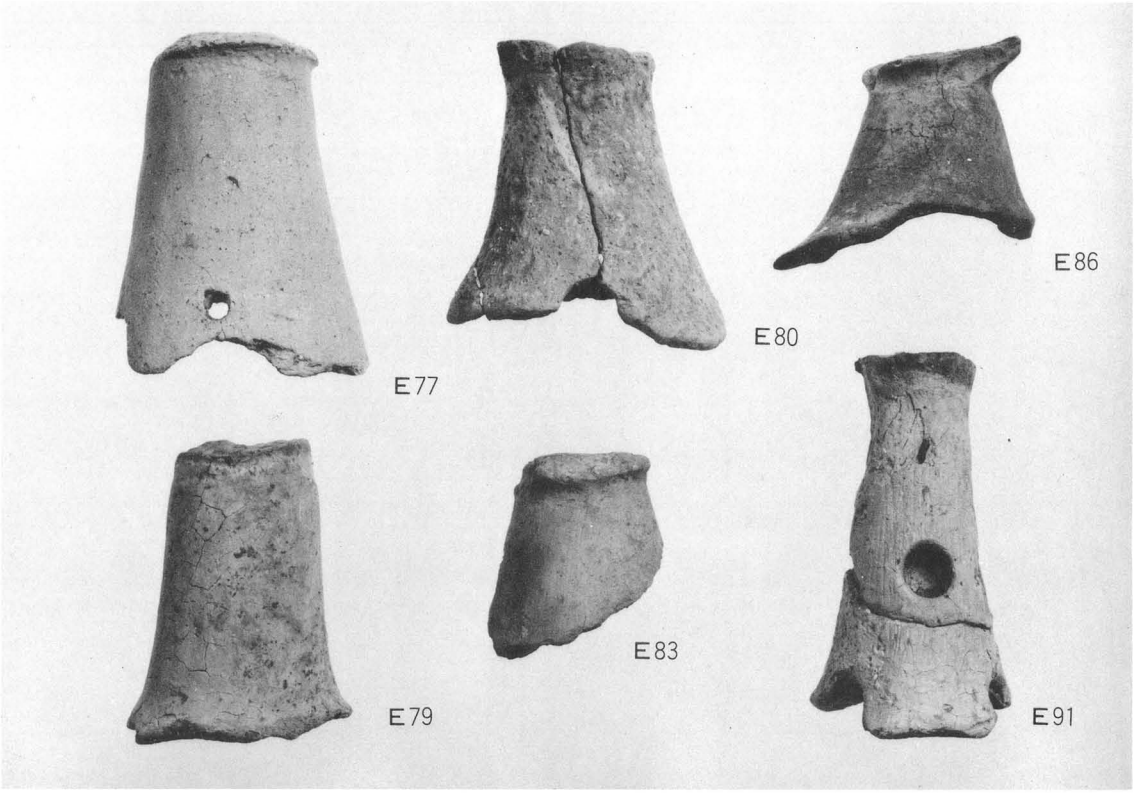

E18
E22
E25
E26
E19
E27
E20
E23
E28
E30
E21
E24
E29
E31

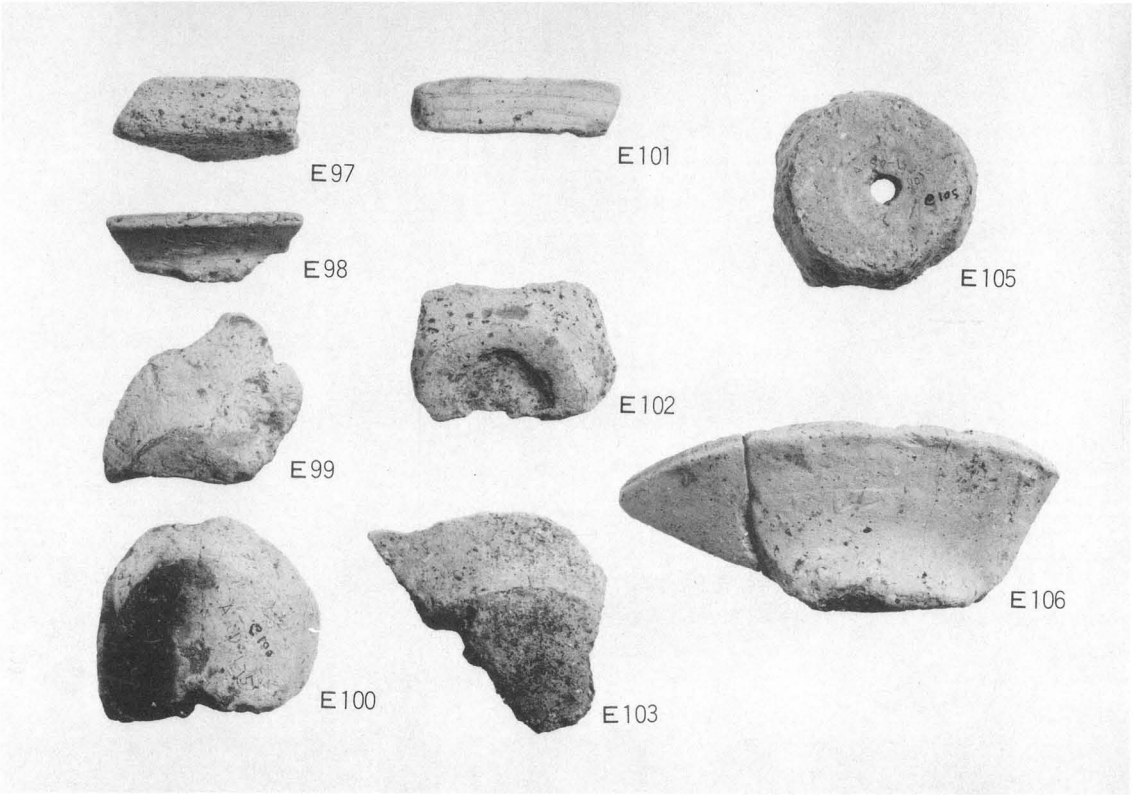

E34
E36
E38
E39
E35
E37
E40
E41
E42
E43
E44

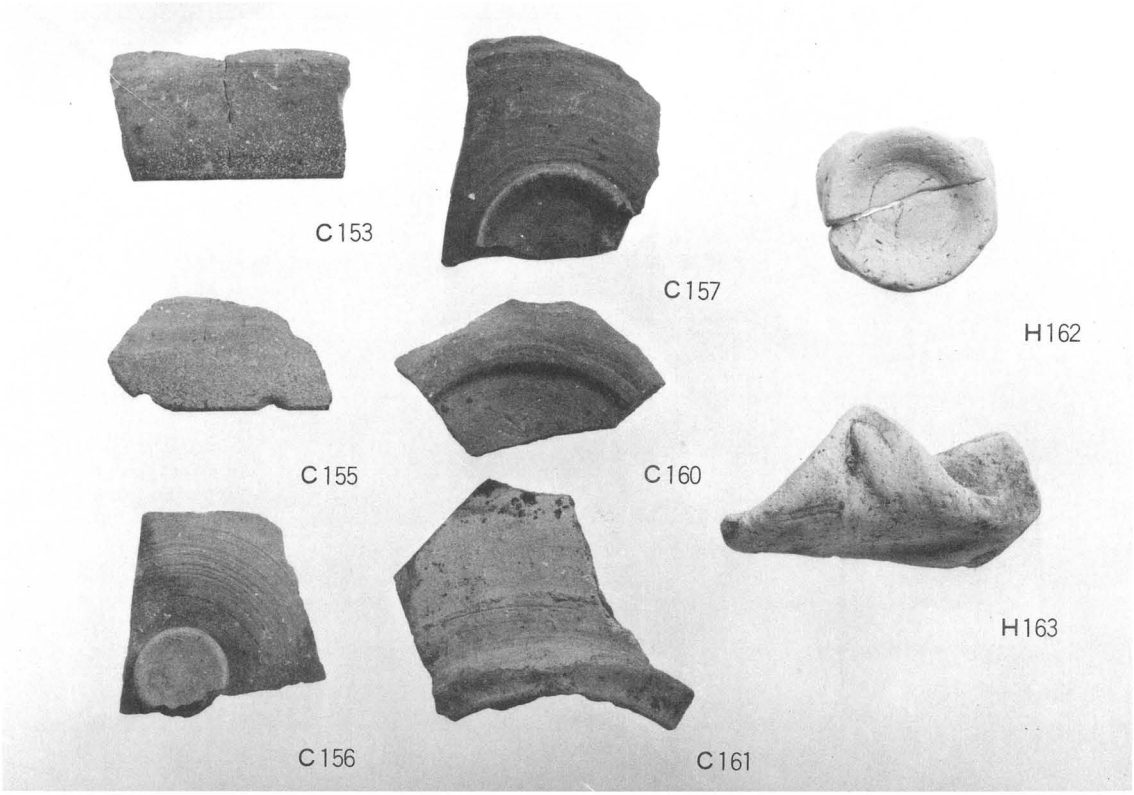

E45
E95
E50
E51
E92
E52
E96
E93
E94
E47
E54

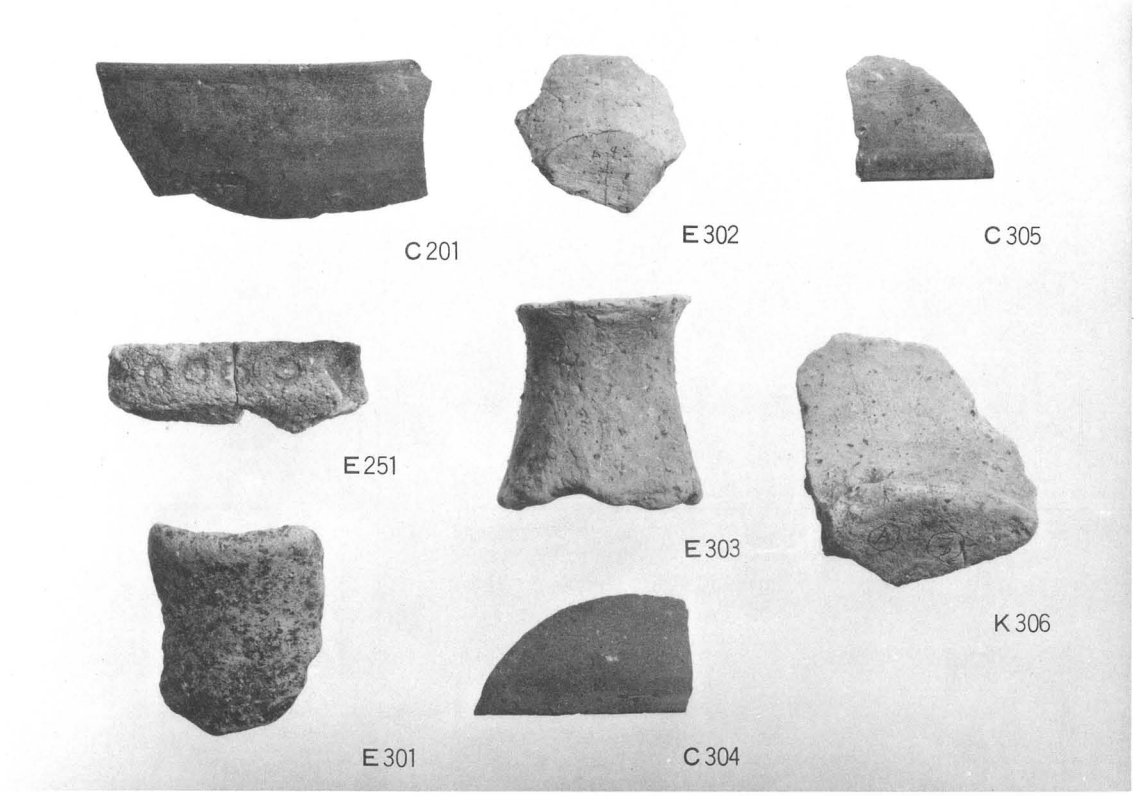

E55
E58
E63
E66
E56
E60
E67
E57
E62
E68
E69

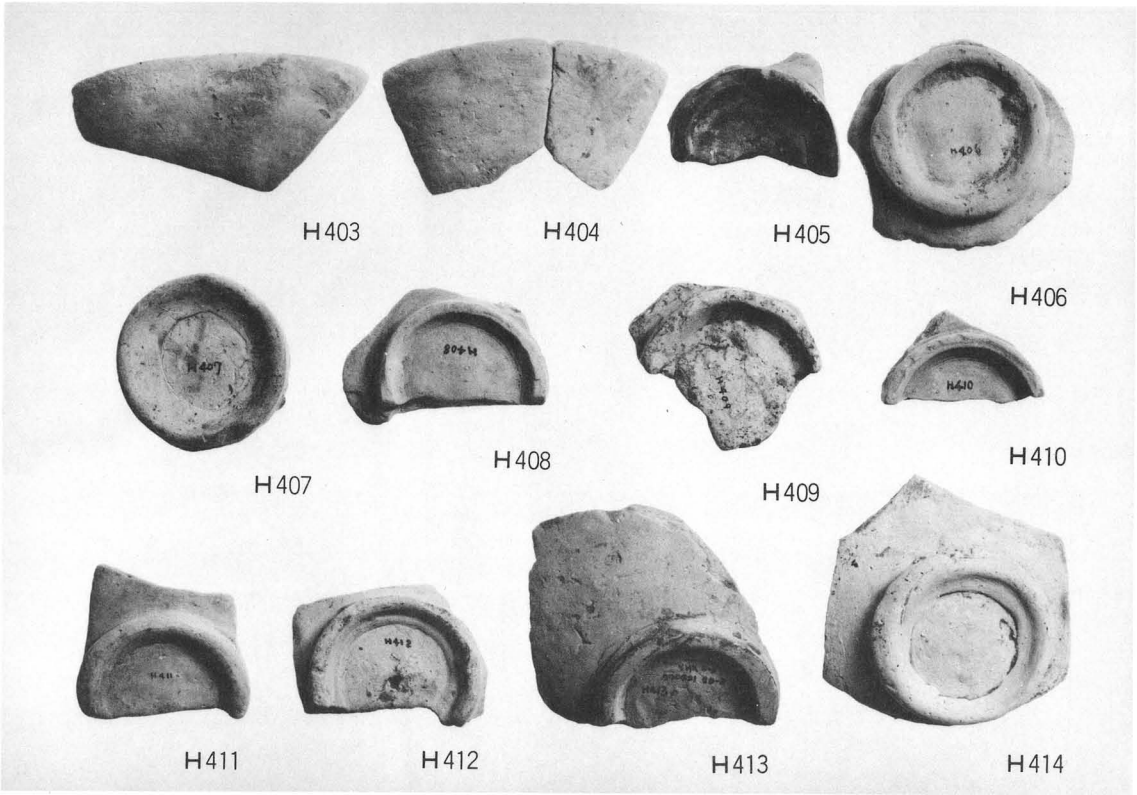

E71
E75
E87
E72
E78
E88
E73
E81
E74
E82
E89

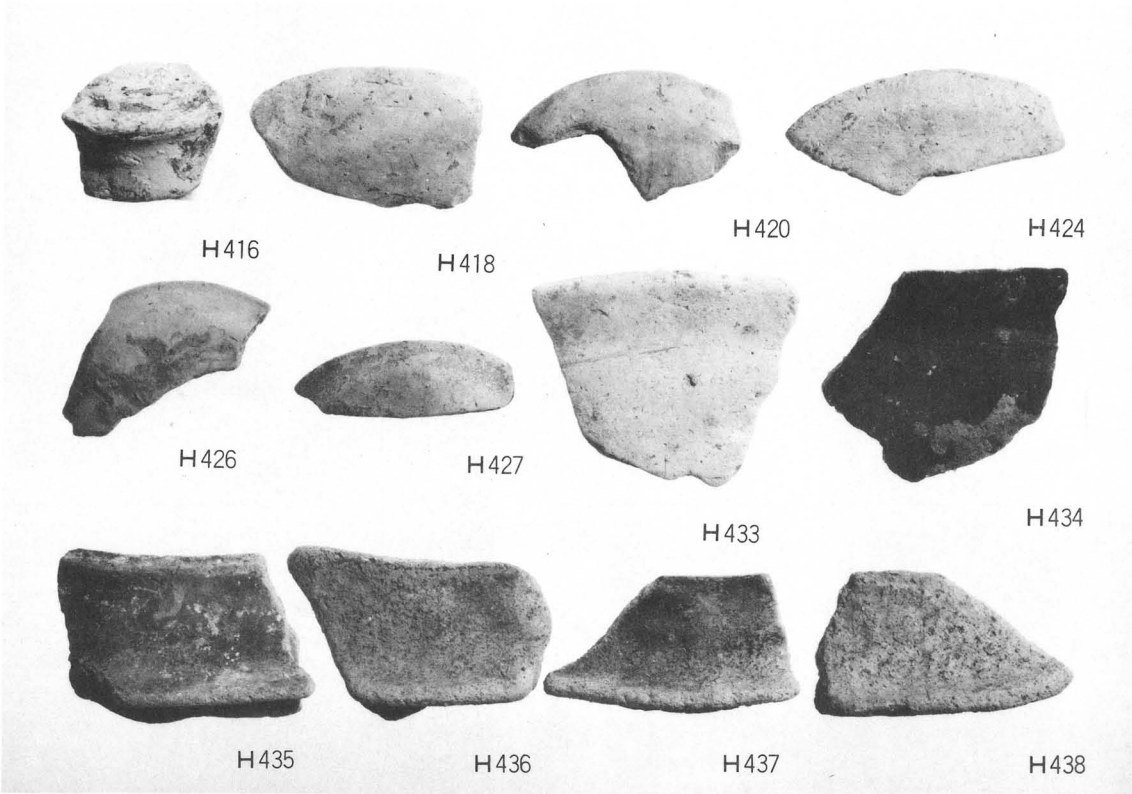

E77
E80
E86
E79
E83
E91


E97
E101
E105
E98
E102
E99
E106
E100
E103


C153
C157
H162
C155
C160
H163
C156
C161


C201
E302
C305
E251
E303
K306
E301
C304


H403
H404
H405
H406
H407
H408
H409
H410
H411
H412
H413
H414


H416
H418
H420
H424
H426
H427
H433
H434
H435
H436
H437
H438

B443

H445

B446

B447

B448

B449

B450

B451

B452

B453

B454

B455

B456

B457

B458

B459

B460

B461

B462

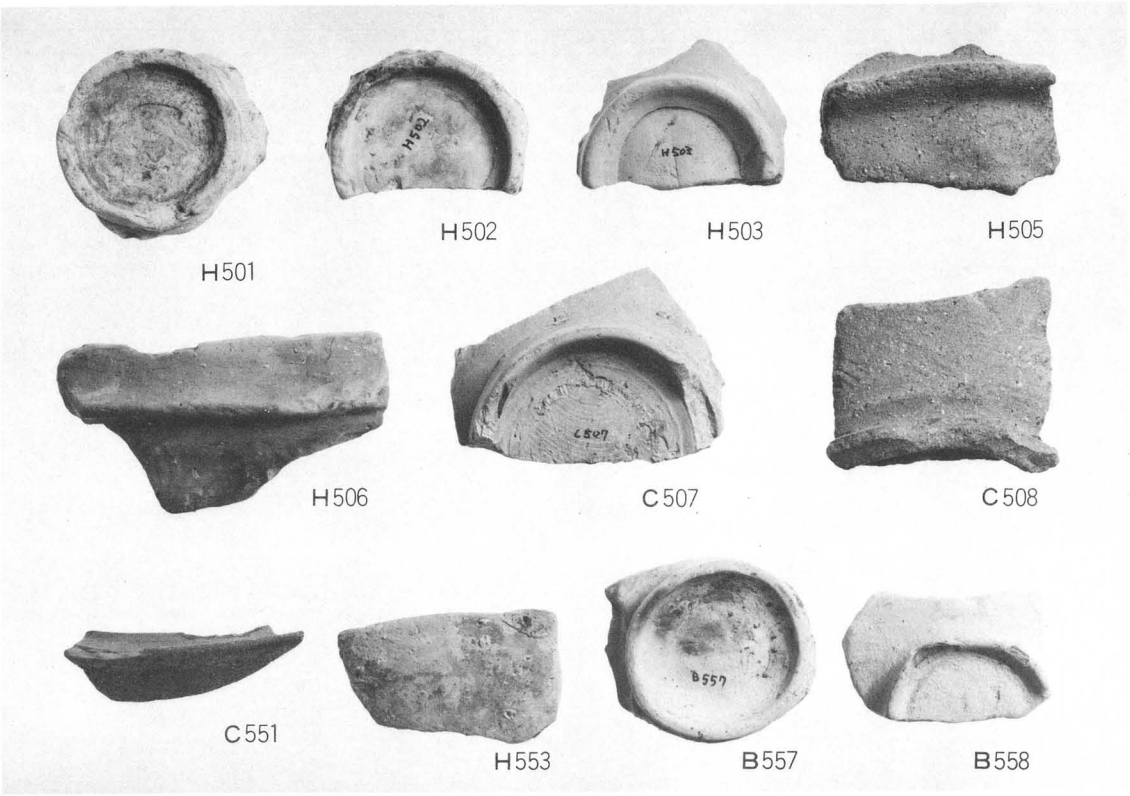
B463

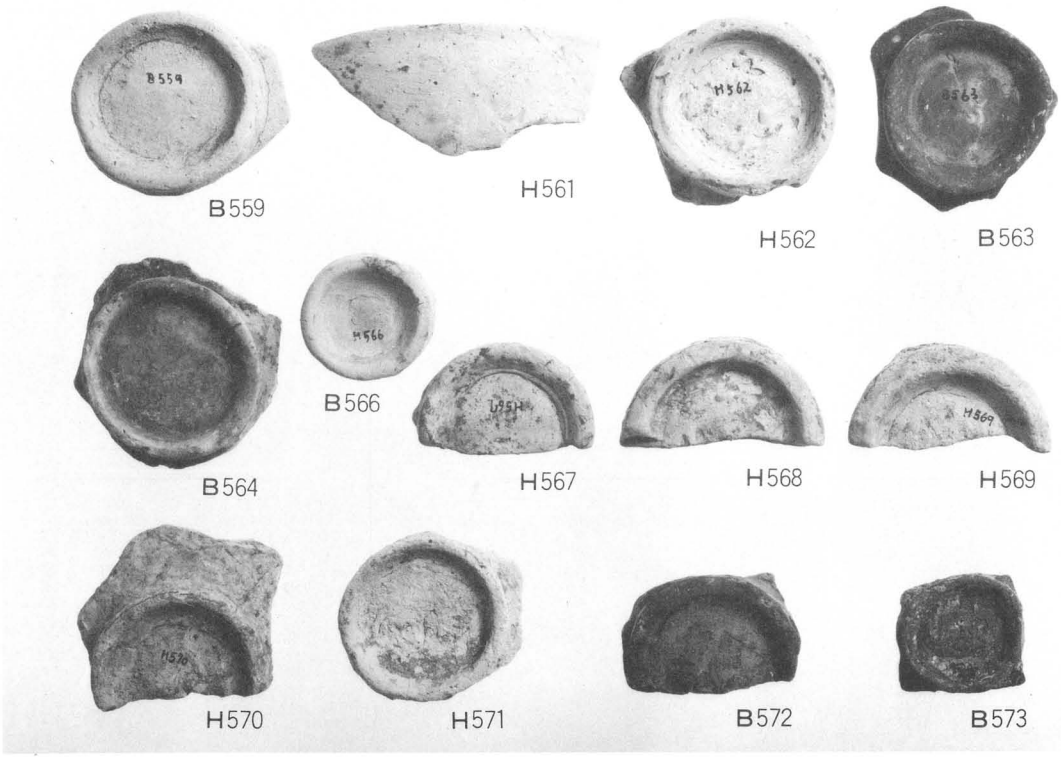
B464

B465

C466

G467


H501
H502
H503
H505
H506
C507
C508
C551
H553
B557
B558


B559
H561
H562
B563
B564
B566
H567
H568
H569
H570
H571
B572
B573

E600

C601

H614

H618

H615

H616

H619

H620

H621

H622

H623

H624

H625

H627

H628

H629

H631

H632

H633

H634

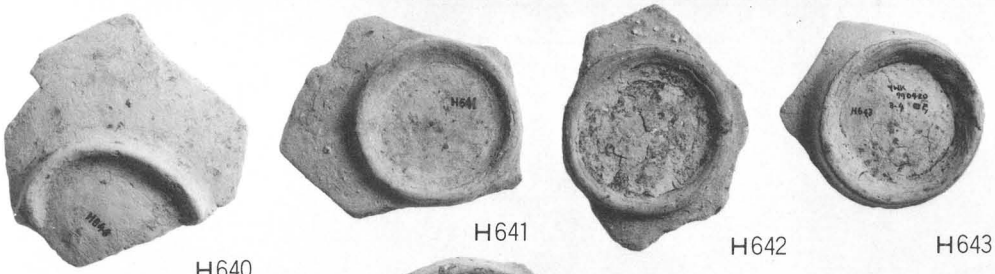
H635

H636

H637

H638

H639


H640

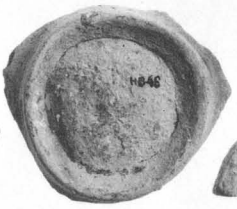
H641

H642

H643

H644

H645


H646

H647

H648

H649

H650

H651

H652

H653

H654

H655

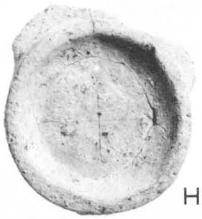
H656

H657

H658

H659

H660

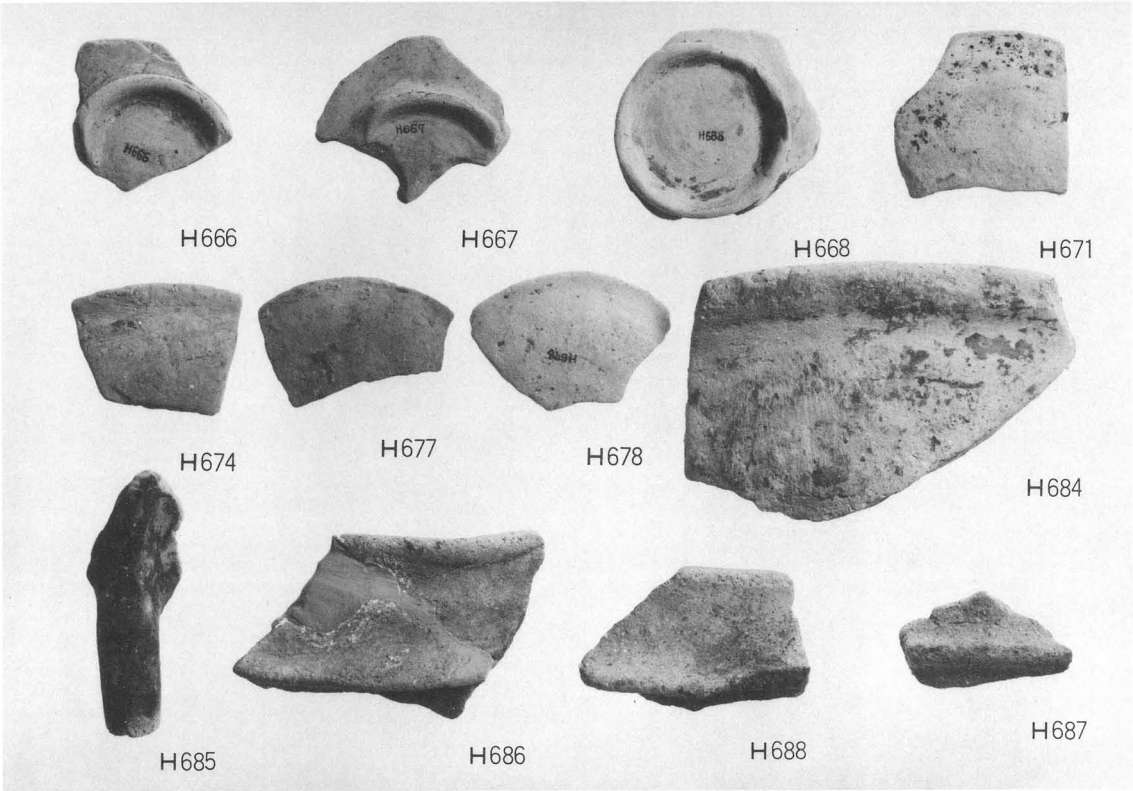

H661

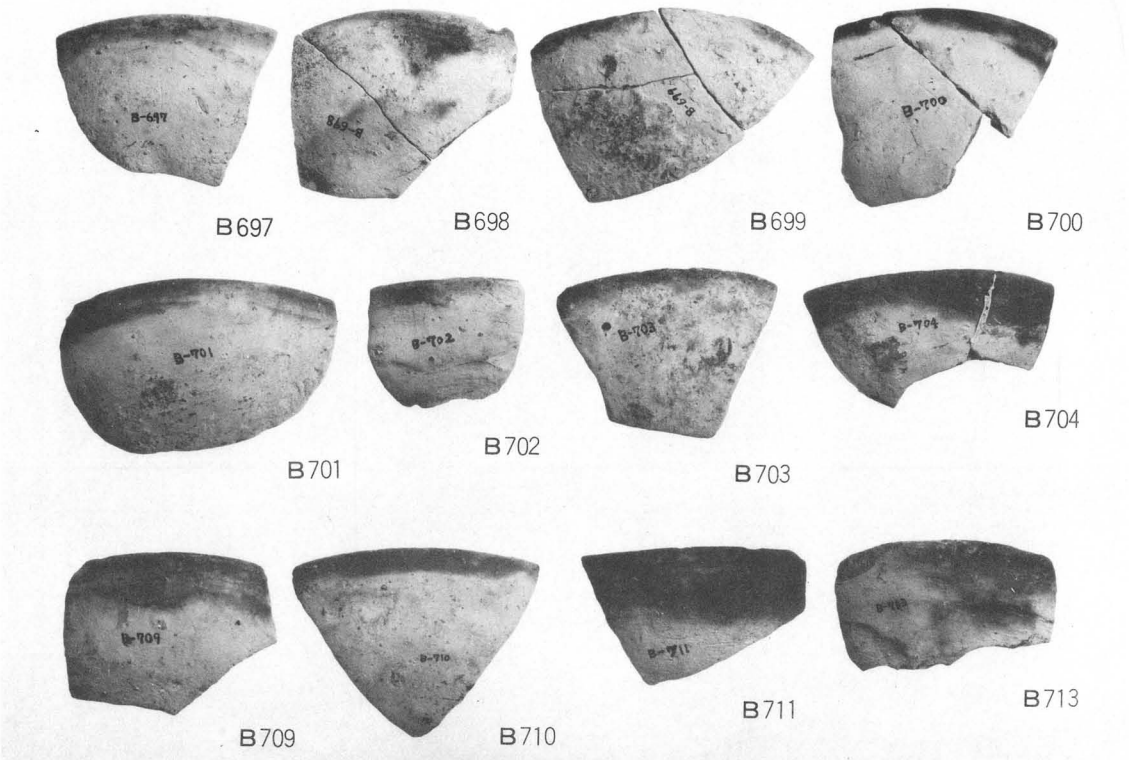
H662

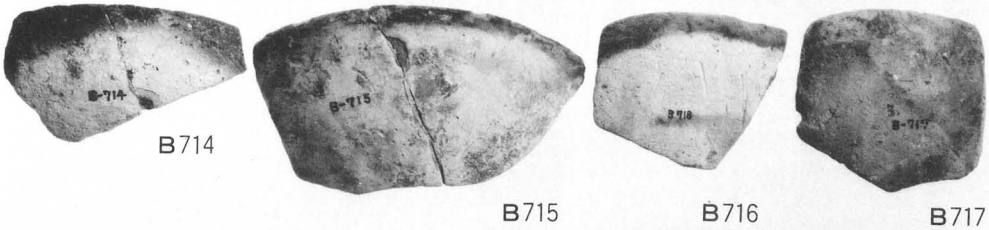
H663

H664

H665


H666
H667
H668
H671
H674
H677
H678
H684
H685
H686
H688
H687


B697
B698
B699
B700
B701
B702
B703
B704
B709
B710
B711
B713

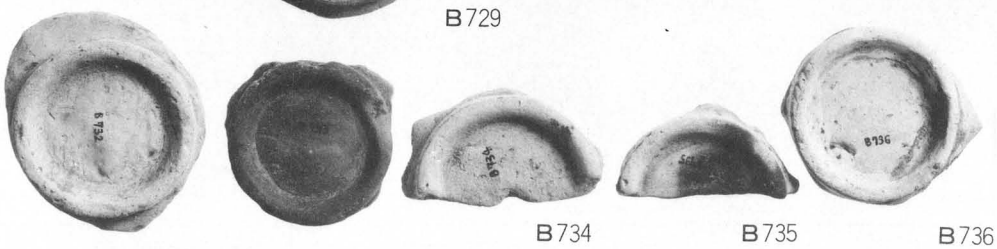


B714 B715 B716 B717

B719 B720 B721 B722

B723 B724 B725 B726 B727

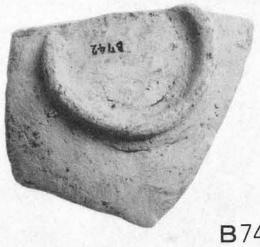
B728 B729 B730 B731



B732 B733 B734 B735 B736

B737 B738 B739 B740

B741


B742

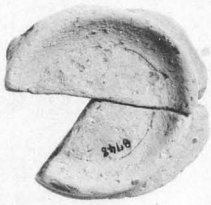
B743

B744

B745

B746

B747


B748

B749

B750

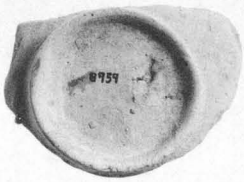
B751

B752

B753

B754

B755


B757

B756

B758

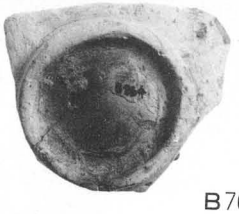
B759

B760

B761

B762

B763


B764

B765

B776

B767

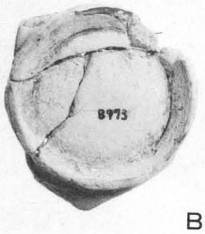
B768

B769

B770

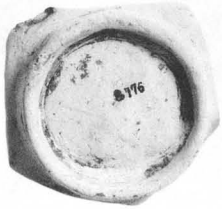
B771

B772


B773

B774

B775


B776

B782

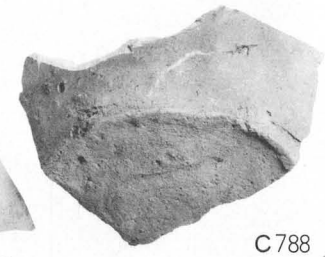
B783

C784

C785

C786

C787


C788

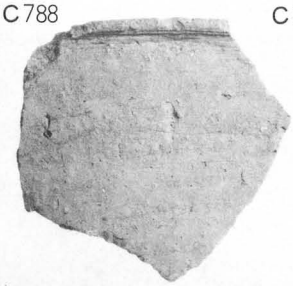
C789

G790

P793

K794

K795


K796

H797

C801

C809

C820

C803

C815

C821

C806

C817

C822

C808

C819

C823

C825

C833

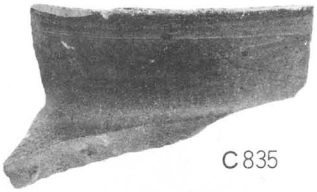
C838

C826

C834

C839

C827


C835

C890

E841

H848

H853

E842

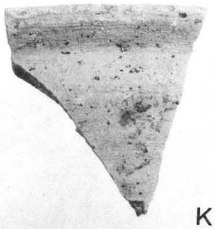
H849

H854

H846

H847

H850


K856

H855

C901

C908

C911

C902

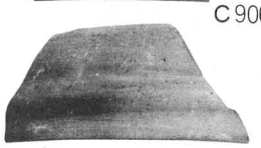
C912

C913

C904

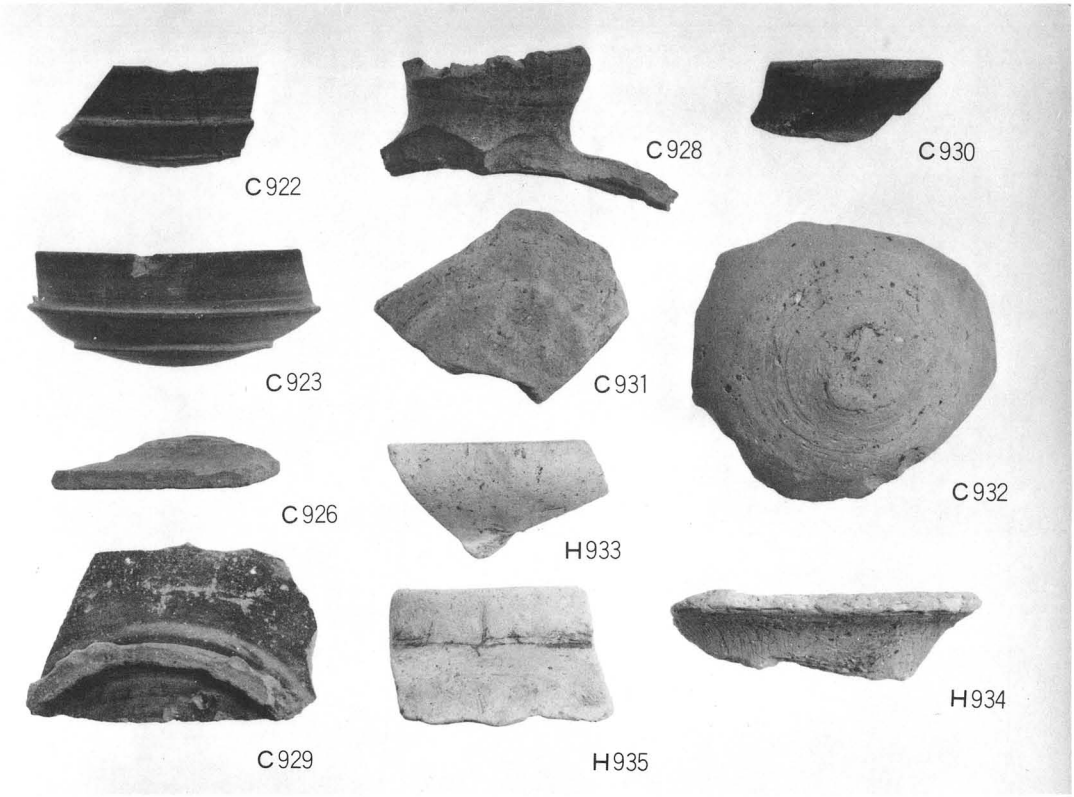
C919

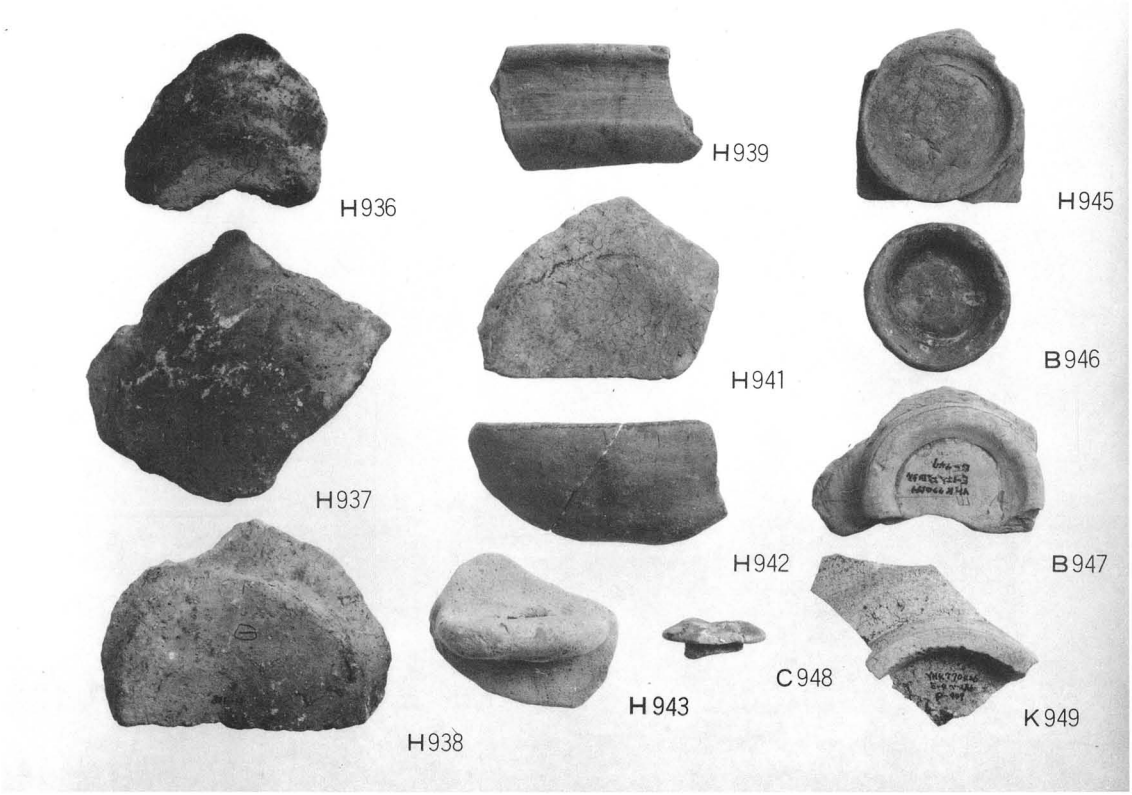
C906


C907

C920

C921


C922
C928
C930
C923
C931
C932
C926
H933
C929
H935
H934

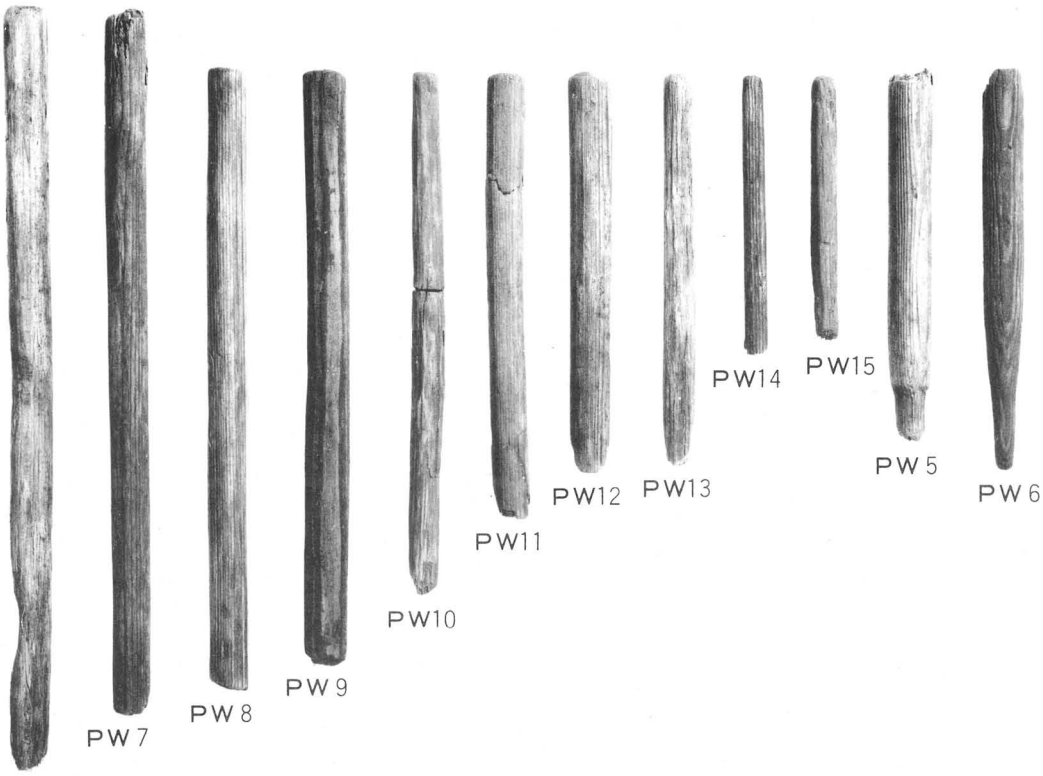

H936
H939
H945
H941
B946
H937
H942
B947
H938
H943
C948
K949

PW 1

PW 2

PW 3

PW 4



PW17

PW18

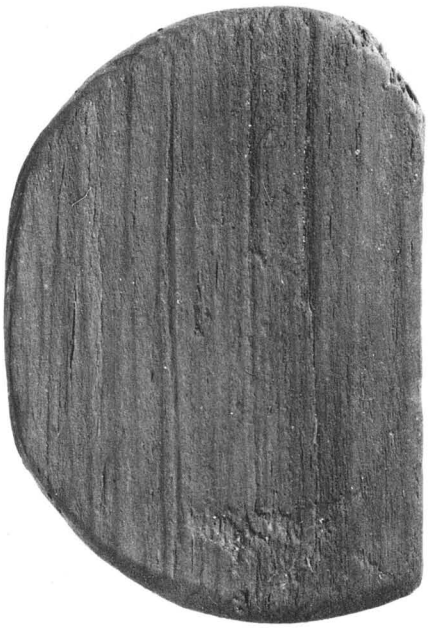
PW19

PW20

PW21

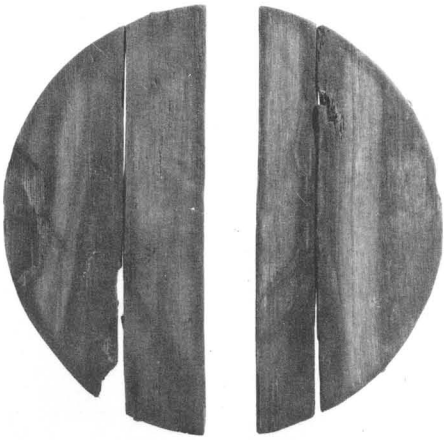
PW22

PW24



PW25

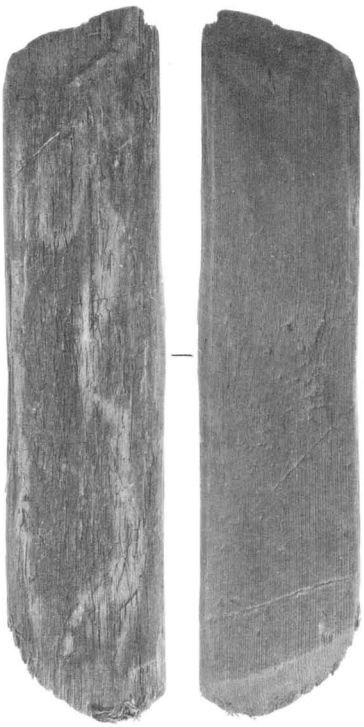
PW28



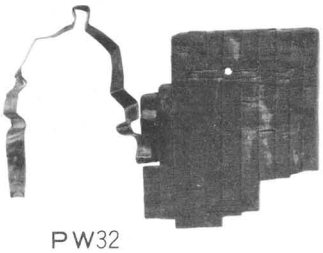
PW29

PW30

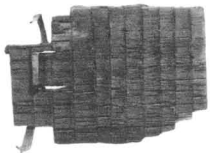
PW31



PW34

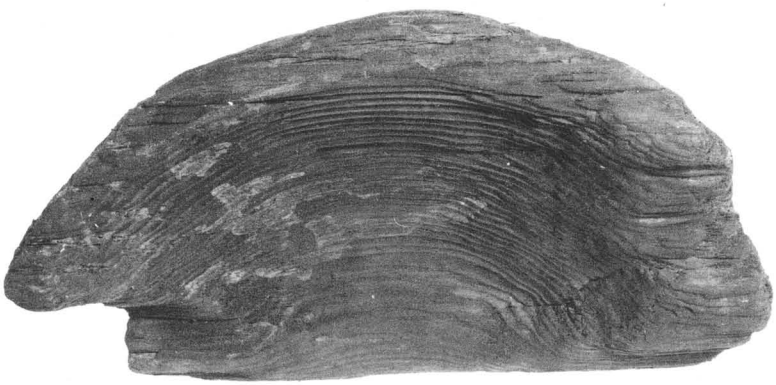


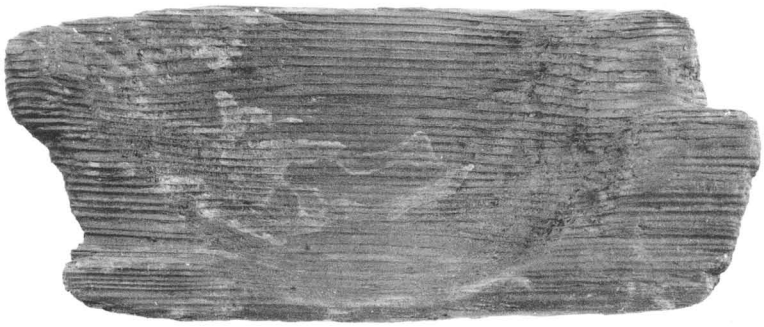
PW32



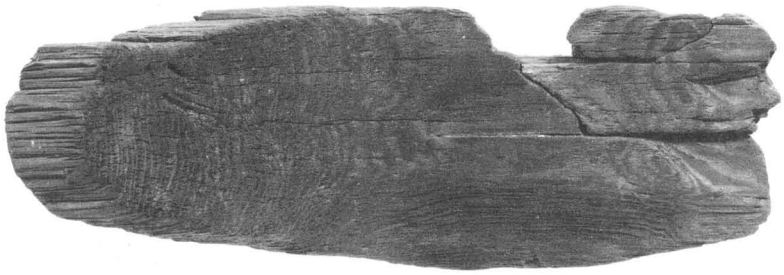
PW33

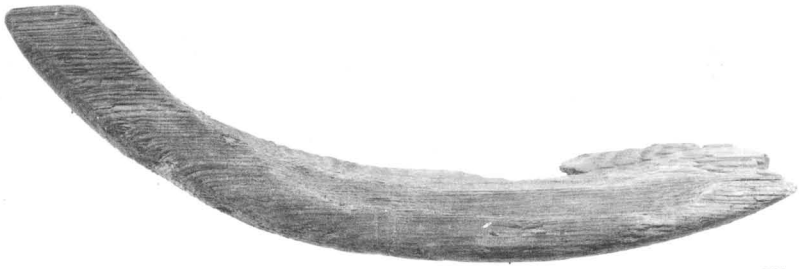
PW35





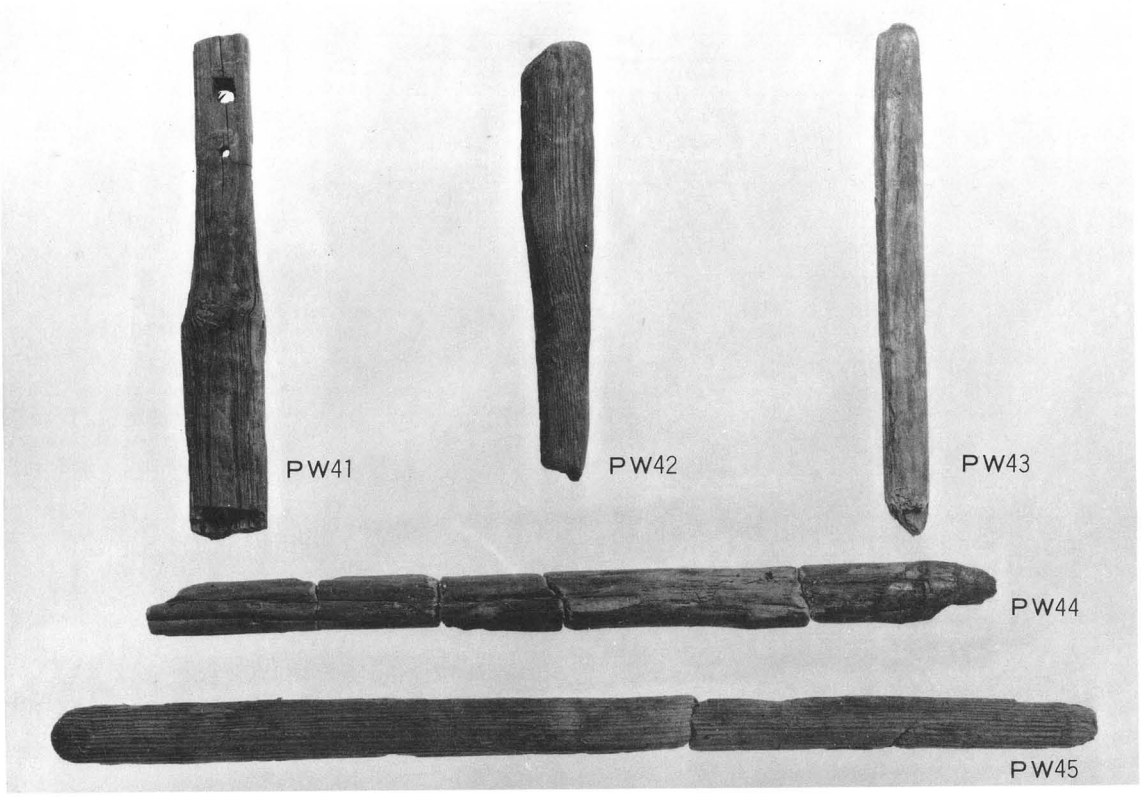
PW36



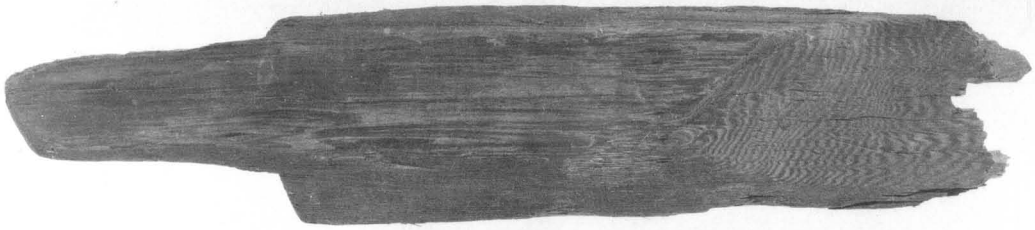


PW37

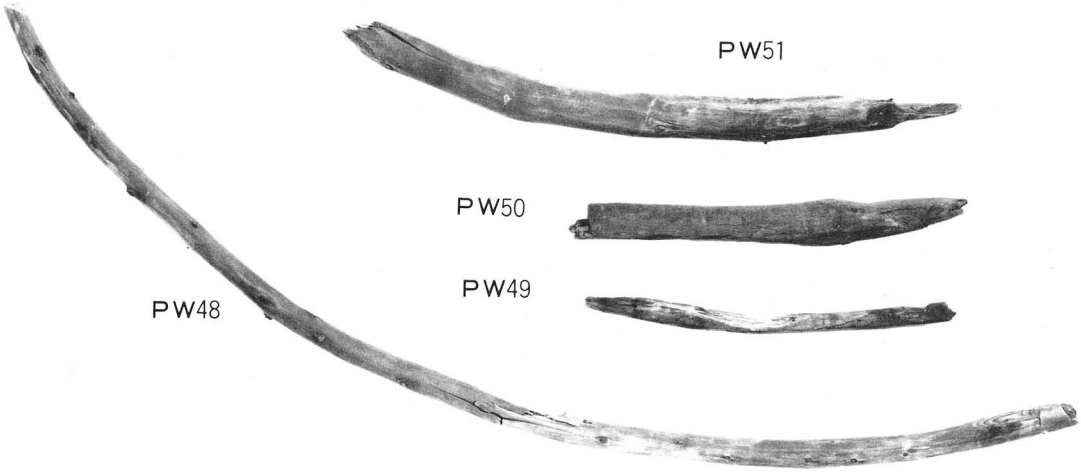
PW38



PW47



PW46

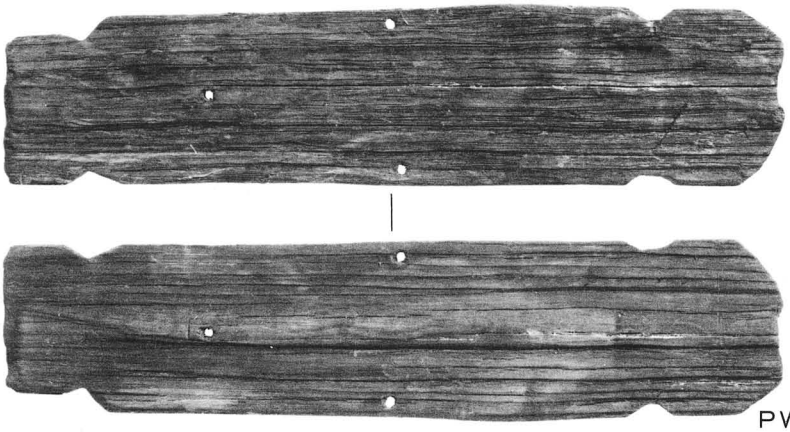


PW53

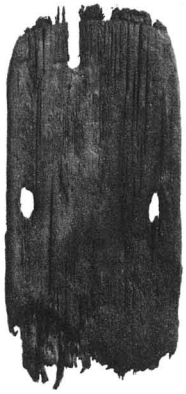
PW54

PW55

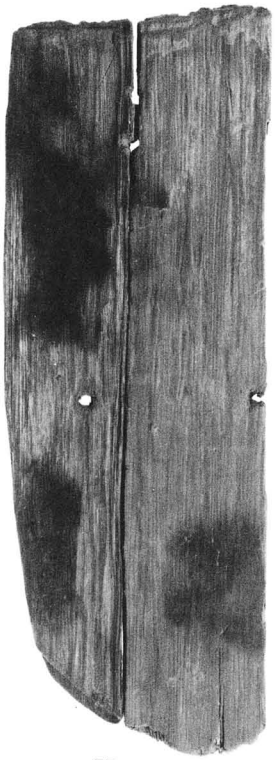
PW56



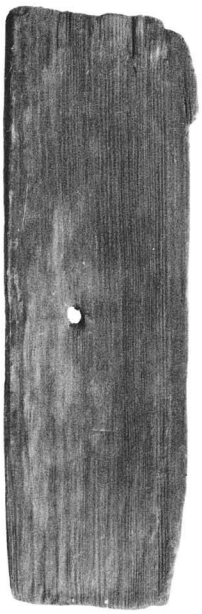
PW58



PW59

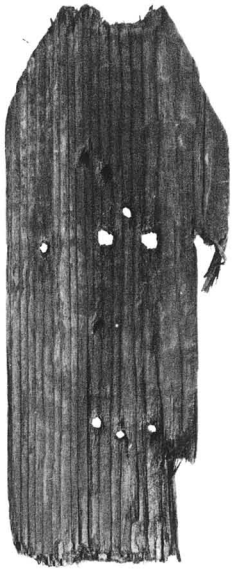


PW57



PW61

PW63



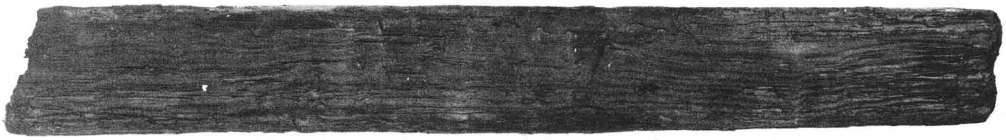
PW62

PW65

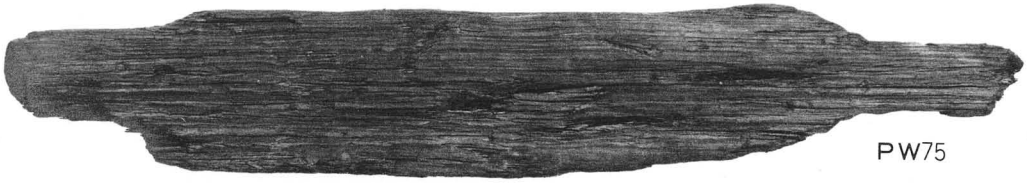
PW66

PW68

PW73



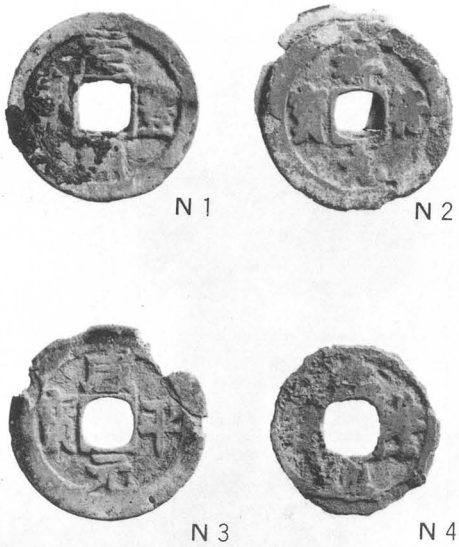
PW74



PW75

PW76

S 950

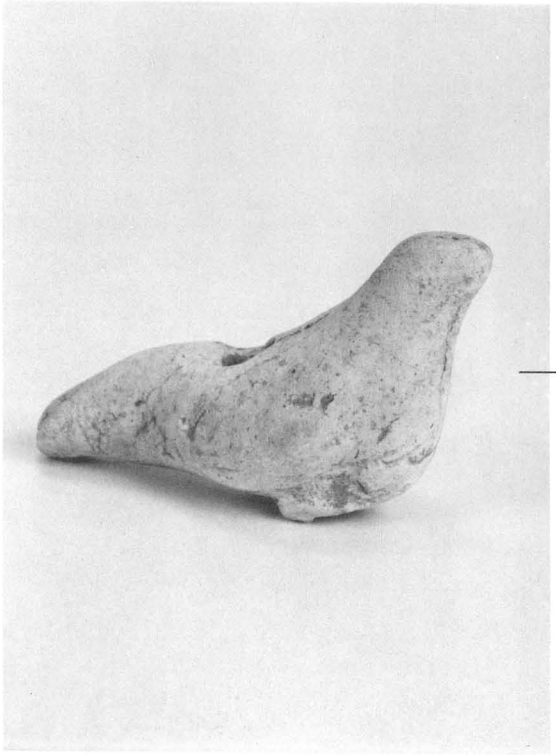


N 1

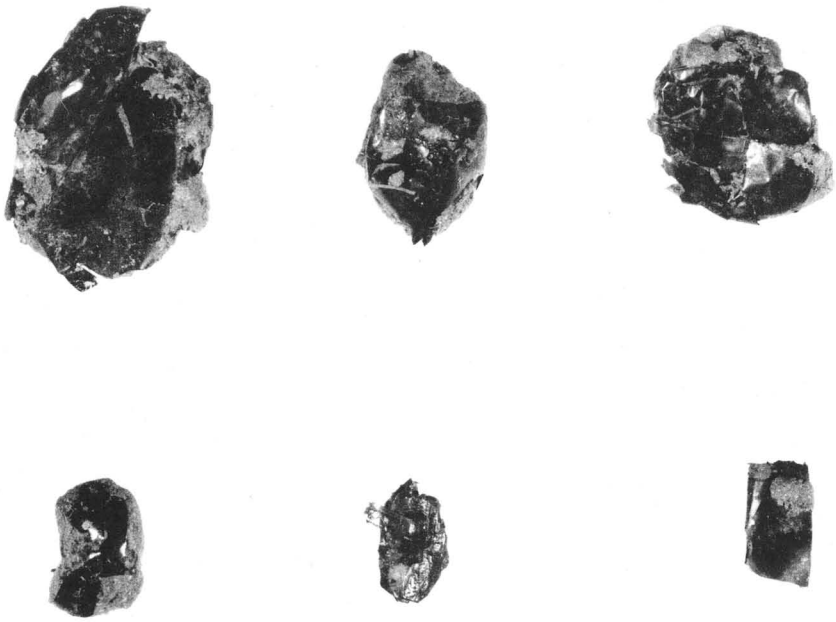
N 2

N 3

N 4



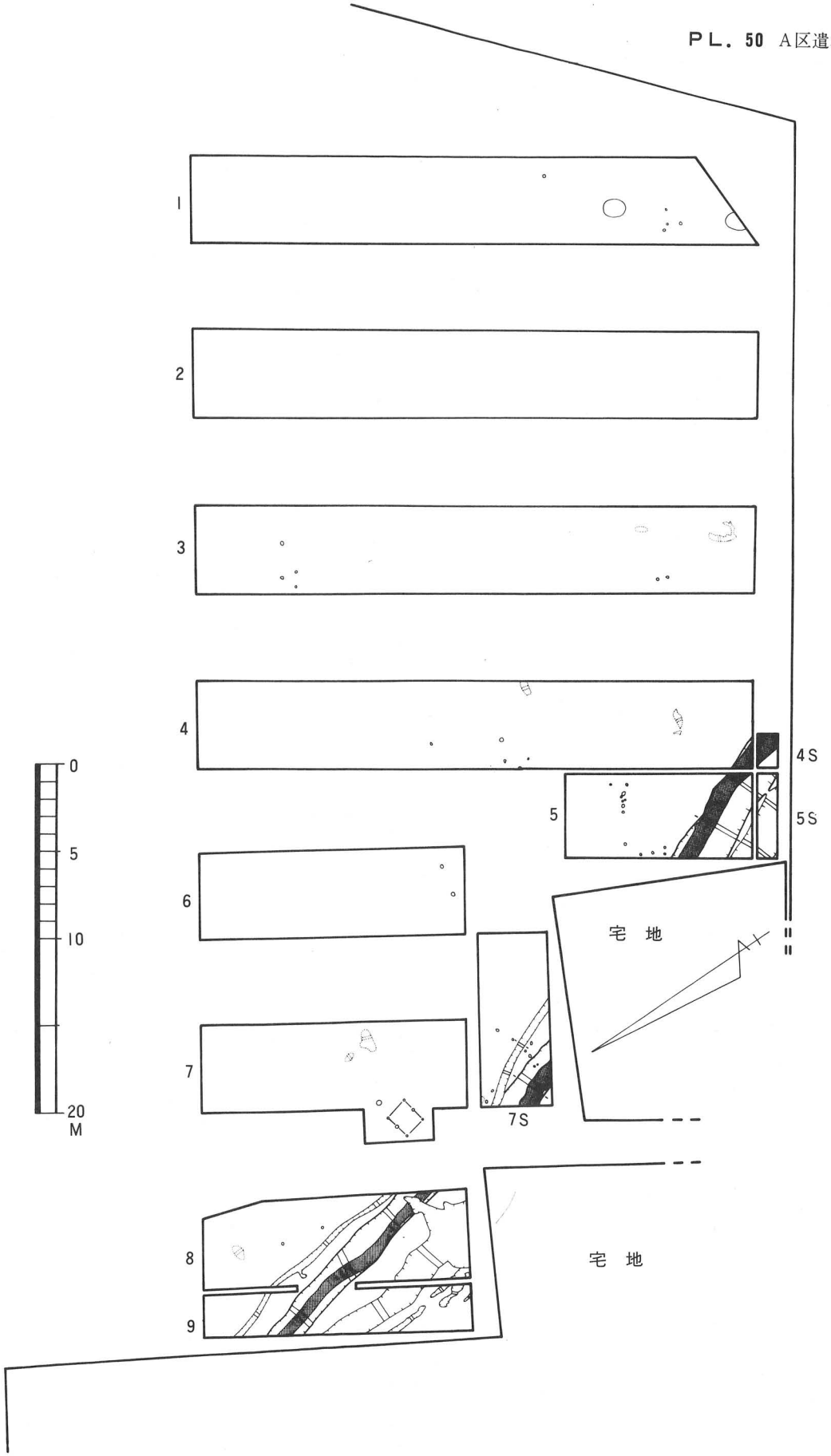
I 307



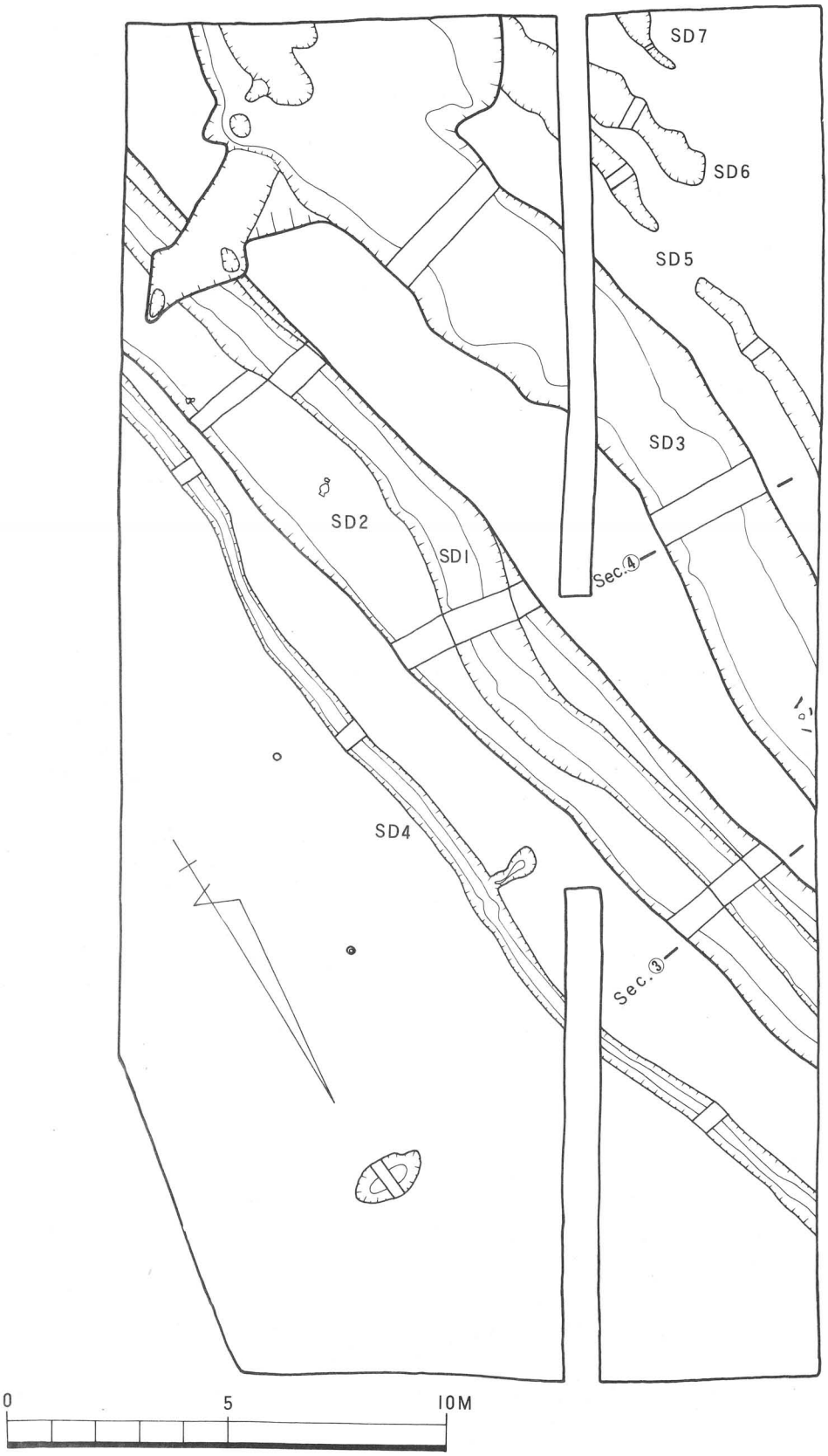
昆 虫 遺 体

種 子

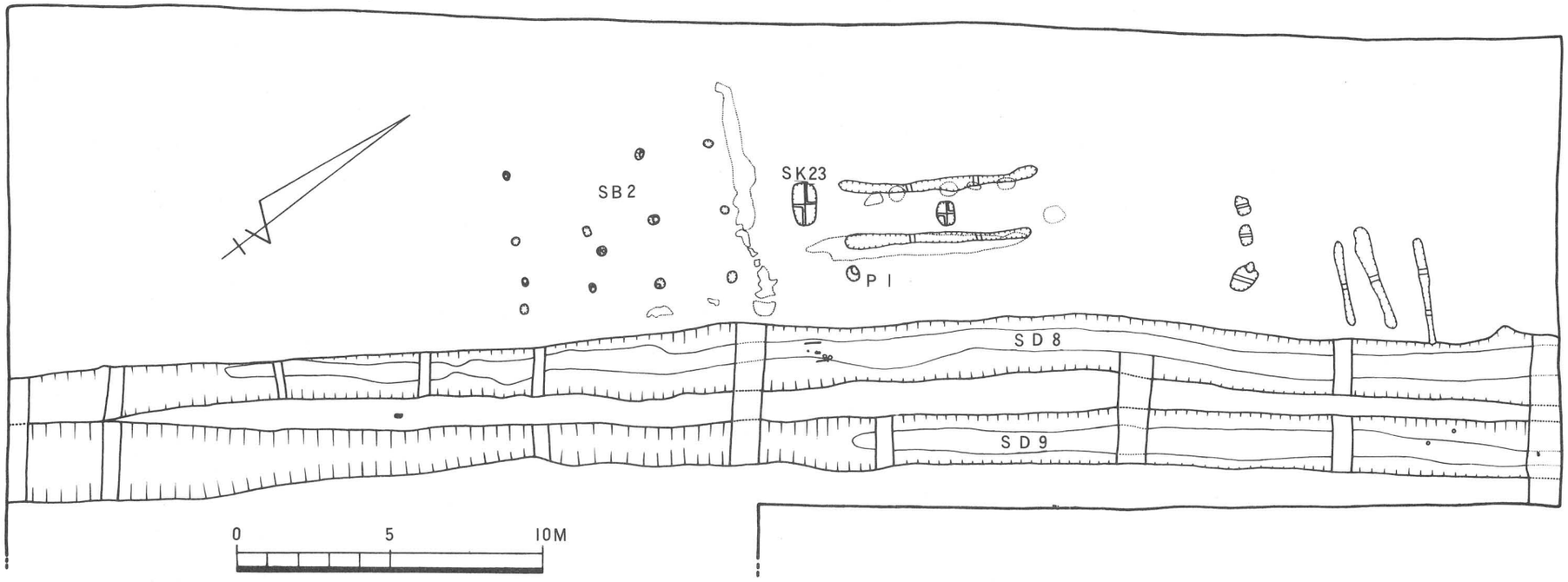
PL. 50 A区遺構全図



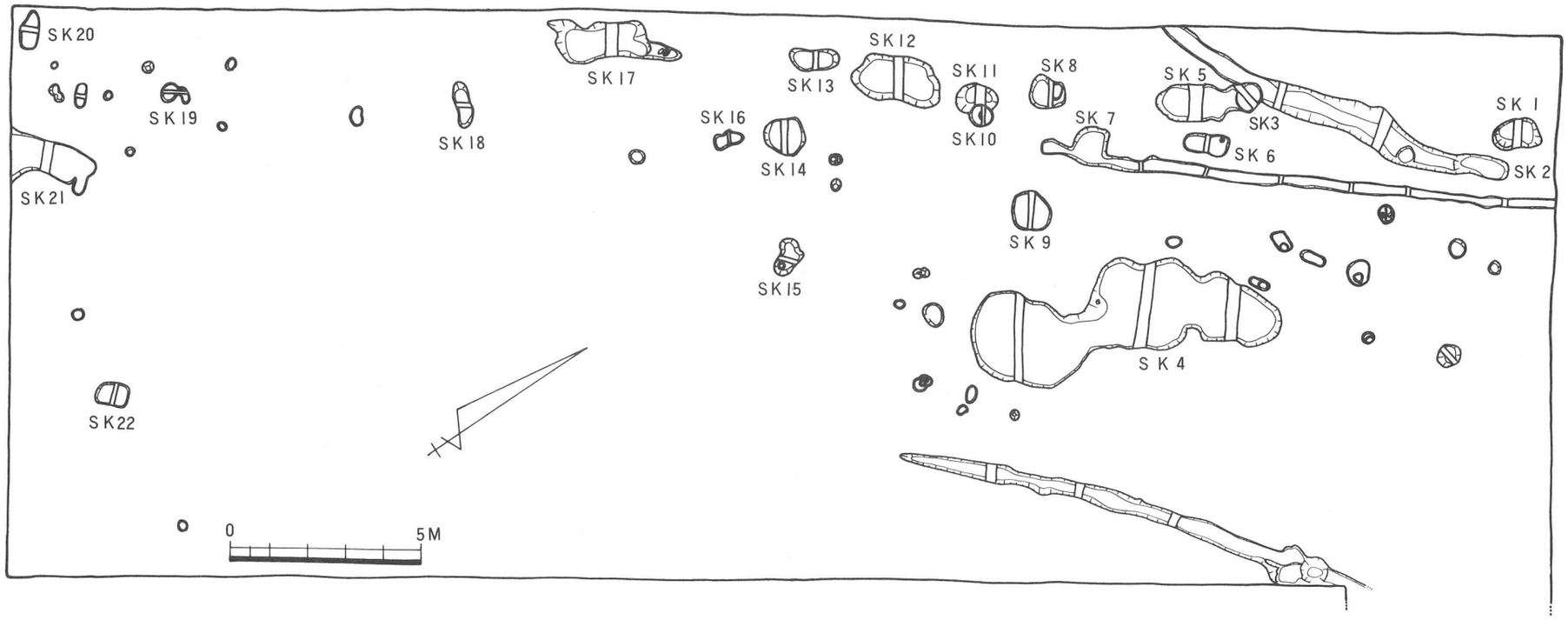
PL. 51　A8・9トレンチ遺構図



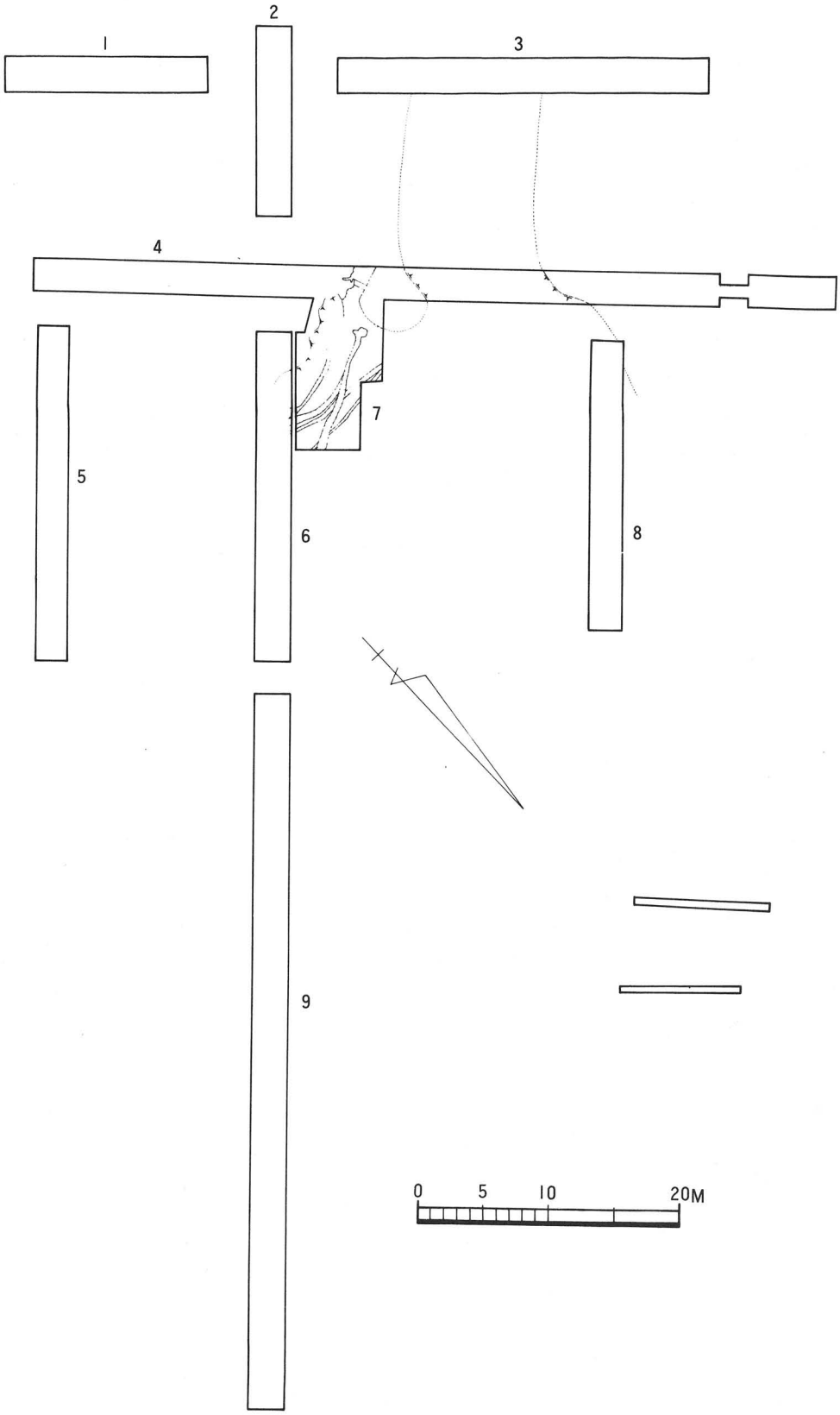
B1トレンチ遺構図



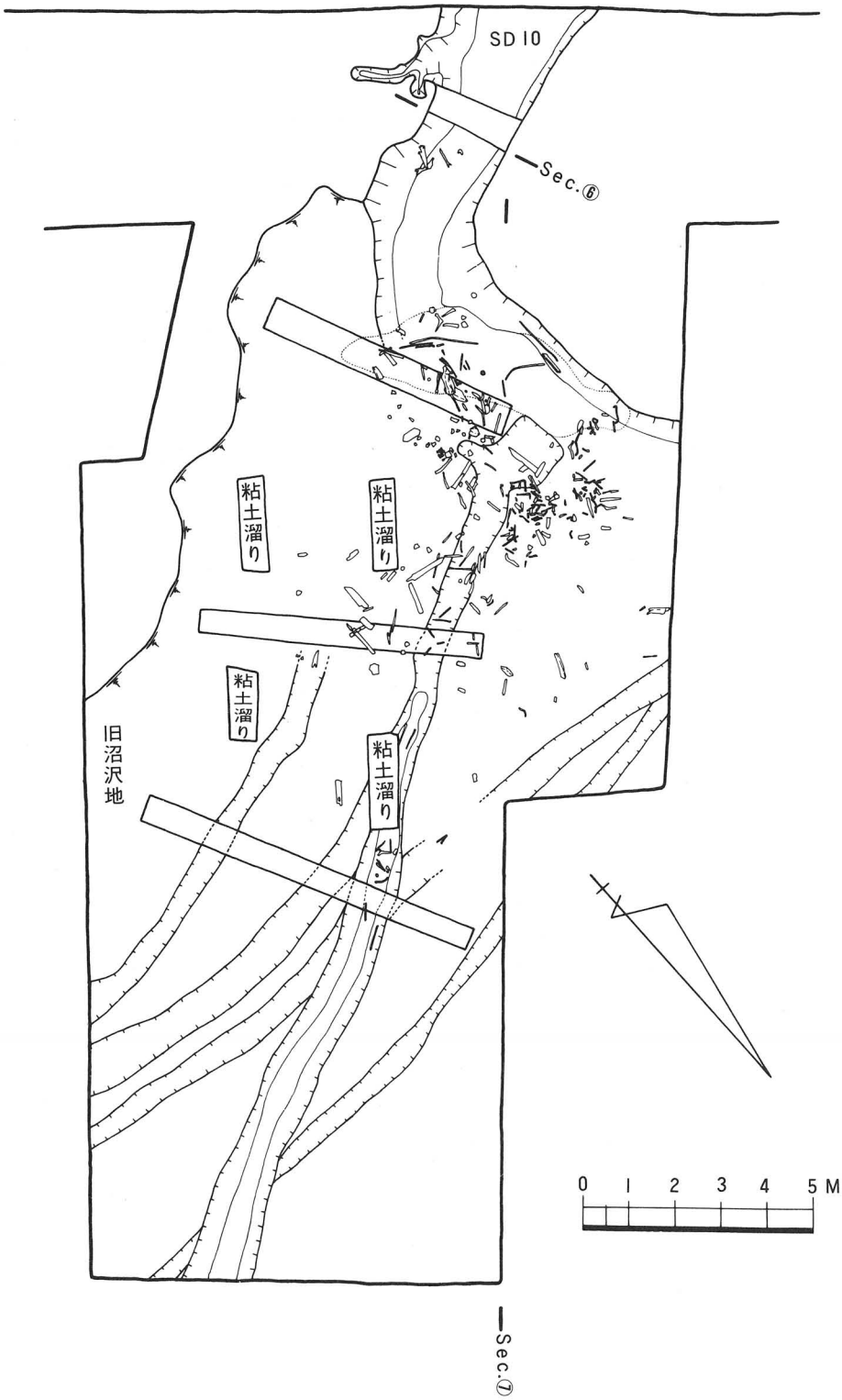
B2トレンチ遺構図



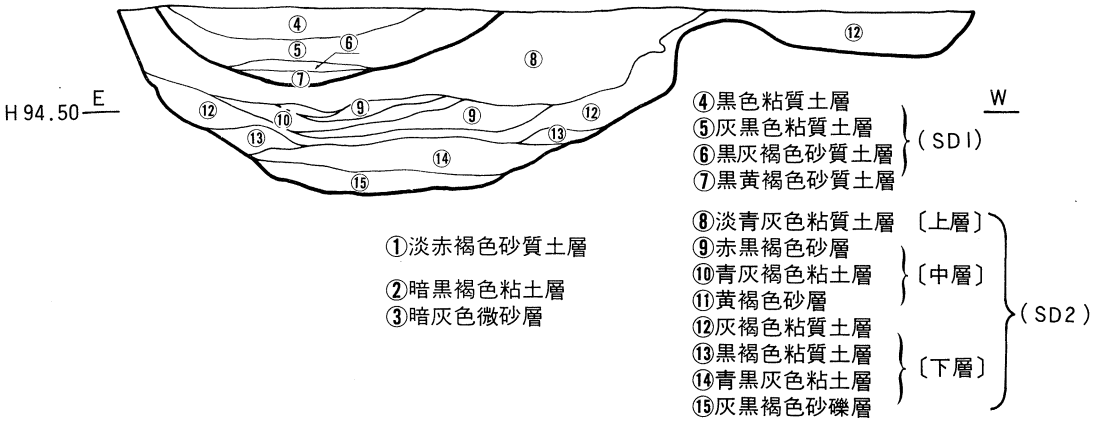
PL. 53 C区遺構全図



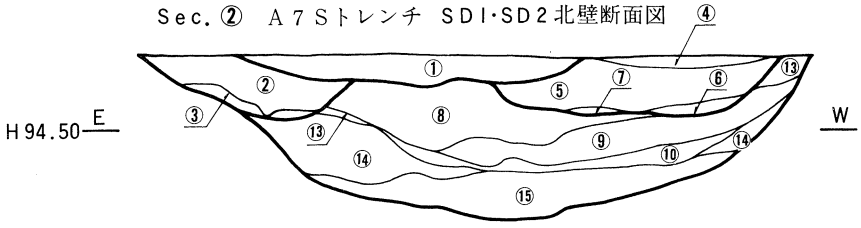
PL. 54　C7トレンチSD10開口部



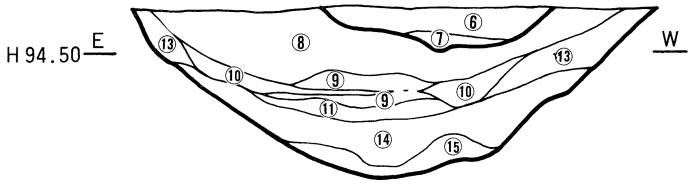
Sec.① A5トレンチ SD1・SD2北壁断面図



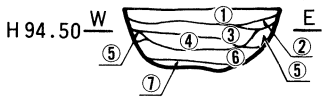
Sec.② A7Sトレンチ SD1・SD2北壁断面図



Sec.③ A8トレンチ SD1・SD2北壁断面図

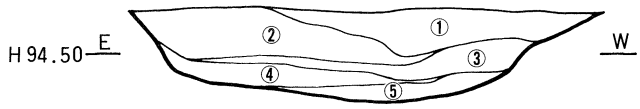


Sec.⑤
A7Sトレンチ SD4南壁断面図

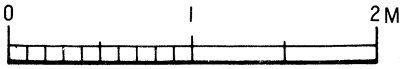


①淡灰褐色粘質土層
②灰褐色粘質土層
③暗灰褐色砂層
④暗茶褐色砂層
⑤灰黒色粘質土層
⑥淡茶褐色砂層
⑦黄褐色砂層

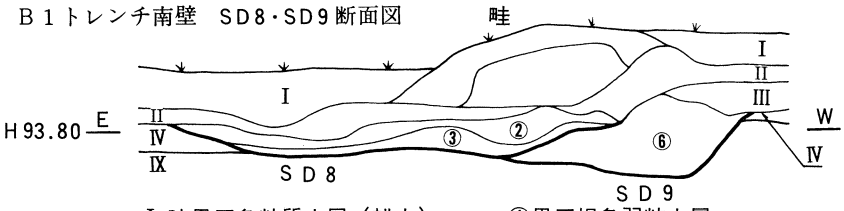
Sec.④ A8トレンチ SD3北壁断面図



①黄灰色砂質土層
②灰褐色砂質土層
③灰色砂質土層
④黄灰色砂礫層
⑤青灰褐色砂層



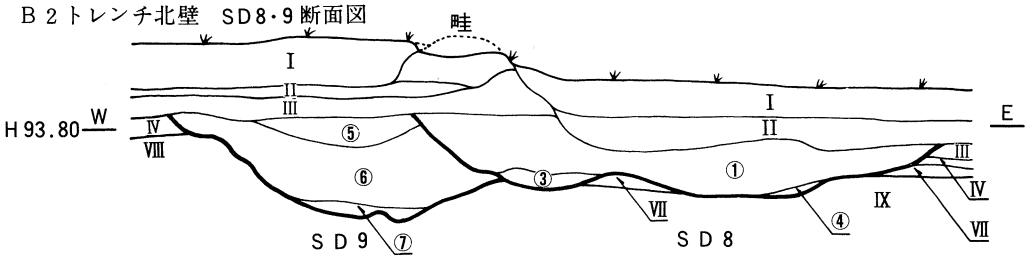
B1トレンチ南壁 SD8・SD9断面図

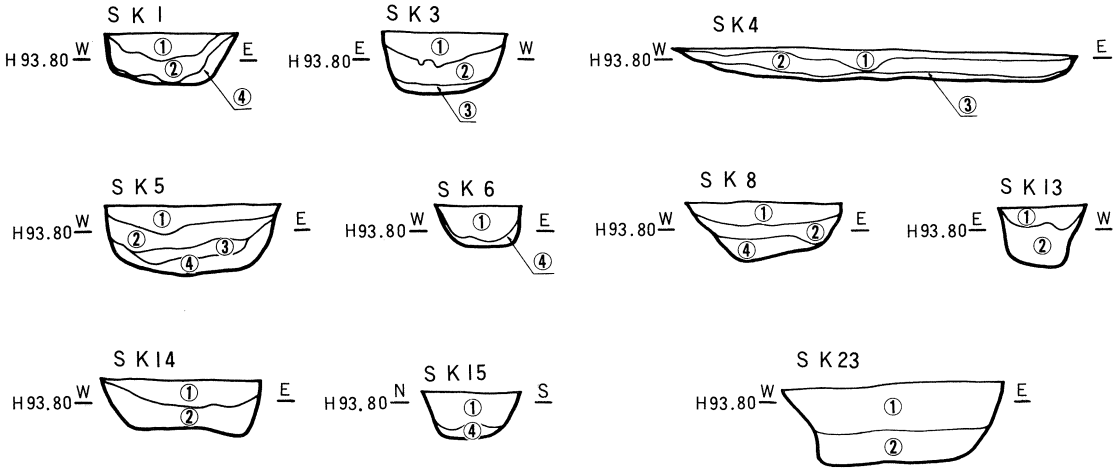


I 暗黒灰色粘質土層（耕土）
II 黄灰色粘質土層（床土）
III 灰褐色粘質土層
IV 黒灰褐色粘質土層
VII 黒灰褐色泥炭層（旧沼沢地）
VIII 黄褐色粘土層
IX 青灰色強グライ粘土層

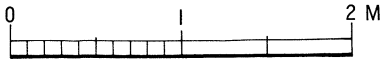
①黒灰褐色弱粘土層
②青黒褐色砂層
③黄褐色砂層
④灰白色砂層
（SD8）
⑤黒灰褐色弱粘質土層
⑥灰黒色粘土層
⑦灰白色砂層
（SD9）

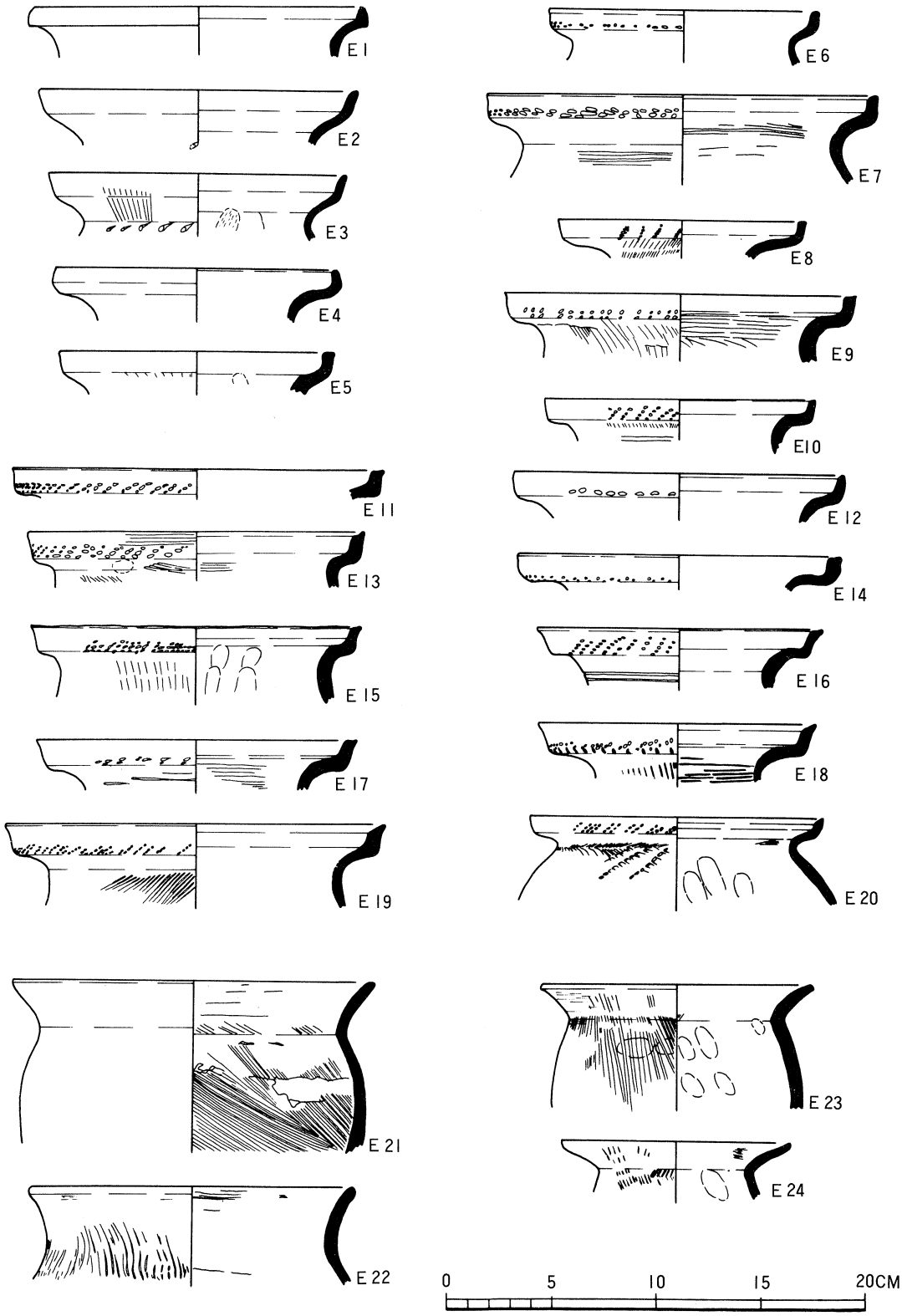
B2トレンチ北壁 SD8・9断面図





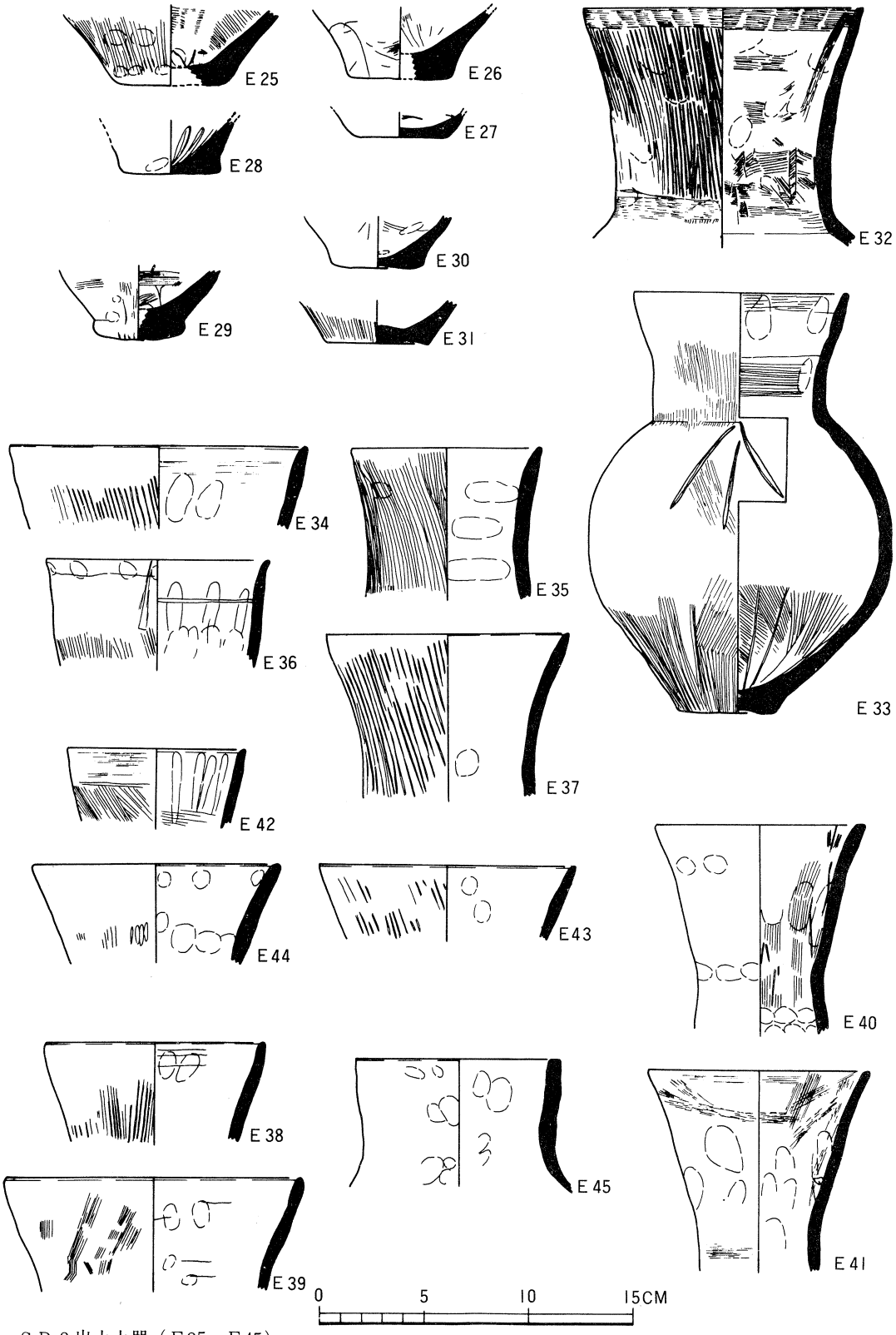
①黒灰褐色粘質土層　③灰褐色粘質土層
②暗黒灰色粘質土層　④黄灰褐色粘質土層



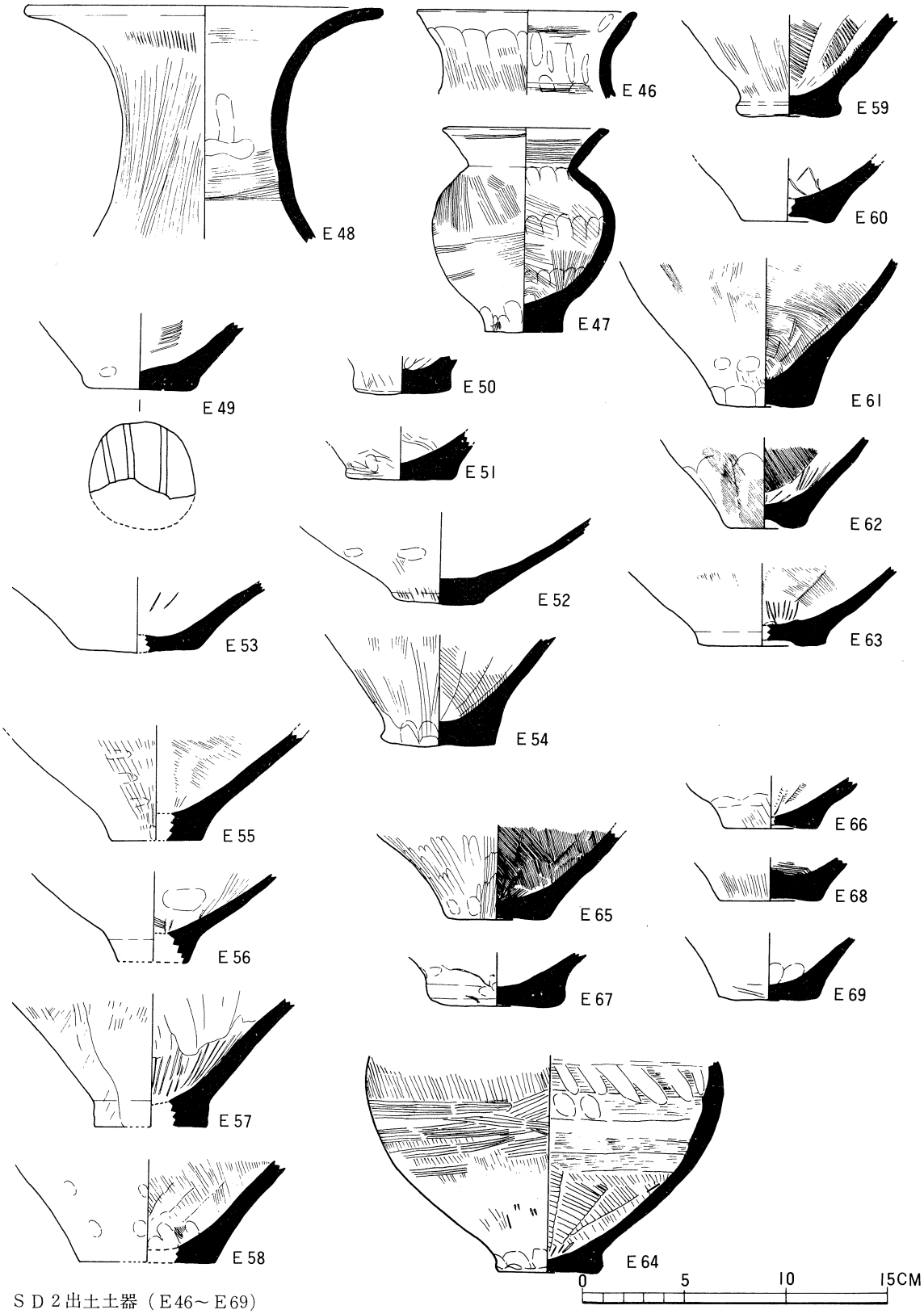


ＳＤ２出土土器（Ｅ１～Ｅ24）

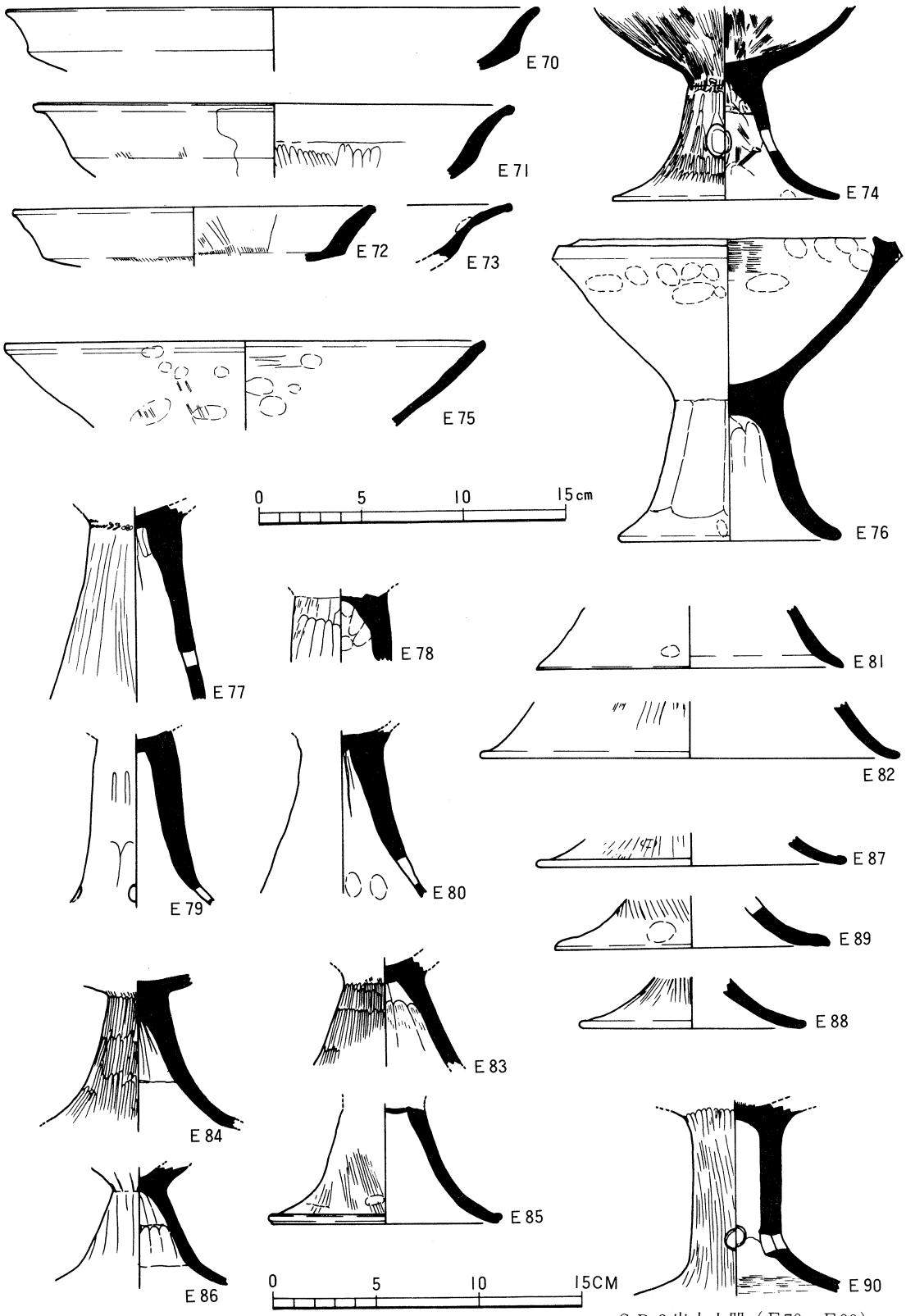
PL. 58　A区出土土器実測図



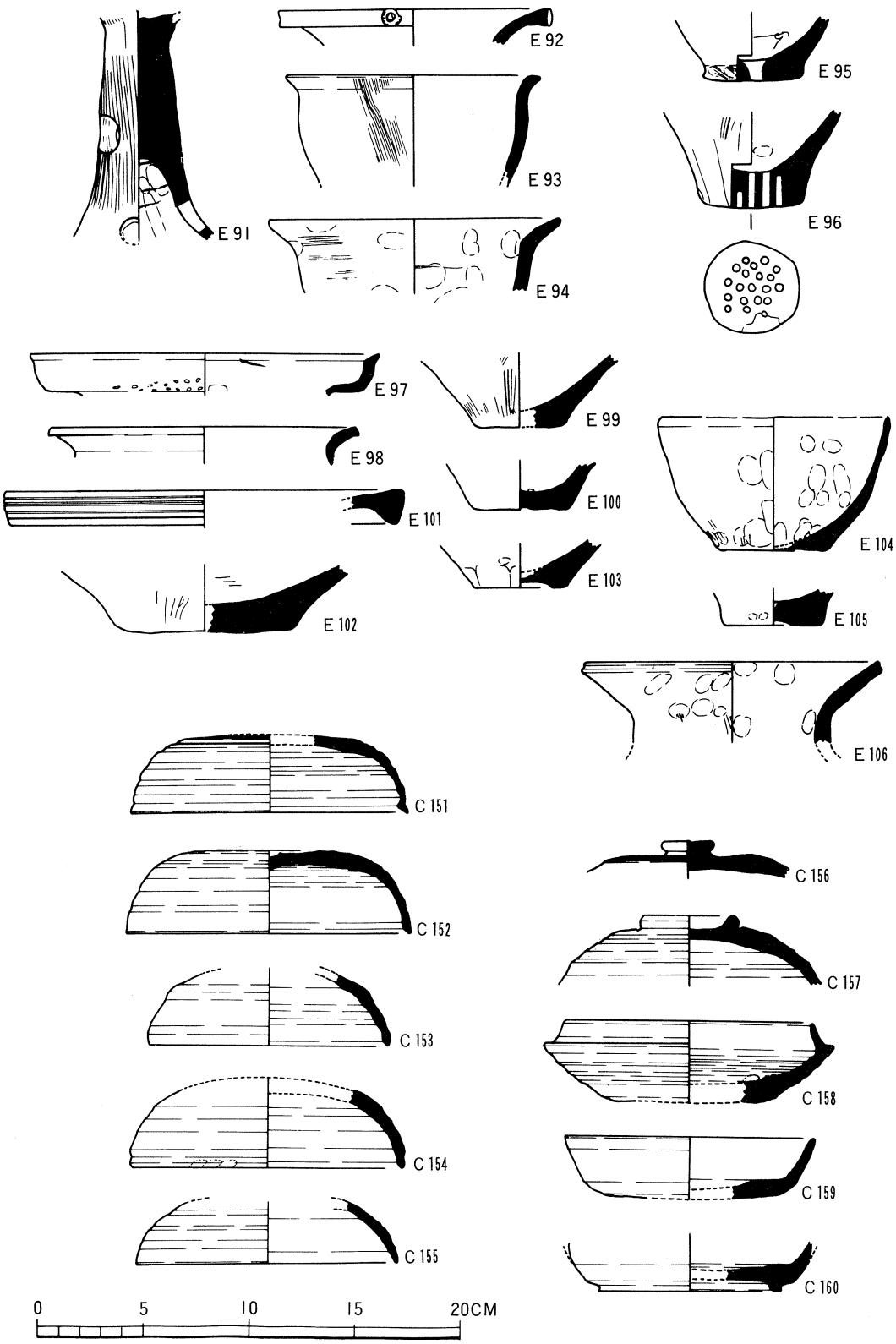
ＳＤ２出土土器（Ｅ25～Ｅ45）



SD2出土土器（E46～E69）

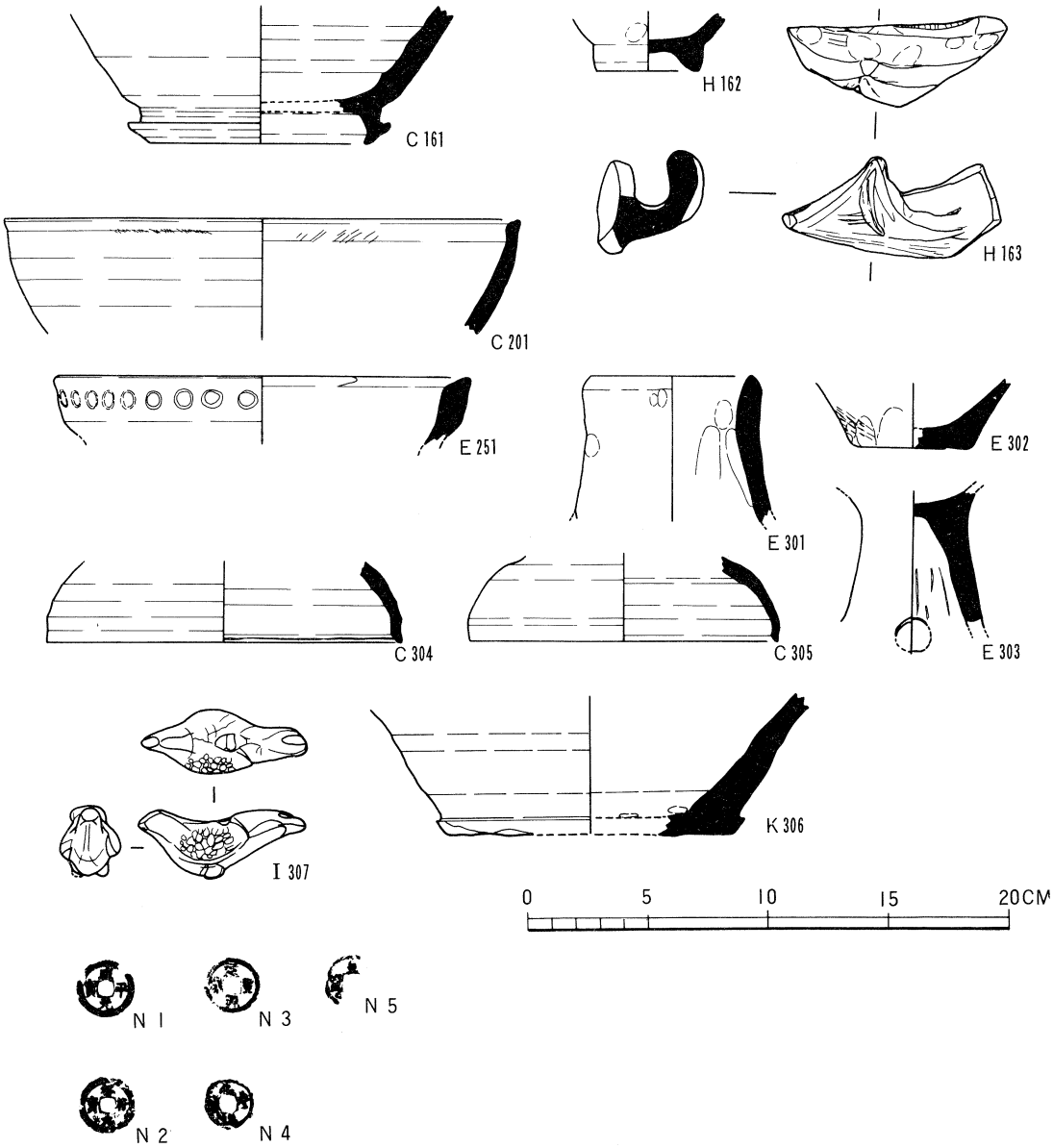


ＳＤ２出土土器（E70～E90）

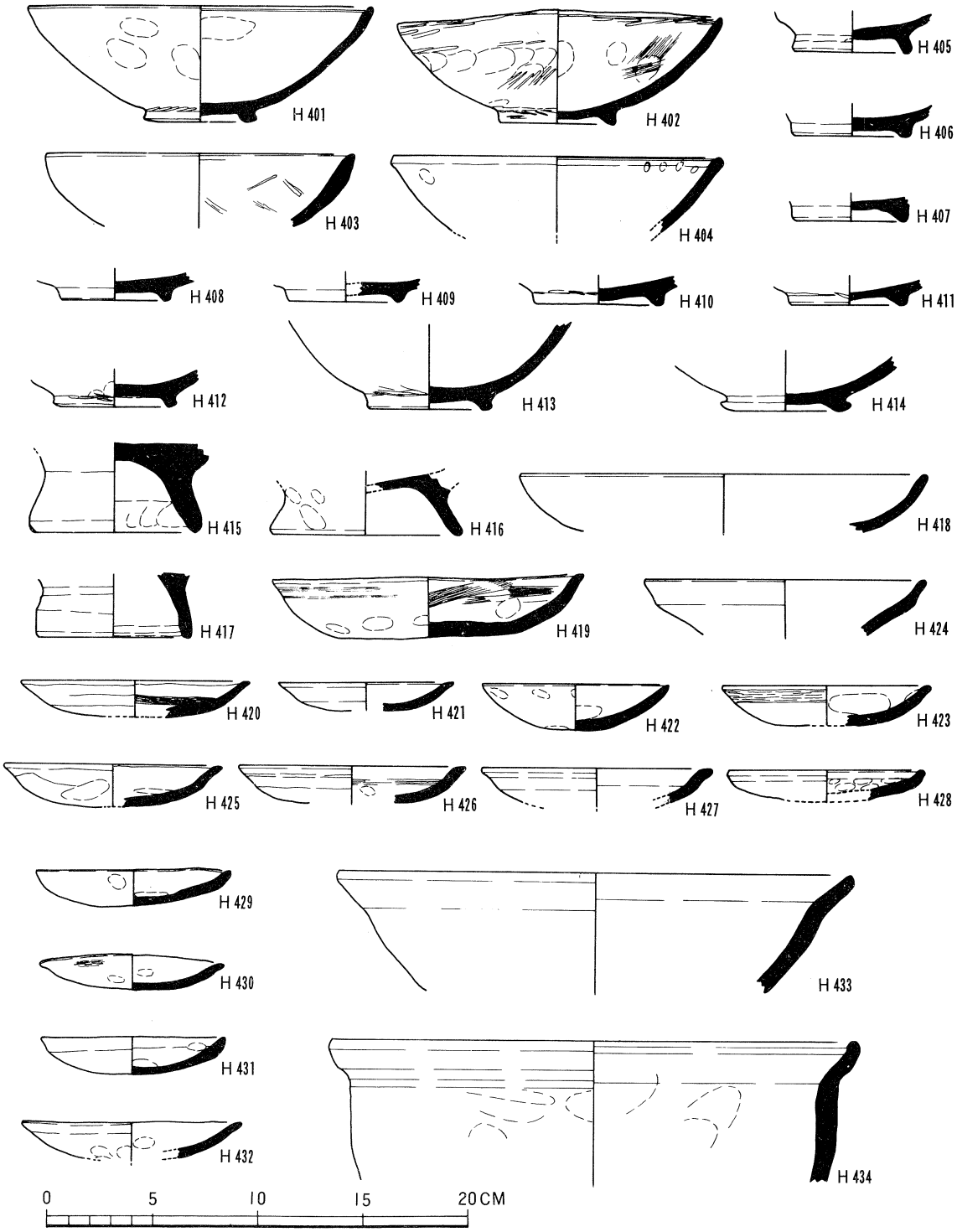


ＳＤ２出土土器（Ｅ91～Ｅ106）ＳＤ３出土土器（Ｃ151～Ｃ160）

PL. 62　A区出土土器実測図、古銭拓本

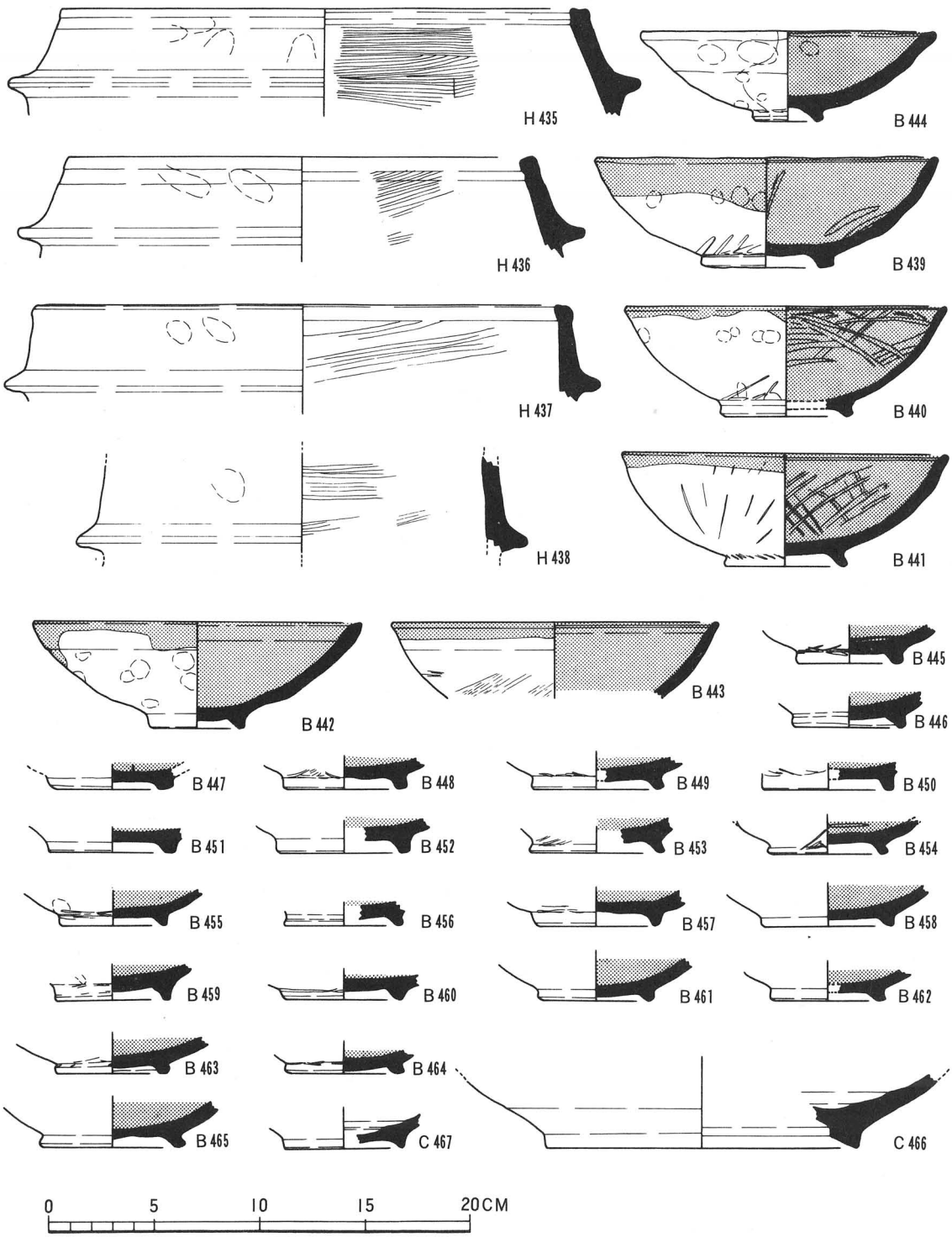


ＳＤ３出土土器（Ｃ161・Ｈ162・Ｈ163）ＳＥ１出土土器（Ｃ201・Ｅ251）
包含層その他出土土器（Ｅ301～Ｅ303・Ｃ304・Ｃ304・Ｃ305・Ｋ306・Ｉ307）古銭（Ｎ１～Ｎ５）

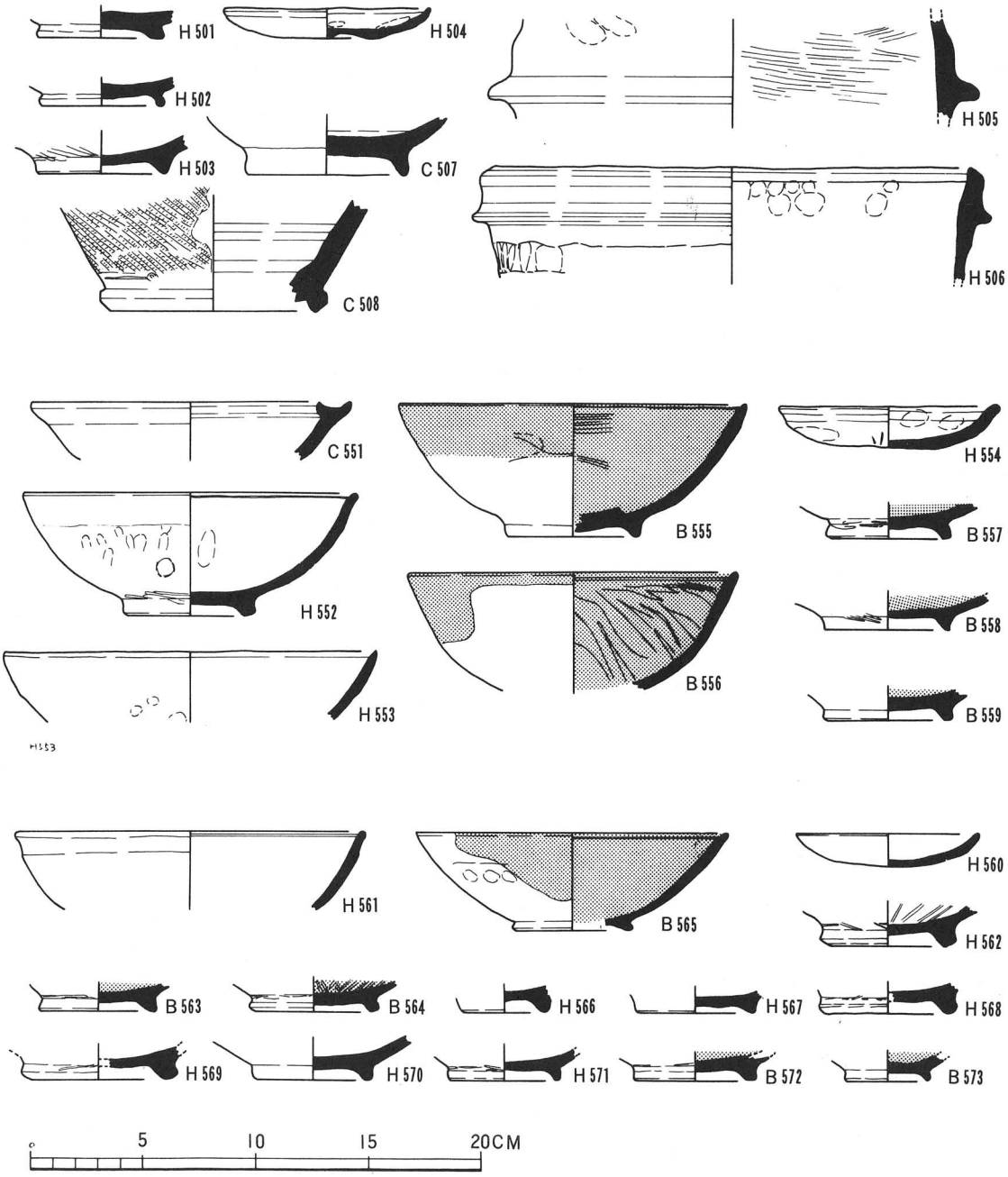


ＳＤ８出土土器（H401～H434）

PL. 64　B区出土土器実測図

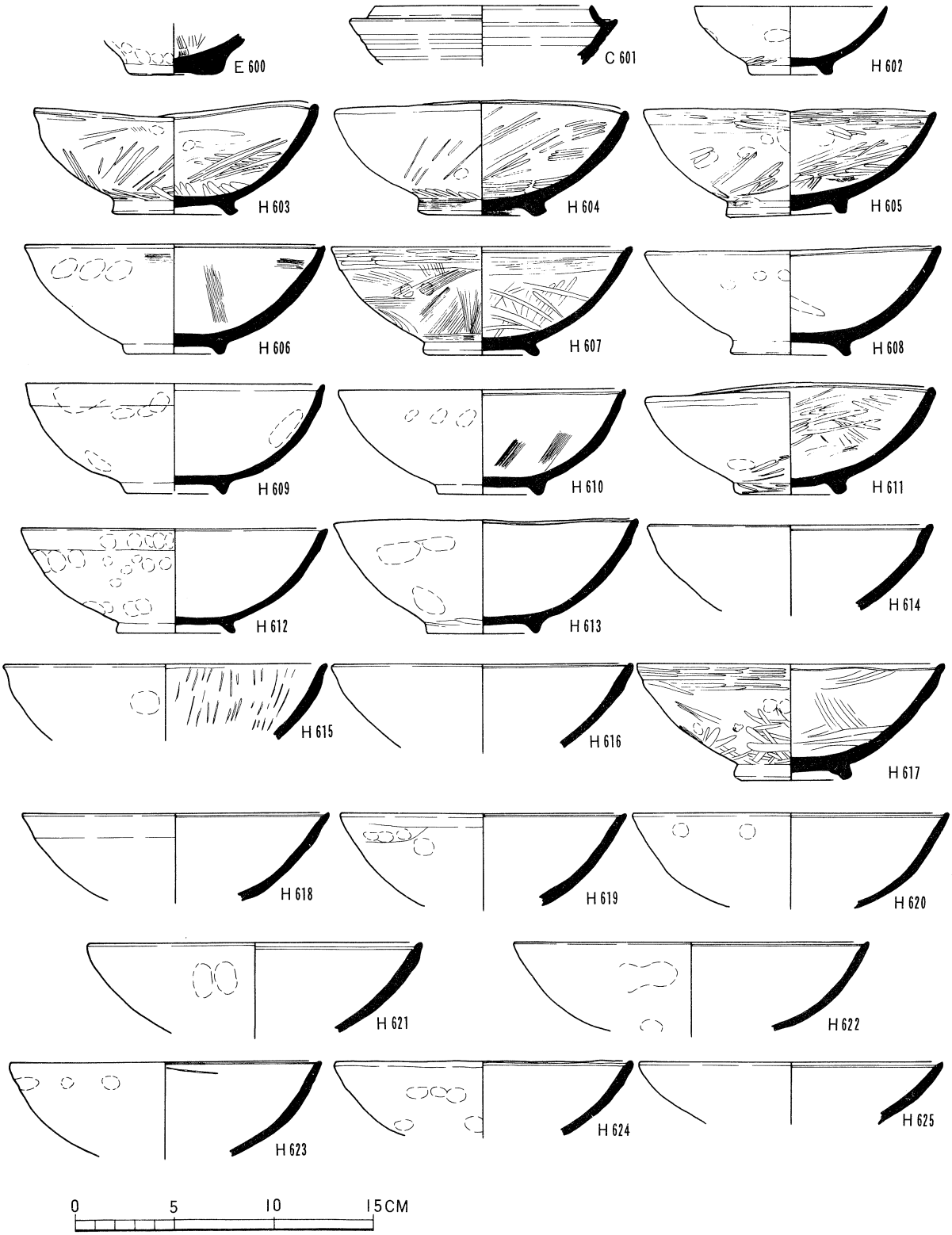


ＳＤ８出土土器（Ｈ435～Ｈ438、Ｂ439～Ｂ465、Ｃ466・Ｃ467）

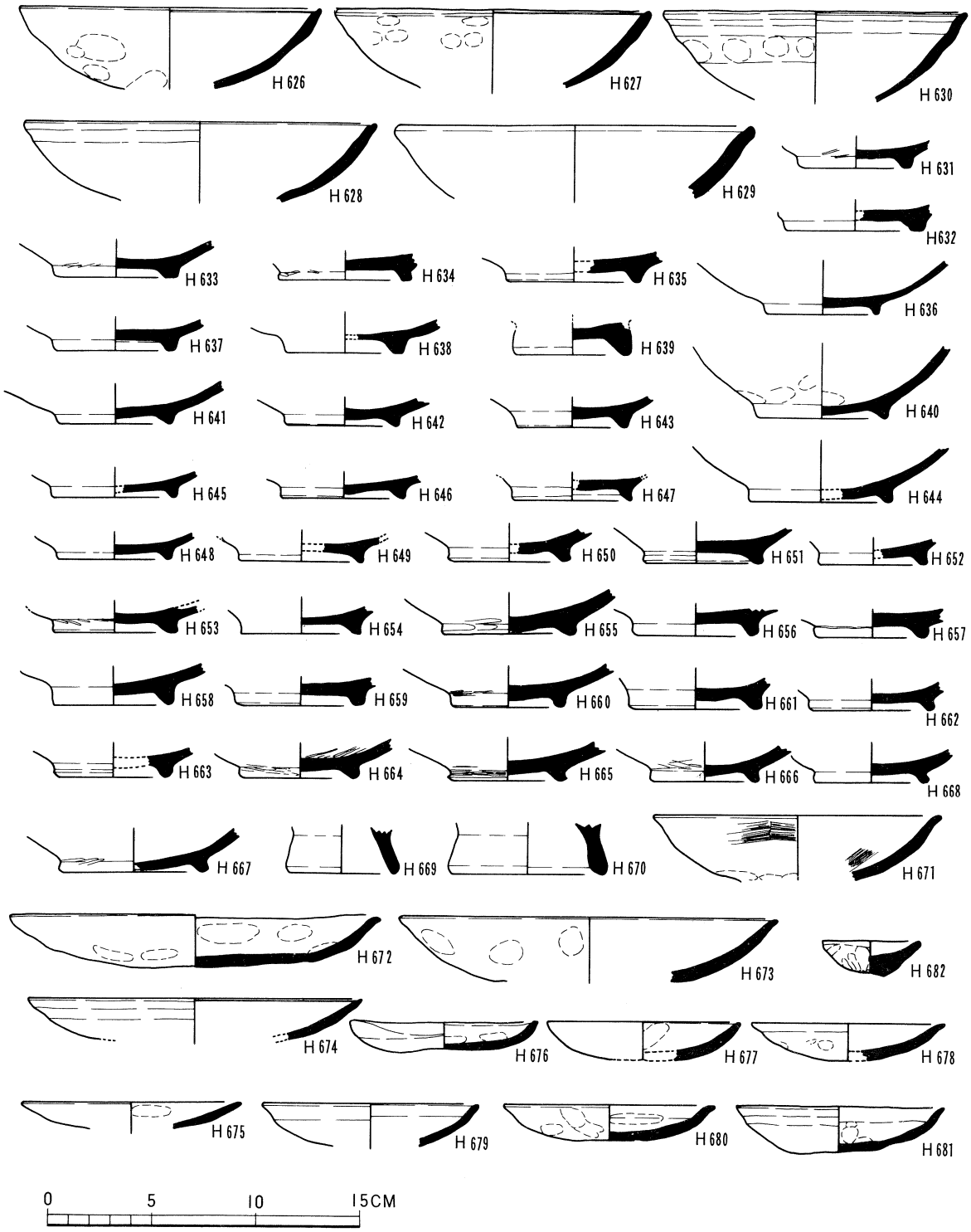


ＳＤ９出土土器（Ｈ501～Ｈ506，Ｃ507・Ｃ508）　ＳＢ２出土土器（Ｃ551～Ｈ552～Ｈ554，Ｂ555～Ｂ559）
Ｐ１ほか出土土器（Ｈ560～Ｈ562，Ｂ563～Ｂ565，Ｈ566～Ｈ571，Ｂ572～Ｂ573）

PL. 66　B区出土土器実測図

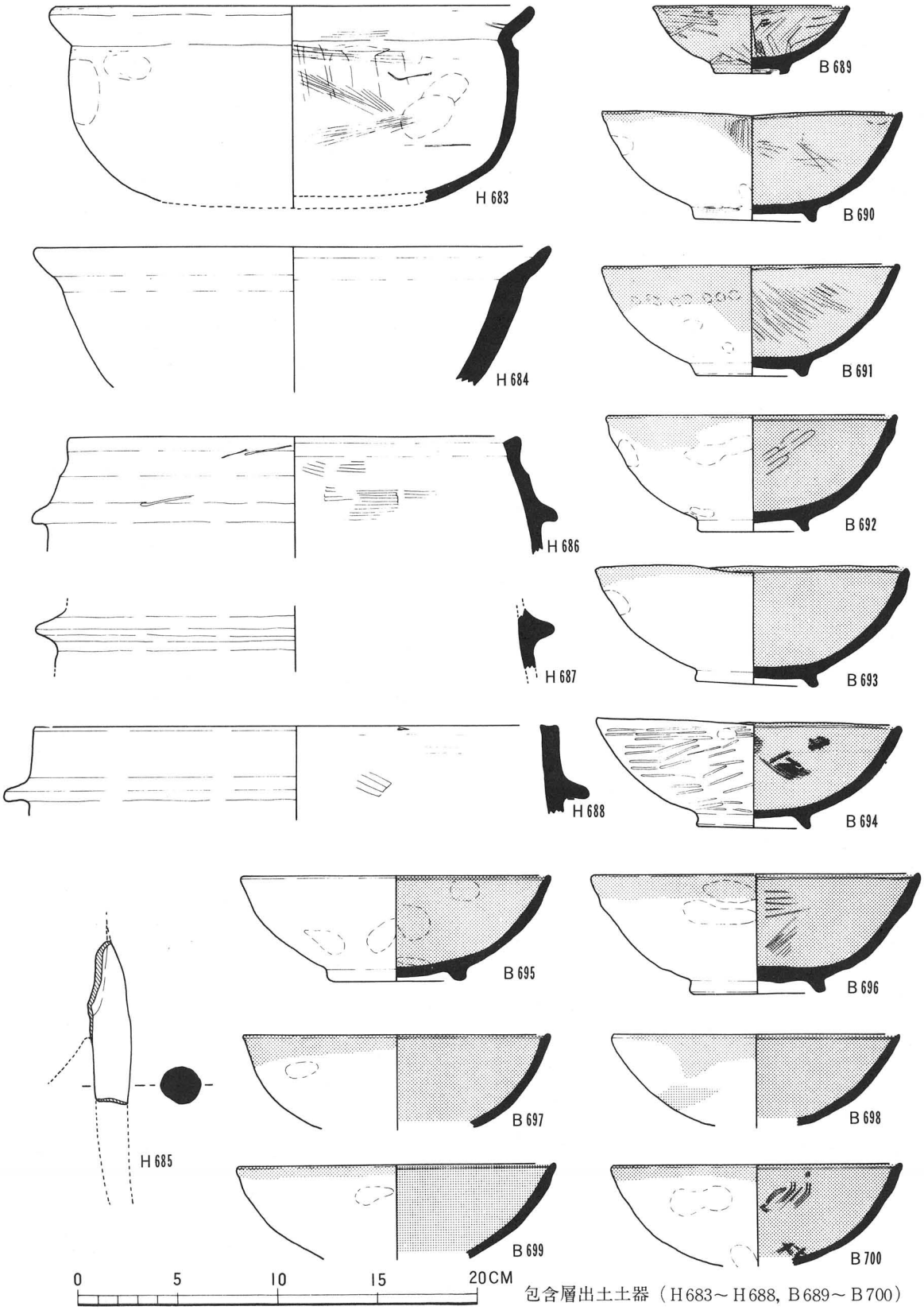


包含層出土土器（E600, C601, H602～H625）

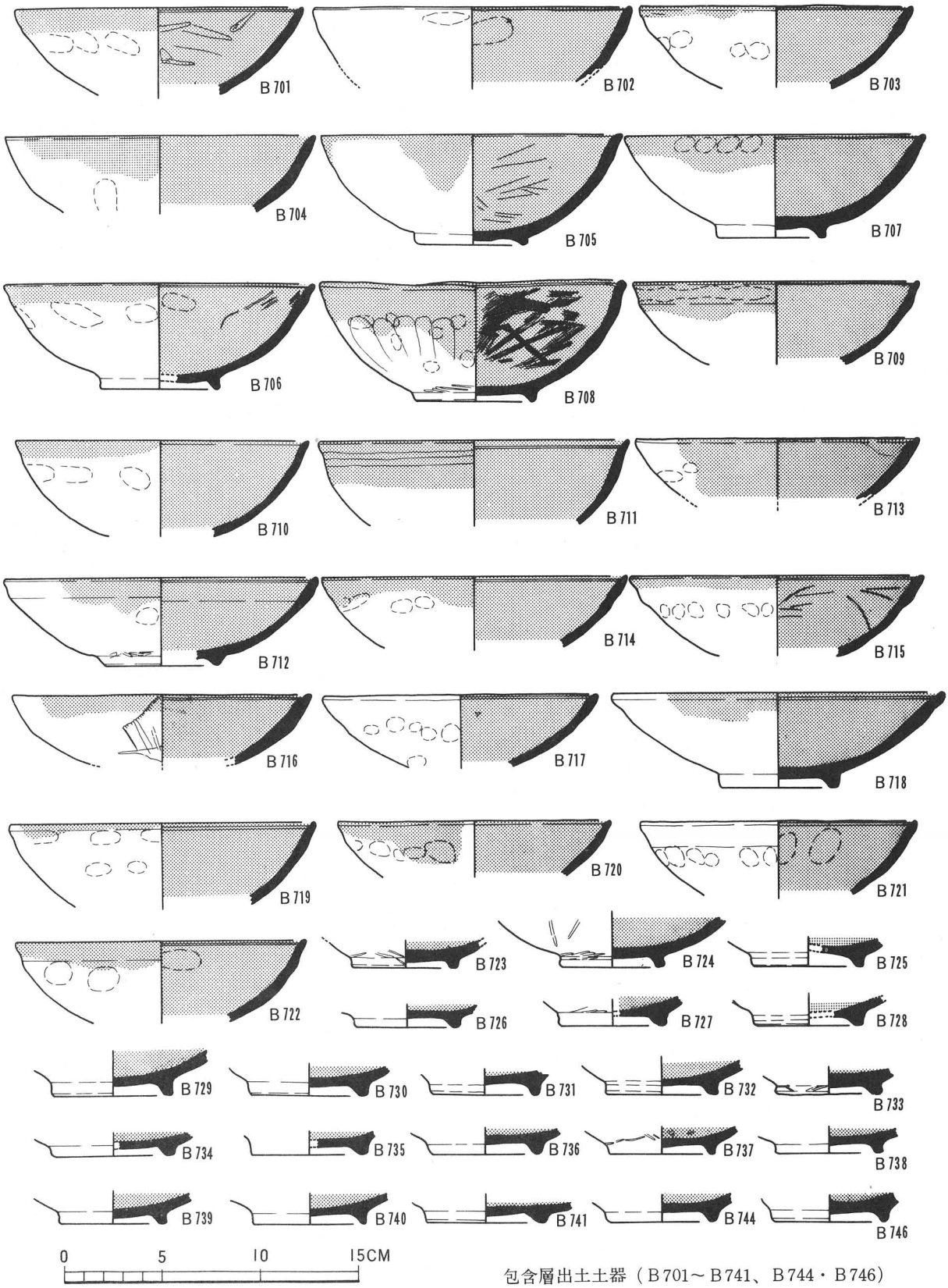


包含層出土土器（H626～H682）

PL. 68　B区出土土器実測図

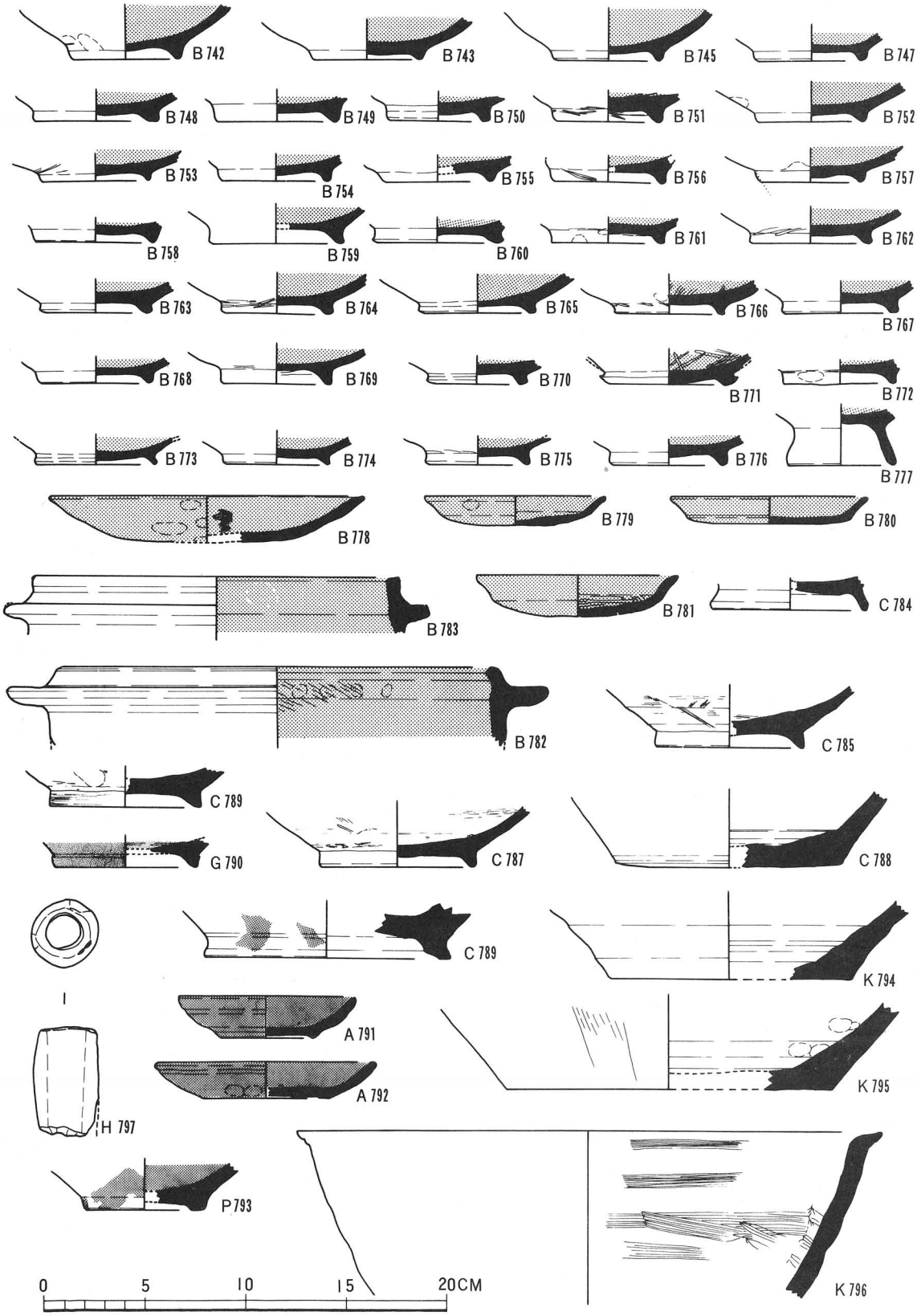


包含層出土土器（H683～H688, B689～B700）

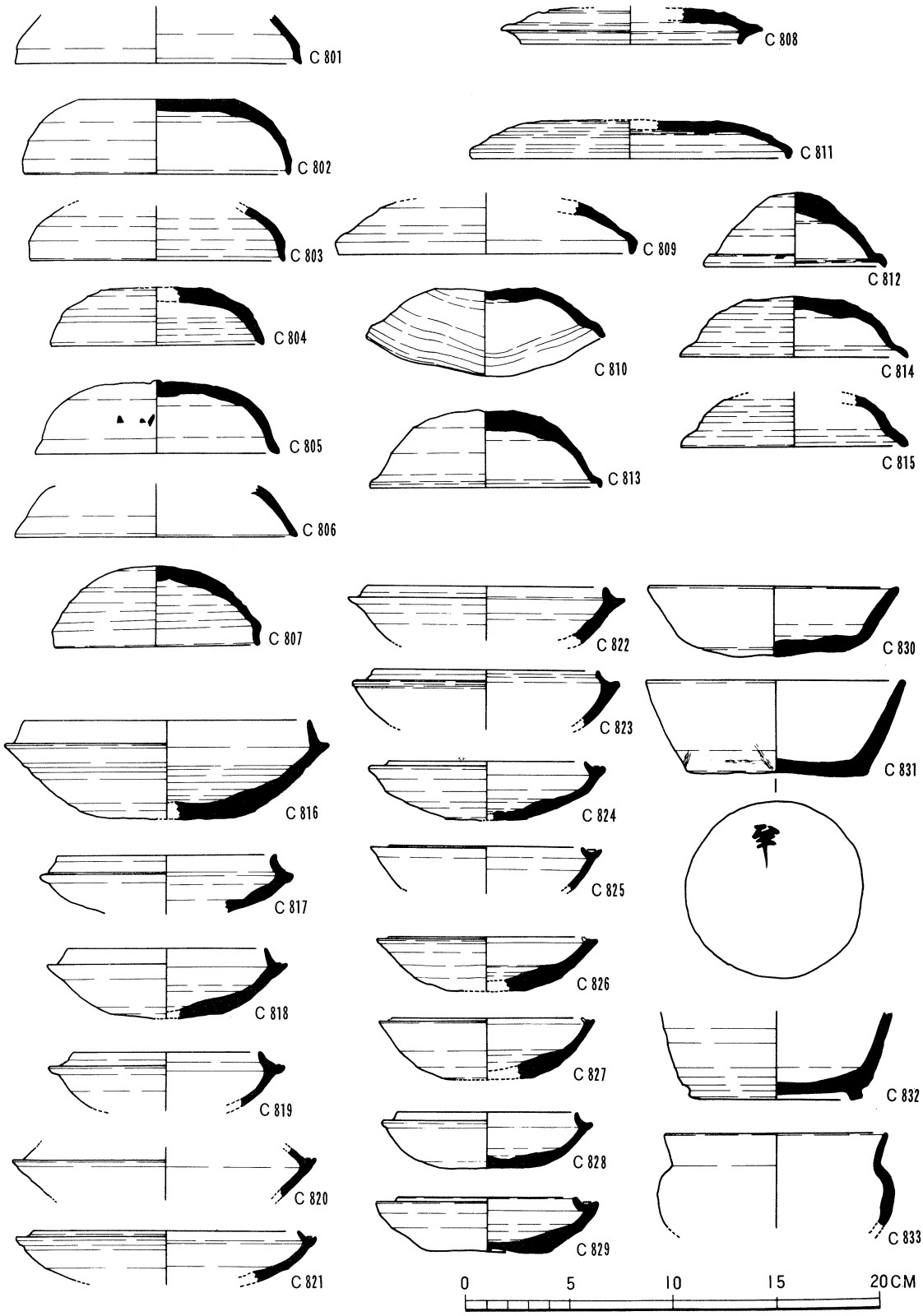


包含層出土土器（B 701～B 741、B 744・B 746）

PL. 70　B区出土土器実測図

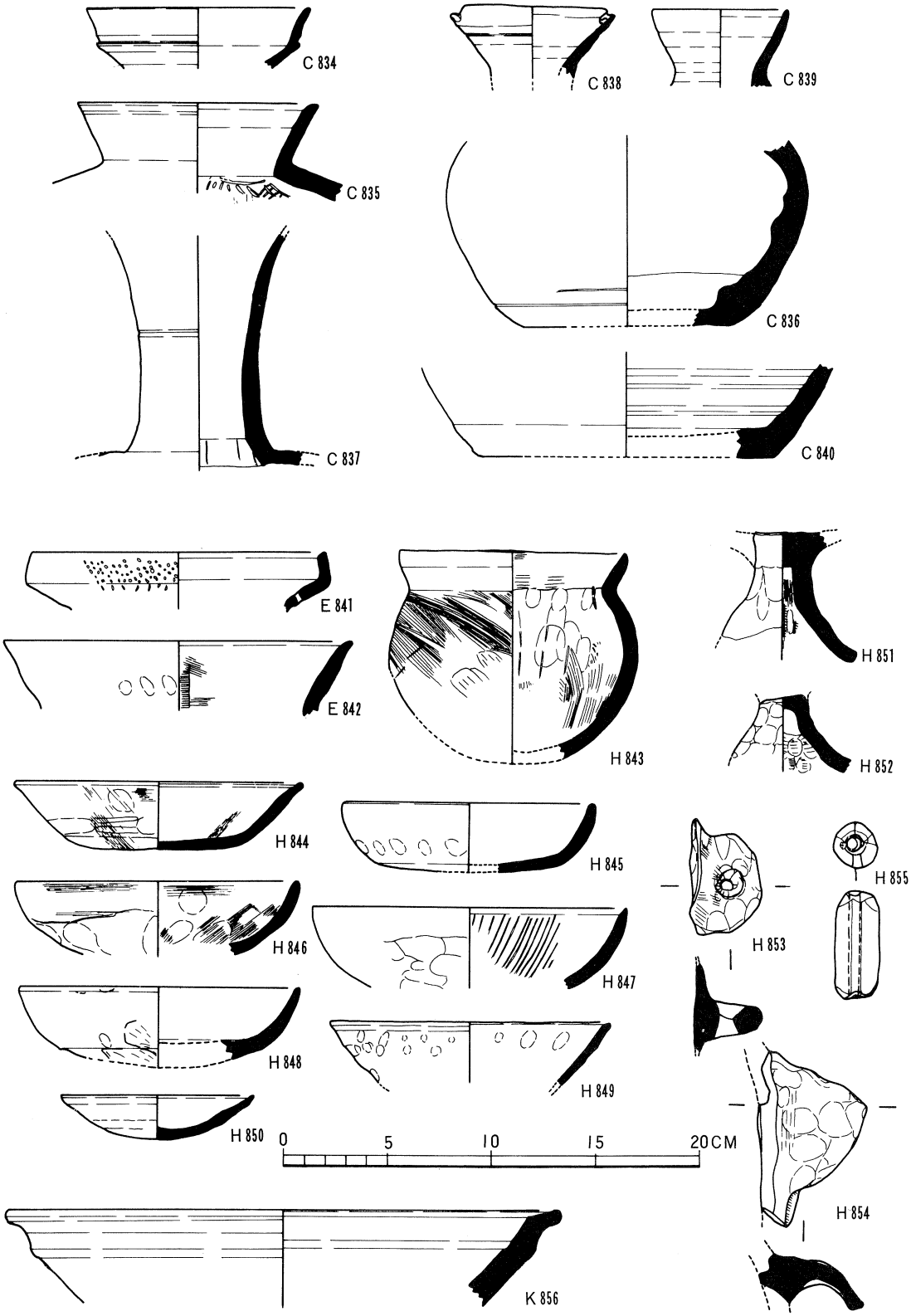


包含層出土土器（B742・B743・B745・B747～B783．C784～C789、G790、A791～792、P793、K794～K796、H797）

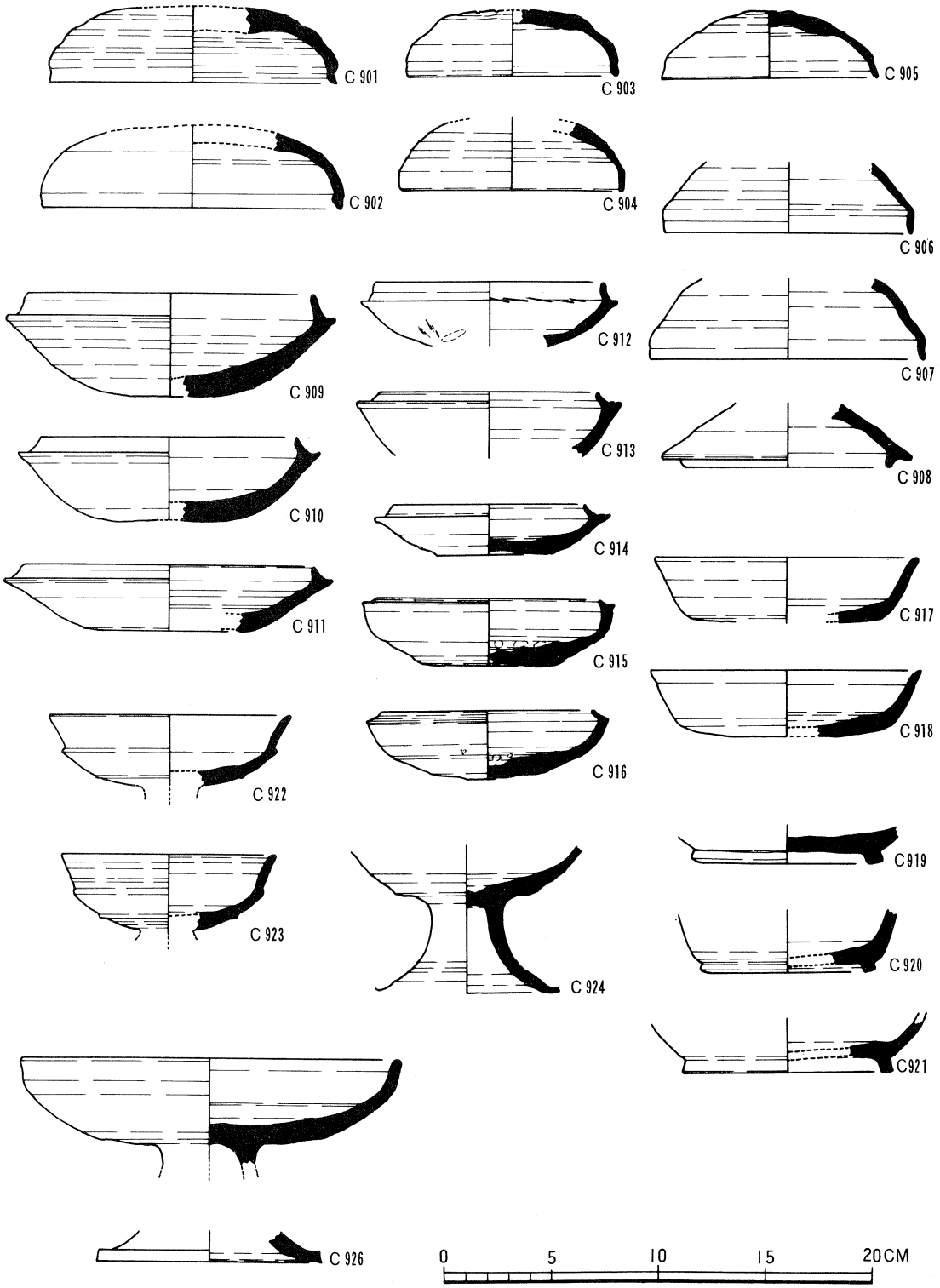


S D10出土土器（C801～C833）

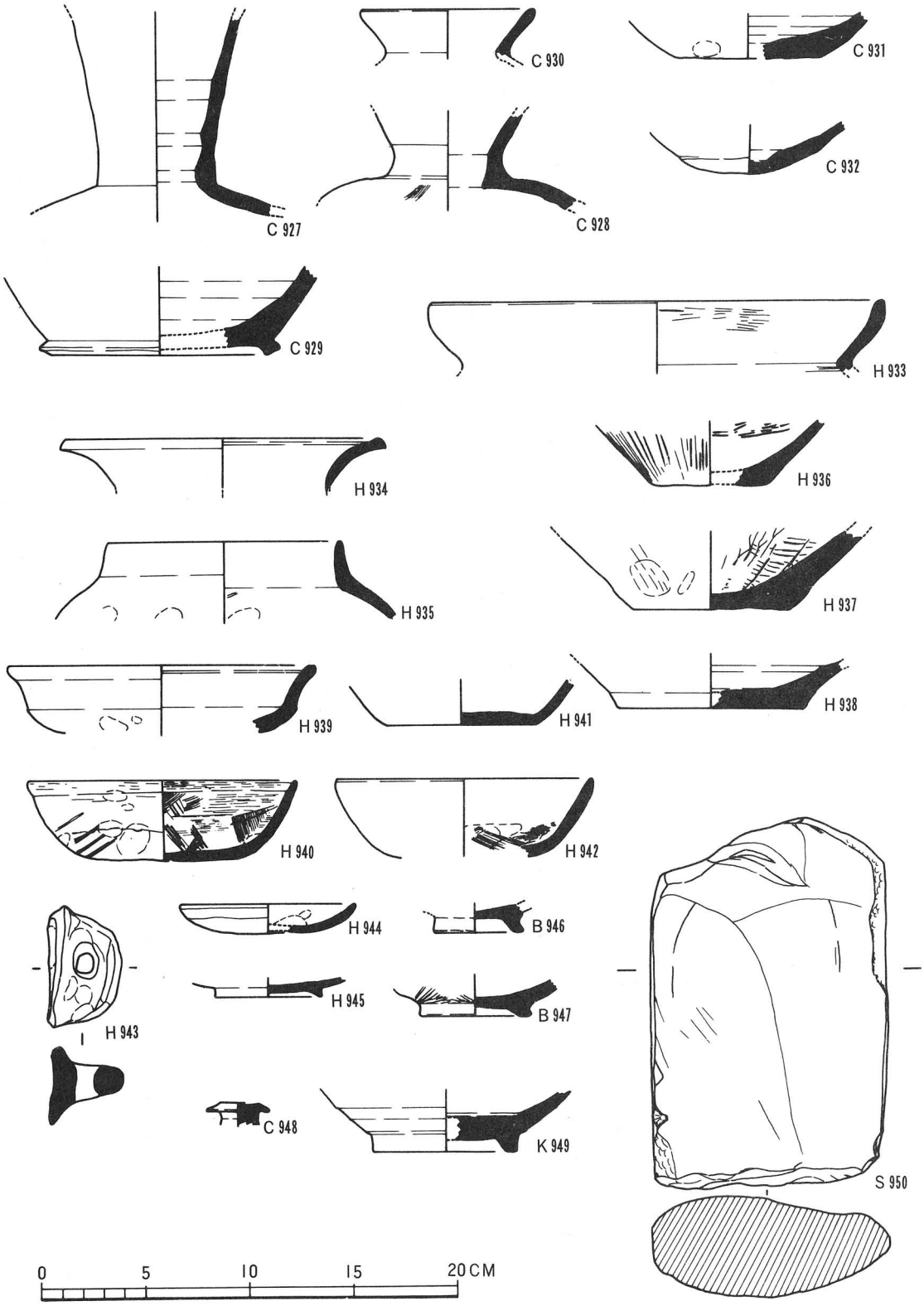
PL. 72　C区出土土器実測図



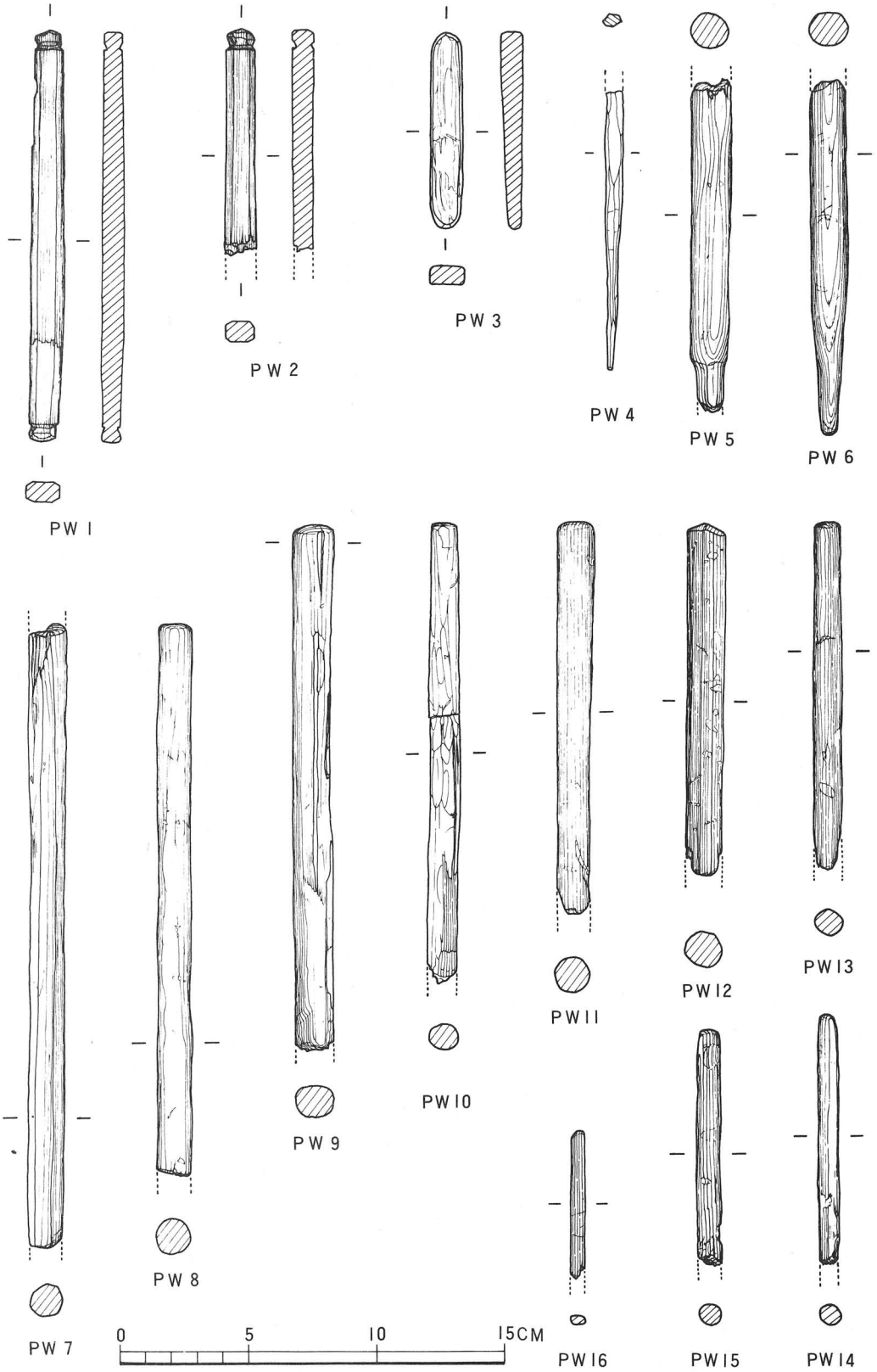
SD10出土土器（C834～C840、E841、E842、H843～H855、K856）



旧沼沢地出土土器（C901～C926）

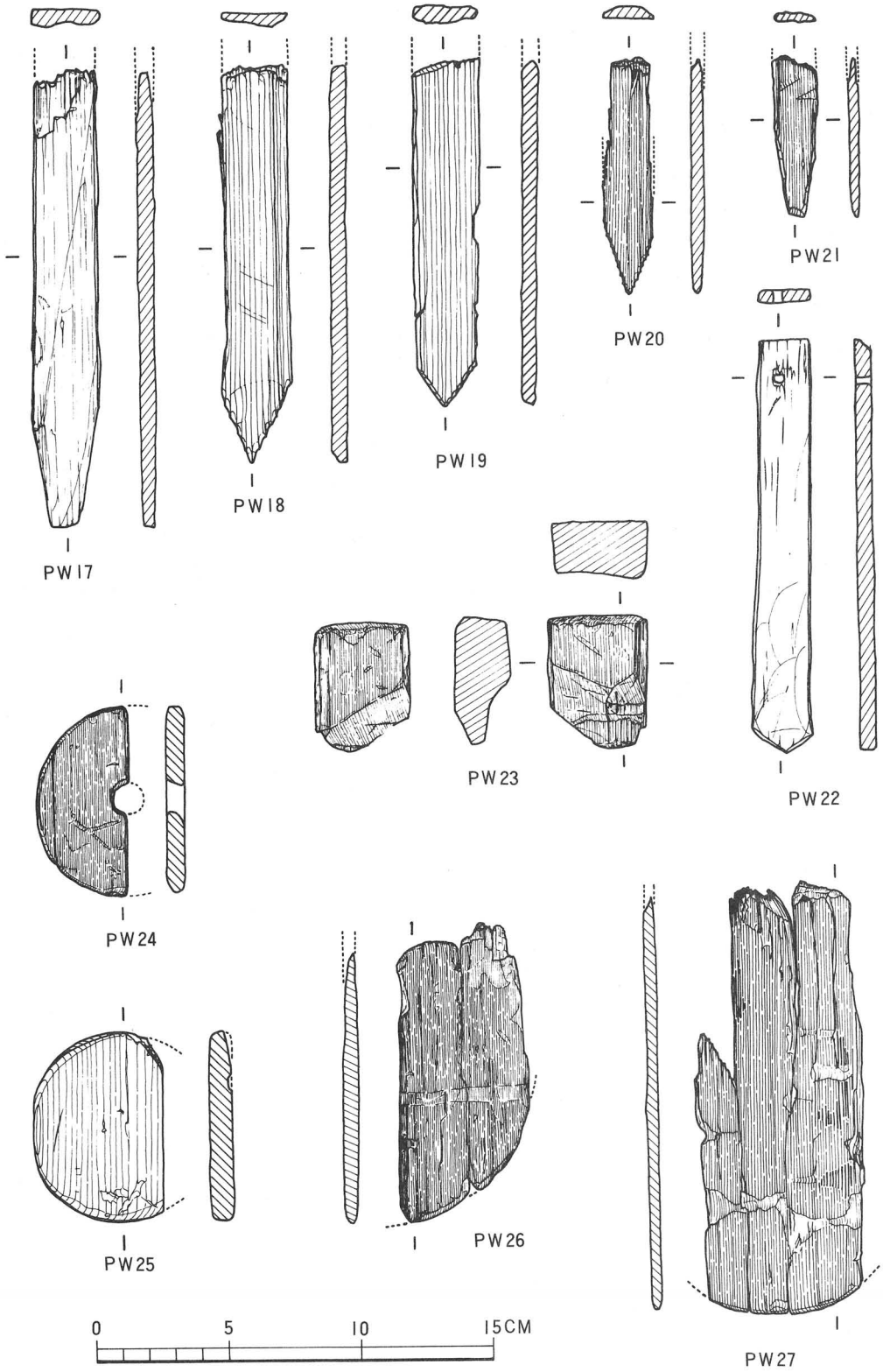


旧沼沢地出土土器（C927～C932、H933～H945、B946～947、S950）その他出土（C948、K949）

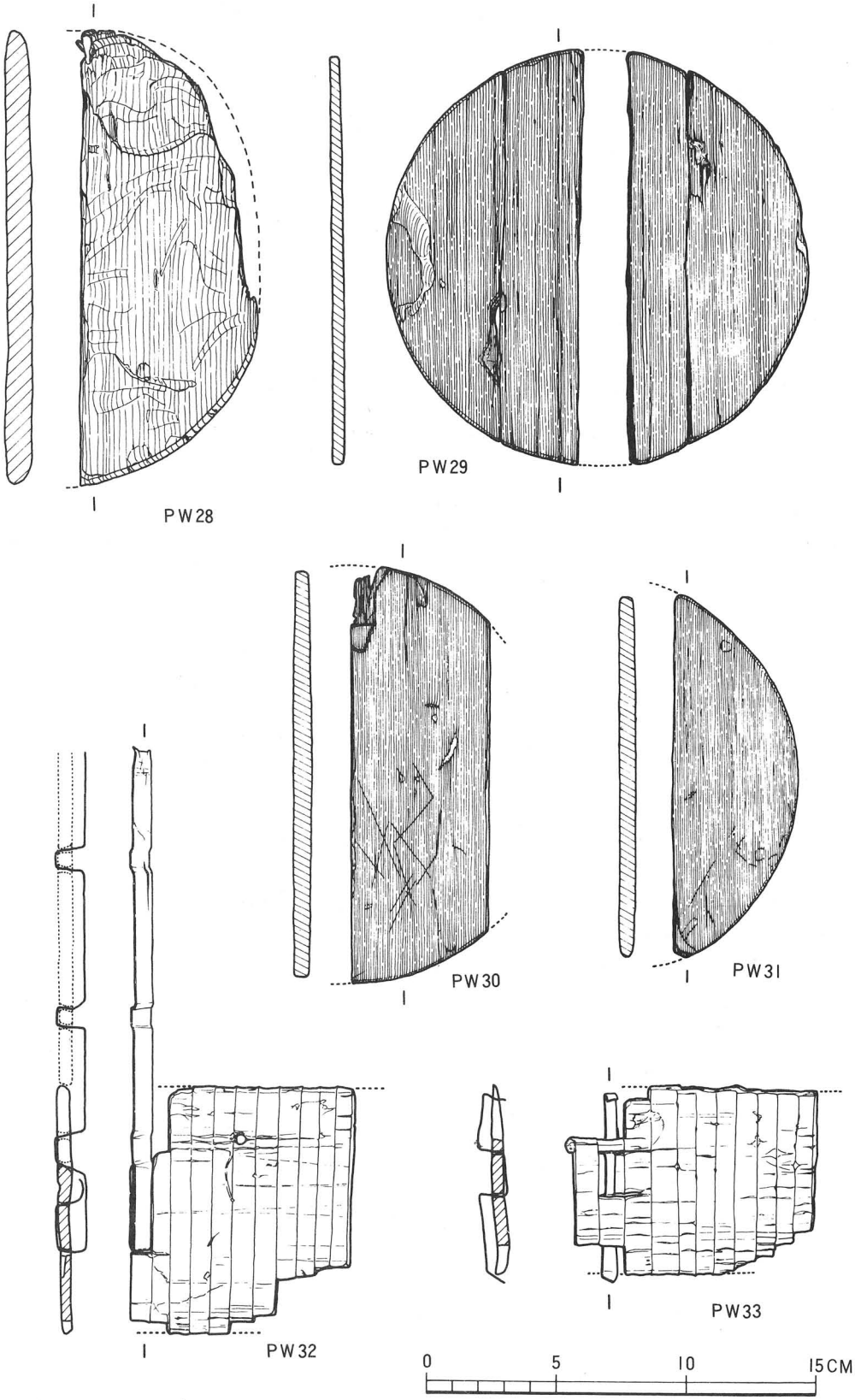


旧沼沢地（ＰＷ１～ＰW16）

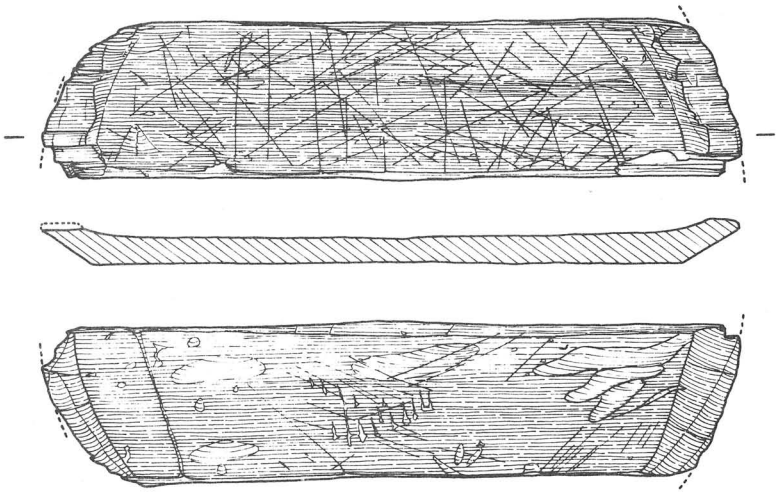
PL. 76　C区出土木製品実測図



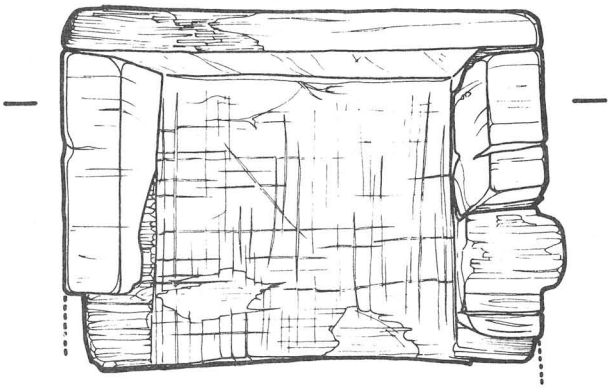
旧沼沢地（PW17～PW27）

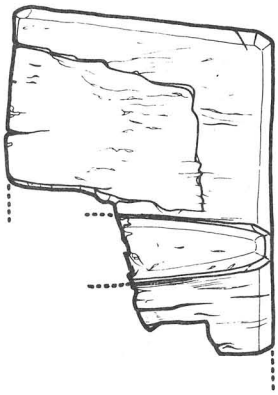


旧沼沢地（PW28～PW33）

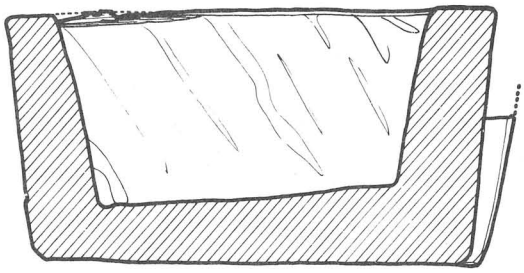


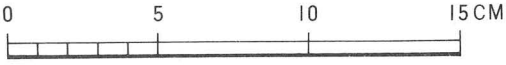
PW34



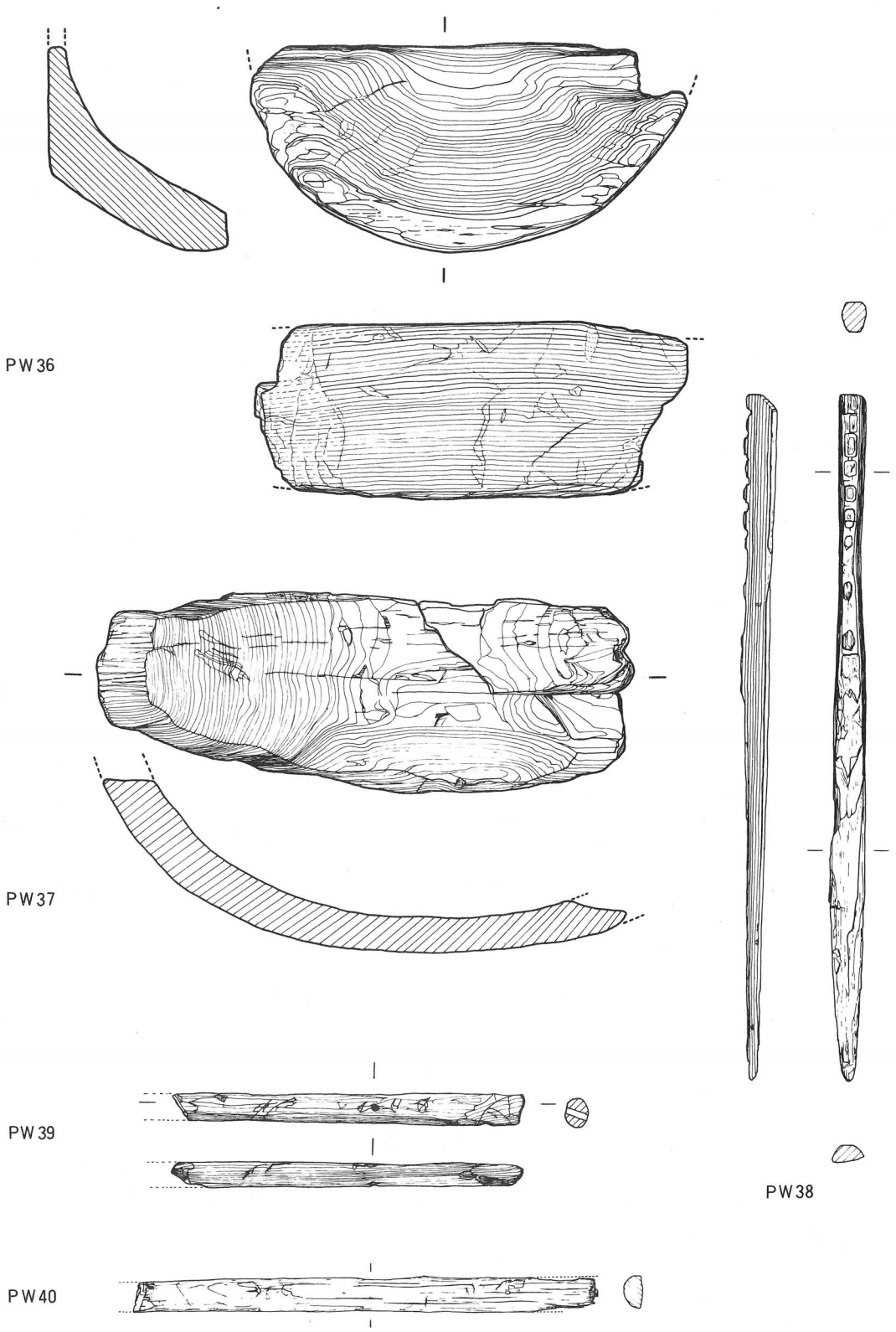


PW35



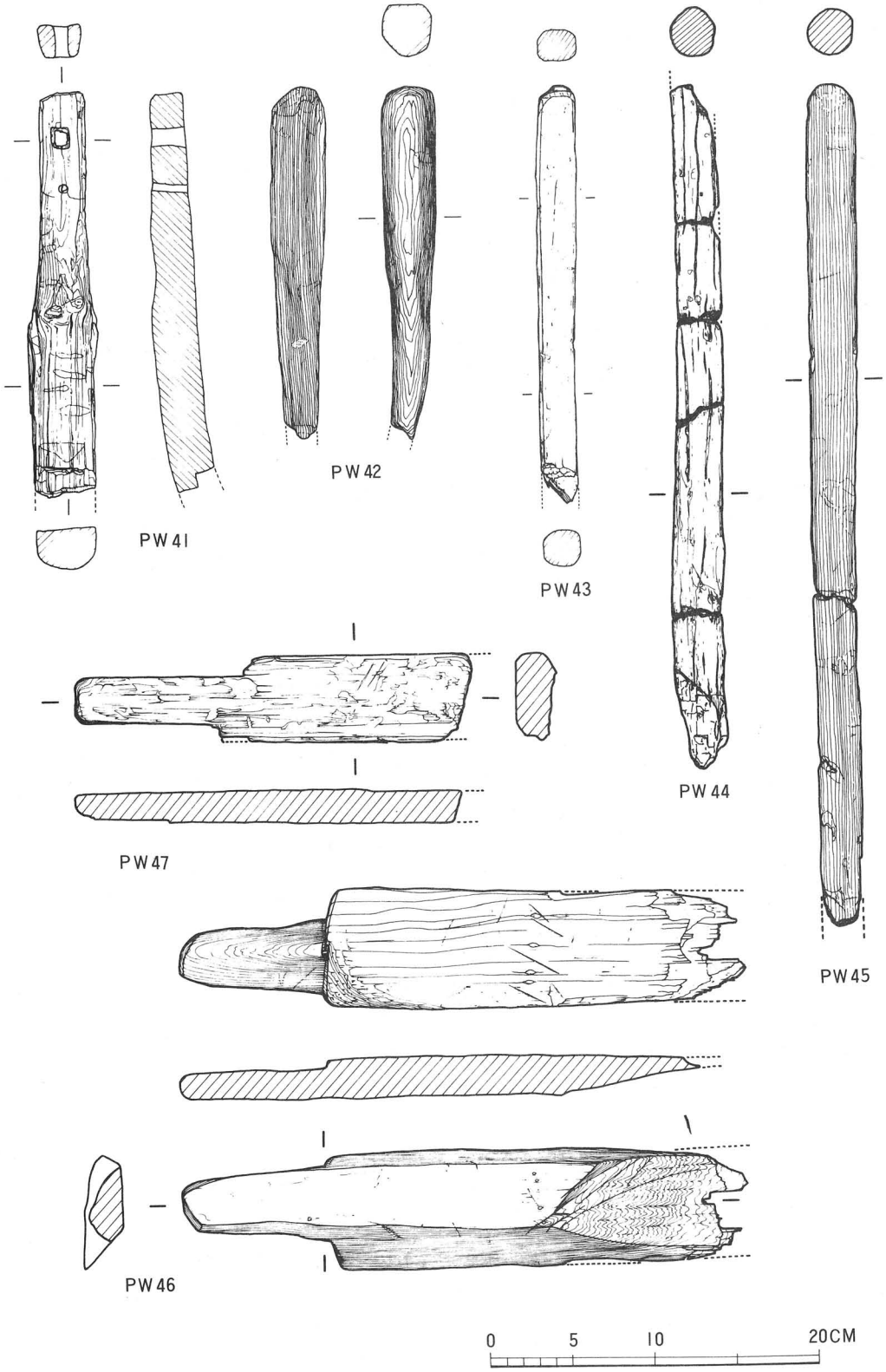


旧沼沢地（ＰＷ34～ＰＷ35）

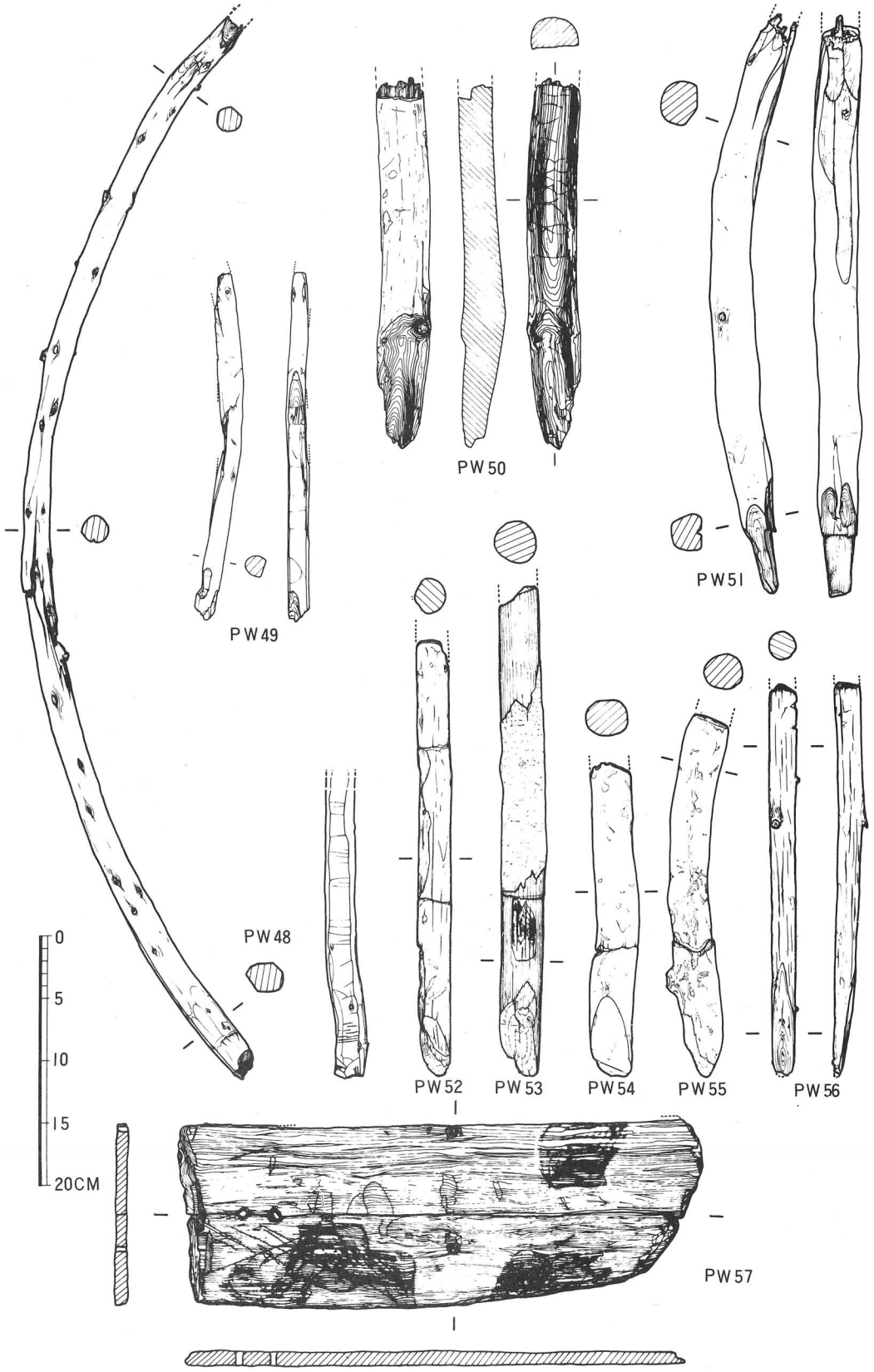


旧沼沢地（PW36～PW40）

PL. 80　C区出土木製品実測図

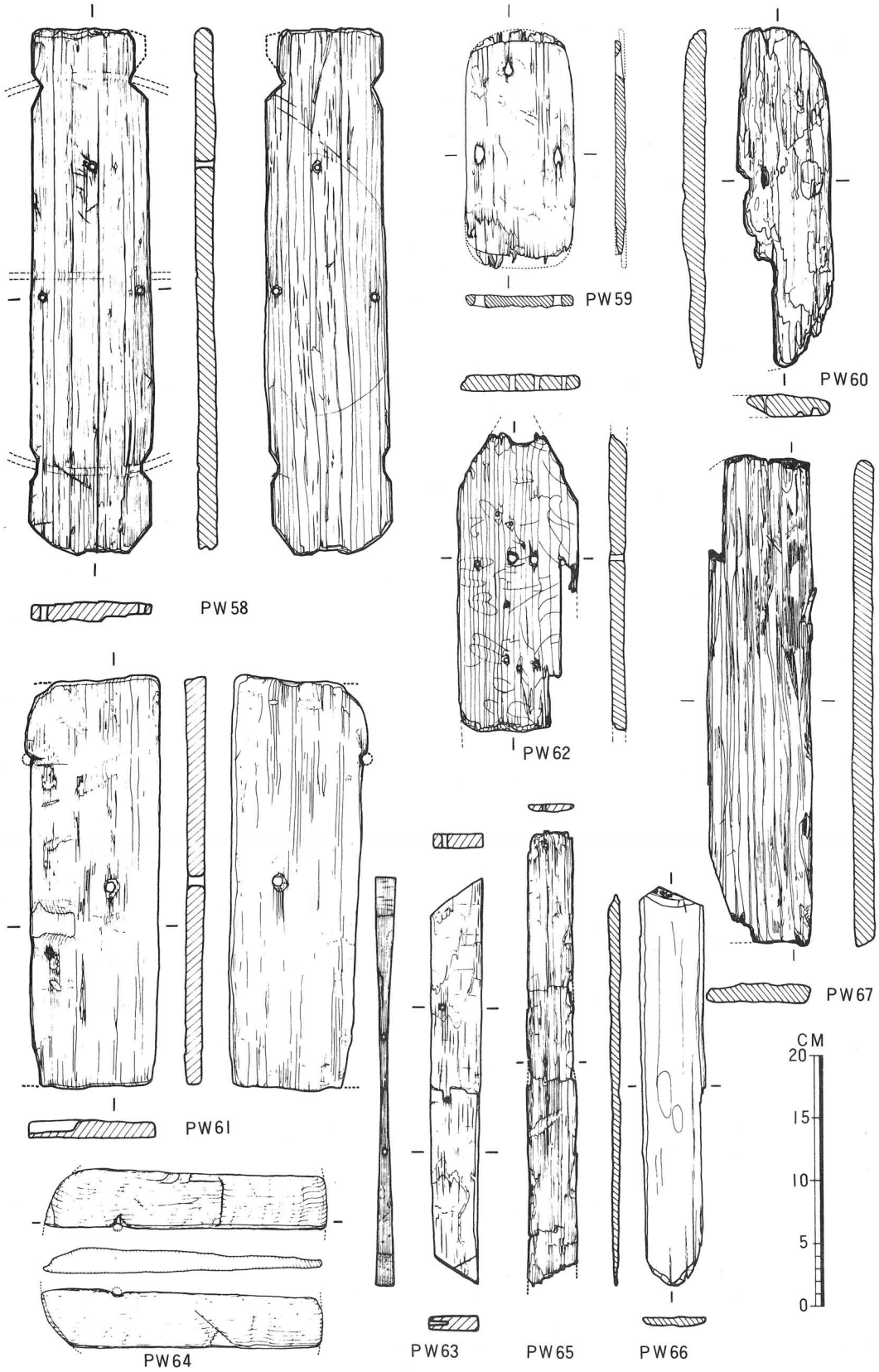


旧沼沢地（PW41～PW47）

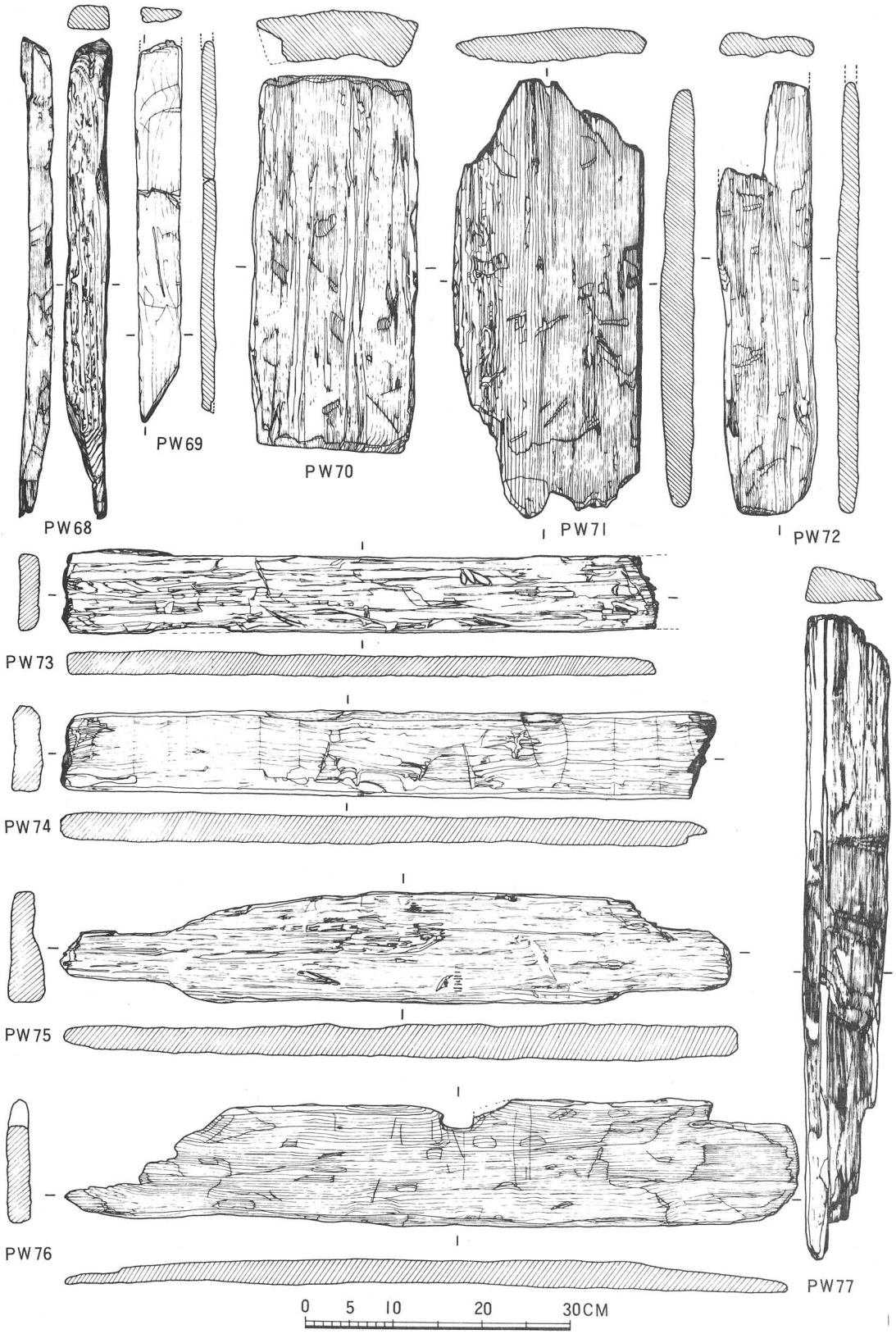


旧沼沢地（PW48～PW57）

PL. 82　C区出土木製品実測図



旧沼沢地（ＰＷ58～ＰＷ67）



旧沼沢地（PW68～PW77）

久野部遺跡発掘調査報告書
——七ノ坪地区——

昭和52年12月

編　集　滋賀県教育委員会
発　行　滋賀県教育委員会
　　野洲町教育委員会
　　(財)滋賀県文化財保護協会
印　刷　株式会社　中村太古舎